

龜井遺跡

寝屋川南部流域下水道事業長吉ポンプ場
築造工事関連埋蔵文化財発掘調査報告書 II

財団法人 大阪文化財センター

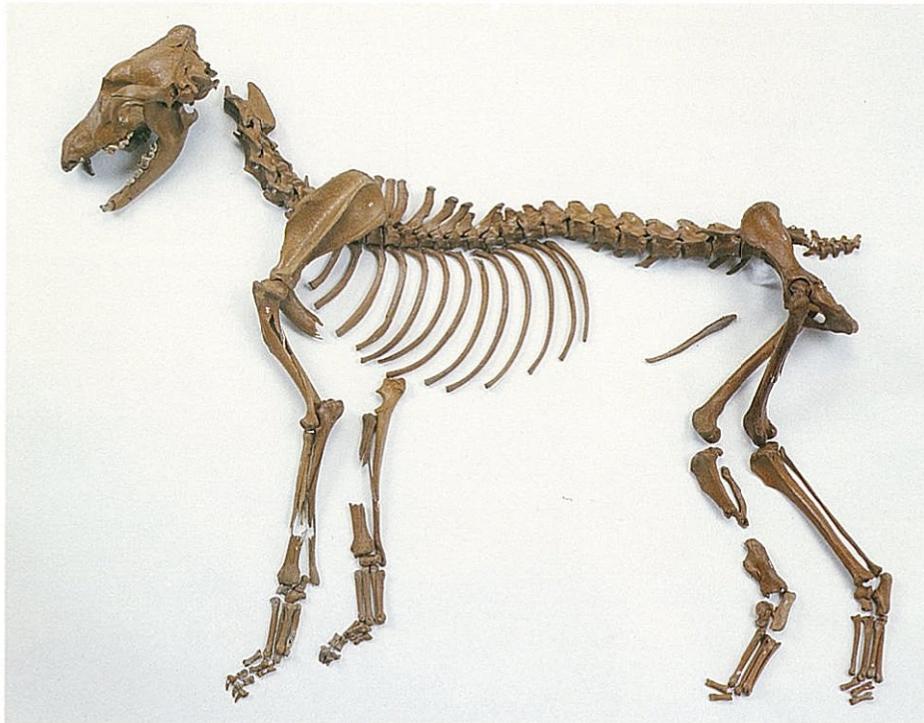


邪視文土盤 (S D -03W)



亀井1・2号犬 出土状況 (S D-03W)

黄色にみえるのは 亀井1号犬 (♂)
茶色にみえるのは 亀井2号犬 (♀)



龜井1号犬（♂）全身骨格（SD-03W）



龜井2号犬（♀）全身骨格（SD-03W）



ト骨 (SD-03E)

左 外側面
右 助骨面



武器形木製品 出土状況 (S D-03E)



1・2号方形周溝墓（西から）



1号方形周溝墓 1・6号主体

序

八尾市南龜井町一帯に所在する龜井遺跡は、昭和43年の発見以来、数次にわたる範囲確認調査と、長吉ポンプ場並びに近畿自動車道の建設に関連した本格的な発掘調査が実施されたことによって、その規模や内容が序々に判明して来ると同時に、河内平野内部に所在する瓜生堂遺跡や山賀遺跡といった弥生時代前期から始まる集落遺跡と比較しても遜色のない大集落遺跡であることが明らかとなっていました。

当該遺跡の本格調査の端初となった長吉ポンプ場建設事業は、大阪府土木部が計画、施工している寝屋川南部流域下水道事業の一環として実施しているものであり、事前の発掘調査は当センターが、大阪府土木部の委託を受けて、昭和53年度から昭和55年度までの約3ヶ年間にかけて実施したものであります。その調査の成果は、当センターが、昭和55年度に“龜井・城山”として刊行したことは、記憶に新しいところであります。

本書は、上記の長吉ポンプ場本体部分に附属する諸施設や、平野川の改修工事を必要とする部分について、長吉ポンプ場関連事業として昭和55年6月から、昭和57年3月まで発掘調査を実施した成果を収録したものであります。本書が、“龜井・城山”と共に、龜井遺跡の実態の把握、ひいては河内の古代史に、より一層の貢献が出来るものと確信いたしております。

これらは偏に、大阪府土木部下水道課、大阪府東部流域下水道事務所並びに大阪府教育委員会文化財保護課の関係各位の御理解、御協力の賜物と深く感謝いたしますと共に、今後とも当センターの各種事業に対し、温かい御支援を賜わるよう切望してやみません。

昭和57年3月

財団法人 大阪文化財センター

理事長 加藤三之雄

例　　言

1. 本書は大阪府土木部が進めている寝屋川南部流域下水道事業長吉ポンプ場築造に伴なう龜井遺跡（H1・2地区）の発掘調査報告書である。
2. 本書で報告する龜井遺跡の発掘調査は、財団法人大阪文化財センターが、大阪府土木部東部流域下水道事務所の委託を受けて実施したものである。
3. 本調査に要した費用202,270,000円は、すべて大阪府が負担した。
4. 本調査は、昭和55年6月1日から昭和56年10月31日までの間実施した。
5. 出土遺物の基礎的な整理作業は、上記発掘調査と併行して実施するとともに、本書の作成にかかる総括的な整理作業は、現地調査終了と同時に開始し、昭和57年3月31日までの5ヶ月間実施した。
6. 本調査は、大阪府教育委員会と緊密な連絡を取りながら、財団法人大阪文化財センターが実施した。調査並びに本報告書作成に関係した者は以下の組織表のとおりである。

調査関係者組織表

| | | |
|---------|------------|---|
| 事務局 | 理事兼事務局長 | 井上定清 |
| | 事務局次長兼総務課長 | 筒井康雄（現大阪府水道部会計課長代理） |
| | " | 大塚恭朗 |
| | 主幹兼庶務係長 | 阪上允子、主査 田中喜代子、主事 秋山芳廣 灰本明子、干野和久、田口宗義、鎌山洋子、宮本哲男 |
| 調査総括責任者 | 業務課長 | 堀江門也（現大阪府教育委員会文化財保護課主査） |
| | " | 中井貞夫 |
| | 業務課主幹 | 椋尾孝彦 |
| 調査担当 | 業務課主幹兼第5係長 | 酒井龍一 技師 宮崎泰史、西村尋文、国乗和雄、小島成元 入江正則 |
| | 業務課業務第3係長 | 渡邉昌宏、技師 片山彰一 |
| | 業務課業務第4係長 | 高嶋 徹、技師 尾谷雅彦、寺川史郎、広瀬雅信 畠 潤子、清原弘美、金光正裕、山口誠治、山田拓伸（現大分県歴史民俗資料館） |
| | 業務課主幹兼第1係長 | 中西靖人（昭和56年8月20日付、第5係長兼務）、 技師 上西美佐子 |

7. 出土動物や人骨等については以下の方々に調査を依頼した。

動物骨………金子浩昌、丹羽百合子（早稲田大学考古学研究室）

人骨………池田二郎（京都大学理学部人類学教室）

また、以下の方々には、調査途上並びに本書作製の段階で種々のご指導、ご教示を得た。記して感謝の意を表する。

山中一郎（奈良大学）、沢田正昭、秋山隆保、土肥孝（奈良国立文化財研究所）、小池裕子（東京大学）、田代克己（帝塚山短期大学）、佐藤良二（奈良県立橿原考古学研究所）、那須孝悌、樽野博幸、石井久夫（大阪市立自然史博物館）

8. 花粉化石の調査についてはパリノサーヴェイ株式会社に、また、出土木製品の保存処理については財団法人元興寺文化財研究所に、さらに遺構の空撮並びに実測図作製については国際航業株式会社にそれぞれ委託した。

9. 本調査では、高森郁恵・宮北千秋・家村富貴子・辰見和子・竹村こずえ・伯井幸代・飯田智子・新中伸子・月森香世子・岩本敦美・竹内佳代・遠藤美栄子・菊山孝子・上田浩子・斎木優子・太田邦子・高畠留美・岡本康代・布目久夫・森 哲哉・石田篤司・丸尾雅則・堺 千鶴・竹村美香子・入野恵美・野村康子・森安美枝子・小沢和代・丸目ゆかり・岡本由美・伊藤佳津江・辻 登紀子・老月伸也・小北茂子・島田敏男・谷本昌隆・坂口昌治・井上国子・斎藤ふみ・今井工造の諸氏の参加、協力を得た。

10. 本書の執筆分担は目次に示したとおりであるが、第Ⅶ章の執筆は、石器を西村、有孔円板・紡錘車を広瀬が行い、その他は宮崎が行った。土器の実測、トレースの一部は上西、畠が行い、木製品の一部については上西が行った。植物遺体については、新たに報告したい。

11. 本書の編集は、中西、宮崎、西村が行った。

12. 本調査にあたっては、写真、実測図などの記録を作成するとともに、カラースライドも多数作製した。広く利用されることを希望する。

凡 例

1. 遺構は、2つのアルファベット記号と2桁の数字を組み合わせて表記している。
使用したアルファベット記号は、溝・自然河川（S D）、土坑・井戸（S K）、墓（S X）である。
2. 亀井遺跡の略称名をKMとし、今回の調査対象地区名をKMのうしろに平野川の略称Hを添加してKM-H地区とした。この例にならって先のポンプ場本体部の調査地をKM、近畿自動車道建設工事内の調査地をKM-Kとしている。
3. 遺構、遺物出土状況の実測図の縮尺率は、 $\frac{1}{25}$ 、 $\frac{1}{30}$ 、 $\frac{1}{40}$ 、 $\frac{1}{50}$ を基調とした。
4. 出土遺物実測図の縮尺率は、一部の例外を除いて土器は $\frac{1}{4}$ を基調とし、小さなものは $\frac{1}{2}$ 。石器は磨製を $\frac{1}{2}$ 、打製を $\frac{1}{3}$ に統一している。木器は $\frac{1}{2}$ 、 $\frac{1}{6}$ を基本に、土製品・骨角器は $\frac{1}{4}$ 、 $\frac{1}{6}$ とした。
5. 同一遺構出土の遺物は、とおし番号を付した。
6. 引用、参考文献はすべて註としてまとめた。
7. 木器の形態的説明にあたっては、『池上』木器編を参照した。
8. レベル高は、T.P.土で表記した。
9. 遺構のスケールはm、遺物はcm、動物遺存体の計測はmm、重さはgで表示している。

亀井遺跡

寝屋川南部流域下水道事業長吉ポンプ場

築造工事関連埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ

目 次

巻頭カラー写真図版

序 文

例 言（凡 例）

第Ⅰ章 はじめに 中西靖人 1

第Ⅱ章 亀井遺跡周辺の環境

第1節 自然地理的背景 原 秀禎 3

第2節 歴史的環境 宮崎泰史 8

第Ⅲ章 調査の目的と方法

第1節 調査に至る経過 中西靖人 11

第2節 調査の目的 宮崎泰史 13

第3節 調査の方法 宮崎泰史 13

第Ⅳ章 基本層序 宮崎泰史 17

第Ⅴ章 調査の概要 宮崎泰史 19

第1節 はじめに 19

第2節 KM-H 1・2 の調査 19

第3節 KM-H 3・4・5 の調査 22

第4節 KM-H 7 の調査 25

第5節 KM-H 8 の調査 26

第Ⅵ章 検出された遺構と遺物 KM-H 1・2 宮崎泰史、西村尋文、広瀬雅信

第1節 弥生時代中期 29

第2節 弥生時代後期 91

第3節 古墳時代 121

第4節 奈良時代 123

第5節 室町時代 123

第6節 江戸時代 124

第Ⅶ章 出土遺物の詳説

| | | |
|-----------------------|------------|-----|
| 第1節 亀井遺跡における剝片生産技術 | 西村尋文 | 133 |
| 第2節 出出土器の観察 | 宮崎泰史 | 157 |
| 第3節 亀井遺跡出土の卜骨について | 宮崎泰史 | 179 |
| 第4節 亀井遺跡出土の動物遺存体 | 金子浩昌・牛沢百合子 | 183 |
| 第5節 亀井遺跡のイヌについて | 宮崎泰史 | 205 |
| 第6節 方形周溝墓人骨の取り上げと保存処理 | 山口誠治 | 231 |

第Ⅷ章 考 察

| | | |
|--------------------------------|------|-----|
| 第1節 調査のまとめ | 宮崎泰史 | 235 |
| 第2節 縦内大社会の理論的様相——大阪湾沿岸における調査から | 酒井龍一 | 239 |

図版目次

- 図版1 a. 遺跡全景（北から）
b. 調査地区（KM-H 1、2）近景（東から）
- 図版2 KM-H 1 南壁断面（東一西）北から
- 図版3 a. 落ち込み1上層 遺物出土状況（北から）
b. 落ち込み1下層 遺物出土状況（南から）
- 図版4 a. 落ち込み2（西から）中央やや左のところ
b. 西地区ピット群（北から）
- 図版5 a. SK-03 下層遺物出土状況（北から）
b. SK-03（南から）
- 図版6 a. SD-05 遺物出土状況（北から）
b. SD-05 全景（北から）
- 図版7 a. SD-03E (Ⅲ) 層遺物出土状況（北から）
b. SD-03E (Ⅲ) 層遺物出土状況（北から）
- 図版8 a. SD-03E 4ブロック(Ⅳ) 層遺物出土状況（北から）
b. SD-03E (Ⅳ) 層 ネズミ一個体分の骨格検出状況
- 図版9 a. SD-03E 1ブロック(Ⅴ) 層 ト骨出土状況（北から）
b. SD-03E イヌ椎骨出土状況（西から）
- 図版10 a. SD-03E (Ⅵ) 層 鋸出土状況（南から）
b. SD-03E (Ⅵ) 層 鋸出土状況（南から）
- 図版11 a. SD-03W (I) 層 遺物出土状況（北から）
b. SD-03W (II) 層 遺物出土状況（北から）
- 図版12 a. 壺形木製品出土状況 SD-03W (II) 層出土
b. 亀井1、2号犬 出土状況（北から）
- 図版13 a. 1、2号方形周溝墓 全景（北から）
b. 1、2号方形周溝墓 全景（西から）
- 図版14 a. 1号方形周溝墓 1号主体
b. 1号方形周溝墓 1、6号主体
- 図版15 a. 2号方形周溝墓 2、3、4号主体（東から）
b. 2号方形周溝墓 2号主体（北から）
- 図版16 a. 1、2号方形周溝墓のマウンド除去（西から）
b. 1、2号方形周溝墓のマウンド除去（南から）

- 図版17 a. S D-02 全景（東から）
b. S D-02下層 遺物出土状況（北から）
- 図版18 a. S D-02下層 遺物出土状況（北から）
b. S D-02下層 イノシシ幼獣の骨（頭蓋・下顎骨）
- 図版19 a. S D-04 (II) 層 遺物出土状況（東から）
b. S D-04 (II) 層 遺物出土状況（東から）
c. S D-04 (II) 層 遺物出土状況（東から）
- 図版20 a. S D-04 (III) 層 遺物出土状況（東から）
b. S D-04 (IV) 層 遺物出土状況（北から）
c. S D-04 (IV) 層 遺物出土状況（東から）
- 図版21 a. S D-04 (V) 層 イヌ上腕骨（東から）
b. S D-04 (V) 層 ニホンジカの骨の出土状況（東から）
c. S D-04 (V) 層 遺物出土状況（東から）
- 図版22 a. S D-04 全景（東から）
b. S D-04 (III) 層 イヌ二頭分の骨 出土状況
- 図版23 a. S D-06 (I a) 層 遺物出土状況（北から）
b. S D-06 (I b) 層 遺物出土状況（南から）
- 図版24 a. S D-06 (I b) 層 イヌ左右下顎骨出土状況
b. S D-06 (I b) 層 鋤 出土状況（西から）
- 図版25 a. S D-01 布留式土器 出土状況
b. S D-01 全景（東から）
- 図版26 a. 第Ⅶ層上面（東から）
b. 奈良時代（第Ⅶ層）（東から）
- 図版27 a. 第Ⅶ層上面（東から）
b. 第Ⅶ a 層上面 素掘り溝（東から）
- 図版28 落ち込み1 出土土器（1）
- 図版29 落ち込み1 出土土器（2）
- 落ち込み1 出土土器（3）
- 図版30 S D-03 出土土器（1）邪視文土器
- 図版31 S D-03 出土土器（2）
- 図版32 S D-03 出土土器（3）
- 図版33 S D-03 出土土器（4）
- 図版34 S D-03 出土土器（5）コップ形丹彩土器
- 図版35 S D-05 出土土器

- 図版36 S K-03及び方形周溝墓 出土土器 (1)
- 図版37 方形周溝墓 出土土器 (2)
- 図版38 S D-02 出土土器 (1)
- 図版39 S D-02 出土土器 (2)
- 図版40 S D-04 出土土器 (1)
- 図版41 S D-04 出土土器 (2)
- 図版42 S D-04 出土土器 (3)
- 図版43 S D-04 出土土器 (4)
- 図版44 S D-04 出土土器 (5)
- S D-04 出土土器 (6)
- 図版45 S D-04 出土土器 (7) (8)
- 図版46 S D-06 出土土器 (1)
- 図版47 S D-06 出土土器 (2) (3)
- 図版48 S D-06 出土土器 (4)
- 図版49 S D-06 出土土器 (5)
- 図版50 S D-06 出土土器 (6) (7)
- 図版51 S D-01 出土土器
- 図版52 (a) 石核表面 (1 包含層、2 S D-03) (23)
 (b) 石核裏面
- 図版53 (a) 石核表面 (1・2 ブロック層、3 S D-03) (23)
 (b) 石核裏面
- 図版54 (a) 剥片背面 (2 S D-02、1・6 S D-03、5 S X-01、3・4 S X-
 (b) 剥片腹面 02) (23)
- 図版55 (a) 剥片背面 (1 S D-02、2・6 S D-03、3 S X-01、4 S X-02、
 (b) 剥片腹面 5 ブロック土層)
- 図版56 (a) 剥片背面 (2・3 S D-03、4 S X-01、1・7 S X-02、
 (b) 剥片腹面 6 ブロック土層・5 旧平野川)
- 図版57 (a) 剥片背面 (3 S D-03、4 S D-08、1 S X-02、2・5 旧平野川)
 (b) 剥片腹面
- 図版58 (a) 剥片背面 (1・2 S D-03、4 S X-02、3・5 ブロック土層、
 (b) 剥片腹面 6 旧平野川)
- 図版59 (a) 石鏃未製品表面 (4 S D-04、1・3・5・7 S X-01、
 (b) 石鏃未製品裏面 2・6 旧平野川)
- 図版60 (a) 石鏃 (4・5・7・9 S D-03、1 S D-06、6・11 S X-01、2・3

- 8 SX-02、10 ブロック土層)
 (b) 1~4 石錐 (1~4 SD-02、3 SD-03、2 SX-02)
 5~6 石小刃 (6 SD-03、5 落ち込み 1)
 7~9 楔形石器 (7 SX-01、9 包含層、8 旧平野川)
 10 尖頭器状石器未製品
- 図版61 (a) 削器 (4 SD-02、5 SD-06、3 SX-01、1~2 SX-02)
 (b) 削器 摂器
 1~3 削器 (2 SD-02、1 SD-03、3 包含層)
 4 摂器 (SD-04)
- 図版62 (a) 円形摂器 表面 (3 SX-01、1 ブロック土層、2 旧平野川)
 (b) 円形摂器 裏面
- 図版63 (a) 尖頭器状石器未製品 表面 (1~2 旧平野川、3 包含層)
 (b) 尖頭器状石器未製品 裏面
- 図版64 (a) 尖頭器状石器 (旧平野川) (3分)
 (b) 砧石 (1~2 SX-01) (1分)
 (c) 石槍未製品 石槍 (3~7 SD-03、1 SD-06、2 ブロック土層、
 8 旧平野川) (3分)
- 図版65 (a) 石庖丁 (1~3・5~6 SD-03、12 SD-04、7 SD-06、
 2~9 SX-01、4~8・10 SX-02、11 旧平野川) (3分)
 (b) 1 性格不明磨製石器 (SD-02)
 2~3・7~8 叩石 (2~3 SD-02, 7~8 SX-02)
 4 小形柱状片刃石斧 (SX-02)
 5 扁平片刃石斧 (包含層)
 9 環状石斧 (SX-02) (1分)
- 図版66 木製品 (1 SD-03E、2 SD-02、3 SD-03W、4 SD-04、
 5 SD-03W)
 骨角製品 (4 SD-04)
- 図版67 (a) 円板形土製品 1) 不明 2) SX-02 3) SP-03W 4) 旧平野川
 5) SX-01 6) SD-06
 (b) 有孔円板 1) 骨角製 SD-03E 2) 石製 SK-02 3) 土製 SD-03W
 4) 土製 SX-02
 (c) ヤス状骨器 (1 SD-03E、2 SD-04)
 (d) 鳥形土製品 (SX-01) (1分)

挿 図 目 次

| | |
|--|-------|
| 第 1 図 地形分類図..... | 2 |
| 第 2 図 等高線図..... | 3 |
| 第 3 図 1 m等高線図..... | 4 |
| 第 4 図 遺跡分布図..... | 7 |
| 第 5 図 翼状剥片石核 (1/1) | 8 |
| 第 6 図 KM-H調査トレンチ配置図..... | 12 |
| 第 7 図 KM-H地区割り図 (1/500) | 15~16 |
| 第 8 図 KM-H 1 土層柱状図 (1/80) | 17 |
| 第 9 図 第Ⅰ層の柱状図 (1/20) | 18 |
| 第 10 図 近代の素掘り溝 (西から) | 19 |
| 第 11 図 青灰色シルト面 (第Ⅲ層) 東から..... | 20 |
| 第 12 図 弥生時代包含層上面 (第Ⅳ層) 東から..... | 20 |
| 第 13 図 弥生時代最終遺構面 東から..... | 20 |
| 第 14 図 H 4 地区江戸時代 北から..... | 22 |
| 第 15 図 H 3 地区弥生時代最終面 南から..... | 22 |
| 第 16 図 H 4 地区弥生時代最終面 南から..... | 22 |
| 第 17 図 H 5 地区弥生時代最終面 東から..... | 22 |
| 第 18 図 S D-12出土の布巻具..... | 23 |
| 第 19 図 S D-12出土の臼..... | 23 |
| 第 20 図 S D-19出土の鹿角完存品 (落角) | 23 |
| 第 21 図 S D-19出土の土器に入っていた骨..... | 24 |
| 第 22 図 S K-17 北から..... | 25 |
| 第 23 図 S D-19 遺物出土状況 黒漆塗弓..... | 25 |
| 第 24 図 S K-25 遺物出土状況 東から..... | 26 |
| 第 25 図 亀井遺跡平野川 (KM-H) 弥生時代最終遺構図 (1/300) | 27~28 |
| 第 26 図 落ち込み 1 (上層・下層) 遺物出土状況及び土層断面図 (1/40) | 29 |
| 第 27 図 落ち込み 1 出土遺物 (1/4) | 30 |
| 第 28 図 落ち込み 1 出土遺物 (3/3) | 31 |
| 第 29 図 落ち込み 2 遺構平面図 (1/60) | 31 |
| 第 30 図 焼土坑 1、ピット群平面図及び土層断面図 (1/40) | 33~34 |
| 第 31 図 S K-02 出土遺物 (1/2) | 35 |
| 第 32 図 S K-03 出土遺物 (1/4) | 36 |
| 第 33 図 S K-03 下層遺物出土状況 (1/30) | 37 |
| 第 34 図 S D-03E 出土遺物 (1/4) | 38 |
| 第 35 図 S D-03E (Ⅲ)(Ⅳ) 層遺物出土状況 (1/40) | 39~40 |
| 第 36 図 S D-03E (Ⅴ) 層遺物出土状況及び土層断面図 (1/40) | 41~42 |
| 第 37 図 S D-03E 出土遺物 (1/4) | 43 |
| 第 38 図 S D-03E 出土遺物 (1/2) | 44 |

| | | | |
|--------|---------------------------------|----------------------|-------|
| 第 39 図 | S D-03E | 出土遺物 (少) | 45 |
| 第 40 図 | S D-03E | 出土遺物 (少) | 45 |
| 第 41 図 | S D-03E | 出土遺物 (少) | 46 |
| 第 42 図 | S D-03E | 出土遺物 (少) | 46 |
| 第 43 図 | S D-03E | 出土遺物 (少) | 46 |
| 第 44 図 | S D-03W (I)、(II) | 層遺物出土状況 (1/40) | 47~48 |
| 第 45 図 | 7 ライン沿セクション土層断面図 (1/60) | | 49 |
| 第 46 図 | S D-03W | 出土遺物 (少) | 49 |
| 第 47 図 | S D-03W | 出土遺物 (少) | 50 |
| 第 48 図 | S D-03W | 出土遺物 (少) | 51 |
| 第 49 図 | S D-03 | 出土遺物 (少) | 53 |
| 第 50 図 | S D-03 | 出土遺物 (少) | 54 |
| 第 51 図 | S D-03 | 出土遺物 (少) | 55 |
| 第 52 図 | S D-03 | 出土遺物 (少) | 57 |
| 第 53 図 | S D-03 | 出土遺物 (少) | 58 |
| 第 54 図 | S D-03W | 出土遺物 (少) | 59 |
| 第 55 図 | S D-03W | 出土遺物 (少) | 60 |
| 第 56 図 | S D-03W | 出土遺物 (少) | 60 |
| 第 57 図 | S D-05 | 遺物出土状況 (東) | 60 |
| 第 58 図 | S D-05 | 出土遺物 (少) | 61 |
| 第 59 図 | S D-05 | 遺物出土状況及び土層断面図 (1/40) | 62 |
| 第 60 図 | S D-05 | 出土遺物 (少) | 63 |
| 第 61 図 | S D-08 | 出土遺物 (少) | 63 |
| 第 62 図 | S X-01 | 北溝出土遺物 (少) | 64 |
| 第 63 図 | 第 1・2 号方形周溝墓 (S X-01・02) (1/50) | 及び土層断面図 (1/40) | 65~66 |
| 第 64 図 | 1 号主体実測図 (1/25) | | 67 |
| 第 65 図 | ヒトの全身骨格図 | | 67 |
| 第 66 図 | 6 号主体実測図 (1/25) | | 68 |
| 第 67 図 | S X-01 | 鳥形土製品 (少) | 68 |
| 第 68 図 | S X-01 | 出土遺物 (少) | 69 |
| 第 69 図 | S X-01 | 出土遺物 (少) | 71 |
| 第 70 図 | S X-01 | 出土遺物 (少) | 72 |
| 第 71 図 | A-2 号主体・B-3 号主体実測図 (1/25) | | 73 |
| 第 72 図 | 4 号・5 号主体実測図 (1/25) | | 74 |
| 第 73 図 | 方形周溝墓及び包含層 | 出土遺物 (少) | 75 |
| 第 74 図 | " | (少) | 76 |
| 第 75 図 | " | (少) | 77 |
| 第 76 図 | S X-02 | 出土遺物 (少) | 79 |
| 第 77 図 | S X-02 | 出土遺物 (少) | 80 |
| 第 78 図 | S X-02 | 出土遺物 (少) | 81 |
| 第 79 図 | S X-02 | 出土遺物 (少) | 82 |
| 第 80 図 | S X-02 | 出土遺物 (少) | 83 |

| | | |
|---------|-----------------------------|-----|
| 第 81 図 | ブロック土層 出土遺物 (3) | 84 |
| 第 82 図 | ブロック土層 出土遺物 (3) | 85 |
| 第 83 図 | ブロック土層 出土遺物 (3) | 86 |
| 第 84 図 | 包含層 出土遺物 (3) | 88 |
| 第 85 図 | 包含層 出土遺物 (3) | 89 |
| 第 86 図 | 包含層 出土遺物 (3) | 90 |
| 第 87 図 | 包含層 出土遺物 (3) | 90 |
| 第 88 図 | 包含層 出土遺物 (2) | 90 |
| 第 89 図 | S D-02 上層遺物出土状況 (1/60) | 91 |
| 第 90 図 | S D-02 出土遺物 (1/4) | 92 |
| 第 91 図 | S D-02 下層遺物出土状況 (1/40) | 93 |
| 第 92 図 | S D-02 出土遺物 (1/4) | 93 |
| 第 93 図 | S D-02 出土遺物 (3) | 94 |
| 第 94 図 | S D-02 出土遺物 (1/2) | 95 |
| 第 95 図 | S D-02 出土遺物 (1/6) | 96 |
| 第 96 図 | S D-02 出土遺物 (1/4) | 97 |
| 第 97 図 | S D-04 土層断面図 (1/40) | 98 |
| 第 98 図 | S D-04 (II) 層遺物出土状況 (1/30) | 99 |
| 第 99 図 | S D-04 (III) 層遺物出土状況 (1/30) | 99 |
| 第 100 図 | S D-04 (IV) 層遺物出土状況 (1/30) | 100 |
| 第 101 図 | S D-04 (V) 層遺物出土状況 (1/30) | 100 |
| 第 102 図 | S D-04 出土遺物 (1/4) | 102 |
| 第 103 図 | S D-04 出土遺物 (1/4) | 103 |
| 第 104 図 | S D-04 出土遺物 (1/4) | 104 |
| 第 105 図 | S D-04 出土遺物 (1/4) | 105 |
| 第 106 図 | S D-04 出土遺物 (1/4) | 106 |
| 第 107 図 | S D-04 出土遺物 (1/4) | 107 |
| 第 108 図 | S D-04 出土遺物 (上3/5、下2/5) | 108 |
| 第 109 図 | イヌ出土状況 (北から) | 109 |
| 第 110 図 | S D-04 出土遺物 (1/2) | 110 |
| 第 111 図 | KM-H 2 東側土層断面図 (1/60) | 110 |
| 第 112 図 | S D-06 土層断面図 (南) (1/60) | 110 |
| 第 113 図 | S D-06 (I a) 層遺物出土状況 (1/40) | 111 |
| 第 114 図 | S D-06 (I b) 層遺物出土状況 (1/40) | 112 |
| 第 115 図 | S D-06 出土遺物 (1/4) | 114 |
| 第 116 図 | S D-06 出土遺物 (1/4) | 115 |
| 第 117 図 | S D-06 出土遺物 (1/2) | 115 |
| 第 118 図 | S D-06 出土遺物 (1/4) | 116 |
| 第 119 図 | S D-06 出土遺物 (1/4) | 117 |
| 第 120 図 | S D-06 出土遺物 (3) | 118 |
| 第 121 図 | S D-06 出土遺物 (1/2) | 118 |
| 第 122 図 | S D-06 出土遺物 (1/2) | 119 |

| | | |
|---------|---|-----|
| 第 123 図 | S D-06 出土遺物 (少) | 119 |
| 第 124 図 | S D-06 イヌ出土状況 (少) | 120 |
| 第 125 図 | S D-01 土層断面図 (少) | 121 |
| 第 126 図 | S D-01 平面図 (少) | 121 |
| 第 127 図 | S D-01 布留式土器出土状況 (少) | 122 |
| 第 128 図 | S D-01 出土遺物 (少) | 122 |
| 第 129 図 | 中・近世遺構平面図 (少) | 123 |
| 第 130 図 | 旧平野川 出土遺物 (少) | 125 |
| 第 131 図 | 旧平野川 出土遺物 (少) | 126 |
| 第 132 図 | 旧平野川 出土遺物 (少) | 127 |
| 第 133 図 | 旧平野川 出土遺物 (少) | 128 |
| 第 134 図 | 旧平野川 出土遺物 (少) | 128 |
| 第 135 図 | 旧平野川 出土遺物 (少) | 129 |
| 第 136 図 | 旧平野川 出土遺物 (少) | 130 |
| 第 137 図 | 旧平野川 出土遺物 (少) | 130 |
| 第 138 図 | 他地区出土の石核 (少) | 134 |
| 第 139 図 | 石核 I 剥離面構成図 (少) | 137 |
| 第 140 図 | 石核 II 剥離面構成図 (少) | 138 |
| 第 141 図 | 石核 III 剥離面構成図 (少) | 139 |
| 第 142 図 | 石核作業面剥離方向度数分布図 | 140 |
| 第 143 図 | 剥片 I 類剥離面構成図 (少) | 141 |
| 第 144 図 | 剥片 II、III 類剥離面構成図 (少) | 142 |
| 第 145 図 | 剥片計測位置模式図 (少) | 143 |
| 第 146 図 | 剥片剥離角度分布図 | 143 |
| 第 147 図 | 剥片長幅値分布図 | 144 |
| 第 148 図 | 剥片長幅比分布図 | 144 |
| 第 149 図 | 目的剥片長幅比分布図 | 144 |
| 第 150 図 | 剥片剥離工程模式図 | 147 |
| 第 151 図 | 石鏃・剥片長幅分布図 | 148 |
| 第 152 図 | 土器細部の名称 | 157 |
| 第 153 図 | 亀井遺跡出土の卜骨 (少) | 178 |
| 第 154 図 | 肩甲骨外側面の細部名称 | 179 |
| 第 155 図 | 森の宮遺跡の卜骨 (少) | 180 |
| 第 156 図 | イノシシ及びニホンジカ 写真 (少) | 198 |
| 第 157 図 | ニホンジカ (<i>Cervus nippon</i>) 写真 (少) | 199 |
| 第 158 図 | ニホンジカ (<i>Cervus nippon</i>) 写真 (少) | 200 |
| 第 159 図 | S D-02出土のイノシシ幼獣 写真 (少) | 201 |
| 第 160 図 | ネズミ (<i>Rattus norvegicus</i>) 写真 (少) | 201 |
| 第 161 図 | タヌキ (<i>Nyctereutes Procyonoides</i>) の右下顎骨 (S D-04) 写真 (少) | 202 |
| 第 162 図 | ナマズ (<i>Pavasilurus asotus</i>) (S D-03) 写真 (少) | 202 |
| 第 163 図 | カエル (S D-03W) 写真 (×2) | 202 |
| 第 164 図 | 小動物 写真 (×2) | 202 |

| | | |
|---------|---------------------------------------|---------|
| 第 165 図 | イヌ各部骨の名称 | 204 |
| 第 166 図 | 亀井 1・2 号犬出土状況実測図（I） | 205～206 |
| 第 167 図 | イヌの上・下・側面観、下顎の計測点 | 210 |
| 第 168 図 | 亀井 1・2 号犬全身骨格写真 a（♀） b（♂） | 219 |
| 第 169 図 | 亀井 1・2 号犬出土状況 S D-03W の（II）層掘削中に検出 | 220 |
| 第 170 図 | 亀井 1・2 号犬出土状況（近景）東から | 221 |
| 第 171 図 | 亀井 1 号犬（♂） a 上面観 b 側面観 c 底面観 | 222 |
| 第 172 図 | 亀井 2 号犬（♀） a 上面観 b 側面観 c 底面観 | 223 |
| 第 173 図 | 左下顎骨 a 亀井 2 号犬（♀）外側面観 b 亀井 1 号犬（♂）同上 | 224 |
| 第 174 図 | S D-02 出土頭蓋（4 号犬） a 上面観 b 側面観 | 224 |
| 第 175 図 | S D-06 出土イヌ頭蓋（3 号犬） a 上面観 b 側面観 c 底面観 | 225 |
| 第 176 図 | イヌ | 226 |
| 第 177 図 | イヌ | 226 |
| 第 178 図 | a 左胫骨・腓骨（亀井 1 号犬） b 右胫骨・腓骨 | 228 |
| 第 179 図 | 人骨の取り上げ | 231 |
| 第 180 図 | 人骨の取り上げ | 232 |
| 第 181 図 | S D-03 出土の邪視文のある土器片（I） | 233 |
| 第 182 図 | 亀井遺跡既往の調査トレンチ配置図 | 235～236 |
| 第 183 図 | 基本生活領域を核とする環境体 | 243 |
| 第 184 図 | 拠点集落による構成 | 244 |
| 第 185 図 | 生産物移動の諸レベル | 247 |

表 目 次

| | | |
|--------|--------------------|---------|
| 第 1 表 | 遺跡地名表 | 6 |
| 第 2 表 | KM-H 1・2 調査遺構一覧表 | 21 |
| 第 3 表 | 遺構の前後関係（KM-H 1・2） | 21 |
| 第 4 表 | KM-H 3・4・5 調査遺構一覧表 | 24 |
| 第 5 表 | KM-H 7 調査遺構一覧表 | 25, 26 |
| 第 6 表 | KM-H 8 調査遺構一覧表 | 26 |
| 第 7 表 | 各ピットの径・深さ計測一覧表 | 32 |
| 第 8 表 | 1・2 号方形周溝墓人骨一覧 | 64 |
| 第 9 表 | 石核計測一覧表 | 151 |
| 第 10 表 | 剥片 I i 類計測一覧表 | 151 |
| 第 11 表 | 剥片 I ii 類計測一覧表 | 151 |
| 第 12 表 | 剥片 I iii 類計測一覧表 | 151 |
| 第 13 表 | 剥片 I iv 類計測一覧表 | 151～152 |
| 第 14 表 | 剥片 II ii 類計測一覧表 | 152 |
| 第 15 表 | 剥片 II iii 類計測一覧表 | 153 |
| 第 16 表 | 剥片 II iv 類計測一覧表 | 153～154 |
| 第 17 表 | 剥片 III 類計測一覧表 | 154～155 |

| | | |
|--------|------------------------|---------|
| 第 18 表 | その他の剝片計測一覧表 | 155～156 |
| 第 19 表 | 石鎌計測一覧表 | 156 |
| 第 20 表 | 落ち込み 1 出土土器観察表 | 158 |
| 第 21 表 | S K-03出土土器観察表 | 159 |
| 第 22 表 | S D-05出土土器観察表 | 159～160 |
| 第 23 表 | S D-03出土土器観察表 | 163 |
| 第 24 表 | 方形周溝墓及び包含層出土土器観察表 | 166 |
| 第 25 表 | S D-02出土土器観察表 | 166～168 |
| 第 26 表 | S D-04出土土器観察表 | 168～174 |
| 第 27 表 | S D-06出土土器観察表 | 174～178 |
| 第 28 表 | S D-01出土土器観察表 | 178 |
| 第 29 表 | イノシシ肩甲骨の計測値 | 179 |
| 第 30 表 | 脊椎動物遺体種名表 | 181～182 |
| 第 31 表 | 遺構別動物遺存体の概要 | 185 |
| 第 32 表 | 縄文・弥生期家犬の計測表 | 186 |
| 第 33 表 | 遺構別動物遺存体の説明 | 187～196 |
| 第 34 表 | 家犬頭骨及び四肢骨長幅標準表 | 203 |
| 第 35 表 | 1、2号犬出土部位の名称 | 207～209 |
| 第 36 表 | 頭蓋の計測値一覧表 | 212 |
| 第 37 表 | 下頸骨の計測値一覧表 | 213 |
| 第 38 表 | 亀井1、2号犬各部骨計測値一覧表 | 214～215 |
| 第 39 表 | 恩智犬頭蓋の計測値一覧表 | 216 |
| 第 40 表 | 池上遺跡出土イヌ | 217 |
| 第 41 表 | 大福遺跡出土のイヌ頭蓋の計測値一覧表 | 217 |
| 第 42 表 | 東奈良遺跡出土のイヌ下頸骨の計測値一覧表 | 217 |
| 第 43 表 | 動物遺存体の最少個体数 (KM-H 1・2) | 238 |
| 第 44 表 | 生活領域内における生活行為の類型 | 238 |

第Ⅰ章 はじめに

亀井遺跡は、八尾市南亀井町を流れる平野川の右、左両岸を中心に、一辺約500m四方で拡がっている複合集落遺跡であることが知られている。

当該遺跡地内に、大阪府土木部が計画、施工している寝屋川南部流域下水道事業にかかる長吉ポンプ場の築造並びに飛行場南北幹線下水管渠の築造については、施工に先立って、事業主体である大阪府東部流域下水道事務所から、大阪府教育委員会に取り扱いについての協議がもたれた。協議を受けた大阪府教育委員会は、試掘調査の実施と、その結果に基づく再協議の必要性を回答した。

この回答に基づく試掘調査は、昭和52年6月25日付で財団法人大阪文化財センターと東部流域下水道事務所との間で委託契約が締結され、実施された。
(註1)

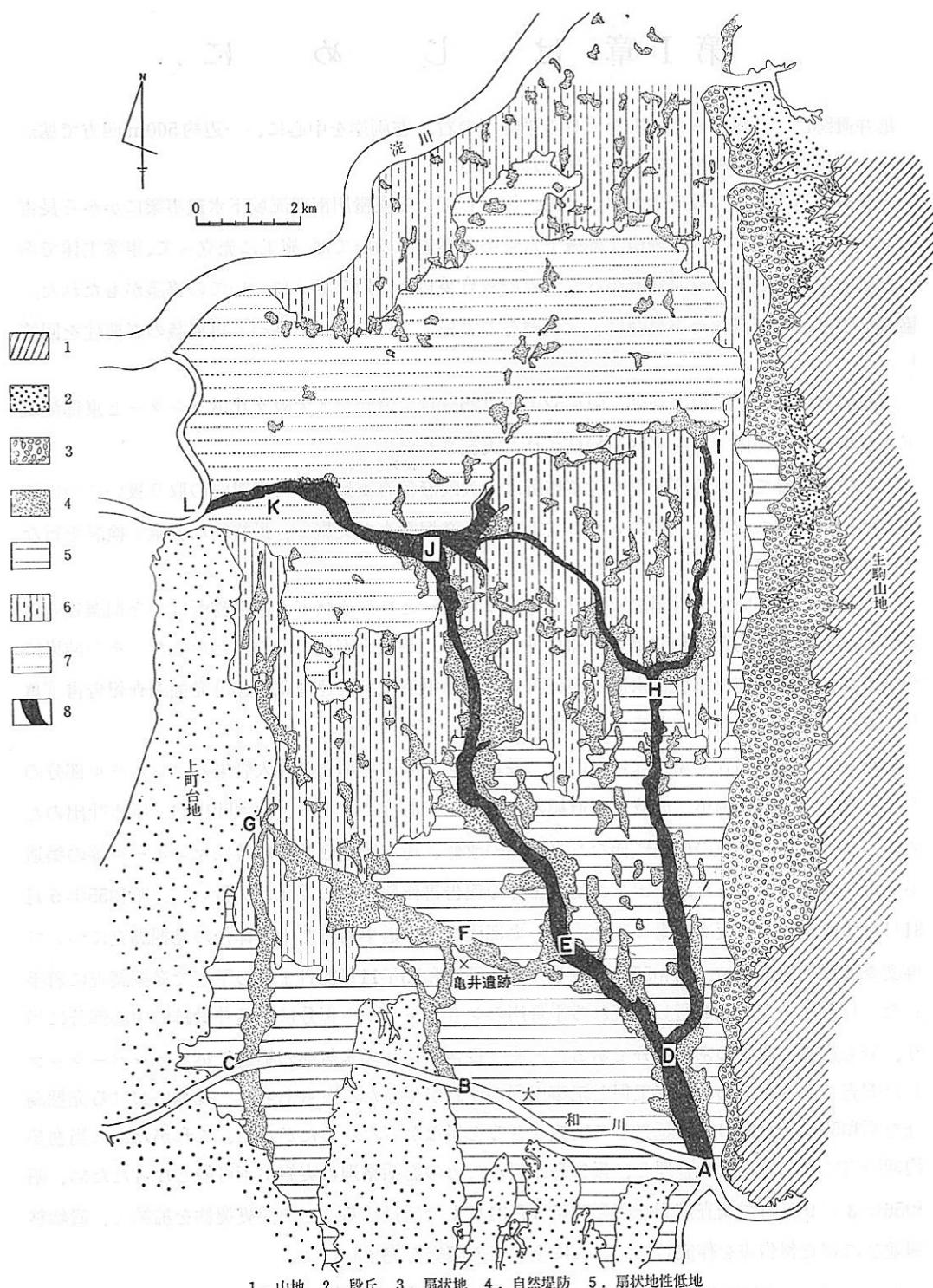
その結果を得て、東部流域下水道事務所は、大阪府教育委員会と再度遺跡の取り扱いについて協議をし、検討の結果、工事に先行して十二分な発掘調査を実施し、最終的な協議と検討を行なう条件で合意に達することとなった。

この合意に基づいて、財団法人大阪文化財センターと東部流域下水道事務所は、発掘調査の実施にかかる委託契約を昭和53年5月23日付で締結し、調査を実施することになった。その結果については、寝屋川南部流域下水道事業長吉ポンプ場築造工事関連埋蔵文化財発掘調査報告書『亀井・城山』として刊行されたことは記憶に新しいところである。
(註2)

しかし、上記の調査対象となったのは、長吉ポンプ場本体部及び流入管渠のマンホール部分のみであり、本ポンプ場が、広域下水道網の中継基地であることから、雨水吐出口、雨水吐出のためのバックウォーターの確保に伴なう平野川の改修、污水圧送管並びに特殊マンホール等の築造が不可欠のものであるため、ポンプ場本体部の報告書作製業務の委託と併行して、昭和55年5月31日付で財団法人大阪文化財センターは、東部流域下水道事務所と上記部分の発掘調査について再度委託契約を締結し、昭和55年6月1日から翌昭和56年11月30日までの予定で発掘調査に着手した。しかし、大きく蛇行して流れる平野川のショートカット部分は、亀井遺跡の中心部分に当たり、最も遺構、遺物の密な部分であることや、長吉ポンプ場本体部の築造工事とオーバーラップした調査であったため、調査工程と工事工程のずれが生じたこともある、現地における発掘調査を昭和56年10月31日まで延長して実施せざるを得なかった。したがって、これがために当初契約期間内に十二分な遺物整理と、報告書作製のための総括整理の実施が不可能となったため、昭和56年3月9日付で調査期間を昭和57年3月31日まで延長することで変更契約を締結し、遺物整理並びに調査報告書を作成して、ここに全ての調査を完了した。

〔註〕 (1) 寝屋川南部流域下水道事業長吉ポンプ場築造工事に伴う亀井遺跡発掘調査報告書
 昭和53年3月 財団法人 大阪文化財センター

(2) 『亀井・城山』—寝屋川南部流域下水道事業長吉ポンプ場築造工事関連埋蔵文化財発掘調査報告書—昭和55年12月 財団法人 大阪文化財センター



1. 山地 2. 段丘 3. 扇状地 4. 自然堤防 5. 扇状地性低地
6. 三角州性低地 7. 潟湖性低地 8. 旧河道

第1図 地形分類図

第Ⅱ章 亀井遺跡周辺の環境

第1節 自然地理的背景

1 地形分類

河内平野は、東を生駒山地、西を上町台地、北を淀川、南を現大和川によって画された、東西約10km、南北約20kmの長方形をした沖積低地である。この低地の成形には、海水準の昇降による侵食基準面の移動と、旧大和川と淀川による堆積作用、さらに地盤の沈降運動と近年の地盤沈下との相互作用があざかっている。現在みられる地表面形態は、1704年（宝永元年）に大和川が付けられた当時の地形を色濃く残している（藤岡 1972）。第1図地形分類図をもとに、河内平野の地表面形態について概観してみよう。（第1図）

a 山地

山地は、主として花崗岩で構成されている生駒山地を示している。河内平野に面する山地西麓部で、南北に数本の断層が走り、山地と平野との対照は明瞭である。

b 段丘

当地域の段丘面は、上位・中位・下位・沖積の4面に区分することができる。上位段丘は、寝屋川市の太奏、国守町付近に一部みられるのみで、上町台地や大和川南部に発達する段丘面は、大半が中位段丘である。また、下位段丘は、大和川南部の中位段丘を開拓した河川沿いにみられ、沖積段丘は、下位段丘の縁にごく一部存在するのみである。

c 扇状地

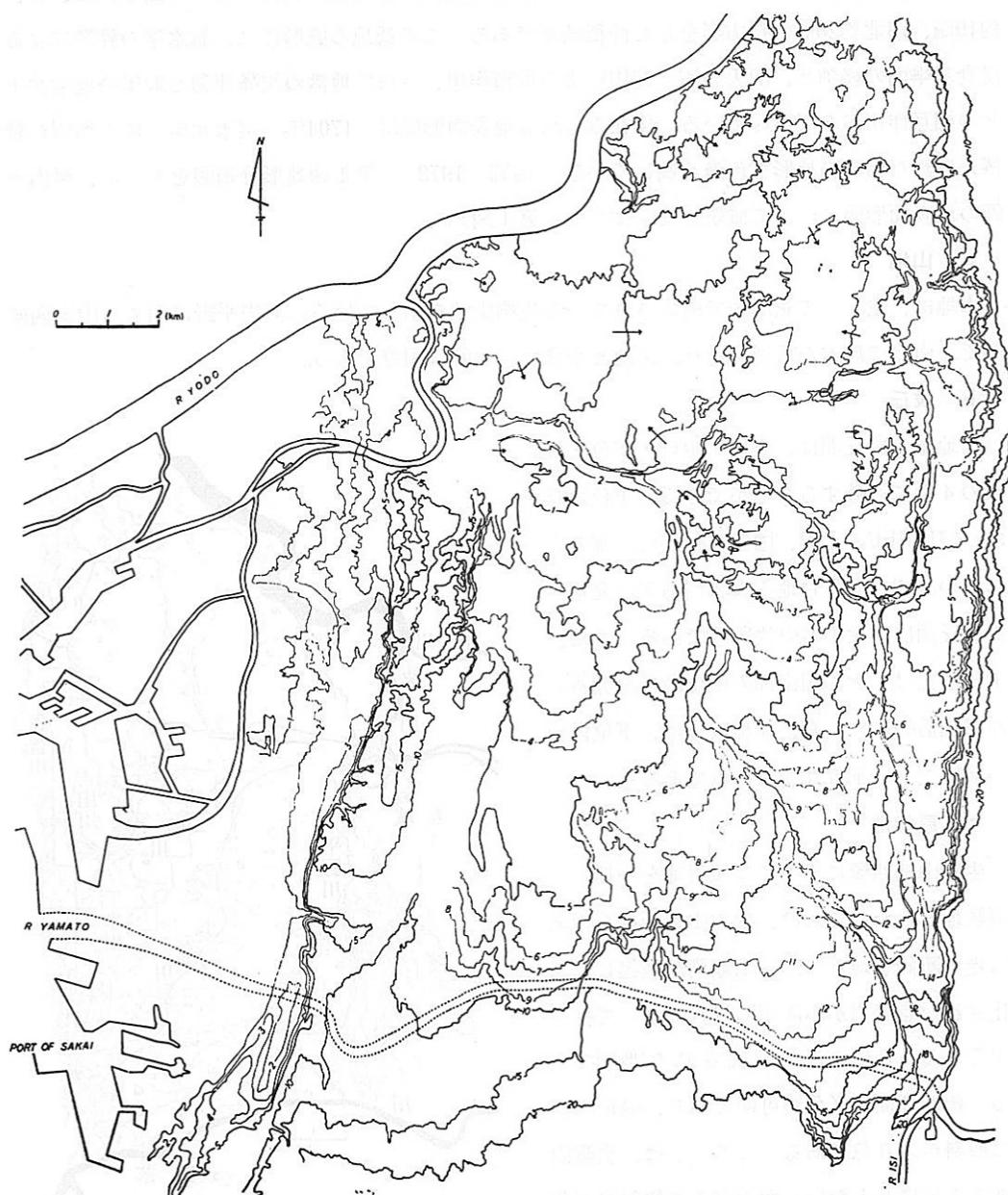
生駒山地西麓に発達する傾斜地を一括して扇状地とした。これは、生駒山地西縁を南北に走る断層を境として、山地側が隆起し、風化された花崗岩が小河川の侵食によって押し出されることによって形成された地形である。新旧2面に区分が可能であり、高位の面は傾斜がより急である。このことは、生駒山地の上昇にともない、面の高さや傾斜が変化したものと思われる。



第2図 等高線図

d 自然堤防

自然堤防は旧大和川や東除川などの河岸に沿って発達するものと、それらに沿わず沖積平野上に分布するものとに分けることができる。これらの自然堤防は、旧大和川などの河道変遷によって形成された微高地で、自然堤防の連続性から旧河道を復原することが可能である。特に顕著なものは、東除川、西除川の延長上の自然堤防列と、それらが合流する北西方向に延びる自然堤防列である。これらの自然堤防の存在は、地形だけではなく仮製2万分の1地形図に示された集落



第3図 1 m 等 高 線 図

の分布からも裏付けられる（第2図）。

e 扇状地性低地・三角州性低地・潟湖性低地

これら3つの低地は、旧河道、自然堤防間に認められる低地で、一般には後背湿地として区分されている。

扇状地性低地、旧大和川の形成した地形面と考えられる。生駒山地西麓の扇状地とは、傾斜、堆積物、形成過程等が異なっている。第3図をみると明らかのように、石川が大和川に合流する地点より、ほぼ同心円状に扇型をなした等高線配置がみられる。これは、5m等高線付近で、傾斜変換線をむかえ、次の三角州性低地へと移行する。

三角州性低地は、標高2～5mに至る後背湿地である。かつての潟湖に淀川と旧大和川が流入した際に形成された三角州の頂置層堆積面と考えられる。

次に、標高2m以下の凹地を潟湖性低地とした。江戸時代には、深野池や新開池として知られた低湿地である。また、近年では内水洪水の多発地帯としても知られている（大矢・中村1969）。

f 旧河道

大和川と石川の合流点から北西方向に延びる長瀬川、玉串川、菱江川、吉田川水系を旧河道とした。これらの水系は、天井川化しているため、周囲の後背湿地と自然堤防より1～3mも高く明瞭な河道跡を残している。

2 龜井遺跡周辺の地形的特徴

河内平野の沖積低地においては、弥生時代にまでさかのぼりうる地形面は残存していない。それらはすべて現地表面下数mのところに埋積されており、河内平野における地盤の沈降と大和川水系による埋積作用が、はげしかったことを物語っている。当亀井遺跡においても、現地表面下3m付近に、古墳時代、弥生時代の遺構面が埋積されている。

河内平野の現在の地表面形態は、1704年（宝永元年）に河道が付替えられた後、大和川による顕著な堆積活動は行われていないため、当時の形態をよく保存している。新田開発や地盤沈下、宅地造成の盛土等によって、改変をうけている地域もあるが、1704年当時の地形については、かなりの精度で復原が可能である。

当時の大和川は、石川との合流点A（第1図）から、A—D—E—J—K—Lと続く長瀬川、並びにDから分岐しHへと続く玉串川、H—J間の菱江川、H—I間の吉田川の4つに分流していた。これらはいずれも天井川化しており、堤防によって河川が固定されていたことを示している。

それ以前の旧河道については、自然堤防列の連続性から推定される。亀井遺跡周辺において、もっとも顕著な旧河道跡は、現大和川から北へ延びるC—G間の西除川、B—F間の東除川があげられる。これらの旧河道は現大和川への付替えによって放棄された河道であり、非常に明瞭で

ある。一方、E—F—Gへと続く自然堤防列も頗著である。この自然堤防列で示される河川が長瀬川から分離したのは、6～7世紀（建設省国土地理院 1965）、あるいは9世紀中頃（服部 1978）とも推定されており、さらにこの水系こそが、かつての大和川本流であったとする見解もある（服部 1978）。いずれにしても、E—F—Gと続く自然堤防列を形成した河川が弥生時代、古墳時代を通じて同位置を流れていたか否かについては、地形学的には不明である。

なお、今回の発掘に伴う地質学的調査によって、亀井遺跡付近では、縄文海進最高頂期の後、沖積層上部砂層堆積期を通じて、扇状地～氾濫原的環境が継続し、しばしば自然堤防も形成されていたことが明らかとなった。詳細は第Ⅳ章を参照されたい。

〔引用文献〕

- 大矢雅彦・中村祝恵 1969 「寝屋川流域内水洪水の地理学的研究」資源科学研究所彙報 72
 建設省国土地理院 1965 『土地条件調査報告書（大阪平野）』
 服部昌之 1978 「大阪平野低地古代景観の基礎的研究」「歴史地域研究と都市研究（上）」大明堂
 藤岡謙二郎 1972 『大和川』学生社

第1表 遺 跡 地 名 表

| 番号 | 遺 跡 名 | 時 代 | 番号 | 遺 跡 名 | 時 代 |
|----|---------------|--------|----|-------------|-------|
| 1 | 亀 井 遺 跡 | 弥生～江戸 | 19 | 久 宝 寺 遺 跡 | 弥生～室町 |
| 2 | 国 府 遺 跡 | 旧石器～奈良 | 20 | 友 井 東 遺 跡 | 弥生～古墳 |
| 3 | 長 原 ・ 城 山 遺 跡 | 旧石器～鎌倉 | 21 | 河 合 遺 跡 | 弥 生 |
| 4 | 恩 智 遺 跡 | 縄文～弥生 | 22 | 大 県 | 弥 生 |
| 5 | 馬 場 川 遺 跡 | 縄文～弥生 | 23 | 恩 智 垣 内 | 弥 生 |
| 6 | 船 橋 遺 跡 | 縄文～奈良 | 24 | 上 田 町 遺 跡 | 古 墳 |
| 7 | 八 尾 南 遺 跡 | 弥生～古墳 | 25 | 西 の 山 古 墳 | 古 墳 |
| 8 | 山 賀 遺 跡 | 弥生～鎌倉 | 26 | 花 岡 山 古 墳 | 古 墳 |
| 9 | 瓜 生 堂 遺 跡 | 弥生～平安 | 27 | 向 山 古 墓 | 古 墓 |
| 10 | 巨 摩 廃 寺 遺 跡 | 弥生～室町 | 28 | 樋 野 ケ 池 窯 跡 | 窯 跡 |
| 11 | 瓜 破 遺 跡 | 弥生～古墳 | 29 | 土 師 ノ 里 遺 跡 | 古墳～室町 |
| 12 | 瓜 破 北 遺 跡 | 弥生～古墳 | 30 | 若 江 北 遺 跡 | 弥生～鎌倉 |
| 13 | 小 若 江 遺 跡 | 弥生～古墳 | 31 | 心 合 寺 山 古 墓 | 古 墓 |
| 14 | 衣 摺 遺 跡 | 弥 生 | 32 | 郡 川 西 塚 古 墓 | 古 墓 |
| 15 | 中 田 遺 跡 | 弥生～古墳 | 33 | 郡 川 東 塚 古 墓 | 古 墓 |
| 16 | 東 弓 削 遺 跡 | 弥生～鎌倉 | 34 | 高 安 古 墓 群 | 古 墓 |
| 17 | 小 阪 合 遺 跡 | 弥 生 | 35 | 高 井 田 横 穴 | 古 墓 |
| 18 | 加 美 遺 跡 | 弥生～古墳 | 36 | 平 尾 山 千 塚 | 古 墓 |



第4図 遺 跡 分 布 図

国土地理院発行 2.5万分の1地形図「大阪東南部」使用

第2節 歴史的環境

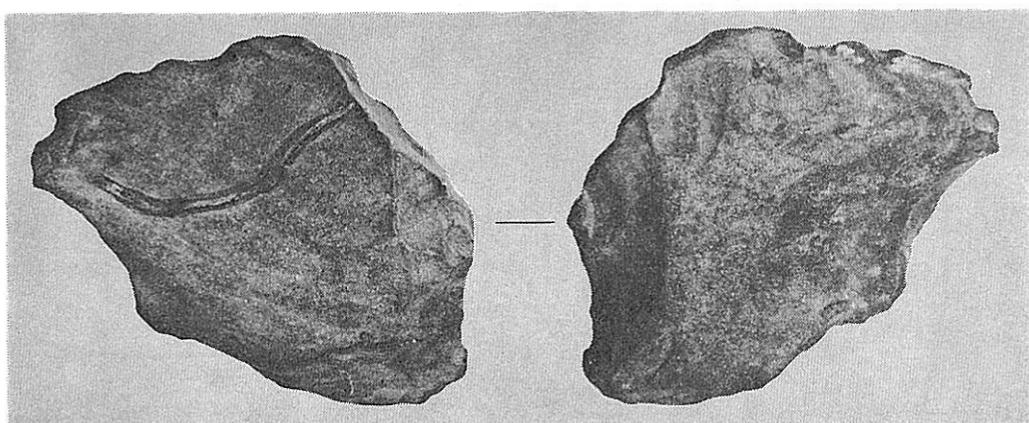
亀井遺跡は、旧大和川の支流である東除川、平野川の2つの旧河道の河道変遷によって形成された微高地（自然堤防）上に位置する弥生時代を中心として現代に至るまで居住空間として営まれてきた集落址である。

亀井遺跡をとりまく歴史的環境を理解するにあたっての前提作業として、旧大和川、とりわけ東除川、平野川流域地域にスポットライトを照射して歴史的（考古学的）環境を理解することがある。あわせて周辺の歴史的環境については『亀井・城山』第Ⅱ章第2節を、参照されたい。

〔旧石器時代〕

長原遺跡の調査では、従来から無遺物層（考古学的遺物を含まない層）と考えられていた地層より、ナイフ形石器・有舌尖頭器・石核・縦長剝片・横長剝片等の出土が知られており、当地域における旧石器時代の実態解明に一明を与えていている。また、昨年6月に大阪文化財センターの手で試掘調査した、松原市に所在する大堀遺跡から翼状剝片石核等が検出されている。本年3月に本調査に入るということなので、プライマリーな遺物包含層・遺構の検出が期待されるところである。さらに二次的堆積層ではあるが、爪破遺跡においてもナイフ形石器の出土が知られている。

今後、低湿地の調査からもプライマリーな状態での検出が期待されている。今回の亀井遺跡の調査でも弥生時代の遺構である1号方形周溝墓の盛土中から翼状剝片石核（第5図）、SD-03から縦長剝片各1点を得ている。



第5図 翼状剝片石核 (1)

〔縄紋時代〕

縄紋時代には、羽曳野丘陵の縁辺部に長原・八尾南遺跡、生駒西麓に恩智・馬場川遺跡、上町台地の東辺部には縄紋～弥生時代の人骨16体を出土した森の宮遺跡が知られる。長瀬川流域には国府・船橋遺跡等多くの遺跡が形成されている。

東除川流域に関わる遺跡として長原遺跡、八尾南遺跡が注目される。長原遺跡は昭和52～53年

の調査で縄紋時代晚期の住居址、溝、土坑等が検出され当地域の縄紋時代集落構造を知る上で画期的なものといえよう。また、周辺から畿内には出土例の乏しい祭祀具である石棒・土偶が得られている。石棒は和歌山県紀ノ川流域産の緑色片岩でつくられたもので、紀ノ川流域の人たちとの交易によって得られたものであると想定される。八尾南遺跡でも縄紋後晚期の自然流路が検出されている。地理的に亀井・長原・八尾南遺跡は有機的な関係にあると言え、今後、縄文時代の亀井遺跡を理解する上において、つねに念頭においておく必要があろう。

また、最近の河内平野における調査では、新家・山賀・亀井などで縄紋時代晚期の土器片の出土が知られ、低湿地での縄紋集落の存在が期待されている。山賀遺跡は弥生時代前期を中心とする集落址であるが、昭和56年の調査で自然河川の底から後晚期の土器片と歩行状況を示すヒト・偶蹄目（イノシシ・シカ）の足跡も検出されている。出土した土器片は、ほとんど磨滅していない。

今回の亀井遺跡（KM-H）の調査によって、基本層序Ⅹ層（「KM-H」の第Ⅹh層—暗褐灰色粘土層）中から晚期の底部をプライマリーな状況で検出している。これは「KM」第Ⅸ章中の自然科学の成果を考古遺物で証明したことになり、暗褐灰色粘土層=縄紋時代晚期形成層という方程式の成立の証明は、喜ばしいことである。

〔弥生時代〕

狩猟・採集経済に基盤をおく縄紋時代に比べると、農耕技術・金属器の導入は河内の低湿地の開発を進行させ、弥生時代の遺跡数は著しく増大してくる。瓜生堂（巨摩廃寺）・鬼虎川・恩智・山賀等の大集落の出現も豊かな経済力を背景として理解される。瓜生堂遺跡からは大阪湾型銅戈、鐸型土製品が知られる。巨摩廃寺から吉備系の土器・方形周溝墓・有鉤銅釧・貨泉・ガラス玉等の豊富な遺構・遺物が出土している。有鉤銅釧は、南海産巻貝製腕輪（ゴホウラ）の九州形の中でも立岩型を模したもので、畿内においては要池遺跡につぐ出土例で、畿内と九州をつなぐ遺物として注目される。要池例は弥生から古墳時代前期の溝から出土したもので、やや幅がみとめられるが、巨摩廃寺例は共伴土器から確実に中期末に属するものである。鬼虎川遺跡の調査では、銅鐸の鋳型が出土している。山賀遺跡から豊富な彩文土器とともに、日本最古の漁撈具である笠が検出されている。

東除川・平野川流域では前時代から継続する森の宮・長原遺跡に加えて、桑津・久宝寺・加美遺跡があげられる。昭和49～50年の長原遺跡の調査で検出された住居址（S B-01）からは、火災によって焼失したものの、炭化した建築用材とともに弥生時代後期の土器群の出土が知られている。これらの土器は今後、当地域における後期中頃の一括資料として編年作業に欠かすことの出来ないものとなろう。久宝寺遺跡からは、溝・井戸・土坑等の遺構と弥生時代中期の偶蹄目（イノシシ・シカ）の足跡が検出されている。加美遺跡では、銅劍の出土が知られている。

KM、KM-Kの調査では、多量の土器・石器・木器・自然遺物のほかに銅鐸片・貨泉・小形仿製鏡・銅鏡・管玉・ガラス玉など弥生時代に貴重視されていたと思われる文物を得ている。動

物遺存体には豊獵・豊作を願うための儀式に使用されたものと思われる、イノシシの下あごの下頸枝に粗孔を穿ったものがある。また、イスは20数頭を数え、これらを獵犬として使って狩猟活動も積極的に行なっていたことがわかる。豊富な動物骨の出土は、そのことを裏づけるものといえよう。

〔古墳時代〕

古墳時代以降の歴史的環境については「亀井・城山」の第Ⅱ章第2節を参照していただき、ここでは最近の近畿道の調査成果を中心として、亀井周辺遺跡の概観をおこない、歴史的（考古学的）環境を理解していくこととする。

河内平野に位置する西岩田、巨摩廃寺、山賀、友井東、美園遺跡等から古墳時代の埴輪や土器などが検出されている。従来、空白地帯と考えられていた低湿地での古墳の存在から、古墳分布の立地観を急変させ、修整を余儀なくしている。西岩田遺跡は、古墳時代初頭の庄内式土器と岡山の酒津式土器が共存する遺跡としてつとに有名である。巨摩廃寺遺跡からは、1辺10mの方墳と椅子、人物、水鳥、蓋、家等の豊富な形象埴輪、多数の円筒埴輪等の出土をみている。友井東遺跡の調査では、古墳時代前期の方形周溝墓、中期の土坑・柱穴が検出されている。美園遺跡からは4C末~5C初頭の方墳（1辺約10~12m）とその周濠から類例に乏しい壺形埴輪、精巧なつくりの家形埴輪を得ている。また、久宝寺遺跡の調査では、古墳時代の旧河道からI段階の須恵器とともに漢式系の完形土器を含む多くの土器片を得ており、渡来系氏族の居住地を近辺に求められている。亀井遺跡（KM）からも一辺10mにみたない古墳が単独で検出されており、古墳のあり方が注目されている。

以上、古墳時代の遺跡調査から、古墳時代の環境は、古墳時代以前のものと大きく異なっている。しかし、古墳時代の遺跡調査は、古墳時代以前のものと大きく異なる点では、古墳時代以前のものと古墳時代のものとの間には、必ずしも大きな差異がある。しかし、古墳時代以前のものと古墳時代のものとの間には、必ずしも大きな差異がある。

このことは、古墳時代以前の遺跡調査から、古墳時代以前のものと古墳時代のものとの間には、必ずしも大きな差異がある。しかし、古墳時代以前のものと古墳時代のものとの間には、必ずしも大きな差異がある。

第Ⅲ章 調査の目的と方法

第1節 調査に至る経過

大阪平野（河内平野）は、旧大和川と呼ばれる本流としての長瀬川・玉串川と、平野川を含む数条の中小河川によって形成された沖積平野であり、亀井遺跡は、この沖積平野の南端部に位置している。

一方、近年大都市を中心とした近隣市町の急激な都市化現象は、農地の宅地化を促進し、人口の急増をもたらし、結果、地域住民生活と密接に関連をもつ環境の整備は、必要欠くべからざるものとなってきた。

大阪府土木部下水道課が計画・実施している寝屋川南部流域下水道事業は、これら環境整備事業の一環として、東大阪市・八尾市・柏原市並びに大阪市や藤井寺市の一部を含む地域幹線下水道網整備事業である。

亀井遺跡の所在する八尾市南亀井町3丁目の地は、上記幹線下水道の中継基地として長吉ポンプ場の建設用地となったことから、亀井遺跡も、古代の人々の生活の舞台から、現代の下水道網の中心的基地となることになった。

ちなみに、亀井遺跡は、昭和43年、主要地方道大阪中央環状線の建設工事に伴って実施された平野川改修工事に際して、多量の弥生式土器が発見されたことによって遺跡の存在が知られたものである。この発見により、当該改修工事と併行して発掘調査が実施され、遺物包含層の確認と、その拡がりが把握されたが、工事区間のみに限られていたこともあって、全体の範囲については不明な点が多く、また、層位的に逆転現象が認められたことから、遺構の存在についても否定的な認識のもとにおかれていた。その後、本遺跡の原位置の確認や、遺物包含層の分布範囲の確認を目的とした範囲確認調査が4次にわたって大阪府教育委員会の手で実施された。これら4次にわたる調査でも、遺構が認められたのは1回のみであり、昭和48年の時点では包含層の分布する範囲が東西500mであることを確認したにとどまり、唯一確認された遺構の性格については将来の調査にその解明を持ち越していた。さらに、昭和48年には、財团法人大阪文化財センターの手によって、近畿自動車道に関連する当該遺跡の範囲確認調査も実施され、中央環状線中央分離帯部分に於いて、南北に500mの拡がりを持っていることが確認された。

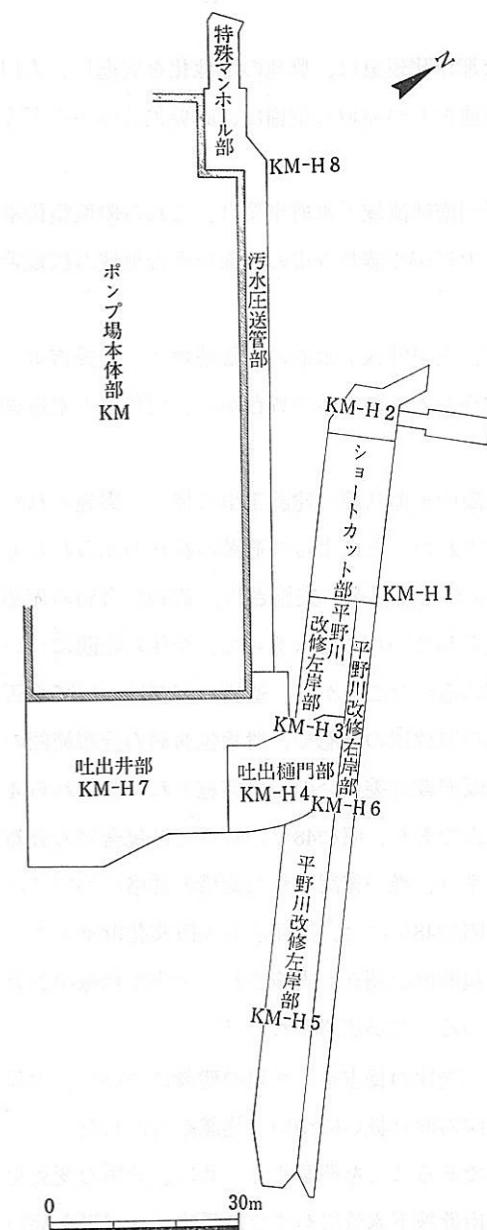
こうして、遺跡の範囲が概ね把握せられた時点で、先述の長吉ポンプ場の建設について、大阪府土木部から、大阪府教育委員会に対して、当該遺跡の取り扱いについて協議がもたれた。

協議を受けた大阪府教育委員会は、当該遺跡地內であることを確認すると共に、計画の変更を強く求めたが、用地取得が完了していること、中央南幹線下水管渠がすでに長吉ポンプ場を除いてほぼ完成していること等、計画の変更は困難であることから、長吉ポンプ場用地内に於ける正

確な試掘調査を実施し、遺物包含層の有無、遺構の有無やその範囲を確認し、その結果に基づいて再度協議したい旨回答した。

この回答に基づく試掘調査は、財団法人大阪文化財センターによって昭和52年に実施され、それまで不明とされていた弥生時代中期及び前期の遺構を検出するとともに、遺物包含層もプライマリーなものであり、当該地が龜井遺跡の中心部分である可能性が強いと結論されるに至った。この結果をもって、再度当該遺跡の取り扱いについて協議をもった大阪府土木部と大阪府教育委員会は、数回にわたり遺跡の保護・保存対策等を慎重に検討したが、結局、工事予定地内すべてに発掘調査を実施することと、その結果を基に最終的な協議と検討を加えることで合意した。こうして実施された長吉ポンプ場の発掘調査は、昭和53年から同55年まで、財団法人大阪文化財センターが東部流域下水道事務所の委託を受けて実施し、弥生時代全般にわたる集落関係の龜井遺跡の中心部であり、大集落遺跡であることを明らかにした。

今回の調査は、先述の過去の調査結果を踏まえて、長吉ポンプ場に関する施設（吐出井・吐口樋門・平野川改修・汚水圧送管）部分について、長吉ポンプ場と一連のものとしての協議に基づいて、同じく財団法人大阪文化財センターが、東部流域下水道事務所の委託を受けて、昭和55年6月から昭和57年3月まで実施したものである。その中で汚水圧送管部分については、古墳時代から弥生時代前期までの遺物包含層及び遺構が破壊されることがレベル的ないことから、上層の調査のみでとどめることとし、他の部分については、すべての時期の調査を実施することとした。



第6図 KM-H調査トレンチ配置図 (1/1000)

第2節 調査の目的

昭和53～55年にかけて行なわれた亀井遺跡（ポンプ場本体部一以下、KMと略称する）発掘調査の成果は従来、洪水等によって遺物が押し流され、これが再堆積して形成された2次堆積層であると考えられていた弥生時代遺物包含層が、長期間同じ場所で生活している間に、生活・生産用具、食料残滓等の積極的な廃棄等の人為的要素と自然の営力によって堆積した自然的要素の2つの要素が融合した結果、形成されたものであることを証明した。加えるに、炭層・焼土層の間に在によって複数の遺構を認め、各層より掘り込まれた遺構を確認でき、弥生時代遺物包含層とは、遺構面の集合したものであることを立証したことは大きな成果であったといえる。同時に豊富な遺構・遺物の出土量は、東除川・平野川流域はもちろんのこと河内平野においても亀井遺跡の重要性を遺漏なく世に示すに足りうるものであった。しかし反面、調査された面積は想定される亀井遺跡のほんのわずかであり、集落全体を考えていく際に、解決されていない3つの問題点を内蔵していた。

今回、調査にあたって我々に提出された大きな課題は、KMの調査で解明できなかった3つの問題を解くことにあった。

- 1) 弥生時代から江戸時代にかけて、人々の生活を復元するにあたっての資料の蓄積が必要。特に、弥生時代に関しては弥生時代中・後期における集落の拡がり、弥生時代前・後期集落の位置（「KM」で検出された柱穴状ピットは、中期のものであり、確実に後期といえるピットはなく、前期に至っては溝一条が知られるのみである。）
- 2) 亀井遺跡の立地環境がいつ頃成立したのか。また、集落の立地を大きく左右したであろう東除川、平野川の流跡については弥生時代後期、江戸時代以降以外は不明である。
- 3) 調査によって縄文海進最高期においては、河内湾南岸に位置していたことが明らかとなつたが、当時の人々の生活域がどのようなものであったのか。また、旧石器時代の人々の生活域が、亀井遺跡まで及んでいたのか否かについては全くわかっていない。また、古墳時代前期の遺構・遺物が検出されていないのに突然、古墳時代中期の古墳が現われてくるのはどうしてなのか。解決されていない問題が山積みとなっている。

以上の問題点は、亀井遺跡における3回目の大規模調査であるという点からも、我々に与えられた課題であったといえる。また、亀井遺跡を理解するにあたっての調査の目的であった。

第3節 調査の方法

調査の開始にあたっては、以上に記したような目的意識（課題）を前提作業として認識し、KMの調査成果を最大限に利用した上で調査方法の検討を行い、調査に望んだ。

調査の準備として、当遺跡が低湿地に存在し、最終遺構面が現地表面下-5.0mに達することが明らかであるため、まず第1に、トレンチを囲むようにして鋼矢板を打設し、壁面の崩壊をあ

らかじめ防いだ。

次に、KMとの位置関係を明確化するためと遺物の取りあげ、遺構実測の基準線としてKMの地区割りをそのまま利用して、第7図に示すように、KM-H全体に 5×5 mの区画を設定割付をした。基準線はポンプ場コンクリート連続壁に合わせ、基準線の方位はN-26°-Eを示す。各区画の地区名は、南北線を数字、東西線をアルファベットで示し、区画の東南の交点の番号を東南優位の原則に従って用いた。地区名はアルファベットを先にしるしている。たとえば、■の地区名はO・5地区と呼称する。また、連壁より以東は0、①、②……として0を境に順次数字に〇印を付した。

調査の実際にあたっては、遺跡全体を一律に覆う層厚約2.0mの盛土（第I層）及び第II層を機械力の導入によって排土し、第III層以下は人力による掘削を行った。

遺構の調査は次のような基準を設けて実施した。

1) 遺跡の土層堆積状況及び遺構の切り合い関係を調べるために、トレンチの端に観察用セクションを斜め、若しくは階段状にして現地表面から残すように心掛けた。幸いKM-H 1～5調査地区は南側に鋼矢板を打設していないので第I層から残すことが出来た。反面、これがために発掘調査が下の方にさがるにしたがい幅をせばめざるをえず、当初設けた幅10mのトレンチが弥生時代最終遺構面では約4.0mとなり遺構の把握（拡がり）を妨げる結果にもつながった。

2) 調査はKMの基本土層に順じ、層位ごとに一面々剥いで遺構検出にあたった。

3) 溝、土坑、方形周溝墓等の遺構については、土層堆積観察用セクションを1～4ヶ所設けて土層の堆積状況の把握に鋭意努力した。

4) 遺物の取りあげは、1つの層に含まれている遺物が一括性を有するか否かについてを検討する前操作業として、できるかぎり層ごとに取りあげることを心掛けた。また、出土状況を重視する立場から実測・写真を取りっている。

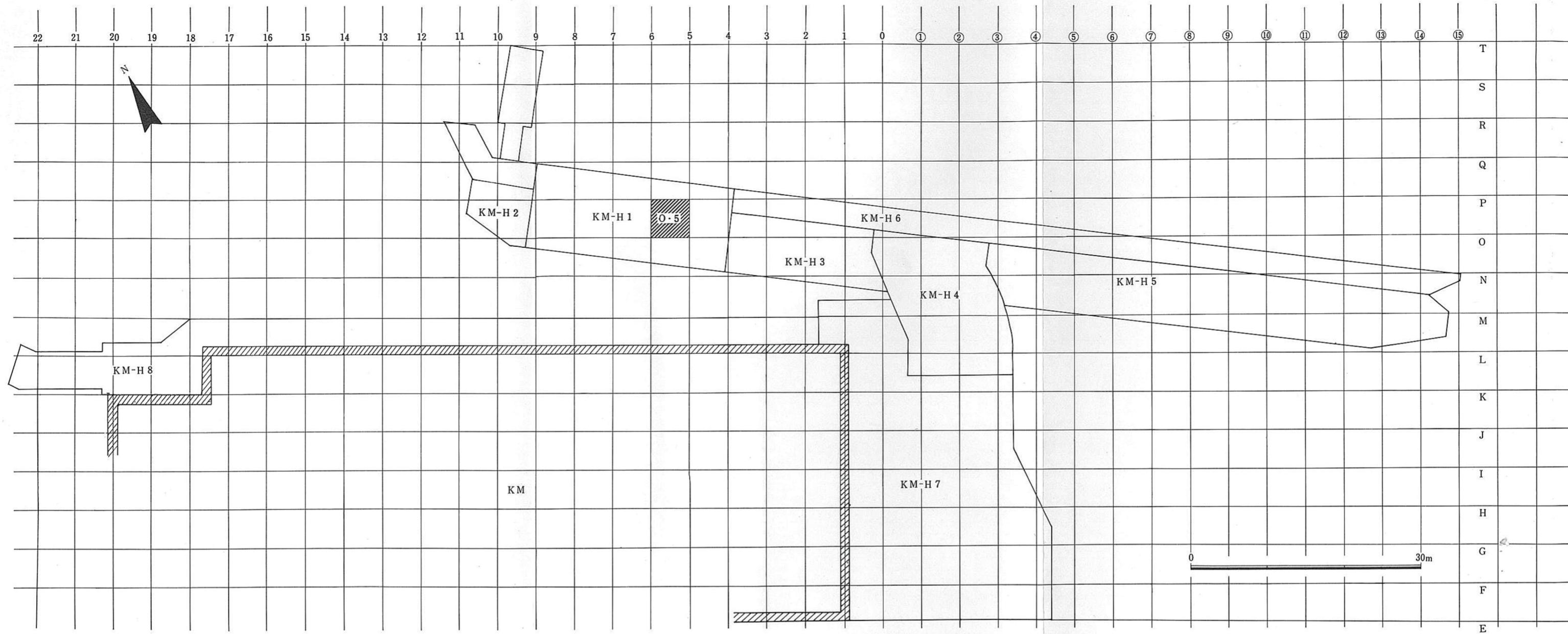
5) 水準の表記はT.P.土を採用した。

6) 平面図の実測は、地区割りの交点杭から各遺構の位置関係・方位の決定を行った。土層断面・平面図の実測図の縮尺は $1/20$ を基調とし、適宜 $1/2$ 、 $1/10$ 、 $1/100$ を併用した。

7) 写真撮影は適時にトレンチのまわり、トレンチ内に1～10段のビティ（写真撮影用足場）を設置して行った。遺物、土坑・溝等の遺構を単独であるいは近接して撮る場合は、三脚、手もちで撮影を行った。

8) 土層観察用のアゼは、必要に応じて再検討できるように、可能な限り最後まで残すように心がけた。

9) 自然環境を復元するための一つの方法として、できる限り土壌サンプルを採取し、種子・小さな動物骨（ネズミ・トリ・ヘビ・サカナ・カエル等）の検出に努めた。

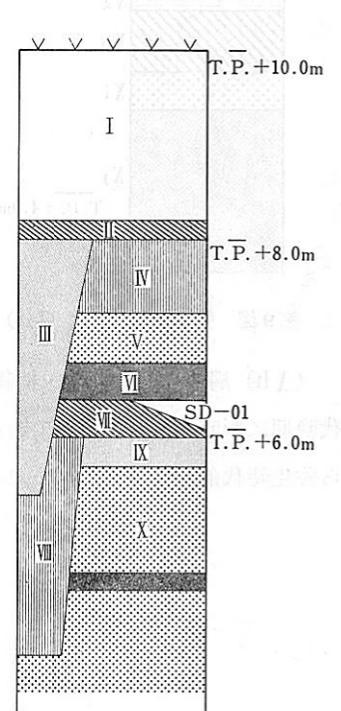


第7図 KM-H地区割り図 (1/500)

第Ⅳ章 基本層序

KM-H調査地区において普遍的に存在する層を基本土層として、KMの基本層序の呼称に従って示すと以下のようになる。

- 第Ⅰ層 調査予定地内の全面にわたって堆積する産業廃棄物（空カン・ビン・タイヤ等）を含む盛り土で、層厚約2m。
- 第Ⅱ層 （暗灰色砂質シルト層） 近年までの床土に相当する。層厚約0.2m。
- 第Ⅲ層 （砂・シルト一互層、粘土層） 江戸時代の平野川内に堆積する土層。T.P.+8.0m～5.4m。上位からa層（暗茶褐色粘土・暗褐色粘質土層—機能消失後、その凹みに堆積した土層）T.P.+7.9m～6.9m、b層（青灰色極細砂と青灰色シルトの互層）T.P.+6.9m～6.2m、c層（灰白色粗砂—瓦・すり鉢・弥生土器を多く含んでいる。）T.P.+6.2m～5.3m。a層下位（暗褐色粘質土層）上面にて、取水用の井戸を検出している。（KM-H 4）
- 第Ⅳ層 （黄褐色シルト層） 全域を覆ってほぼ水平に堆積する。上位よりa層（黄褐色極細粒砂混りシルト層）、b層（黄褐色シルト層—多数の細い植物の根の跡に酸化鉄が沈着し、微少なマンガンノジュールが散存する）、c層（灰黄褐色極細粒砂混リシルト層）。第Ⅳa層上面にて江戸時代平野川の輪郭を確認している。第Ⅳb層上面では中世の小溝や落ち込み状遺構を検出した（KM-H 1）。
- 第Ⅴ層 （暗灰色粘土層） 本層上位は黄褐色極細砂、中位には植物遺体層が数層間存する。下位では塊状の炭酸第一鉄が点在する層準に移行する。
- 第Ⅵ層 KM-H地区では偽礫層ではなく、層厚約0.4mの褐灰色細砂+暗灰色シルトのラミナが挿在する。第Ⅵ層に対応するものと思われる。
- 第Ⅶ層 （青灰色シルト層） 自然河川NR-3001（SD-11）の氾濫土層である。とくに弥生時代後期遺構の凹みで厚く堆積する。層厚0.3～0.5m。上面にて古墳時代前期の自然流路SD-01を確認している。
- 第Ⅷ層 （粗粒砂層） 弥生時代後期の自然河川である



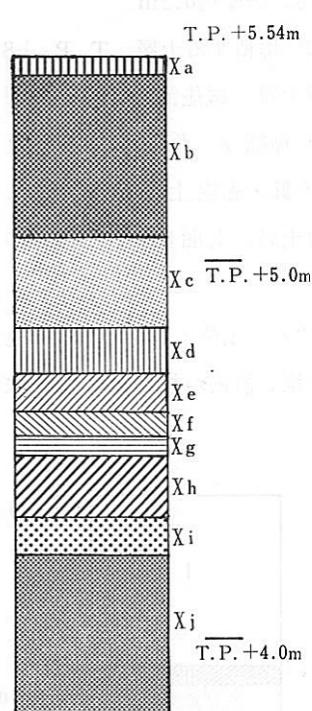
第8図 KM-H 1 土層柱状図 (1:50)

N R - 3001 (これは、KM-H の S D-11) に堆積する砂層で上面は T.P. +6.0m。

第Ⅹ層 (弥生時代遺物包含層) 上面はほぼ水平で T.P. +6.2m~6.0m、層厚0.5~0.8m。方形周溝墓は第Ⅹ層をベースとして築かれている。黒灰色粘土と黒褐色粘土で形成されている。カーボン・焼土の間隙によって4層に分層できる。

第Ⅹ層 (青灰色シルト層) 龜井遺跡弥生時代最終遺構面のベースとなる層 (地山層) である。上面は T.P. +5.30~5.54m。

さらに、第Ⅹ層を T.P. +5.45~T.P. +4.0mまで、層準の中で細分すると以下のようになる。(第9図)



第Ⅹa層 (青灰色粘質土) 層厚5~10cmと薄く堆積する。

第Ⅹb層 (青灰色シルト) 粘土層や砂・シルト互層を薄く間ませ、漸進的に粗粒砂に変化する。

第Ⅹc層 (青灰色粘土)

第Ⅹd層 (茶灰色粘土) ラミナを認める。

第Ⅹe層 (暗青色粘土) 有機物を多量に含み、カーボン層を間している。

第Ⅹf層 (暗灰色粘土) わずかに有機物を含み、カーボンを多量に含む。

第Ⅹg層 (暗灰色シルト) 第Ⅹf層から第Ⅹh層にいたる漸進層である。

第Ⅹh層 (暗褐灰色粘土) こまかに有機物を多量に含んでいる。

第Ⅹi層 (暗灰色シルト) 比較的よくしまっている。

第Ⅹj層 (青灰色シルト) この層に達すると湧水が激しくなり、漸進的に粗粒砂に変わる。

第9図 第Ⅹ層の柱状図 (1/20)

(Ⅹh) 層からは有機物・植物種子とともに繩紋晚期の土器底部を得ており、この層が繩紋時代晚期に形成された堆積層であると思われた。したがって、第Ⅹg層-第Ⅹa層は繩紋時代晚期から弥生時代前期の間に形成されたものであることが了解された。

第V章 調査の概要

第1節 はじめに

調査によって弥生時代中期から江戸時代の平野川までの遺構を検出している。遺物では旧石器時代の石器から江戸時代の瓦・土器の出土をみている。

調査の開始にあたってあらかじめ調査対象地を8つの地区に分け、その進行にあわせてH1・2、H3~5、H7、H8と4回にわけて調査を行なった。以下に、節などに分けて調査の概要を略記する。なお、H6地区の調査は現平野川の堆積土を除去したのみなので省略している。

第2節 KM-H1・2の調査

1) 調査の概要

調査によって検出した遺構は弥生時代の溝8・土坑3・落ち込み2・焼土坑1・ピット（柱穴状ピット100余・杭状ピット100余）・方形周溝墓2、古墳時代の自然流路1、奈良時代の小穴多数、中世の小溝1・落ち込み1、江戸時代の河川、近代素掘り溝である。

中世以後

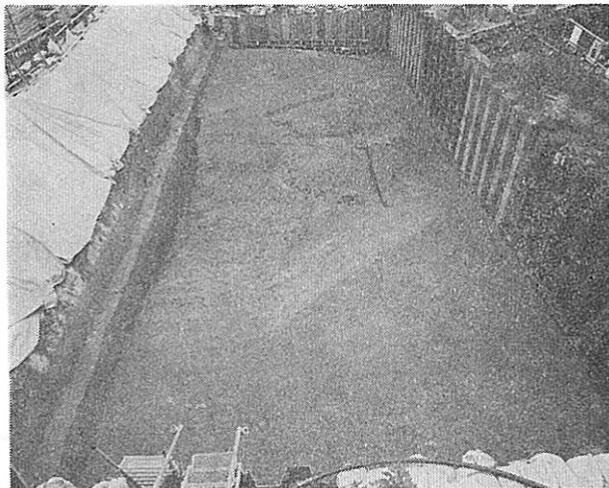
第I・II層を取り除くと第IV層の上面にて南北走する幅約20cm、深さ約3mの素掘り溝、東西走する幅46cm、深さ16cmの小溝（第10図）を検出した。得られた土器は細片で時期を明確に決定できないが層準から考えて近代と思われる。また、同一面のトレンチ西端にて江戸時代平野川の輪郭を（機能消失後の凹みに堆積した第IIIa層の）を確認した。深さT.P.+5.3mまで達し、この部分では弥生時代の包含層はえぐりとられていた。東側では第IVb層上面で中世の小溝、落ち込みを確認している。

奈良時代

第V層上面で径約10~15cm程の小穴が密度の濃淡はあるが全域にわたって多数みとめられている。その小穴中にはシルト・極細砂が充填されており、H5地区で検出した奈良時代の河川の氾濫による堆積によるものと思われた。



第10図 近代の素掘り溝 西から



第11図 青灰色シルト面（第Ⅶ層）東から



第12図 弥生時代包含層上面（第Ⅷ層）東から



第13図 弥生時代最終遺構面 東から

古墳時代

層厚約 0.5 m の第Ⅳ層を除去すると古墳時代の堆積層である暗灰色粘土が約 0.7 m 堆積していた。西側にみられる 2 つの高まりは後述する弥生時代の方形周溝墓の上に堆積する粗砂層である。この下には弥生時代の氾濫土である青灰色シルト（第Ⅸ層）が堆積し、その凹みには布留期の土器を検出した自然流路 S D-01 が流れている。（第 11 図）西地区は方形周溝墓の盛土のため第Ⅶ層の堆積は認められない。

弥生時代

第Ⅷ層を除去すると東地区の第Ⅸ層（弥生時代包含層）上面にて、弥生時代後期の溝 S D-02・04 を検出している。（第 12 図）西地区では方形周溝墓のマウンドが、マウンド下に弥生中期の溝 S D-03・05・07・08、落ち込み 1・2 を確認している。（第 13 図）弥生・古墳時代の遺構・遺物の概要については第 2 表にまとめているので参照されたい。

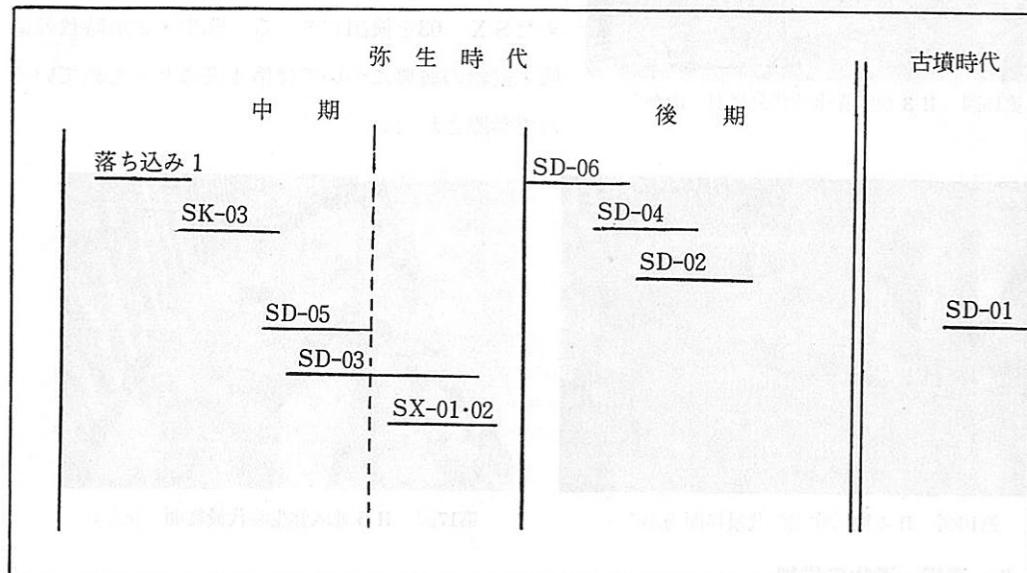
縄文時代

第Ⅹh 層（暗褐色粘土）中からプライマリーな状態で縄文晩期の底部を得た。弥生時代中期後半の方形周溝墓のマウンド及び S D-03 からは旧石器時代の石器を得ている。

第2表 KM-H 1・2調査遺構一覧表

| | 遺構名 | 時代 | 規模(m) | 主な遺物 | 備考 |
|------|-------|--------|----------------|---------------------|----|
| 溝 | SD-01 | 古墳時代 | 幅 10 深 1.3 | 布留期の甕・鉢 | |
| | SD-02 | 弥生時代後期 | 幅約4.7 長さ10.0以上 | 多量の土器・フライパン状木製品、自然木 | |
| | SD-03 | 弥生時代中期 | 幅約2.8 深 1.5 | 木製農具・絵画土器・動物遺存体(イヌ) | |
| | SD-04 | 弥生時代後期 | 幅3.0以上 深0.6以上 | 土器・動物遺存体(イヌ) | |
| | SD-05 | 弥生時代中期 | 幅 0.6 深 0.4 | 多量の完形土器 | |
| | SD-06 | 弥生時代後期 | 幅7.0以上 深 1.4 | 土器・木製品・動物遺存体(イヌ) | |
| 土坑 | SK-01 | 弥生時代中期 | 径 0.9 深 0.7 | 土器 | |
| | SK-02 | 弥生時代中期 | 径 2.5 深 0.3 | 土器・石製紡錘車 | |
| | SK-03 | 弥生時代中期 | 径 1.8 深 0.5 | 土器群・イノシシ | |
| 墳墓 | SX-01 | 弥生時代中期 | 径 6.0×3.6 | 木棺墓2 | |
| | SX-02 | 弥生時代中期 | 径 7.0×4.0以上 | 木棺墓2 土墳墓2 | |
| ピット群 | | 弥生時代中期 | | 柱穴状ピット100個余 | |
| | | 弥生時代中期 | | 杭状ピット数100個にて構成 | |

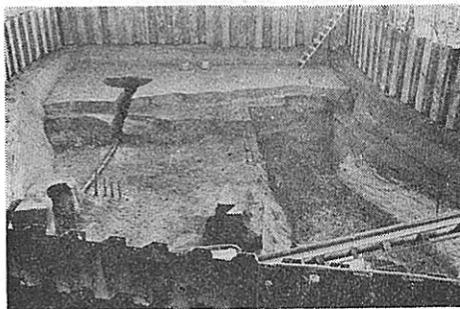
第3表 遺構の前後関係 (KM-H 1・2)



第3節 KM-H 3・4・5の調査

1) 遺構・遺物の概要

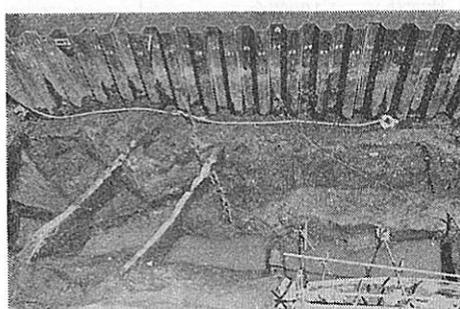
調査によって検出した遺構は、弥生時代の溝12・土坑11・落ち込み2・自然河川1・ピット群、奈良時代の自然河川・小穴多数、江戸時代の旧平野川・取水用の井戸3（第14図）である。



第14図 H4地区江戸時代 北から

弥生時代の遺構は、江戸時代及び現在の平野川の浸食によって調査面積の1/2以上、削平を受けるが、H3地区ではH1地区からつづく蛇行溝SD-03、新たに確認した遺構には、多量の遺物を包含していた後期初頭の溝SD-12及びSK-04を検出した。（第15図）

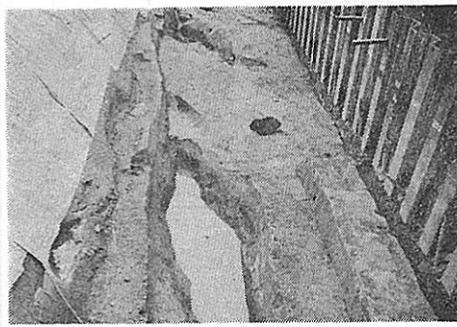
H4地区では、新たに後期のSD-09（KM〔SD-3041〕）、SD-11（KM〔NR-3001〕）、中期のSD-19・20、SK-05・06・07・08・09・12・14を検出している。（第16図）また、H5地区（第17図）においては基本土層の第Ⅶ層上部にて弥生時代後期終末に位置づけられる多量の土器群をえた落ち込み3を、第Ⅶ層の下の青灰色粘土中に弥生時代後期初頭に所属する数百個の土器等をえたSX-03を検出している。弥生・古墳時代の遺構・遺物の概要については第4表にとりまとめているので参照されたい。



第15図 H3地区弥生時代最終面 南から



第16図 H4地区弥生時代最終面南から



第17図 H5地区弥生時代最終面 東から

2) 遺構・遺物の詳細

〔SD-03〕

ショートカット部（H1地区）の調査で検出されたSD-03よりつづく蛇行溝である。各層より自然木片や加工材木とともに多種多量の遺物の出土をみている。木製品には方形容器、鏡、その他イヌ一括、ヤス状骨器等豊富な動物骨を得ている。

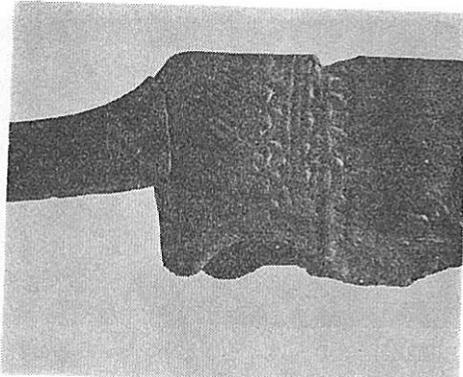
〔SD-12〕

東西に蛇行して走る幅約2.5m、深さは1.0mの弥生時代後期前半の溝である。堆積土は大別して（I）暗褐灰色粘質土、（II）黒灰色粘質土（ブロック土）、（III）暗青灰色粘土であり、溝底（T.P.+4.4m）は暗灰色シルト上面まで及んでいる。遺物は（I）～（II）層に集中しており、多量の完形土器、木製品、動物遺存体、種子等が出土した。土器では、長頸壺の口頸部に「△」字形の記号文をもつものも出土している。木製品には布巻具、高杯、臼等が検出されている。布巻具（第18図）は把手に渦巻文、身部両端近くに鋸歯文、綾杉文を刻んでおり、装飾性に富んだもので類例を知らない。高杯はなだらかに拡がる脚部に浅い椀状の杯部がつく。臼（第19図）は今までに報告された中で最も整ったもので完形品である。高さは約40cm、口径は土圧によって変形を受けているが約31×37cmを測る。木製農耕具も2～3点検出している。

動植物遺存体には、イノシシ・ニホンジカ・ネズミ・カラス・モモ・コメ・ドングリ類等を得ている。中でも鹿角加工品、シカ頭蓋の集中出土する点は注目される。これは亀井遺跡の中で解体一加工一廃棄というシステムを追っていると考えられ、亀井弥生人の生産活動の一端を示す好例といえよう。

〔SD-19・20〕

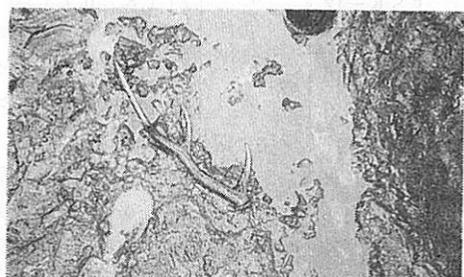
西一北東に曲走する弥生時代中期中葉の大溝である。幅は約3.0m、深さ約1.5mをはかる。遺物はⅠ～Ⅲ層に集中しており土器、石器、木製品、動物遺存体等を多量に包含していた。Ⅲ層より柄に装着されたままの石斧、木製容器（四脚・六脚）、しゃくしを得ている。占いに使用されたと思われる卜骨も1点出土している。他にイノシシ・ニホンジカ・スッポン・ブダイ等の豊富な動物遺存体を検出している。これらは、当時の亀井弥生人の食生活、採集活動を考えいく上で貴重なデーターを提出してくれる。また興味深いものに土器の中にイノシシ左右下顎骨（M₃未萌



第18図 SD-12出土の布巻具



第19図 SD-12出土の臼



第20図 SD-19出土の鹿角完存品（落角）



第21図 SD-19出土の土器に入っていた骨
SD-20溝はSD-09溝によって大きく切られているので詳細は不明。出土遺物には土器、木製容器、種子、獸骨、二枚貝等がある。ほかにイノシシ祭祀に関係する遺物として下顎骨の下顎枝に約2cm大の粗孔を穿ったものがある。KM-Kの調査では5例を確認している。

第4表 KM-H 3・4・5 調査遺構一覧表

| | 遺構名 | 時代 | 規模(m) | 主な遺物 | 備考 |
|-------|-------|------|-------------|-----------------|----------------|
| 溝 | SD-03 | 弥生中期 | 幅約2.8深さ1.5 | 木製農具・容器・イヌ・土器 | |
| | SD-09 | 弥生後期 | 約10.0 1.5以上 | 多量の土器・石庖丁・石槍 | KM(SD-3041)と同じ |
| | SD-11 | " | 約8.0 1.5以上 | 多量の土器(記号文あり) | KM(NR-3001)と同じ |
| | SD-12 | " | 約2.5 1.0 | 多量の完形土器・農耕具・獸骨 | |
| | SD-14 | " | 約1.4 0.6 | 土器 | |
| | SD-16 | 弥生中期 | 約1.6 0.55 | 土器・イヌ・イノシシ等の獸骨 | |
| | SD-18 | " | 約0.85 0.1 | 土器 | |
| | SD-19 | " | 約3.0 1.5 | 多量の土器・豊富な木製品・卜骨 | |
| | SD-20 | " | — — | イノシシ下顎(穿孔)・土器 | KM-H 7参照 |
| | SD-22 | " | 約2.6 1.5 | 多量の土器 | |
| 土坑 | SD-23 | 弥生後期 | 約4.0 1.7 | 土器・自然木・獸骨 | |
| | SD-24 | 弥生中期 | 約2.0 1.0 | 多量の土器 | |
| | SD-25 | " | 約2.0 1.0 | " | |
| | SK-04 | " | 径約0.6 深さ— | 完形土器 | |
| | SK-05 | " | 約1.7 1.4 | 完形土器・石器 | 井戸 |
| | SK-06 | " | 約0.56 0.2 | 土器 | |
| | SK-07 | " | 約1.0 0.16 | " | |
| | SK-08 | " | 約1.2 0.20 | " | |
| | SK-09 | " | 約0.7 0.4 | 土器 | |
| | SK-12 | " | 約1.8 0.7 | " | |
| 落ち込み3 | SK-14 | " | 約2.6 1.32 | 完形土器群 | 井戸 |
| | SK-15 | " | 約0.65 0.9 | 水差形土器 | " |
| | SK-16 | " | 約1.2 1.5 | 完形土器・木器・獸骨 | " |
| | SK-17 | 弥生後期 | 約0.9 1.0 | 完形土器・ヒョウタン・ウニ | " |
| | | " | 約3.0 — | 後期後半の土器一括・ウマの歯 | |
| SX-03 | " | " | 約5.0 — | 後期初頭の一括(記号文含む) | |
| | ピット群 | 弥生中期 | | 多量の柱穴状ピット | |

〔SK-17〕

SK-17は調査トレンチ東隅において検出された弥生時代後期後半の土坑である。平面は不整円形で、断面形態は下ぶくれの台形を呈し、暗灰色シルト層まで掘削している。規模は径約0.88m、深さは約1.26mをはかる。層位は単純で青灰色粘質土・シルト（有機物を多量に含む）によって充填されている。これは自然堆積と思われる。（第22図）



第22図 SK-17

遺物の平面的な出土状況より推して3回にわたる廃棄がみられた。第1回目の廃棄はツル状の植物によって編まれたカゴと、わずかに土器片を含んでいた。第2回目は小型高杯完形品1ヒュニ、第3回目は自然木に混ってヒョウタン4個・楕の子・二又鋤・鋤の柄を含んでいた。ヒョウタンには1cm前後の円孔が穿たれている。本土坑の性格は出土遺物より推して井戸の可能性があるが、なお一層の検討を必要とする。なお、土坑は短期間のうちに埋ったものであろう。

第4節 KM-H 7 の調査

1) 遺構・遺物の概要

調査地はポンプ場本体部に東接する。トレンチ内の西側はポンプ場本体部の連続壁築造の時に使用したアースアンカーによって大きく陥没していた。そのため方墳の輪郭も十分把握することができず、かろうじて方形プランであると確認されたにとどまったのは惜しまれた。

調査によって検出した遺構は、弥生時代の溝7・土坑8・河川1・多数のピット、古墳時代の自然河川1、奈良時代の小穴多数である。弥生・古墳時代の遺構・遺物の概要については第5表にまとめているので参照されたい。



第23図 SD-19遺物出土状況

第5表 KM-H 7 調査遺構一覧表

| | 遺構名 | 時代 | 規模(m) | 主な遺物 | 備考 |
|---|-------|------|-------------|--------------------|---------------|
| 溝 | SD-09 | 弥生後期 | 幅4.5深さ2.0以上 | 多量の土器・石器 | KMのSD-3041と同じ |
| | SD-11 | 〃 | 11.4 2.0以上 | 多量の土器・石器・鉄斧 | KMのNR-3001と同じ |
| | SD-19 | 弥生中期 | 4.3 1.5 | 多量の土器・木製容器・イヌ・イノシシ | |
| | SD-20 | 〃 | 2.3 1.2以上 | 土器・石器・木製容器・獸骨 | KMのSD-3004と同じ |
| | SD-26 | 〃 | 4.2 1.6 | 土器・石器・獸骨 | 上部は弥生後期の砂堆積 |

| | | | | | |
|----|--------|---|-----------|----------|----------------|
| 土坑 | S D-27 | 〃 | 3.5 | 土器、木器、石器 | KMのS D-3001と同じ |
| | S D-28 | 〃 | 2.6+2 0.2 | 土器細片 | |
| | S D-29 | 〃 | 2.2以上1.0 | 土器細片 | |
| | S K-18 | 〃 | 1.1 0.8 | 壺1点 | 口縁打ち欠き |
| | S K-19 | 〃 | 1.7 1.2 | 水差形土器2 | 下層から |
| | S K-20 | 〃 | 1.0以上1.0 | 土器細片 | S D-20に切られる。 |
| | S K-21 | 〃 | 1.0 0.2 | 無頸壺 | |
| | S K-22 | 〃 | 1.2 — | 土器細片 | S D-20を切っている。 |

第5節 KM-H 8 の調査

1) 遺構・遺物の概要

調査地はT.P.+4.7mまで昭和43年以前、江戸時代の平野川によって削平を受けている。検出した遺構は、弥生時代の溝1・土坑3である。弥生時代中期の溝S D-30はKMのS D-3023と同一の溝である。中期の土坑S K-26・27はアースアンカーによって南半部を失っている。弥生・古墳時代の遺構・遺物の概要については第6表にまとめているので参照されたい。

第6表 KM-H 8 調査遺構一覧表

| | 遺構名 | 時代 | 規模(m) | 主な遺物 | 備考 |
|---------|----------------------|--------|--------------------------|--------------------------------------|-----------|
| 溝 土坑 | S D-11 (N R-3001) | 弥生時代後期 | | 多量の弥生土器 | |
| | S D-30 (S D-3023) | 弥生時代中期 | 幅2.4 深0.73 径2.45×2.25 | 南肩部にて高杯完形(1) 3層から(完形の水差 2点甕1点) | 上部は削平をうける |
| | S K-25 | 〃 | 径2.45×2.25 | | 〃 |
| | S K-26 | 〃 | 1.34 深0.92 径2.0以上 | 壺、甕 | 〃 |
| | S K-27 | 〃 | 深0.6以上 | 土器 | 〃 |



第24図 S K-25遺物出土状況 東から

第VI章 検出された遺構と遺物

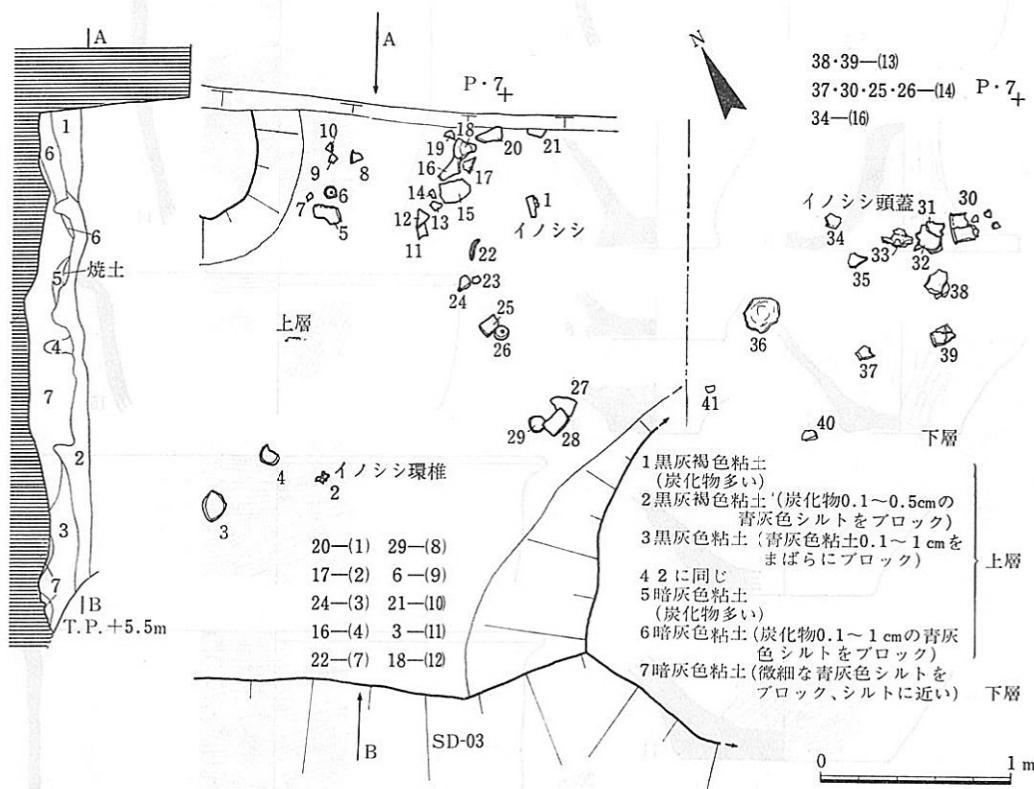
第1節 弥生時代中期

1) 落ち込み1

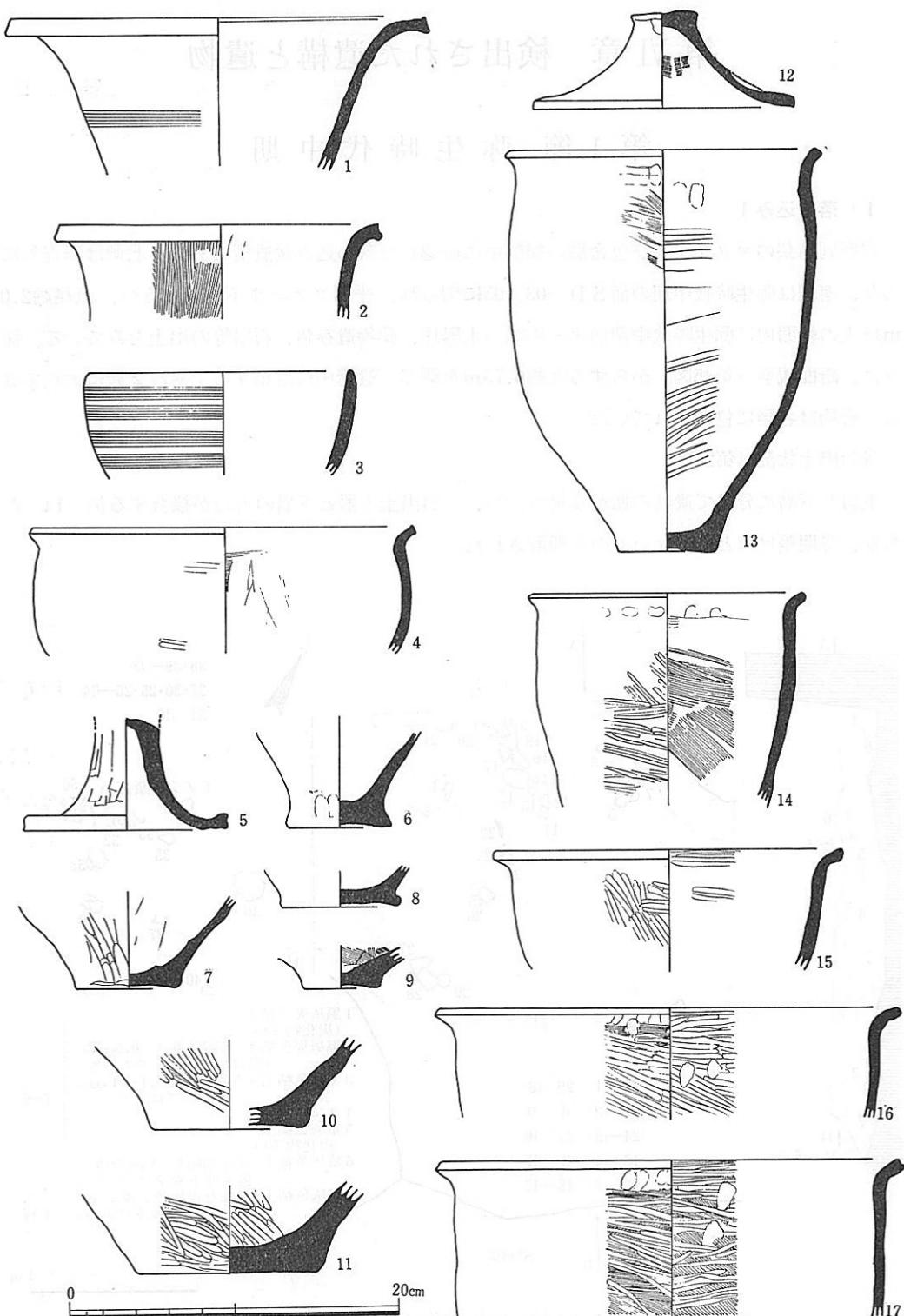
方形周溝墓のマウンド及び包含層の掘削中に確認した落ち込み状遺構である。北側は調査外にあり、南側は弥生時代中期の溝SD-03、05に切られ、平面プランは不明であるが、直径約2.0m以上の範囲内に弥生時代中期前半—中頃の土器片、動物遺存体、石器等の出土をみている。深さは、断面観察（第45図）からすると約0.75mを測る。遺構中に堆積する土層は2層に大別できる。遺物は各層に包含されていた。

遺物出土状況（第26図）

上層と下層に分けて遺物の拡がりをみたが、上層出土土器と下層のものが接合する例（14）があり、時期差はほとんどないと理解された。



第26図 落ち込み1（上層・下層）遺物出土状況及び土層断面図（1/40）



第27図 落ち込み1出土遺物(1/4)

出土遺物（第27～28図）

両層から土器、石器、動物遺存体を得ている。

〔土器〕 上層から（1～12・15）、下層から（13・16・17）を得た。検出した土器は、壺・鉢・高杯・蓋・甕等の各器種資料があり、すべて凹線文、簾状文を飾らないものである。（1・10・11）甕（13・14・16・17）では、すべて口縁部はゆるやかに外反する型式に限られる。（11）

〔石器〕（18）

石小刃（18）先端部及び基部が欠損（註1）したサヌカイト製の石小刃である。a面にはポジティブな素材の剥離面を残し、側縁部より押圧剥離が同剥離面を切り込んでいる。b面は側縁からの押圧剥離が、全面を覆っている。（註2）

〔動物遺存体〕

イノシシ・ニホンジカ・ナマズ・鳥類を検出している。イノシシは頭骨（図版3b）、環椎、歯牙があり、四肢骨は、出土していない。最少個体数7。

ニホンジカは、左上顎臼歯M¹ 1点を得たのみである。ナマズ、鳥の骨は焼けている。鳥は大腿骨片を得ているが、種は不明。

2) 落ち込み2（第29図）

O・7地区にて検出した長軸4.7m、短軸2.0m程の隅丸長方形プランを有する落ち込み状遺構である。方形周溝墓のマウンド掘削後、青灰色シルト（第Ⅹa層）上面にて確認した。深さは予定掘削面に達していたので、未調査の為不明。埋土は、黒褐色粘土である。南はSD-05によつて切られ、上部を失う。

出土遺物

上面にて土器細片、石器、動物遺存体等を得ている。

〔土器〕

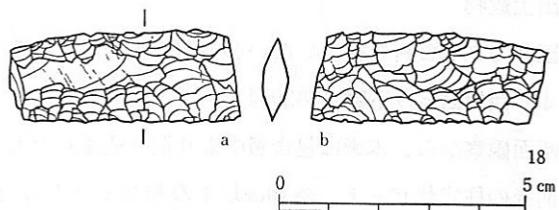
図化できる資料を得ていないが、中期前半～中頃のものである。

〔石器〕

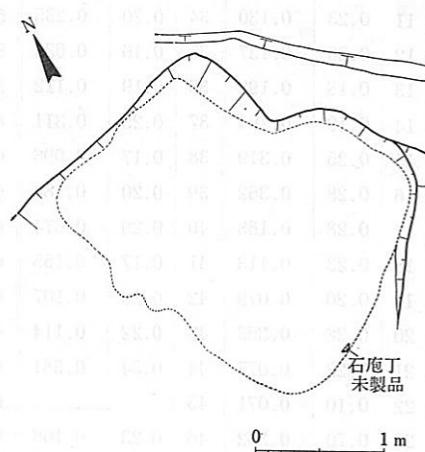
南隅から結晶片岩製の石庖丁未製品を検出した。

〔動物遺存体〕

イノシシ歯牙・ニホンジカ基節骨を各々1点得ている。



第28図 落ち込み1出土遺物（28）



第29図 落ち込み2 遺構平面図（29）

3) 焼土坑 1 (第30図)

O・8 地区にて検出した径 $1.2 \times 1.0\text{m}$ 、深さ 0.68m を測る焼土坑である。北側は、SD-06溝によって切られている。土層の堆積は(Ⅰ)～(Ⅲ)層に大別され、(Ⅰ)暗灰黒色粘土一炭化物、 $0.1 \sim 1.0\text{cm}$ の青灰色粘土を多くブロック、(Ⅱ)青灰色極細粒砂一焼土の堆積をみる、(Ⅲ)青灰色シルト+黒褐色粘土の Mix 層一掘削時の掘り残し土である。遺物は、(Ⅱ)層中から中期の土器細片を検出した。

出土遺物

図示できる資料を得ていないが中期の土器片である。

4) 西地区ピット群 (第30図)

断面観察から、本来は包含層中より掘り込まれたものと思われる。検出したピットは径 $20 \sim 30\text{cm}$ 前後の柱穴状ピット、径 10cm 以下の杭状ピットに分けられるが明確なまとまりはみとめられず、住居等の復元はできなかった。以下にピットの径・深度を表にまとめているので参照されたい。

第7表 各ピットの径・深さ計測一覧表

(単位m)

| P | 径(m) | 深さ(m) | P | 径(m) | 深さ(m) |
|----|------|-------|----|------|-------|----|------|-------|----|------|-------|-----|------|-------|
| 1 | 0.20 | 0.098 | 24 | 0.20 | 0.185 | 47 | 0.17 | 0.100 | 70 | 0.18 | 0.068 | 93 | 0.23 | 0.157 |
| 2 | 0.20 | 0.010 | 25 | 0.18 | 0.167 | 48 | 0.28 | 0.075 | 71 | 0.27 | 0.066 | 94 | 0.16 | 0.042 |
| 3 | 0.28 | 0.264 | 26 | | | 49 | 0.17 | 0.268 | 72 | | | 95 | 0.31 | 0.180 |
| 4 | 0.25 | 0.184 | 27 | | | 50 | 0.22 | 0.070 | 73 | | | 96 | 0.15 | 0.030 |
| 5 | 0.18 | 0.117 | 28 | 0.39 | 0.112 | 51 | 0.17 | 0.082 | 74 | 0.40 | 0.201 | 97 | 0.20 | 0.024 |
| 6 | 0.17 | 0.069 | 29 | 0.29 | 0.227 | 52 | 0.21 | 0.088 | 75 | 0.20 | 0.153 | 98 | 0.15 | 0.049 |
| 7 | 0.19 | 0.016 | 30 | 0.19 | 0.131 | 53 | 0.18 | 0.149 | 76 | 0.24 | 0.110 | 99 | 0.17 | 0.065 |
| 8 | 0.20 | 0.120 | 31 | 0.18 | 0.059 | 54 | 0.18 | 0.113 | 77 | 0.14 | 0.037 | 100 | 0.41 | 0.215 |
| 9 | 0.25 | 0.154 | 32 | 0.38 | 0.068 | 55 | 0.19 | 0.060 | 78 | 0.31 | 0.264 | 101 | 0.12 | 0.064 |
| 10 | 0.20 | 0.528 | 33 | 0.58 | 0.273 | 56 | 0.18 | 0.230 | 79 | | | 102 | 0.24 | 0.060 |
| 11 | 0.23 | 0.130 | 34 | 0.20 | 0.235 | 57 | 0.21 | 0.195 | 80 | 0.38 | 0.283 | 103 | 0.20 | 0.080 |
| 12 | 0.20 | 0.137 | 35 | 0.16 | 0.032 | 58 | 0.12 | 0.062 | 81 | 0.20 | 0.203 | 104 | 0.16 | 0.057 |
| 13 | 0.18 | 0.192 | 36 | 0.19 | 0.112 | 59 | 0.17 | 0.145 | 82 | 0.18 | 0.189 | 105 | 0.16 | 0.108 |
| 14 | 0.19 | 0.104 | 37 | 0.25 | 0.311 | 60 | 0.26 | 0.227 | 83 | 0.33 | 0.200 | 106 | 0.23 | 0.037 |
| 15 | 0.25 | 0.319 | 38 | 0.17 | 0.096 | 61 | 0.25 | 0.202 | 84 | 0.25 | 0.147 | 107 | 0.27 | 0.287 |
| 16 | 0.28 | 0.362 | 39 | 0.20 | 0.180 | 62 | 0.23 | 0.171 | 85 | 0.23 | 0.144 | 108 | 0.12 | 0.045 |
| 17 | 0.28 | 0.168 | 40 | 0.29 | 0.374 | 63 | 0.20 | 0.089 | 86 | 0.18 | 0.127 | 109 | 0.12 | 0.054 |
| 18 | 0.23 | 0.113 | 41 | 0.17 | 0.155 | 64 | 0.13 | 0.240 | 87 | 0.25 | 0.095 | 110 | 0.30 | 0.146 |
| 19 | 0.20 | 0.079 | 42 | 0.20 | 0.107 | 65 | 0.20 | 0.216 | 88 | 0.23 | 0.186 | 111 | 0.20 | 0.209 |
| 20 | 0.28 | 0.363 | 43 | 0.22 | 0.114 | 66 | 0.18 | 0.058 | 89 | 0.19 | 0.099 | 112 | 0.16 | 0.082 |
| 21 | 0.28 | 0.077 | 44 | 0.34 | 0.381 | 67 | 0.14 | 0.110 | 90 | 0.28 | 0.083 | | | |
| 22 | 0.10 | 0.071 | 45 | | | 68 | 0.20 | 0.072 | 91 | 0.32 | 0.359 | | | |
| 23 | 0.70 | 0.362 | 46 | 0.23 | 0.106 | 69 | 0.23 | 0.084 | 92 | 0.18 | 0.042 | | | |

※深さは、青灰色シルト(第X層)面より測定



第30図 焼土坑1、ピット群平面図及び土層断面図 ($\times 40$)

5) SK-01 (第25図)

N・4 地区の南側において検出した中期中頃の土坑である。検出した面は青灰色シルト（第Xa層）であるが、掘り込み面は断面観察から包含層途時に認められる。土坑の平面プランは 0.85×0.8 m程の円形を呈し、深さ0.7mを測る小規模の土坑といえる。覆土は青灰色シルトを多く含む黒灰色粘土の単一層で、土層の堆積状況からして土坑の機能消失後、短日にして埋められたものと理解された。

出土遺物

〔土器〕 細片のため図示していないが、口縁部片・底部からして壺、鉢、高杯、甕などの器種を各々1点ほど得ている。

〔石器〕 下位よりサヌカイト製石槍片1と剝片数点を検出している。

以上、検出した遺物、出土状況からSK-01の性格を推すことはできないが、単なるゴミ場的な土坑ではないと思われる。出土土器からSK-03、KM(SD-3004、SK-3002)に併行する。

6) SK-02 (第25図)

トレーナーの東端、SD-03の北側0.2mで検出した最大径2.1m、深さ約0.5mの深い土坑である。北側は、河床部にあたるため未調査である。

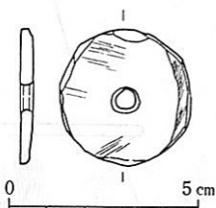
断面形態は、なだらかな皿状を呈し、坑底には中期以降に設けられた柱穴状ピットによる攪乱をうけ凹凸面を残す。覆土は、焼土、炭化物を含む黒褐色粘土の単一層である。

出土遺物 (第31図)

〔土器〕 図示できる土器片は得られなかった。

〔石器〕 坑底からやや浮いた状態で、完形の結晶片岩製紡錘車1点を得た。

紡錘車(第31図)は、直径 3.4×3.4 cm、厚さ0.3cm、中心孔の内径0.5cm、重量7.5gを計る。両面と周縁は丁寧に研磨しており、面取り状の研磨も加えている。中心孔は、両面から錐で穿孔する。材質は結晶片岩で、石庖丁の転用と思われる。



第31図

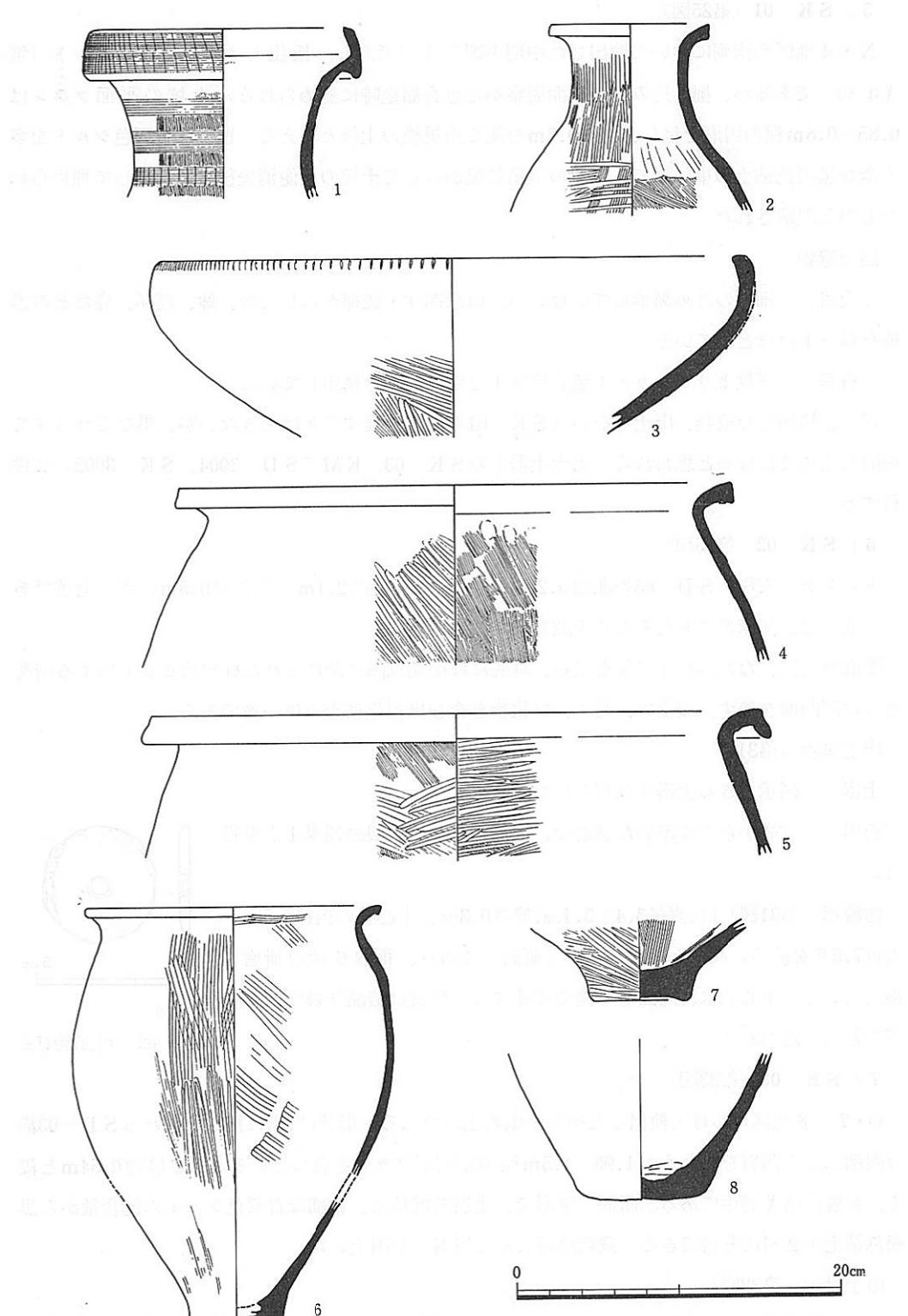
SK-02 出土遺物(之2)

7) SK-03 (第33図)

O・7~8地区にかけて検出した中期中頃の土坑である。形状は、南に接して流れるSD-03溝の開削により南肩を失なうが 1.95×1.5 m程の楕円形プランを有している。深さは約0.54mと浅く、坑底は第X層中にある。断面U字形で、土層の堆積は、微細な青灰色シルトの包含量から黒褐色粘土が2層に分層できる。遺物はほとんど下層より出土した。

出土遺物 (第32図)

SK-03下層から坑底よりやや浮いた状態で弥生時代中期中頃の土器、動物遺存体、自然木片等が出土した(図版5)。



第32図 SK-03出土遺物 (3/4)

〔土器〕(1~8)

壺・鉢・高杯・甕などの器種資料を得てある。土器は集中して出土したわりに接合資料は少ない。(第32図6)は、唯一完形に復すことのできた甕形土器である。器高26cm、口径18cmを測る中形で、体径がやや口径を凌駕する。フォームと調整からして所謂大和形甕の系譜上にあると理解されるが、口縁部内面に粗いヨコハケを施さず、体部外面は粗いタテハケ後ヘラミガキを施すという点から考えて、大和形甕の中でも時期的にやや新しい段階に位置づけられるものと思われる。

〔動物遺存体〕 床直からやや浮いた状態でイノシシ後頭骨(後面を上にして検出)・イノシシ後臼歯(M₃)・ニホンジカ大腿骨近位端・スッポンの部分骨を得ている。

イノシシ後頭骨には、イヌによる咬痕が顕著に認められる。また、鈍重なものでたたかれたものと思われる深い陥没が後頭鱗上にみられた。最少個体数1。スッポンは腹甲板1。

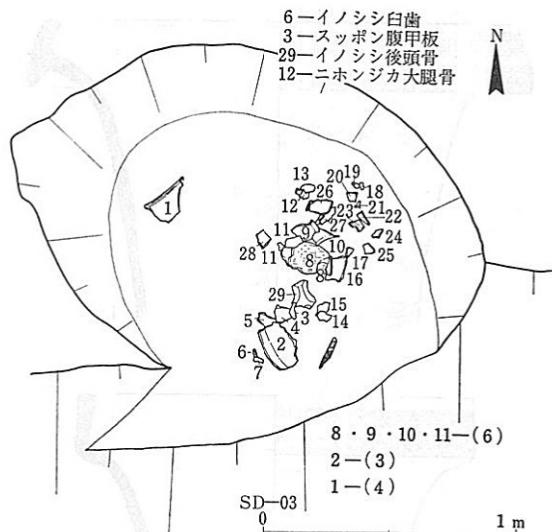
SK-03は、出土土器からSK-01、KM(SD-3004・SK-3002)に併行するものと思われる。遺構の切り合い関係からSD-03、西地区ピット群より古い。

8) SD-03

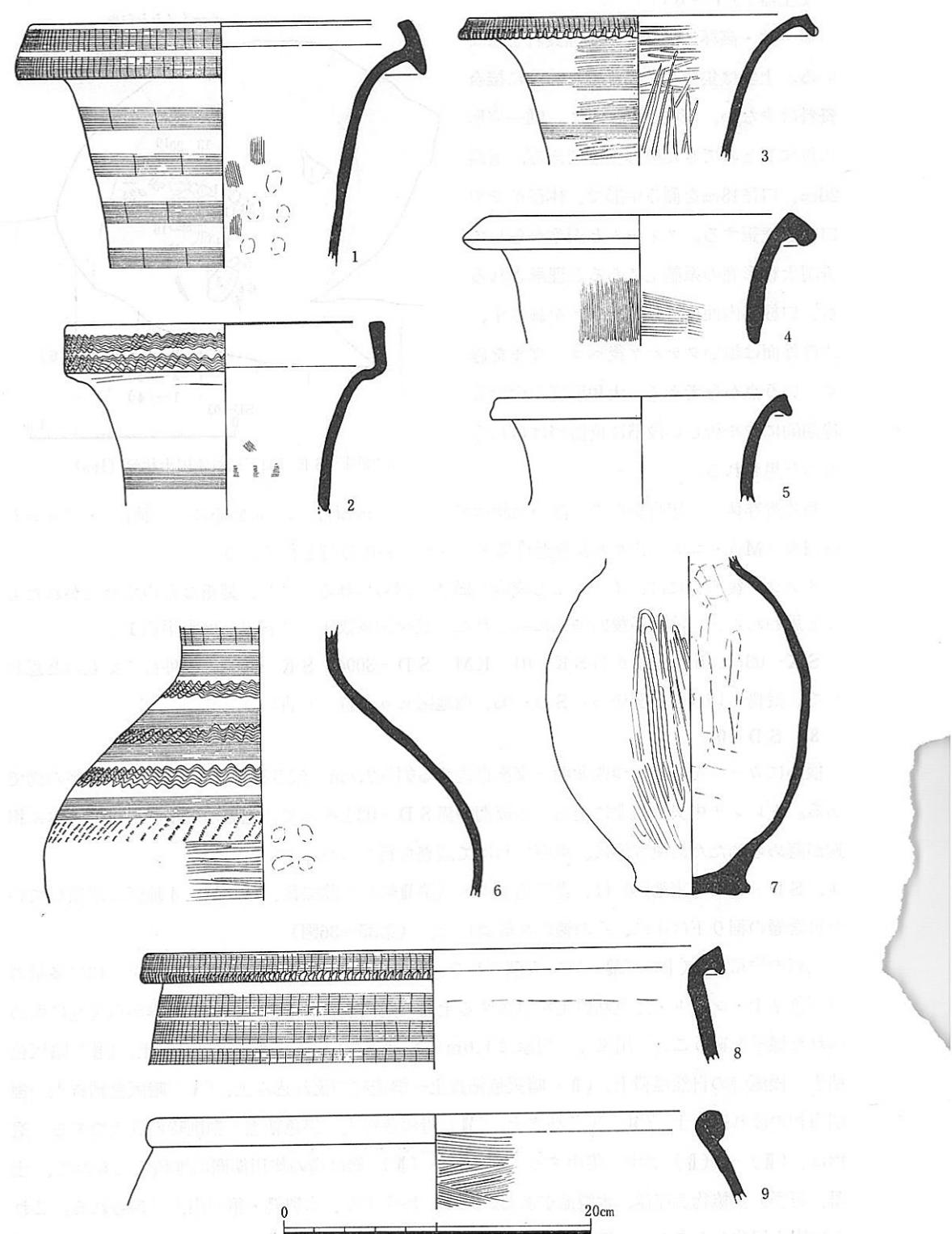
緩かにカーブを描きつつ西北西—東南東走する幅約2.8m、深さ約1.5mを測る中期後半の溝である。トレント中央を南北に走向する後期の溝SD-02を挟んで、土層の堆積状況にいくぶん相違が認められたため便宜的に、東西にわけて調査を行なった。

a. SD-03E(東地区)は、青灰色シルト(第Ⅶ層)の除去後、O-N・4地区に堆積していた包含層の掘り下げ中に、その輪郭を確認した。(第35~36図)

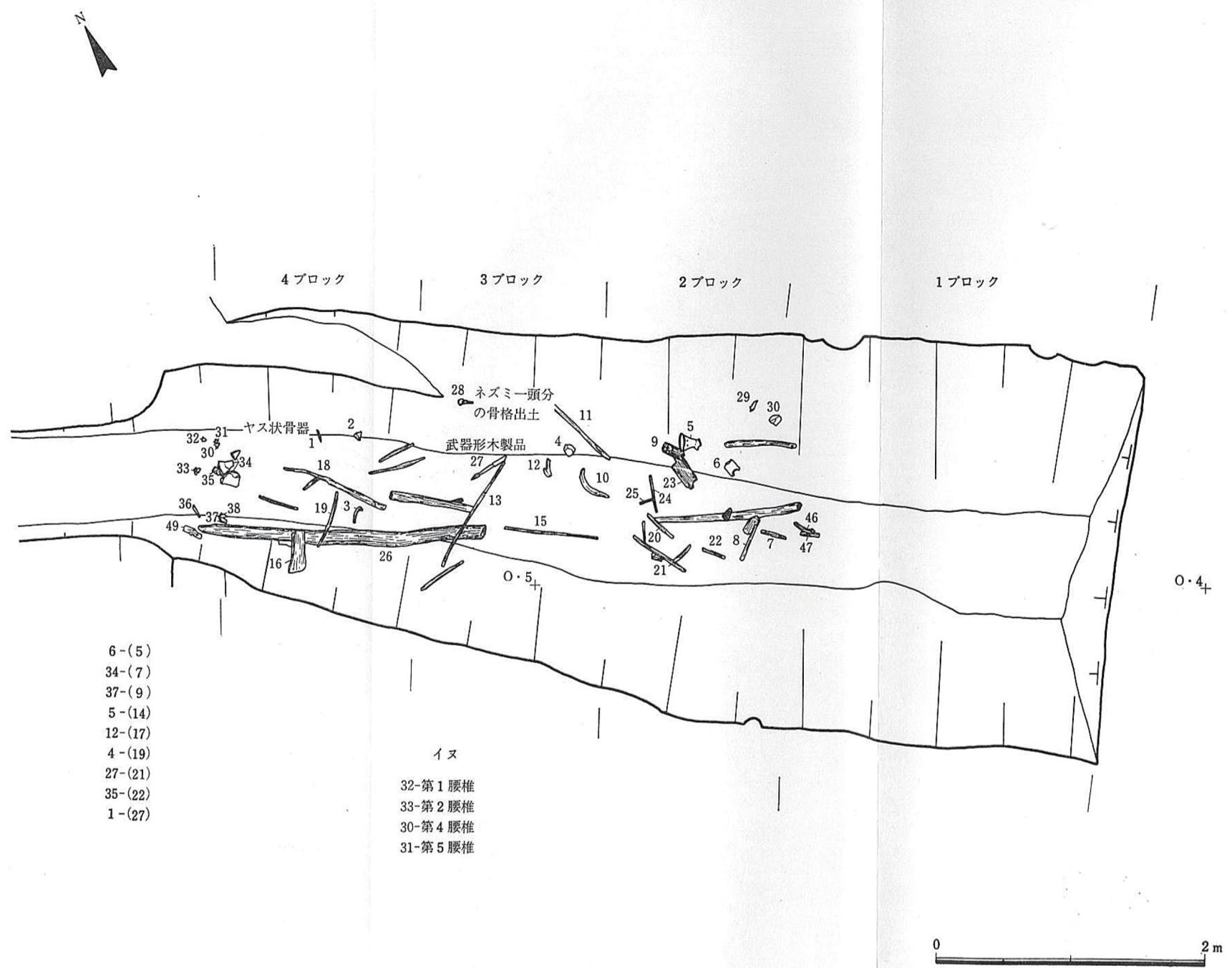
土層の堆積は、(I)~(VII)層に大別される。(I) 黒灰色粘質土—黒灰色粘土を主体に多量の青灰色粘土・シルト・黒色粘質土を包含する土層で断面観察から、人為的に両岸から交互に埋められた様子を窺うことが出来る。層厚は1.0mにも及んでいる。(II) 黒色粘質土、(III) 暗灰色粘土—機能時の自然堆積土、(IV) 暗灰色粘質土—機能時の流れ込み土、(V) 暗灰色粘質土—掘削当初の流れ込み土、(VI) 黒色粘質土、(VII) 青灰色粘土+黒色粘土—掘削時の残土である。遺物は、(III)~(V)層中に集中する。(III)~(V)層は溝の使用期間に堆積したもので、土器、石器、動植物遺存体、木製品がある。(V)層中より、木製鋤・鍬の出土がみられる。これらは出土層位から考えて、溝の掘削にかかる掘削工具としての可能性が考えられる。(VI)層から土器細片、淡水産の巻貝が出土している。(VII)層からは遺物の出土をみていない。



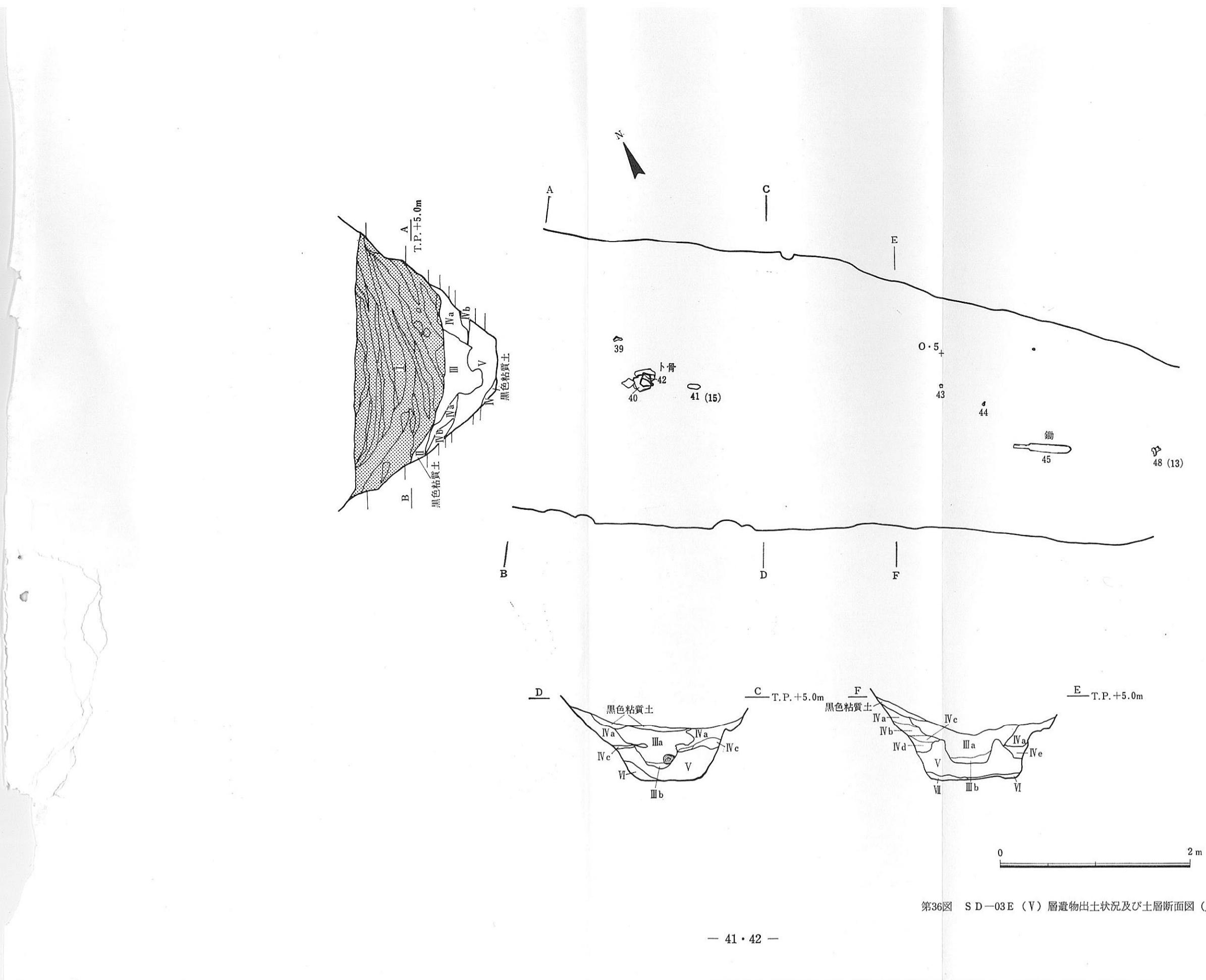
第33図 SK-03下層遺物出土状況 (J30)



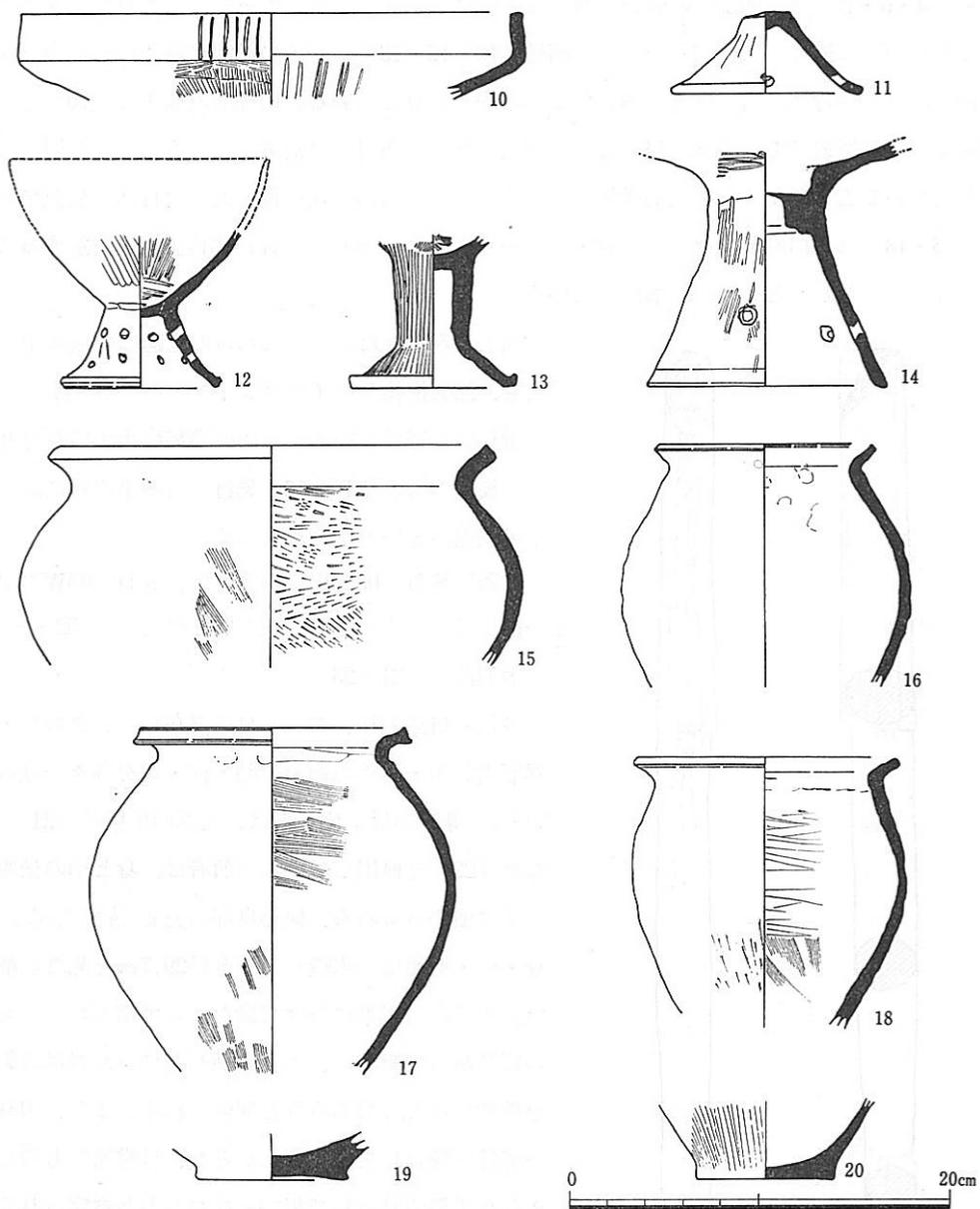
第34図 SD-03 E 出土遺物 (14)



第35図 SD-03 E (III) (IV) 層遺物出土状況 (140)



第36図 SD-03 E (V) 層遺物出土状況及び土層断面図 (1/40)



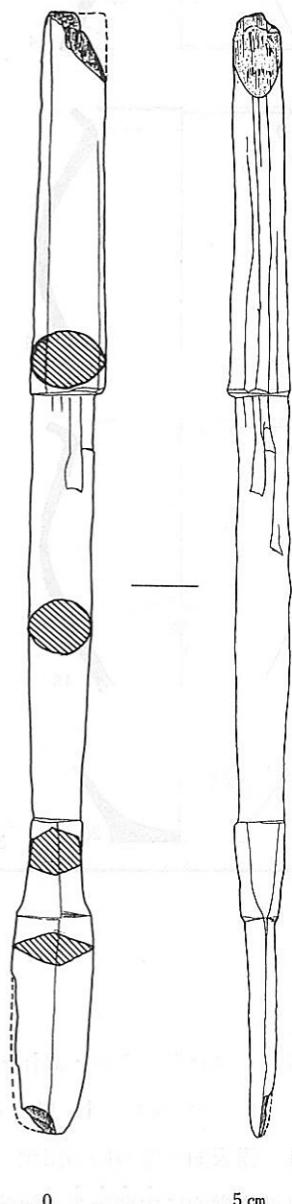
第37図 SD-03 E出土遺物 (1/4)

出土遺物 (第34・37~43図)

〔土器〕 (1~20)

検出した土器は中期中頃（第Ⅲ様式）から中期後半（第Ⅳ様式）にかけての壺・高杯・鉢・蓋・甕等の器種資料を含んでいる。中期中頃の土器（1~3・6）は、いずれも（I）層と（V）層から出土したもので溝掘削・廃棄時の混入であると考えられる。器表面が他の同層出土土器と比較して、著しく荒れている点からもうなづけよう。他の土器は型式学的に中期後半の範疇におさまるものである。

壺（4・5・7）は、装飾性の強い中期にあってはシンプルなプロポーションを有し、すでに無文様化の段階に近づいた型式といえる。高杯（10・12・13）にもその傾向は認められ、椀形高杯（12）は大形台付鉢の台状部を萎縮したような脚部を有している。口縁部内傾する（10）も、中期終末の特徴型式である。鉢（14）では、脚端部を飾る凹線文は消失し、かろうじて大形の台をそなえていることによって中期的様相をとどめている。この時期以後、大形台付鉢は激減する。甕（15～18）は、口唇部に面をもつ肩・腰の張るタイプである。（17）は粘土紐を附加することによって、しっかりとした面を形成している。



第38図 SD-03E 出土遺物 (16)

以上、みてきたようにこれらの土器は中期後半の中でも、無文様化とタイポロジィーの面から判断してより新しい土器群といえ、方形周溝墓出土土器を仲介して、後期初頭のSD-06に先行する基準資料に成り得る可能性が強いものと思われる。

〔石器〕 SD-03E出土の石器は、SD-03Wの項に一括してまとめているので参考されたい。(52ページ)

〔木製品〕 (21～23)

多量の自然木片、加工木材に混在して、きぬた・武器形木製品・石斧の柄未製品・鍬・鋤を各々一点得ている。(Ⅲ)の最下位からは、武器形木製品(21)、きぬた(22)を検出している。前者は、身と柄の先端を一部欠損するものの、保存良好の完形品である。刃身・柄・柄頭は一木造りで、全長29.7cmを測る。柄部は、上端から下端にかけて段をもって細くなる。刃身の形状から判断して、木製の柄を有する武器形青銅品を模倣したものであろうと理解される。また、刃身に一部丹が残存していることからも、日常的なものと考えられず祭祀具として用いられたものと推定される。

きぬた(22)は身部と棒状の柄部からなるもので、全長12.5cm、身径3.9×2.8cmとやや扁平な身をもつ。全体に腐朽が甚だしい。

鍬・鋤は出土状況にも触れたように、(Ⅳ)層から出土したものである。(図版10)

広鍬(図版10b)は、中央から半分欠損しているが後面上端に1辺1cmの方形の孔を穿つ稀有例といえる。側縁は中央に肩を有し、刃縁にむかって細くなる。舟

型突起の形態は「○」形を呈し、突起の上面は平坦につくられ、径5.1cmの柄孔をあけている。身長22.6cm、刃縁幅（推定）10.6cmを測る。

鋤（図版10a）は全長61cm、身幅8.2cmを測る細長いもので、上・下面是フラットな面を成し、側縁に面取りを施している。身には断面扁平形を呈する長さ15cm、幅3cmの着柄軸をつくりだしている。身は細長く反りをもたず、肩はやや下がり気味に張り出している。

斧柄未製品（23）は、全長13.3cm、台部長7.77cmを測る着装部をつくり出す前の未完成品である。台部は断面扁平なカマボコ形を呈し、先端・側面・末端に粗い加工痕を残す。柄部の断面は2×1.3cmで、表面には丁寧な調整を施している。形状からして、扁平片刃石斧柄の未製品と考えられる。柄は完結している。

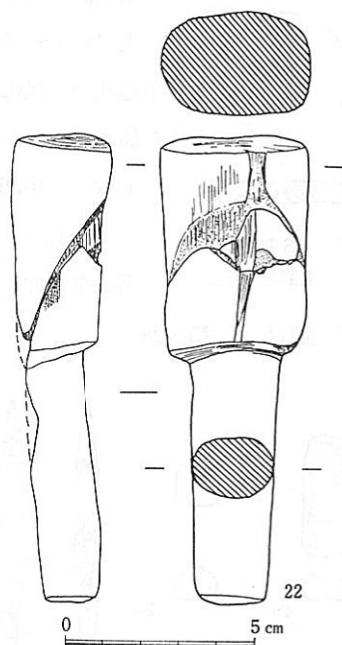
〔動物遺存体〕

イノシシ・ニホンジカ・イヌ・ナマズ・カエル・スッポン・鳥などの各部骨を検出している。イノシシでは上顎骨・歯牙・四肢骨等を得ている。これらの骨には必ずといってよい位に咬痕がついている。また上腕骨下端には金属器による切痕、横位に走る擦痕のみられるものもある。

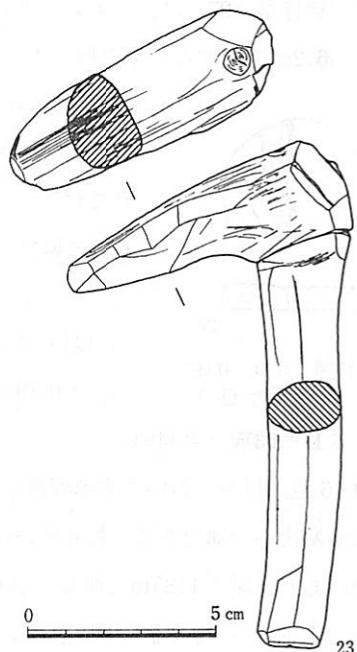
ニホンジカは、鹿角加工品の他に四肢骨の出土が多くみられ、出土状況からして、解体処理後に一括して廃棄されたものと理解される。最少個体数2。

イヌでは、4プロック（Ⅳ）層から一連の胸椎～腰椎を一括して検出した。（図版9b）その他の部骨は一切出土をみていないことから、これらは解体処理後、一連のまま廃棄されたのであろうと思われ、第6腰椎の棘突起にみられる切断痕は、その時に付せられたものであろう。大きさは、亀井2号犬（♀）よりも一回り小さい。また、（I）層から中節骨1点を得ており、少なくとも2個体分の骨が埋存していたものと思われる。

ネズミは、（IV）層から一個体分まとまった状態で（図版8b）出土した。他にも部骨を得ており、最少個体数2。鳥は種不明である。



第39図 SD-03E 出土遺物 (3/2)



第40図 SD-03E 出土遺物 (3/2)

〔土製品〕(24)



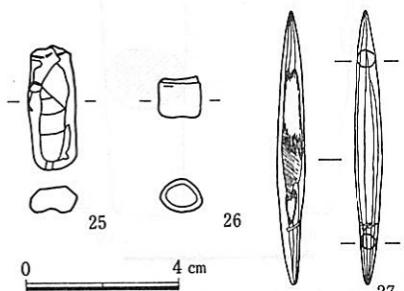
土器片製紡錘車(24) (II)層から出土した。直径3.4×3.3cm、厚さ0.6cm、中心孔の内径0.4cm、重量9.4gを計る。周縁は打ち欠いたのちわずかに研磨を加える。2次的に火を受けている。

〔卜骨〕(第36図42)

第41図 S D-03E
出土遺物(1/2)

(V)層から肋骨面を上にして検出したイノシシ右肩甲骨である。肩甲棘上窓、鋸筋面に4ヶ所焼灼を加えている。(第V章第3節参照)(図版9a)

〔骨角製品〕(25~28)

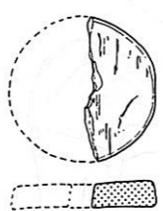


第42図 S D-03E 出土遺物(1/2)

(26)は現存長10mm、径8.6×10.7mm、骨厚1.4mm土を測る短い管状製品である。鳥骨上腕骨幹部を輪切りしたもので、鋭利な擦痕がついている。材料となった骨は、アオサギ位の大形で長い上腕骨が選ばれたものと思われる。(V)層出土。

鹿角加工品(25)は、鹿角を半載したもので長さ33mm、幅12mm、厚さ7.0mmを測る。表面には鋭い加工痕が残り未製品と思われる。(V)層出土。

ヤス状骨器(27)は、ニホンジカの中足、若しくは中手骨を利用した完存品である。長さ66mm、幅6.2mmで丁寧な調整を施している。(III)層出土。



28

第43図 S D-03E
出土遺物(1/2)

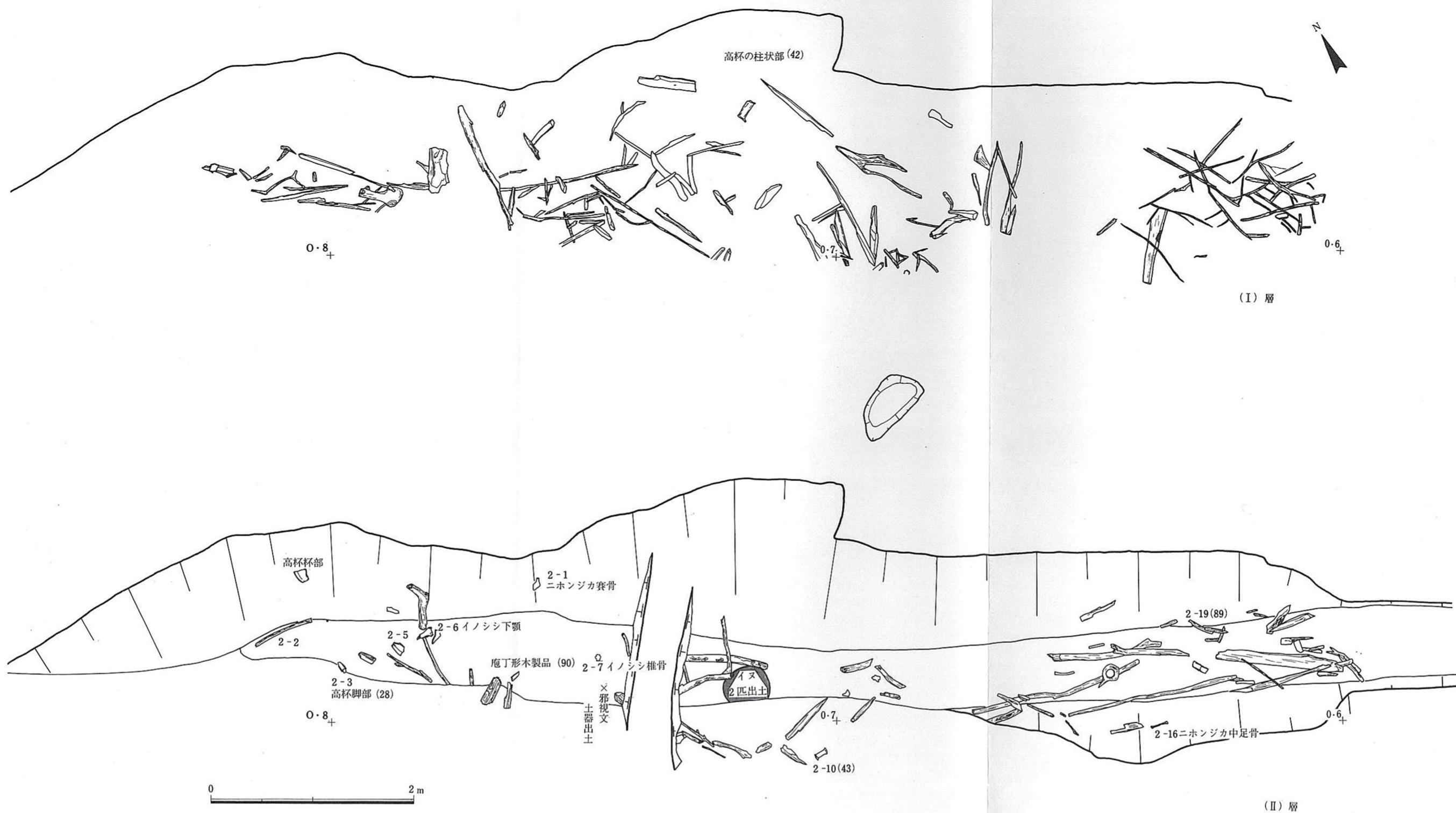
骨製紡錘車(28) 第(V)層より出土した。約半分を欠失するが、直径3.3cm、厚さ0.7cm、重量3.9gを計る。中心孔は周縁の中心より少しずれており、一部を残すのみで直径は不明である。両面および周縁はていねいに研磨して光沢を持つ。材質は鹿角の角座より頭骨に近い部分、ウミガメ、等が考えられるが断定はできない。龜井では他に鹿角製のものが中期・後期各1点ずつ出土している。^(註4)他の遺跡では鹿角製のものが唐古、鬼虎川で鯨骨製のものが長崎県原ノ辻遺跡で出土している。

b. S D-03W(第44図)

O・6地区以西において方形周溝墓マウンド除去後、青灰色シルト(第Xa層)の上面にて検出した中期後半の溝である。掘り込み面は、7ライン沿セクション(第45図)の検討から弥生包含層中にあり、深さ1.85mを測る。溝中の埋土は、3層に大別される。(I)木質・炭化物を多く含む暗灰色シルト、(II)暗灰黒色シルト(粘質)、(III)暗黒褐色粘土+暗灰色粘土ブロックのMix層である。

溝中の断面観察から、(I)(II)層は溝の機能時に自然堆積に手伝って、土器・石器・動植物遺存体・木製品の投下によって形成された土層である。

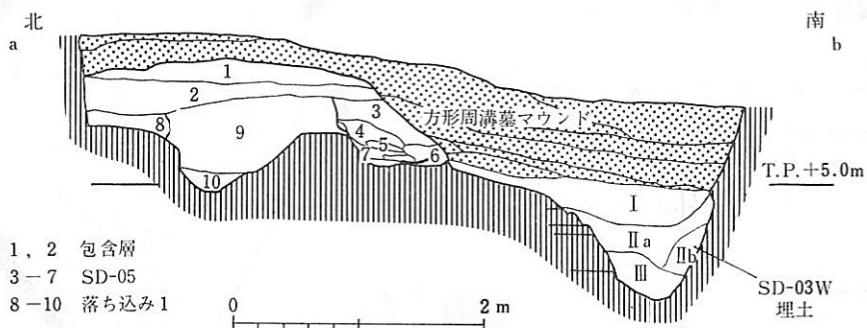
(II)層から邪視文土器と未だ類例の少ない庖丁形木製品の出土がみられた。(III)層は、掘



第44図 SD-03W (I):(II)層遺物出土状況 (1/40)

削の際に生じた土が再堆積して形成された土層で、上面からイヌ二頭分の骨が出土した以外は、
(註5)
遺物の出土をみていない。

ところで、(I) 層、(II) 層、(III) 層は各々 E 地区の (III) (IV) 層、(V) 層、(VI) 層と対応して考えることができる。



第45図 7 ライン沿セクション土層断面図 (1/60)

出土遺物 (第46~56図)

〔土器〕 (29~62)

壺・鉢・高杯・甕等の器種のほかに、コップ形土器・タコ壺を得ている。これらは型式学的には、中期中頃—終末の土器を含んでいる。

(I) 層から (29・30・32・37~39・46・47・49・50・53・56・62)、(II) 層から (34~36・38~45・48・51・52・55・64・57~60)、(61) は (I) (II) 層から出土した。

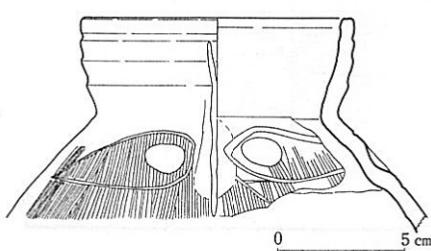
壺 (29~38) の中では、長頸壺 (34・35) の存在は注目される。口頸部は直線的に伸び、(34) は口縁部に擬凹線文二条、(35) は頸部下端に一条を施している。いずれも器表の薄いつくりである。細頸壺・コップ形土器 (36・37) は、外面に丹塗を施した稀有例であり、(37) は両把手を有し、特異なプロポーションを有し非実用的な器種と考えられる。細頸壺 (36) の存在は、中期末にも継続して残存することを示す好例といえる。

高杯 (46~56) は、いろいろなフォーム・タイプの存在が知られる。

甕 (57~62) は、大和形甕 (57) のように古い形式を得ているが、全面にタタキを施す後期的要素、底部はあげ底という具合に中期的特徴を兼ねそなえる過度的形態を有する甕 (62) もある。

〔邪視文土器〕 (第46図)

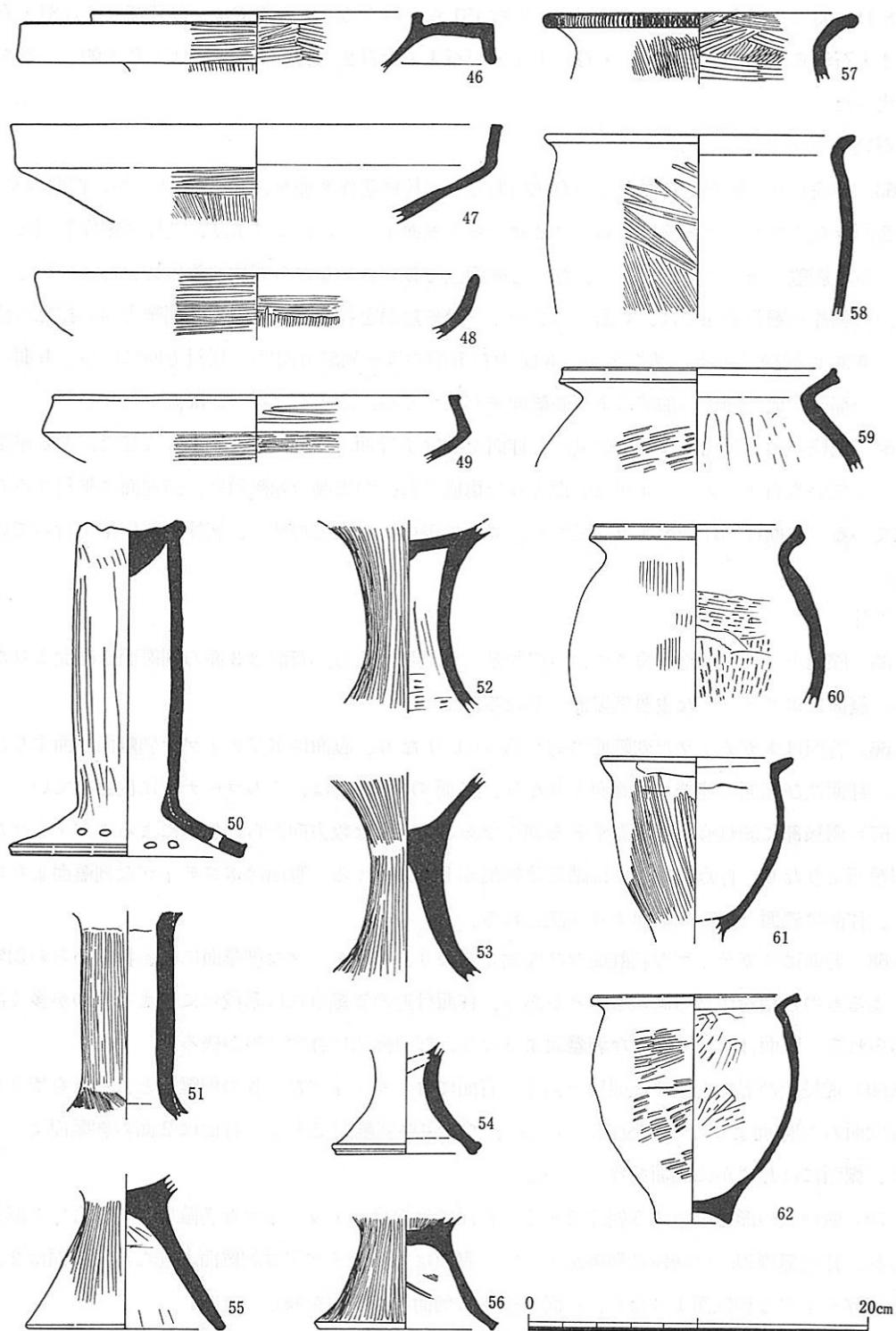
O・7 地区の(II) 層から、顔(とくに眼)を抽象的に描いた土器を得ている。口径 10.8cm、現高 8.0cm を測る。プロポーションは水差形土器に似る。やや内巻する口頸部から体上半にかけての外面に絵画文が描かれている。邪視文銅鐸と同じような機能・役割が考えられよう。



第46図 S D-03W 出土遺物 (1/8)



第47図 SD-03W出土遺物 (1/4)



第48図 S D-03W出土遺物 (1/4)

〔石器〕 (63~88)

S D-03より出土した石器及び剝片は総数151点を数える。その内訳は、碎片45・剝片81・石核2・石鎌6・石錐1・石槍6・石庖丁4・叩石4・砥石2である。その中より代表的なものを図化した。

石核

(63) 準備した剝離平坦打面をもつ石核である。剝片剝離作業面を、a・b 2面もち、打面もc・d 2面存在する石核である。a面ではd面にある礫面上からの作業により、剝片剝離作業面としている。剝離の方向は一定であり、打点を礫面上で移動させながら剝片剝離作業を行っている。b面の剝片剝離作業面では、c面のポジティブな剝離面を打面としていて、剝離方向と打点の位置はa面と同様である。すなわち、a面及びb面の剝片剝離方向は、反対方向になる。b面には、一部分、他方向から加撃による剝離面が存在するが、意図的なものは確かでない。

(64) 残核の形態が扁平な形態を呈し、打面を設けず礫面上を直接加撃することで、剝離作業を行っている石核である。a面は礫面のみで構成され、中央部の剝離面は、節理面に平行する剝離である。b面は剝片剝離作業面であり、a面の礫面上を直接加撃し、剝片剝離作業を行っている。

剝片

(65) 矶面上に打面調整を施さず、直接加撃した剝片である。背面は3面の剝離面と礫面よりなる。腹面はポジティブな主要剝離面よりなる。

(66) 背面はネガティブな剝離面の切り合いよりなり、腹面はポジティブな剝離面一面よりなる。打面及び側面は連続する礫面よりなり、腹面の加撃点は、そのコーナーに位置している。

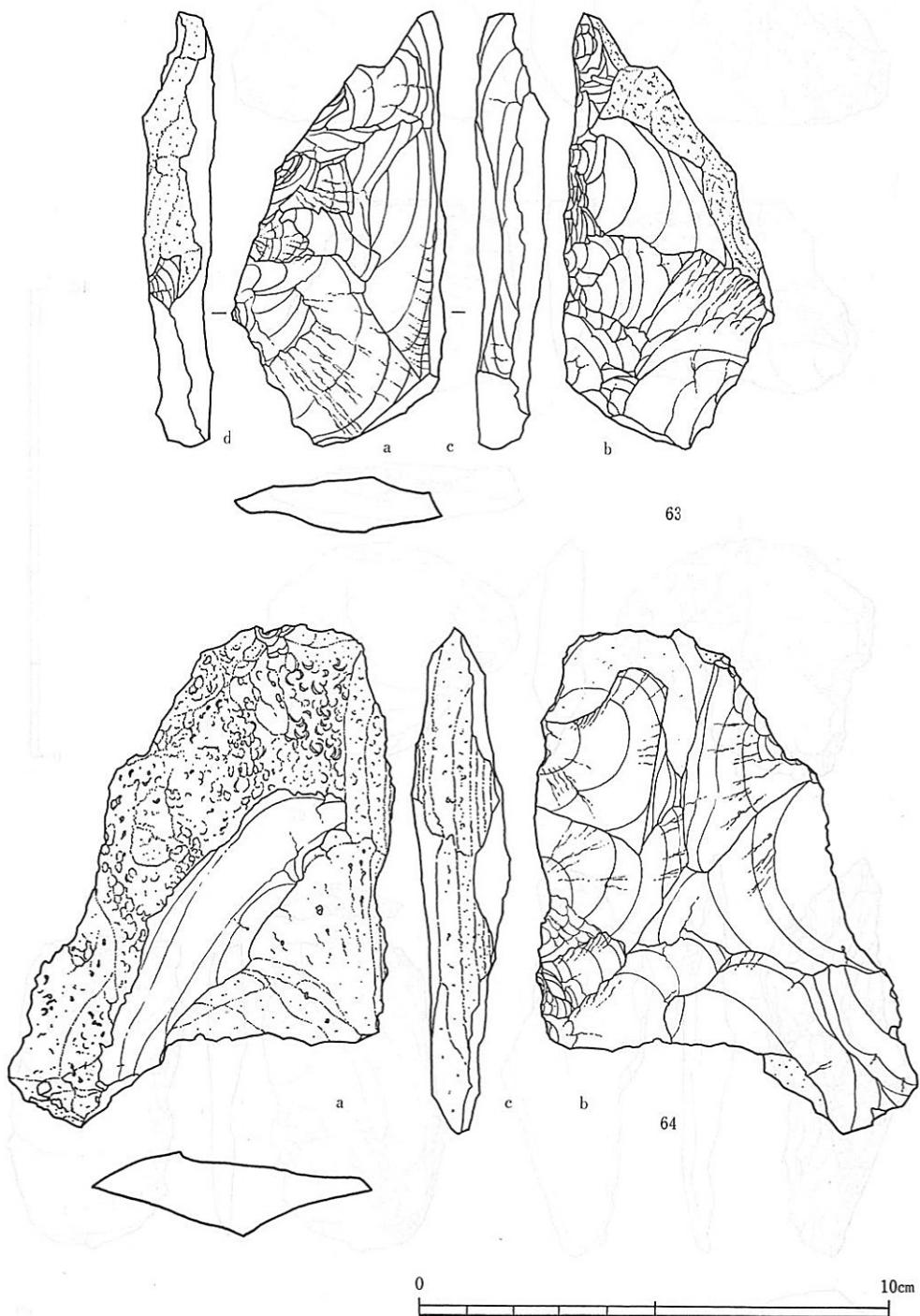
(67) 側縁部に剝離痕をもつ調整ある剝片である。背面は数方向からの加撃によるネガティブな剝離面よりなり、打点部周辺には階段状剝離が認められる。腹面はポジティブな剝離面よりなり、打面は礫面と調整剝離面より構成される。

(68) 背面はネガティブな剝離面及び礫面よりなり、ネガティブな剝離面には、打面からの加撃によるものと相対する方向のものとがあり、打面付近の剝離痕には階段状に止まるものが多く認められる。腹面はポジティブな剝離面よりなり、打面部には打面調整が残る。

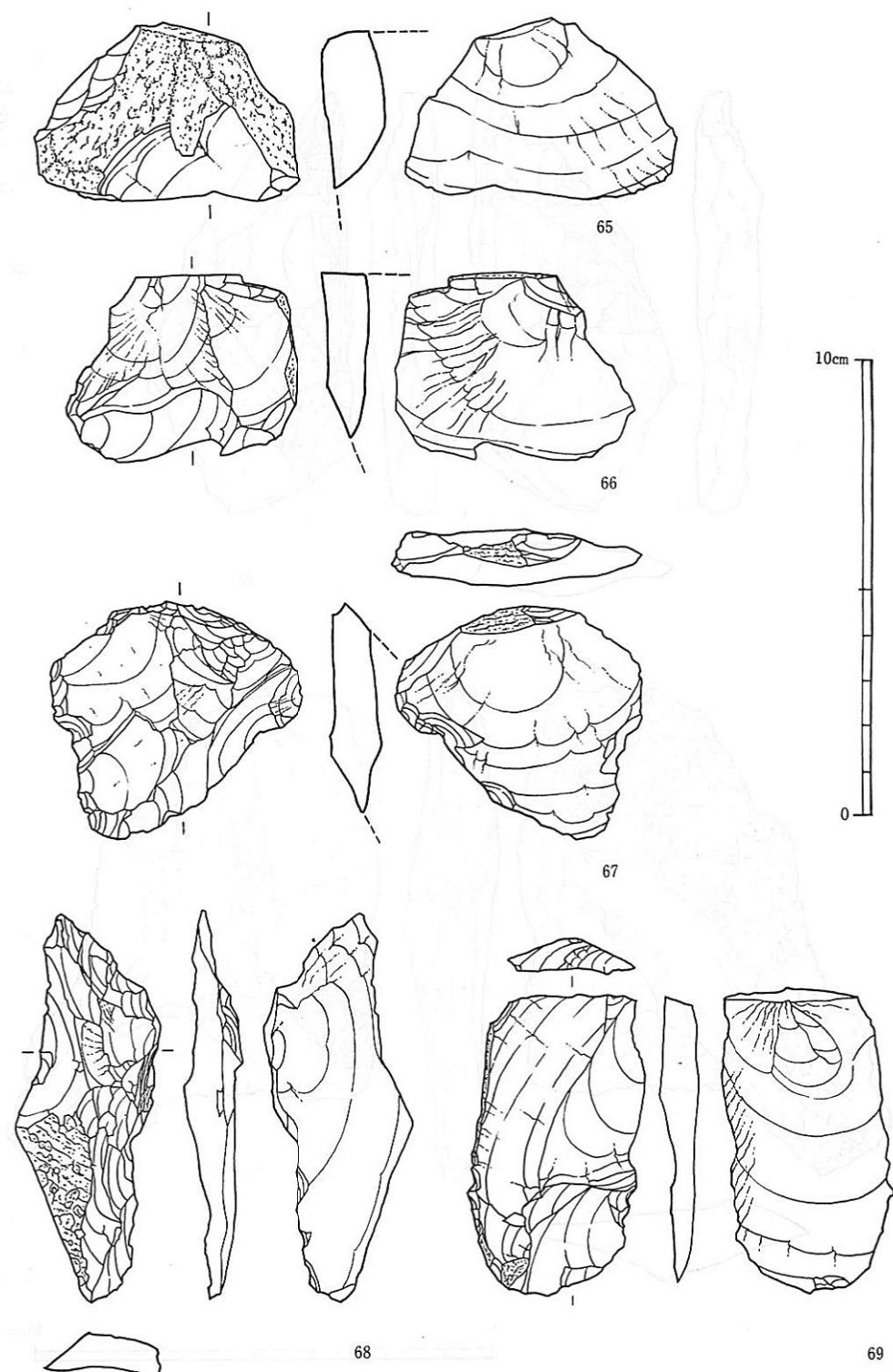
(69) 縦長状の形態を呈する剝片である。背面にはポジティブな一枚の剝離面と、それを切り込む数面の剝離面よりなる。腹面はポジティブな主要剝離面である。打面は2面の剝離面よりなり、側面にはわずかに礫面を残している。

(70) 横長状の形態を呈する剝片である。背面には複数のネガティブな剝離痕の切り合いが認められ、打点部周辺には階段状剝離が著しい。腹面はポジティブ主要剝離面よりなる。打面は2面のネガティブな剝離面よりなり、打面に接する側面には礫面を残している。

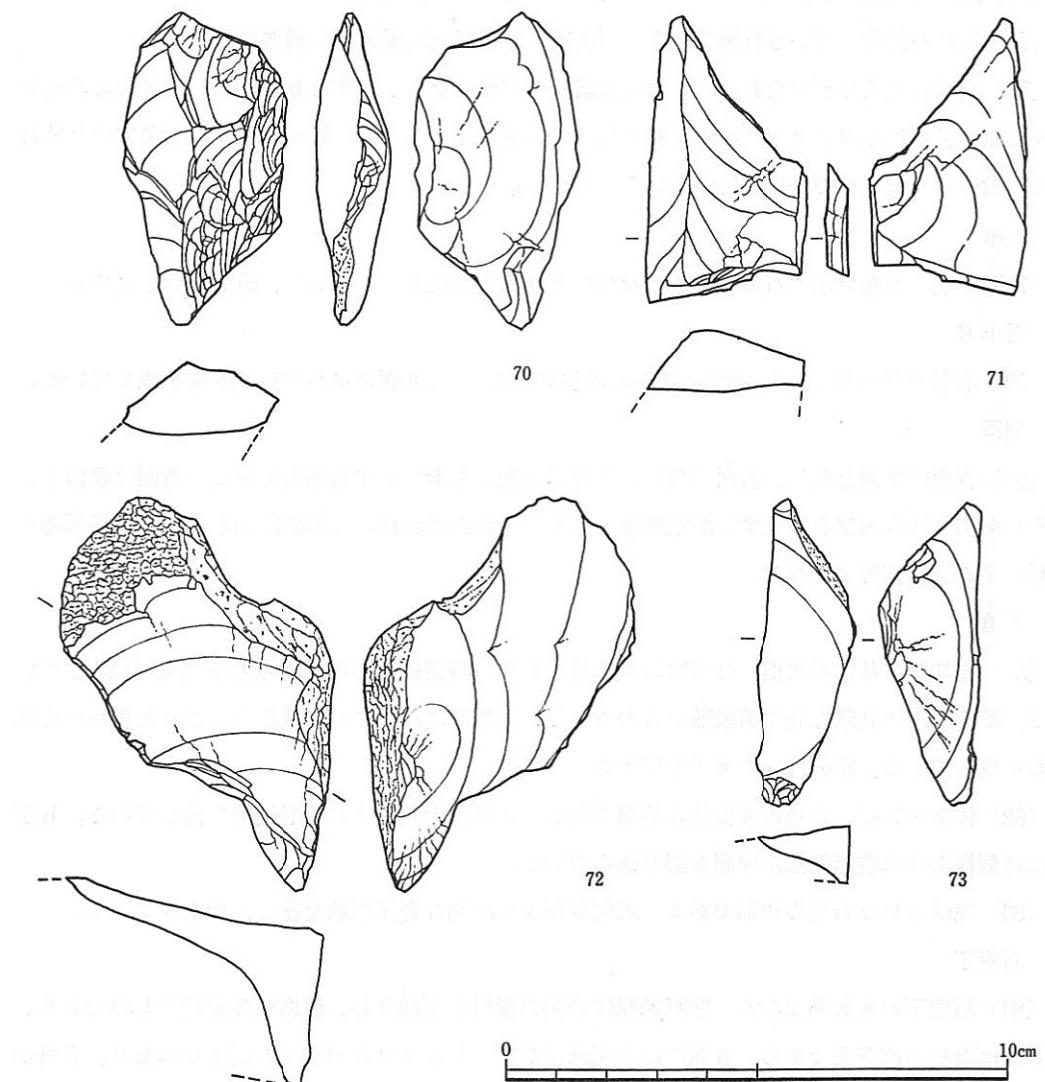
(71) 背面は2面の剝離面よりなり、両者は直線状の稜線を持ち接している。腹面はポジティブな主要剝離面よりなり、打面は平坦な剝離面よりなる。



第49図 SD-03出土遺物 (2/3)



第50図 SD-03出土遺物 (2)



第51図 SD-03出土遺物(2)

(72) 不定形な形状を呈する剥片である。背面はネガティブな剥離面と礫面よりなる。腹面はポジティブな剥離面よりなる。打面はわずかに平坦面を残している。形状から板状の素材より剥離したものと考えられる。

(73) 72と同様、板状の素材より剥離したものと考えられる剥片である。背面は平坦な剥離面と、端部に施された剥離面よりなり、腹面はポジティブな剥離面よりなる。打面は僅かに剥離平坦打面を残し、打面と接する一側面は礫面よりなる。

石鎌

(74) 凸基有茎式の石鎌である。a・b両面伴に側縁より押圧剥離を施している。b面には素材の剥離面を残している。

(75) 凸基有茎式の石鏃である。a・b両面伴に側縁より押圧剝離を施している。

(76) 基部の欠損している石鏃である。両側縁からの押圧剝離により調整されている。

(77) 凸基有茎式の石鏃である。a面には素材の剝離面を残し、またb面においては素材の主要剝離面と思われるポジティブな剝離面を残している。残された素材の剝離面の加撃方向を見れば、横長状の剝片を縦長状に用いていることがわかる。

石錐

(78) 棒状の形態を示す石錐である。両側縁より調整剝離を施していく、断面菱形を呈する。

石小刃

(79) 小形の石小刃である。両側縁部から調整剝離を施し、a面にはわずかに礫面を残している。

削器

(80) 背面に礫面を残し、断面三角形状の肉厚な剝片を素材とする削器である。背面は礫面と、それを切り込み刃部を形成する調整剝離よりなり、腹面は素材の主要剝離面と、背面同様刃部を形成する調整剝離よりなる。

石槍

(81) 先端及び基部が欠損した石槍の未製品である。両側縁部から粗雑な整形剝離を施していく、微細な押圧剝離を施す前段階のものである。下端部にはわずかに基部のなごりと思われる礫面を残している。断面はレンズ状を呈する。

(82) 体部が欠損した石槍未製品の基部である。a面は両側縁より整形剝離を施している。b面には側縁よりの整形剝離が礫面を切り込んでいる。

(83) 完成された石槍の体部である。両側縁部より小刻な押圧剝離を施し、仕上げている。

石庖丁

(84) 石庖丁の未製品である。緑縞緑泥片岩製の素材を荒割りし、研磨する直前のものである。a面は素材の節理面である。b面には不明瞭ながらポジティブなバルブの高まりがあり、素材が剝片より製作されていることがわかる。またb面には部分的に直線状の研磨痕が観察できる。

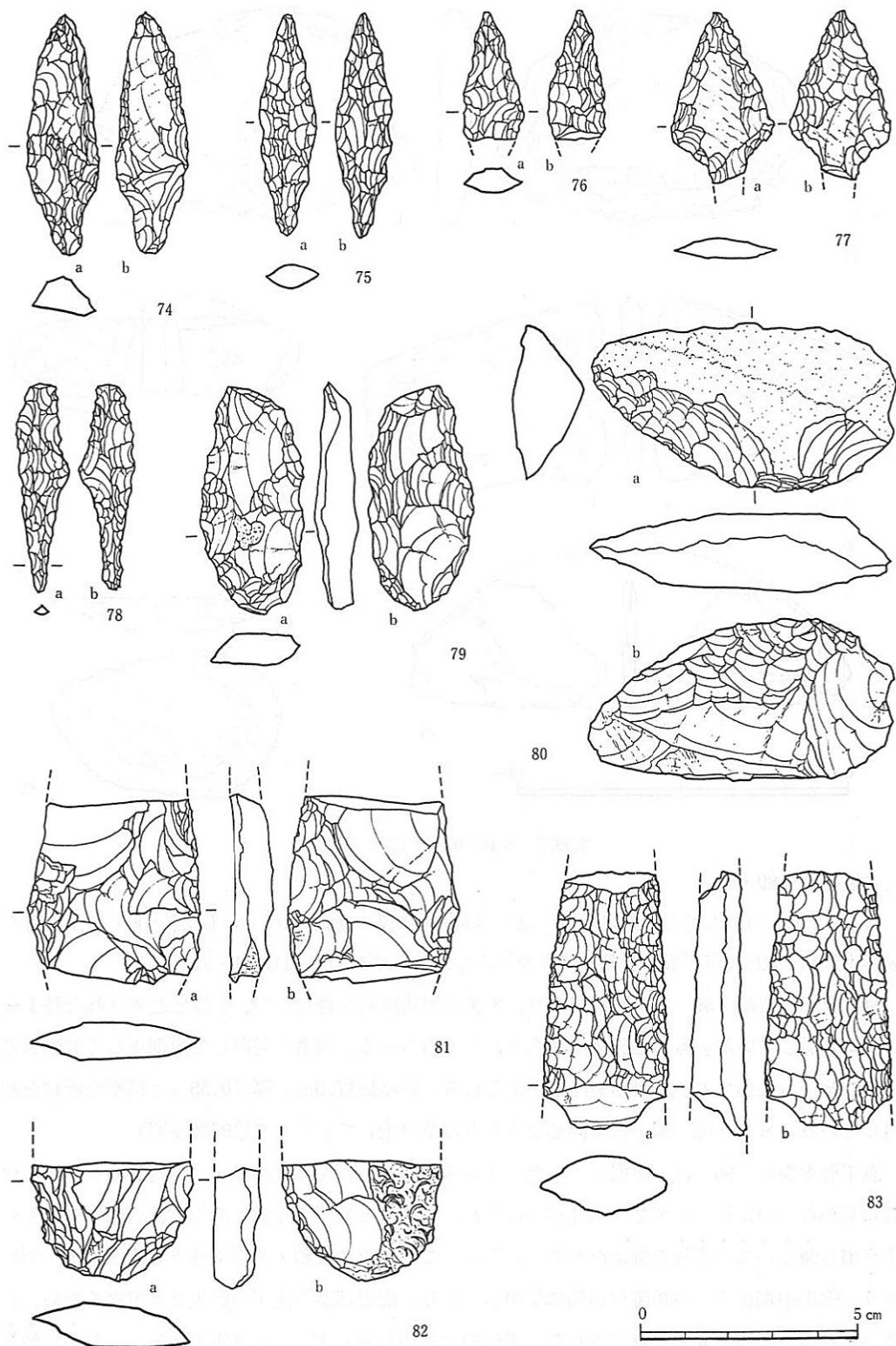
(85) わずかに外彎する両刃の刃部をもつ石庖丁片である。背部は直線状にのびる。a・b両面ともに虫喰い状の小穴が開いている。また、刃部には主軸に直交するような、使用痕が認められる。石質は緑泥縞雲母片岩である。

(86) 端部のみ残存する石庖丁片である。わずかに面取り状に研磨された肩部を残す。石質は緑泥石墨片岩である。

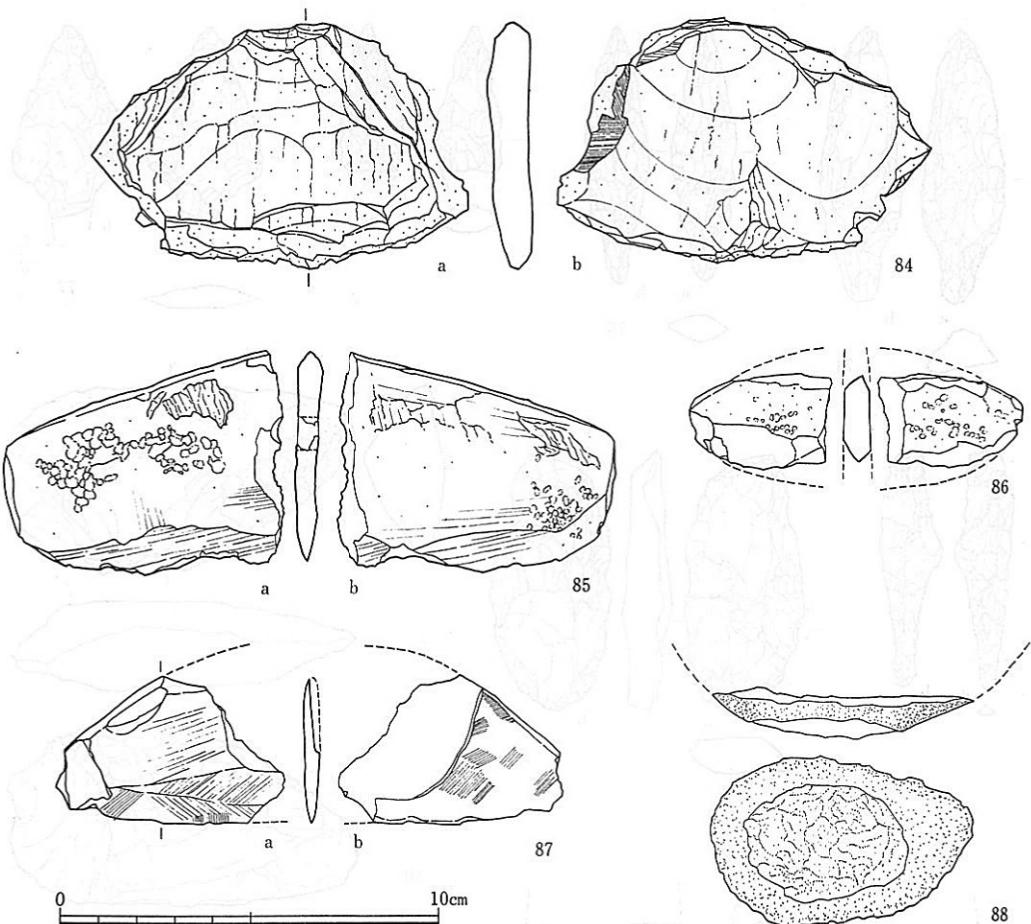
(87) 他の石庖丁と異なり、石質が頁岩製の石庖丁である。a面に不明瞭な刃面をもち、体部には直線状の磨滅痕が認められる。肩部には面取り状に研磨痕が施されている。

叩き石

(89) 和泉砂岩の円礫を使用した、叩き石片である。



第52図 SD-03出土遺物 (2)



第53図 SD-03出土遺物 (1/2)

〔木製品〕 (89・90)

(I) (II) 層から足の踏み場を失うほど多量の自然木・加工木材とともに、(II) 層から有孔板形木製品 (89)、庖丁形木製品 (90) を検出した。いずれも破損している。

有孔板形木製品 (89) は、断片であり、本来の形状は知り得ないが、整然と配列された径 1 mm の孔は貫通していないものと斜めに穿孔されたものがある。両者は対置して規則正しく並列していることから装飾性の色濃い木製品と考えられる。現存長 17.9 cm、厚さ 0.55 cm と扁平な板材を利用している。SD-02 下層からも同じようなものが出土している。(第96図参照)

庖丁形木製品 (90) は、破損して刃を残すのみであるが、現存長約 8 cm、幅約 5 cm を測る。他の類例から一方に片寄って 2 つの孔があけられ、石庖丁と類似する点があるが、背縁は握部をつくり出し鎌としての形態を備えたものといえる。これまでに大和・河内で各々 3 遺跡で出土例があり、弥生中期後半～古墳時代前期に集中している。出現期が石庖丁の消失とも重なるため、石器から鉄器へと移り変わる時に現れた、過渡的な産物と考えることも可能である。また農耕儀礼的な穂摘具としての用途を考えることも、あながち無理強いではないであろう。刃部には使用に

よる磨滅がみとめられた。

〔動物遺存体〕

検出した動物骨には、イノシシ・ニホンジカ・イヌ・カエル・ヘビ・モグラ・ネズミ等の7種が知られる。

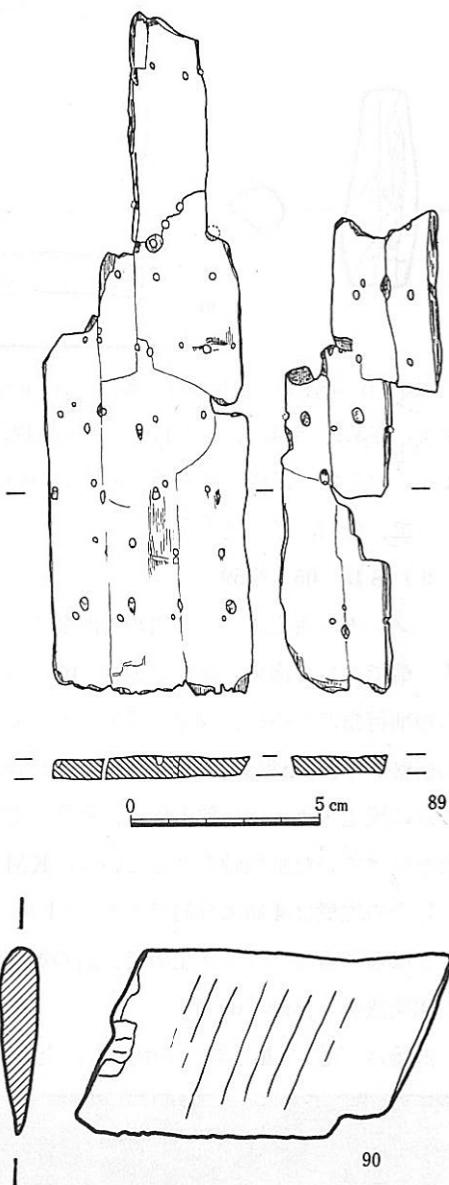
イノシシは、腰椎・下頸骨・歯牙・四肢骨を得ている。下頸骨は犬歯抜去と骨髓食のために骨体がこわれている。犬歯を抜去するのは、装身具として利用するためであろう。よほど幼獣でないかぎり雄の下頸骨に共通して認められる。ニホンジカは頸椎・頭骨片・四肢骨の部骨が散在して出土した。

西側においては、イヌは特異な出土状況を示している。O・7地区の(Ⅱ)層下位にて保存状況の良好なイヌ二頭分(雄・雌)の骨格を検出した。おそらく全身骨格がほとんどそろった資料(弥生期)は本例が最初ではないかと思う。弥生犬の全体像を知る上で、まことに貴重な標本といえる。さらに、雄・雌2頭分の出土で、性差についても今後、骨学的に触れることが可能である。(第VII章、第5節参照)溝中の堆積状況から、(Ⅲ)層堆積後、二頭同時に溝中へ投げ込まれたものと判断される。埋葬ではない点、興味をひく。出土状況は雌犬の上に雄犬が折り重なって、「X」状に交差していた。二頭とも各部骨はよくまとまっており、当初の状態を鮮明に復原できる。他にO・7地区の(Ⅱ)層から、左寛骨2、^(註6)胸骨剣状突起1、左前頭骨1、歯牙1を得ている。

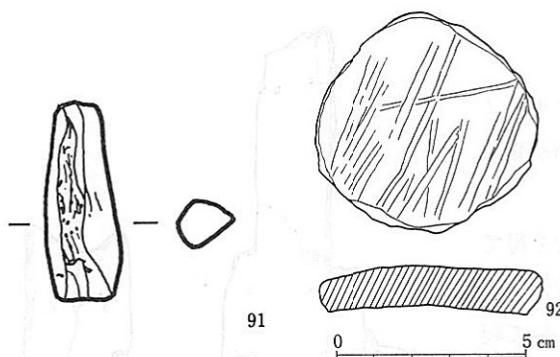
したがって最少個体数は4。

ヘビ・ネズミは先述した2匹のイヌの上位にて出土している。ネズミは部骨数65、最少個体数は3である。

以上、動物遺体について触れたが、ここでEとW地区を合わせた最少個体数を算出すると、次のようになる。イノシシ8、シカ2、イヌ6、カエル2、ヘビ1、モグラ1、ネズミ5、トリ1となる。シカは2個体と少ないが、W地区での散在した出土状況から、もう少し増えるものと思われる。イヌの6個体の出土は豊富な動物骨の出土が裏づけるように、獵犬として飼いならされていたためであろう。また、解体痕のある犬の存在から、食肉として食べられていた可能性も十分考えられる。



第54図 SD-03W出土遺物(1分)



〔骨角製品〕(91)

鹿角加工品(91)は基部を残し先端は欠失しているが、本来は尖頭状を呈していたのであろう。これは鹿角を材料としたもので、周囲に研磨を加えている。現存長26.4mm。N～O・6～7地区の(II)層出土。

〔土製品〕(92)

第55図 S D-03W出土遺物(91) 第56図 S D-03W出土遺物(92) 土器片製円板(92) (II)層から出土した。径5.9×5.4cm、厚さ1.0cm、重量42.5gを計る。周縁は打ち欠いただけで研磨は施していない。おそらく研磨・孔を穿つ前段階の紡錘車未製品と思われる。調整は外面へラミガキ、内面ハケで、色調は赤褐色を呈す。

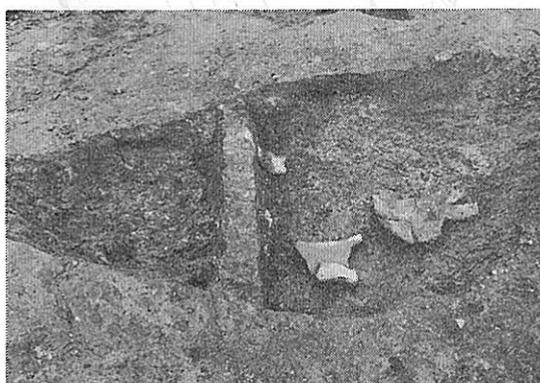
9) S D-05 (第59図)

トレンチの西側において北西—南東に直進するようにして検出した、幅約1.0mの小規模な溝状遺構である。南東は蛇行溝S D-03に切られ、北西は後述する弥生時代後期初頭の溝S D-06の掘削行為のために、収束一消失している。切り込み面からの深さは7ライン沿セクションの断面観察から0.6m程あり、断面形態は傾斜の急なU状、底面は所々深鉢状に凹凸面を残し、その凹みに焼土・カーボン粒の集積、完形土器の出土がみられた。焼土・カーボン粒の堆積層中に、(註7)火を受けていた動物骨を含んでいる。KM-3010に続く同一の溝である。

埋土の堆積は4層に分層できる。(I)～(III) 黒灰色粘土、(IV) 青灰色シルトに黒灰色粘土をまばらに含むブロック土層で、溝の掘削時に掘り残した土が再堆積したものである。

出土遺物(第58・60図)

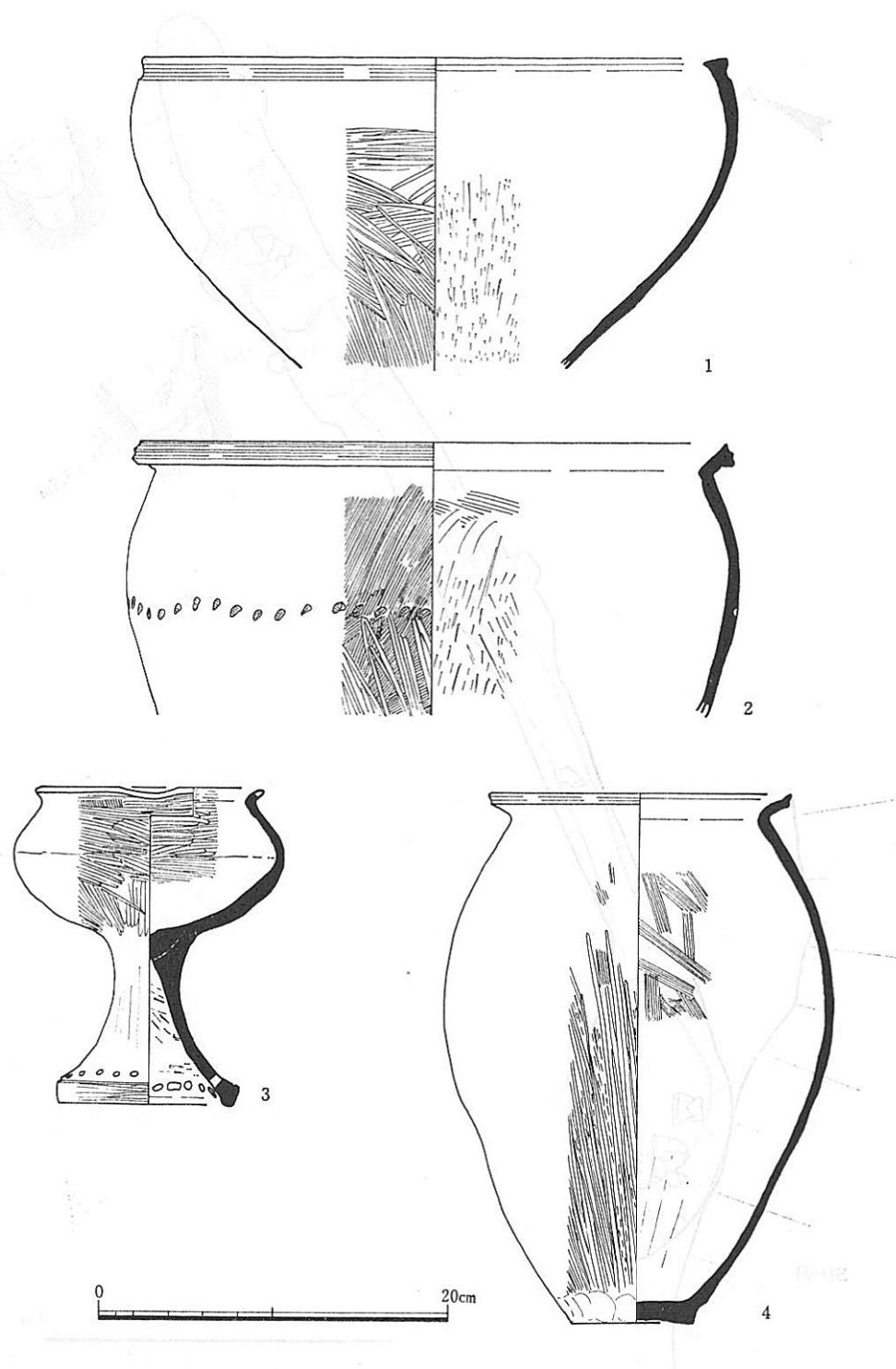
遺物は(II)(III)層に集中して、土器・石器・動物骨等を得ている。



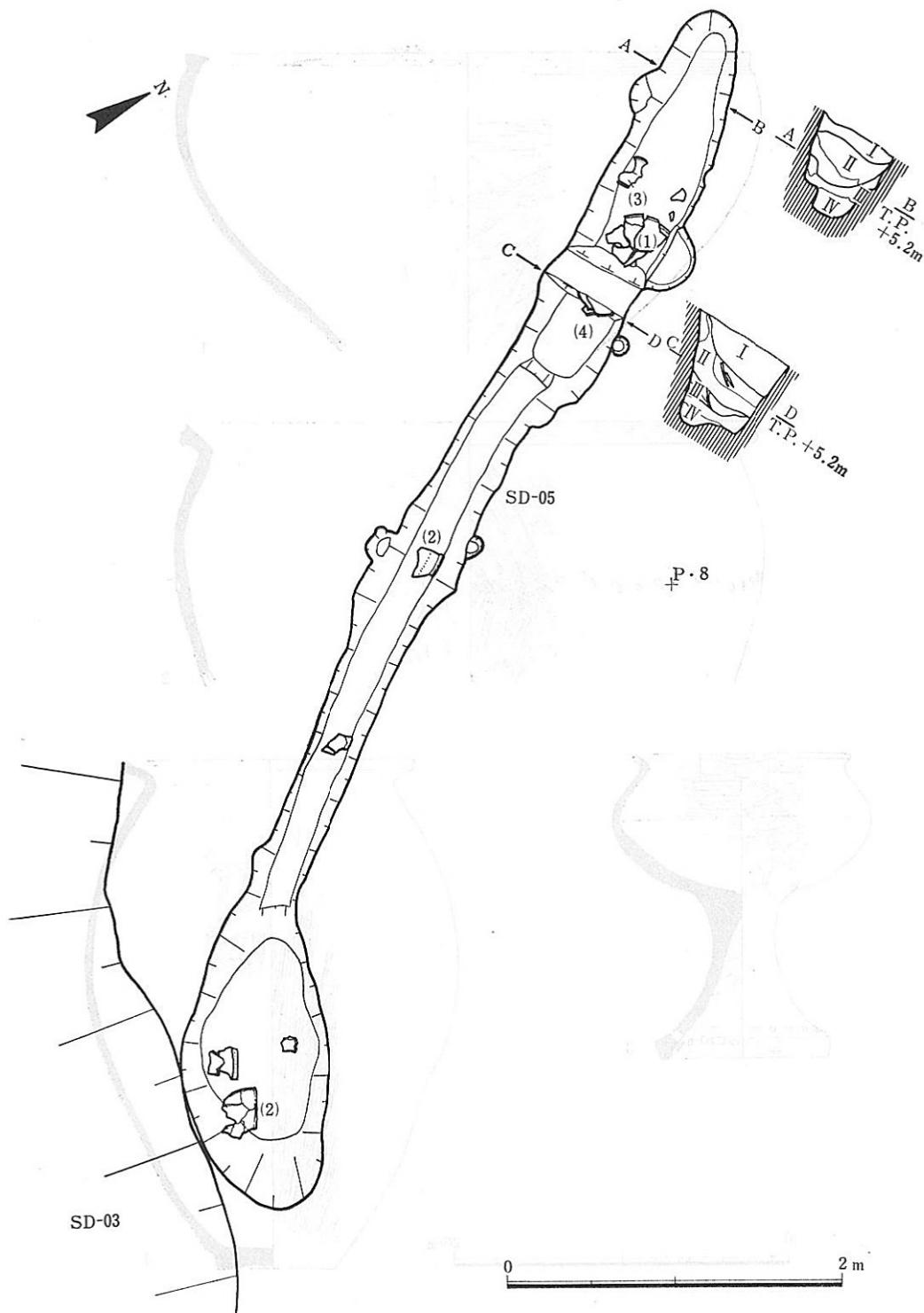
第57図 S D-05遺物出土状況(東)
点が約3.5m離れて検出した土器片が接合したものである。いずれも端面に凹線文を1～2条ほどこしている。検出した土器からKM(S X-3002)に併行するものと考えられる。

〔土器〕(1～4)

両端の凹みにかたまって、中期後半に所属する鉢・片口台付鉢・甕等の器種資料が出土している。(II)層から完形に復元できた腰高の甕(4)、片口口縁をもつシンプルな台付鉢(3)を、(III)層より押しつぶされた状態で鉢(1)を検出した。また、同層から櫛状工具による列点文を肩部に施した甕(2)を得ている。これは、出土地



第58図 S D-05出土遺物 (1/4)



第59図 SD-05遺物出土状況及び土層断面図 (1/40)

〔石器〕(5)

石槌

(5) 和泉砂岩製の石槌である。楕円形の円礫を素材として、部分的に敲打整形し、その胴部中央に溝を一巡させた後、全面に粗い研磨を施している。両端部には使用による磨滅痕が認められる。(II)層出土。

〔動物遺存体〕

O・7地区の(III)層中に堆積する焼土・カーボン粒を多量に含む層から、イノシシ、エイ・ナマズ・ギギ・スッポン（以上、水生動物）等の各骨片を得た。ナマズ・スッポンは火を強く受けている事から火による調理方法をとっていたのであろう。これらの骨は出土状況から食後、灰とともに身近にあった溝に捨てられたものであると理解された。

10) SD-07

O・7地区にて、落ち込み1埋土除去後、検出した北東—南西走する幅0.2~0.4m、深さ0.06mを測る浅い溝状遺構である。南はSD-03に切られ、北は収束—消失する。土層の堆積は黒褐色粘土の単一層。出土した遺物は、すべて弥生土器細片であるため溝の時期を決定する資料は得ていないが、切り合い関係から弥生時代中期前半以前に位置づけることができよう。

11) SD-08

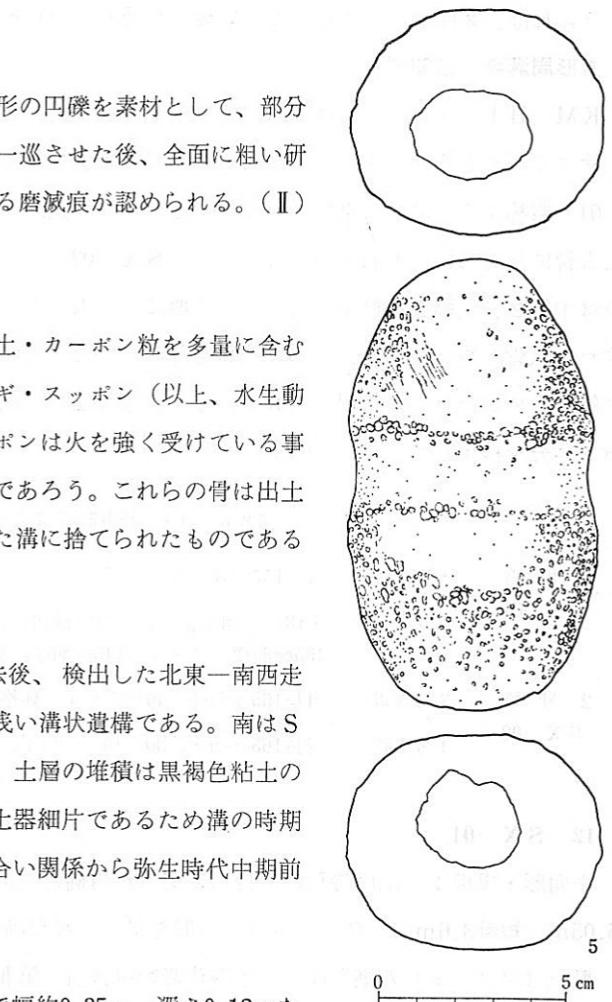
上記に南接して併行に走向する小溝で幅約0.35m、深さ0.12mを測る。断面は逆カマボコ状を呈し、覆土は黒褐色粘土をもって充填される。溝の時期は、中期前半以前に求められよう。動物遺存体には種不明の焼けた骨5片を得ている。

出土遺物（第61図）

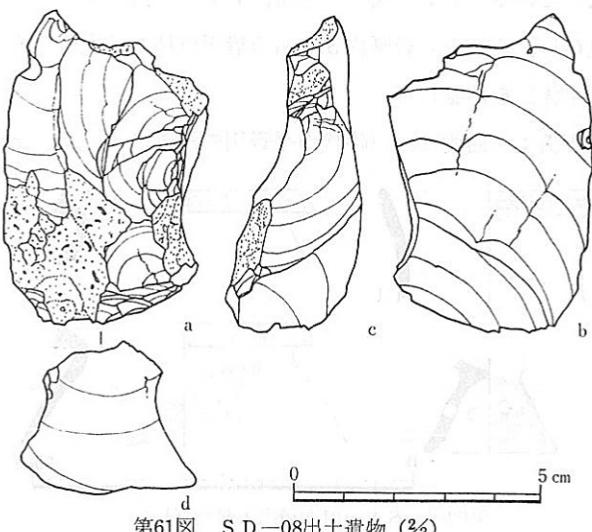
〔石器〕

不定形なサヌカイトの剥片である。

a面は剥離面と礫面からなる。b面は主要剥離面である。c面はa面に剥片剥離作業を施すための打面であり、ネガティブな剥離面となる。d面は主要剥離面の打面であり、切り合い関係



第60図 SD-05出土遺物
(1/2)



第61図 SD-08出土遺物 (2/3)

よりみれば、a面よりの加熱により剥離した最も古い剥離面である。

方形周溝墓（第63図）

KM-H1トレンチ内の西半において第V層除去後、方形周溝墓二基を検出した。上部は削平を受けているもののマウンドは、奈良時代まで影響を与えていた。1号方形周溝墓（以下、SX-01と略称する）には、東にかたよって2つの埋葬施設がある。いずれも木棺で、中に残っていた人骨にはどちらにも石鎌が伴っていた。SX-02はその大半が調査区域外におよぶが、埋葬施設は木棺2、土壙2を検出している。土壙には、人骨の痕跡は認められなかったが、木棺にはいずれも人骨が残っており、やはり石鎌を伴っていた。人骨については、京都大学の池田次郎先生に鑑定していただいた結果、第8表に示すようなことが明らかとなった。また、共有溝からも人骨一体分を検出している。（未同定）

第8表 1・2号方形周溝墓人骨一覧

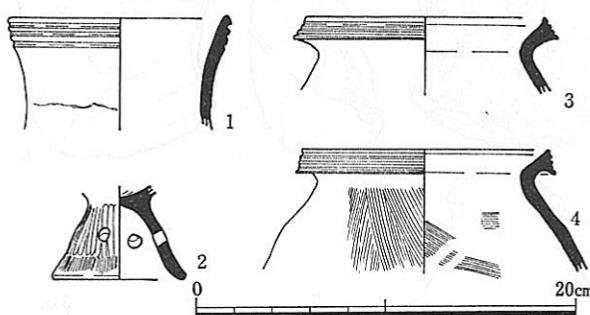
| | | | |
|----------------|------|---|------|
| 1号墳 (SX-01) | 1号人骨 | 身長157~8cm成年男子。 | 1号主体 |
| | 2号人骨 | 上体は上向き、腰、下肢は横向き、ひざをやや曲げている。身長は男子なら155cm前後、女子なら145cm前後。20代後半から30代前半。 | 6号主体 |
| 2号墳 (SX-02) | 3号人骨 | 身長165cm前後。40代の男子で体格はよい。 | 2号主体 |
| | 4号人骨 | 身長165cm前後。30~40代の男子。顔面に朱が認められた。 | 4号主体 |

12) SX-01

平面形・規模； 江戸時代の平野川に切られ西側の一部を失うが、台状部下端において長軸6.05m、短軸3.6mのいびつなカマボコ形を呈し、残存高は周溝底より約1.0mを測る。

墳丘（マウンド）の築造は、弥生時代遺物包含層（第V層）及び弥生時代中期後半のSD-03溝の上面に、青灰色シルト（第X層）+弥生時代遺物包含層（第XI層）のMix層を盛土して施工している。十字に残した断面、7ライン沿いセクションの観察からすると、盛土は0.5~1.5m残存し、その上に層厚約5.0cmの暗灰色粘土が堆積していた。この土層を剥ぐやいなや人骨（1号主体）を確認した。

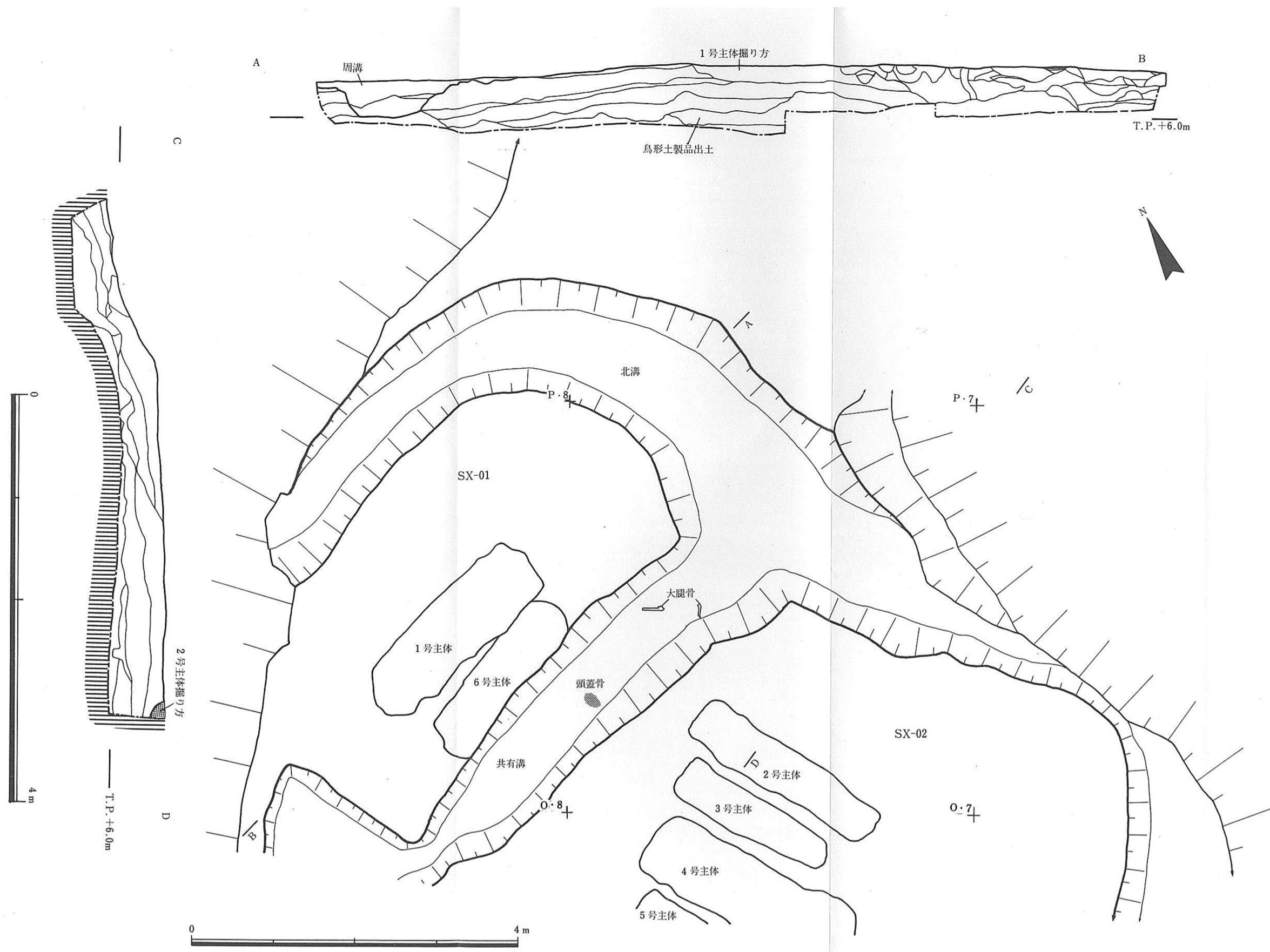
周溝； 西側は江戸時代の平野川の浸食によって、その一部分を失うが、西側コーナーに陸橋



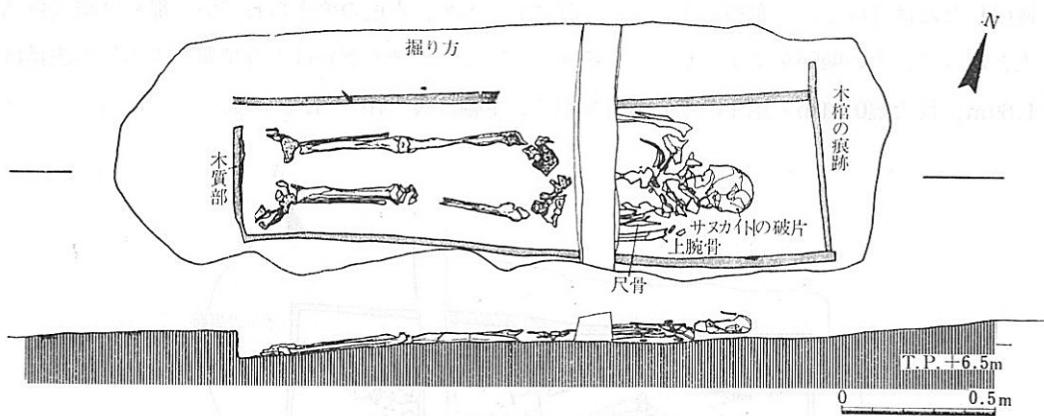
第62図 SX-01北溝出土遺物(3)

部を設けた幅約1.6m、深さ0.34mを測る断面U字状の深い溝である。溝中の土層堆積状況から埋土は黒灰褐色粘土の単一層で、墳丘築造後に掘削されている。

遺物の出土はほとんどみられず、わずかに北溝から壺・脚台・甕の器種資料（第62図）を得たのみである。



第63図 第1・2号方形周溝墓 (SX-01・02) (左) 及び土層断面図 (右)



第64図 1号主体実測図 (1/25)

埋葬施設； 台状部主軸に併行し、やや東寄りにおいて木棺2基を検出した。

1号主体（第64図）

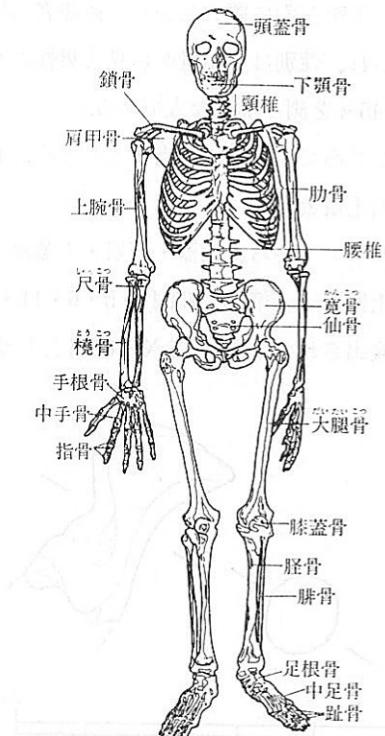
暗灰色粘土を除去直後、マウンド上面にて掘り方（墓壙）及び人骨の一部を確認した。本来、もっと高さをもつ盛土があったのである。掘り方の平面プランは $2.25 \times 0.78\text{m}$ 程の不定長方形を呈し、その中に組み合わせ式の木棺を埋置していた。木棺は、腐朽の進展が著しく側板・小口板の一部に木質部を残すのみであり、かろうじて、土色の変化から厚さ約3cmの板材を組み合わせて作ったものであることが理解された。内法長は 1.95×0.41 （上端）mを測り、足元に向って狭量する。主軸はN-71°-Eである。

木棺に埋葬されていた人骨は保存良好とはいえないが全体像は十分に把握され、左上肢は肘から 180° 近く曲げ左鎖骨の上に左手を置いていた。

被葬者は四肢骨の発育状況・歯牙の咬耗度合からして成人で、身長 $157 \sim 8\text{cm}$ を測り、人骨の骨格から判断して男性と推定される。副葬品は伴っていないが、左側頭骨にサスカイトの破片（石鎌か）が突きささった状態で検出された。

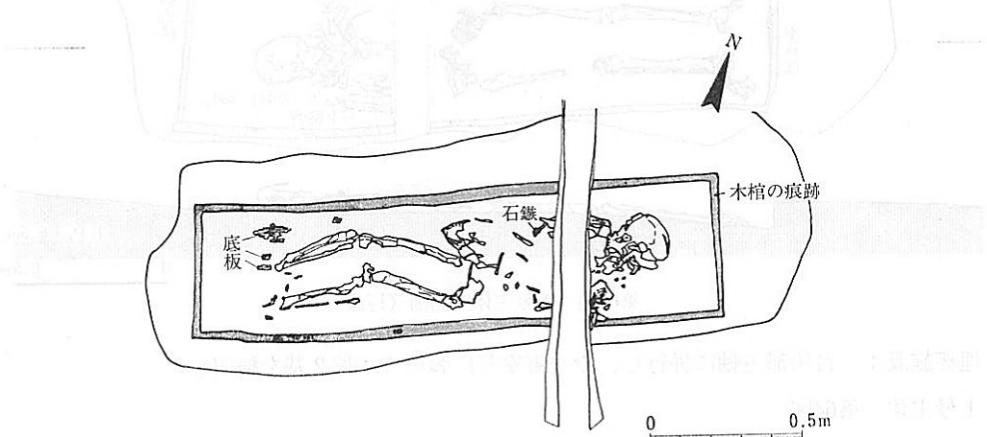
6号主体（第66図）

1号主体の写真撮影のため東側を清掃中に検出した。西側において掘り方の一部を1号主体の設置によって失ない、東は共有溝の開削で、上部は削平を受けている。6号主体は、長軸 2.18m 、短軸 0.70m の不定長方形プランの掘り方をもうけ、中央よりやや東に組合せ式木棺を埋葬主体にもつ。木棺は、左側板・底板のはんの一部を



第65図 ヒトの全身骨格図

検出しただけではほとんど腐朽しているが、腐食痕一本來、木棺のすえられていた部分は暗灰色粘土となって、その輪隔を示す一となって残存している。本来の形状は十分把握できる。内法長は1.69m、最大幅0.41mで足元にて最小値を示す。主軸はN-70°-Eである。



第66図 6号主体実測図 (3/25)

木棺に埋葬された人骨の保存状態は大変悪く、特に肋骨・寛骨は、厚さ0.1mmの膜となって、かろうじて土にへばりつき、形状を維持している。棺内に遺存していた人骨の姿勢は、上体は上向き、腰・下肢を横向きにし、ひざを約40°曲げた屈葬姿を示し、左上肢は肘から180°近く曲げ、手を左胸に置いていた。被葬者の年令は、大臼歯の咬耗度からして20代後半～30代前半と推定され、性別は下顎骨から見て男性の可能性が強い。身長は男性とすれば155cm位、女性であれば145cmを測る小柄な人である。

ところで、右胸に相当するところに石鎌（第69図10）1点の出土をみている。

出土遺物

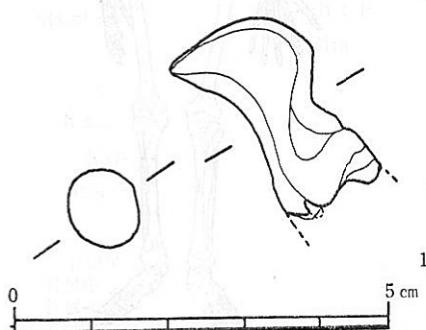
マウンドから、土器・石器・土製品・動物遺存体等を得ている。

〔土器〕（第73～75図1・5・6・11・16・20・23・24・35・38）

検出された土器は、S X-02出土土器と同様、型式学的に第Ⅲ—Ⅳ様式の範ちゅうにおさまる。

〔土製品〕（第67図）

1号主体のマウンド下層（第63図）から鳥形土製品（1）の出土をみた。体部下半は欠損し、全容は明らかでないが、形状から判断してトリを表現しているものと思われる。池上遺跡から出土している鳥形木製品同様、目・口は描かれていない。欠損しているところの胸には2つの穿孔が認められ、本来はその孔に紐をとおしていたであろうと推定される。



第67図 S X-01鳥形土製品 (3/1)

〔石器〕(第68~70図)

S X-01より出土した石器及び剝片は総数62点を数える。その内訳は、碎片5・剝片32・石鎌9・石錐1・楔形石器1・円形搔器1・石庖丁3・削器6・叩石2・砥石2である。その中より代表的なものを図化した。

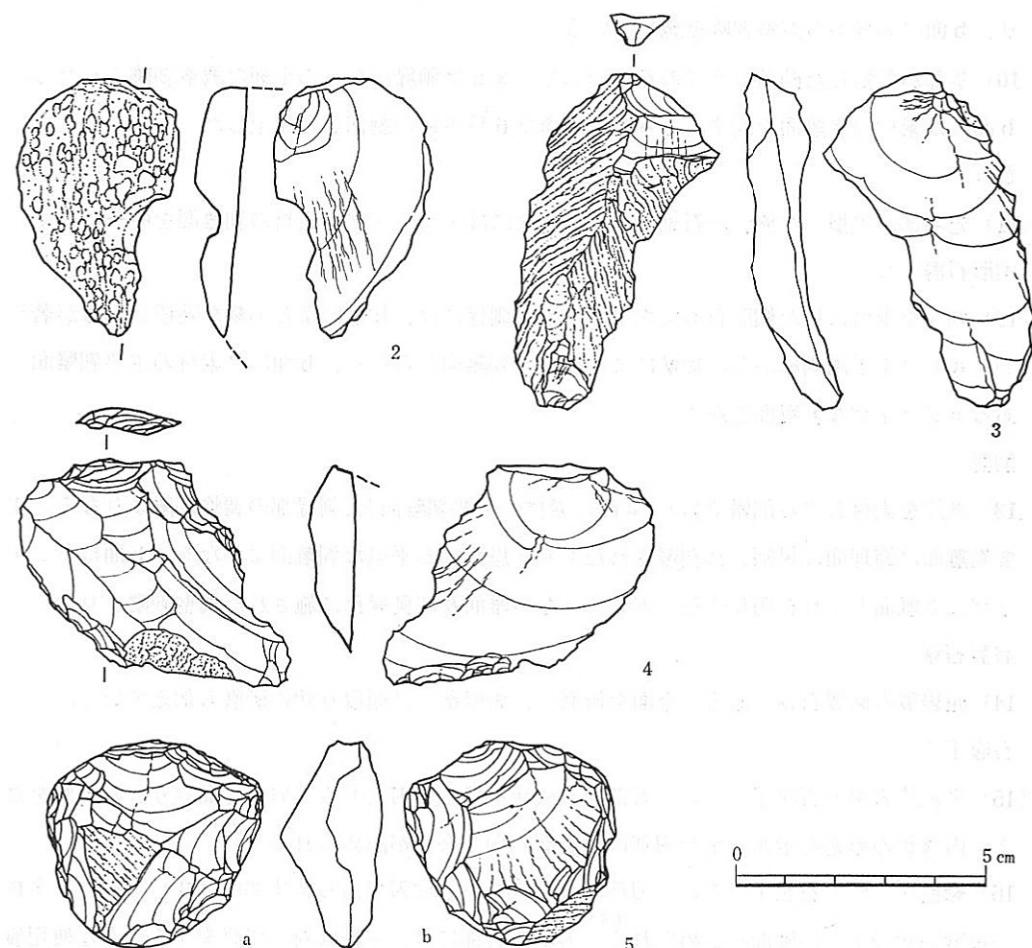
剝片

(2) 所謂、ファースト・フレイクである。背面は礫面よりなり、腹面はポジティブな剝離面よりなる。

(3) 縦長状の形態を呈する不定形な剝片である。背面は礫面とネガティブな剝離面よりなる。

また、剝離面は上下両端からの加撃により、礫面を切り込んでいる。腹面はポジティブな主要剝離面よりなり、打面は背面からの加撃により形成されている。

(4) 背面はネガティブな複数の剝離面が、礫面を切り込んでいる。腹面はポジティブな主要剝離面である。打面は背面の方向からの加撃による。複数の剝離面よりなる調整打面である。側縁には、微細な剝離痕が認められ調整ある剝片といえる。



第68図 S X-01出土遺物 (2/3)

円形搔器

(5) a・b両面に、ネガティブな剥離面及び礫面よりなる。器面調整は側縁より施されている。b面には素材の主要剥離面である、ポジティブな剥離面が認められる。側縁には打撃により潰れたものと考えられる小刻な階段状剥離が認められる。

石鎌

(6) 石鎌の未製品である。a面にはネガティブな、b面にはポジティブな素材の剥離面を残し、両剥離面を切り込み調整剥離を施している。側縁部には小刻な階段状剥離が認められる。

(7) 上下両端に礫面を残す石鎌の未製品である。a面にはネガティブな、b面にはポジティブな素材の剥離面を残し、側縁部より両剥離面を切り込み調整剥離を施している。

(8) 先端部が欠損した石鎌の未製品である。a面は側縁部からの加撃による調整剥離と、基部に残る礫面よりなる。b面は階段状に止まる剥離面を切り込むように、側縁部より調整剥離を施している。

(9) 先端部が欠損した長身鎌の未製品である。a面は礫面と、それを切り込む調整剥離よりなり、b面は側縁から調整剥離を施している。

(10) 茎部が欠損した凸基有茎式の石鎌である。a面は側縁部からの小刻な調整剥離よりなる。b面には素材の剥離面を残す。1号方形周溝墓6号主体の胸部から出土した。

石錐

(11) 先端部が欠損した棒状の石錐である。a面にはネガティブな素材の剥離面を中心部に残す。

楔形石器

(12) 剥片を素材にした楔形石器である。上下両側縁には、加撃による小刻な階段状剥離が著しい。a面は上下両側縁からの加撃による複数の剥離面からなり、b面には素材の主要剥離面であるポジティブな剥離面を残す。

削器

(13) 剥片を素材とする削器である。a面は素材の主要剥離面と、側縁部の調整剥離よりなる。主要剥離面は節理面に規制され剥離されたものと思われる平坦な剥離面よりなる。b面はポジティブな剥離面とそれを切り込むネガティブな剥離面及び側縁部に施された調整剥離よりなる。

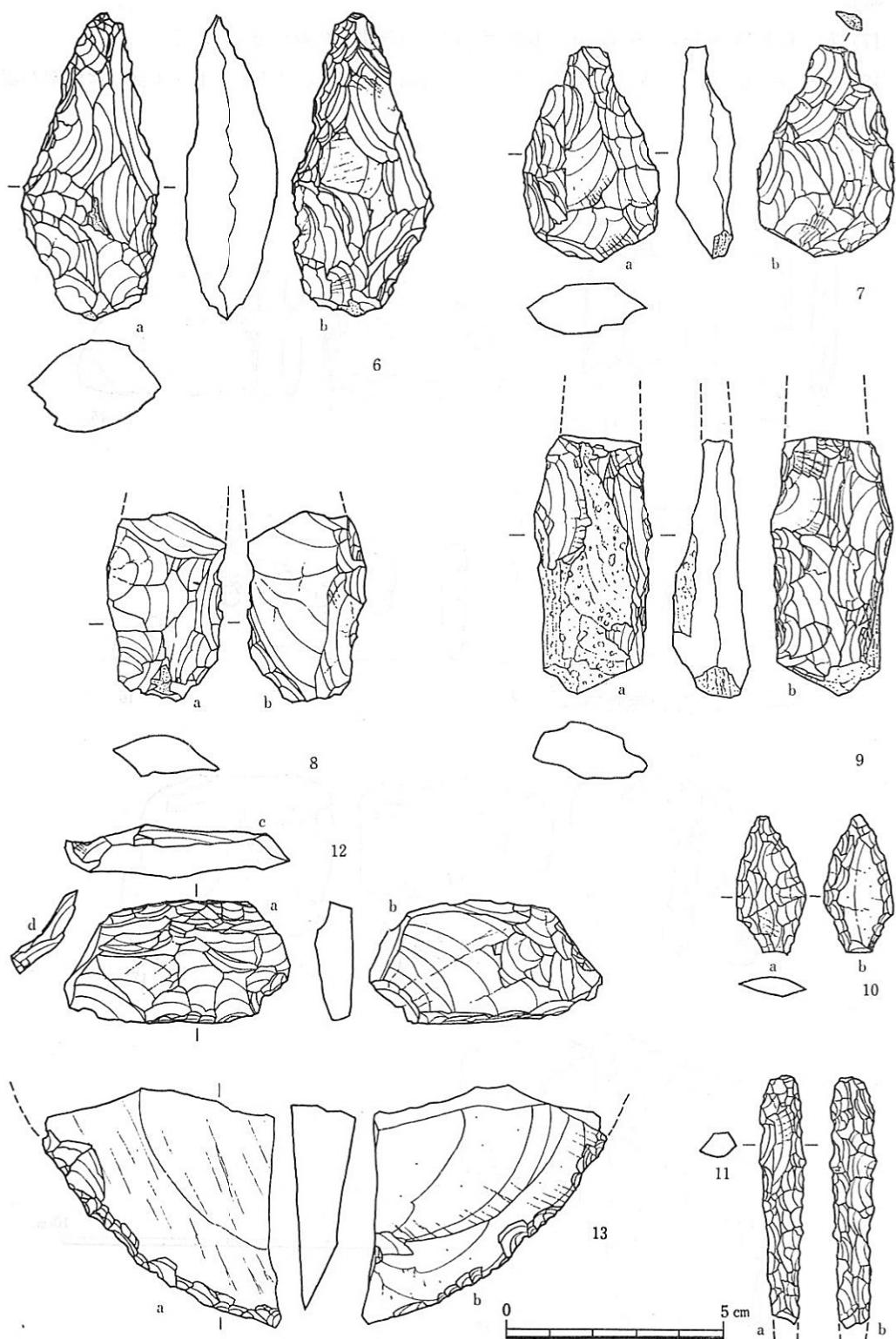
磨製石鎌

(14) 泥岩製の磨製石鎌である。全面を研磨し、側縁部には面取り状の研磨も加えている。

石庖丁

(15) 黒色片岩製の石庖丁である。刃部は直線状を呈し片刃である。肩部は面取り状の研磨を加え、内巻状の形態を示す。また刃部には研磨の切り合いが認められる。

(16) 緑色片岩製の石庖丁である。刃部は直線状を呈し片刃である。体部には3つの組孔と多数の虫食い状の小穴が両面に認められる。^(註8) 刃部と肩部には、主軸に対して直交するような使用痕^(註9) が認められ、石庖丁としての機能より他の使用目的のため転用したものと思われる。

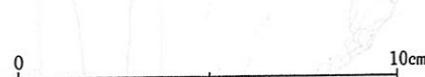
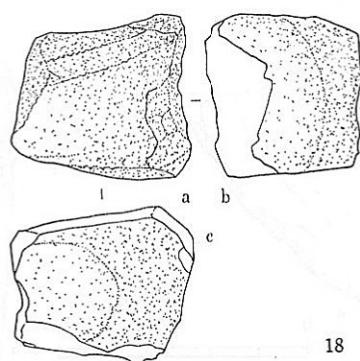
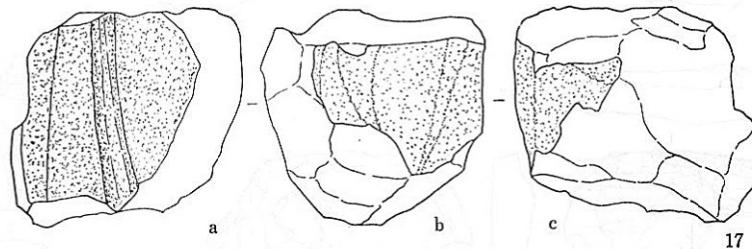
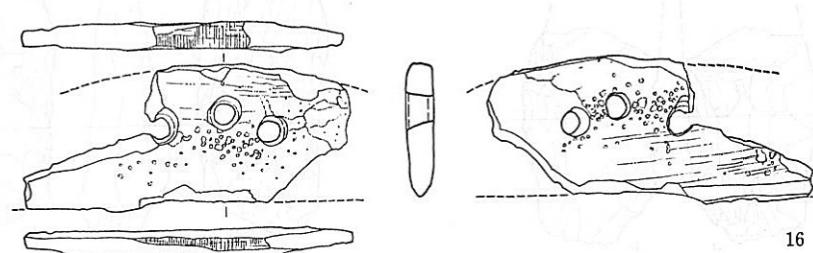
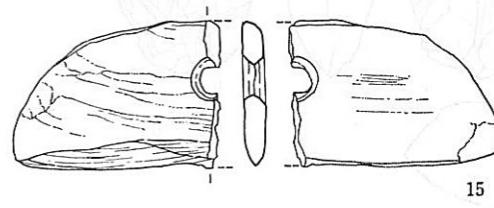
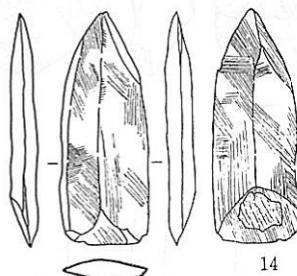


第69図 S X-01出土遺物 (2)

砥石

(17) 和泉砂岩製の砥石である。a・b両面には細い彎曲した溝が認められる。

(18) 和泉砂岩製の砥石である。a面には、細い彎曲した溝が認められ、b・c面には凹部が認められる。



第70図 S X-01出土遺物 (1/2)

〔動物遺存体〕

イノシシ・ニホンジカ・トリの各部骨を得ている。

13) SX-02 (第63図)

平面形・規模； 南側は調査対象外における全容は明らかでないが、一辺約7.0mの不定長方形プランを呈し、残存高は周溝底より約0.4mを測る弥生時代中期末の墳墓である。

墳丘（マウンド）の築造は、十字に残した断面、7ライン沿い断面の観察からすると、弥生時代中期後半のSD-03溝を人為的に埋め、平坦にして第Ⅸ層の上面に第Ⅹ層+第Ⅺ層のMix層を盛土して行う。これはSX-01と同じ築造方法であり、同時に築造された可能性もある。

周溝； 東側はSD-02溝によって切られ北、西側（SX-01と共有）において検出されている。断面はU字状で幅約1.30m、深さ0.38mを測る。断面観察から判断して周溝は、マウンド築造後に掘り込まれたものと了解された。溝の埋土は黒灰褐色粘土の単一層である。

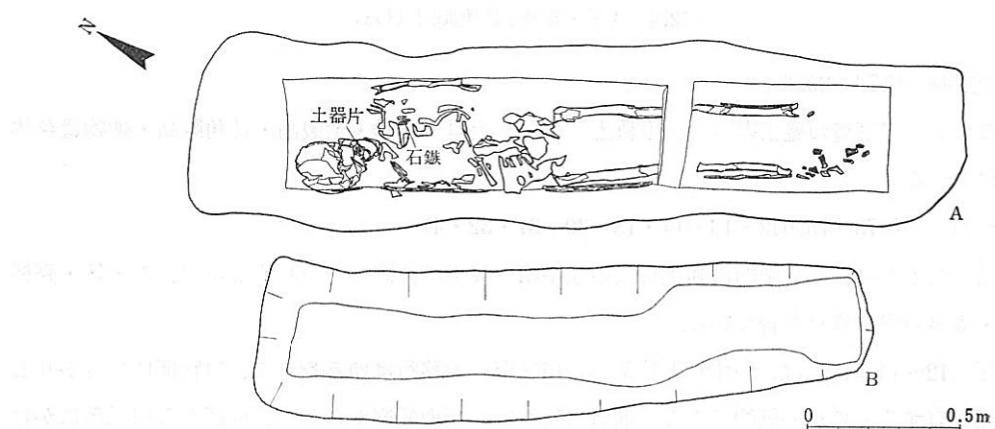
埋葬施設； 台状部の北西側において4基を検出した。（図版15a）

2号主体（第71図）

マウンド中央からやや共有溝よりにおいて検出した長軸2.25m、短軸0.60m程の掘り方内に組み合せ式木棺を埋置していた。

木棺は、わずかに長側板・底板（足元）において残存している。法量は土色の変化からして、内法長1.95m、幅0.35mを測る。主軸はN-30°-Wである。

木棺内に遺存していた人骨は、四肢骨・臼歯からして体格のよい40代の男性で、身長は165cmと推定される。埋葬姿勢は伸展葬（上向け）で、両腕はミゾ落ちあたりで交差している。6号主体と同じく胸上位にて石鎚（第78図51）1点出土している。また、口座には人為的か否か不明であるが土器片が認められた。（図版15b）



第71図 A-2号主体、B-3号主体実測図 (1/25)

3号主体（第71図）

2号主体と4号主体（いずれも木棺）の間に位置する土壙墓である。

平面プランは長さ2.01m、幅0.5~0.36m、深さ0.1mを測る隅丸長方形を呈し、断面はU字状。人骨は検出できなかった。土壙の形状から頭部は2号主体と同様、北にあると推定される。

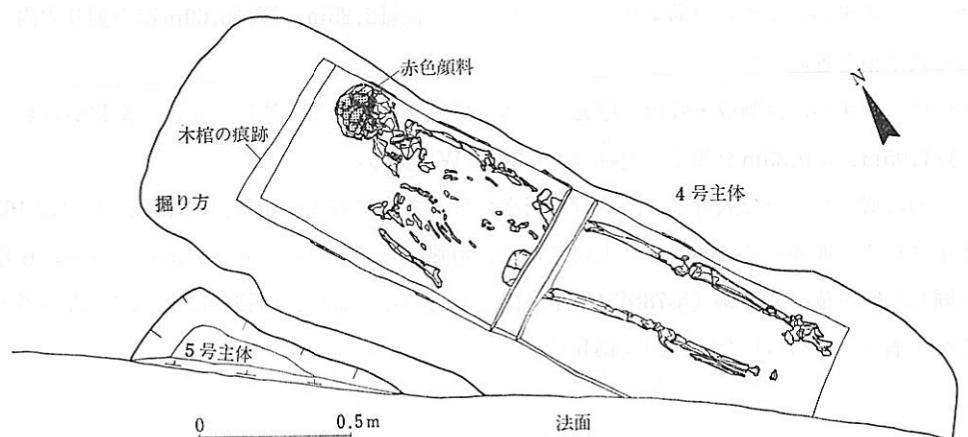
4号主体（第72図）

検出された埋葬施設の中で最も大きい掘り方面積を有している。南は調査対象外にあるが、木棺は、長軸2.76m、短軸0.79mの掘り方内の東よりに埋置されていた。木質部と思われる粘土の輪郭から、内法長1.92m、幅0.52mを測る組み合わせ式木棺である。主軸はN—34°—Wである。

木棺内に遺存していた人骨は、土圧によって押し潰されているが、四肢骨の形状・第三大臼歯の咬耗度から、30代後半～40代前半の頑丈な男性と推定され、身長165~6cmを測る。埋葬姿勢は伸展葬で左腕は伸ばしている。

頭部には、赤色顔料が認められた。また、2号主体と同じく胸に石鎌が伴っていた。

5号主体（第72図） 土壙の一部を検出しただけで輪郭等は不明。土壙墓と思われる。



第72図 4号・5号主体実測図 (1/25)

出土遺物（第73～80図）

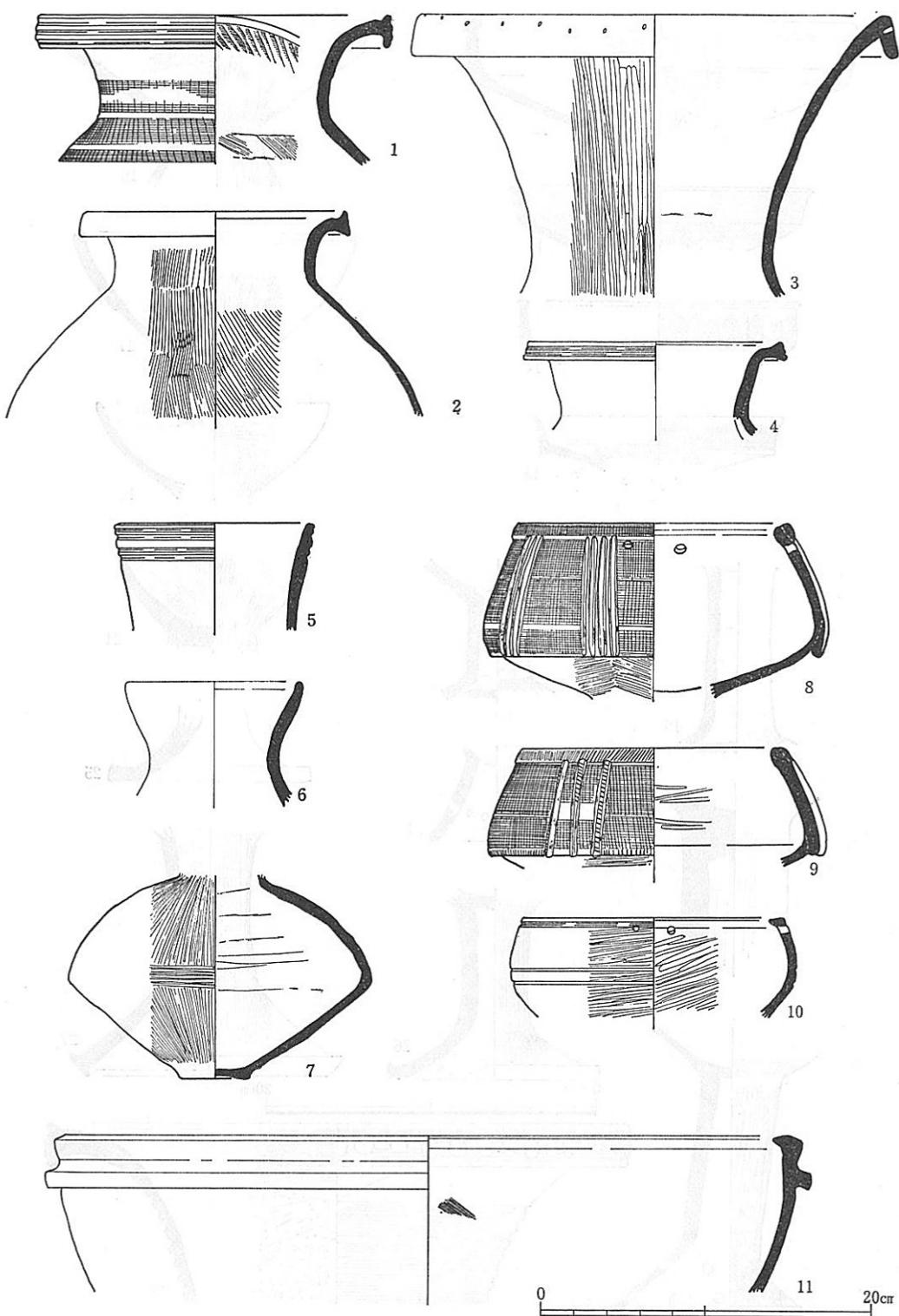
主にマウンド築造の盛土内（二次堆積土）から、土器・石器・土製品・骨角製品・動物遺存体等を得ている。

〔土器〕（第73～75図12・13・14・18・30・31・32・41）

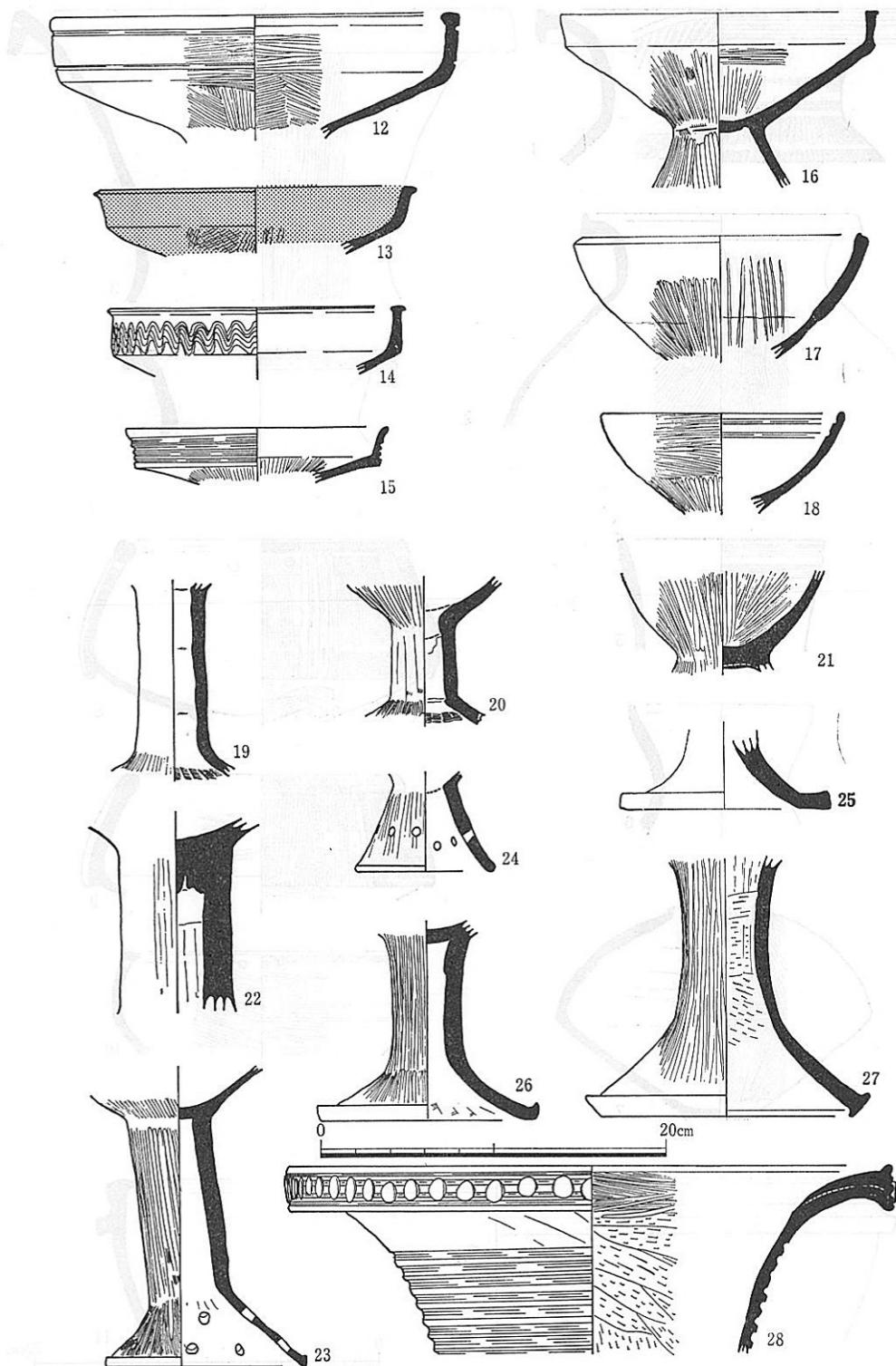
検出した土器は、型式学的に弥生時代中期中頃～後半に位置づけられるもので、壺・鉢・高杯・蓋・甕等の器種資料を得ている。

高杯（12～14・18）は、いずれも杯部から口縁部への移行はゆるやかで、口唇部にしっかりとした面を有するものが一般的である。前者の特徴は、断面観察からして、杯部から口縁部にかけて連続的に作りあげたことに基因するものと理解される。（SD-06の〔土器〕を参照）

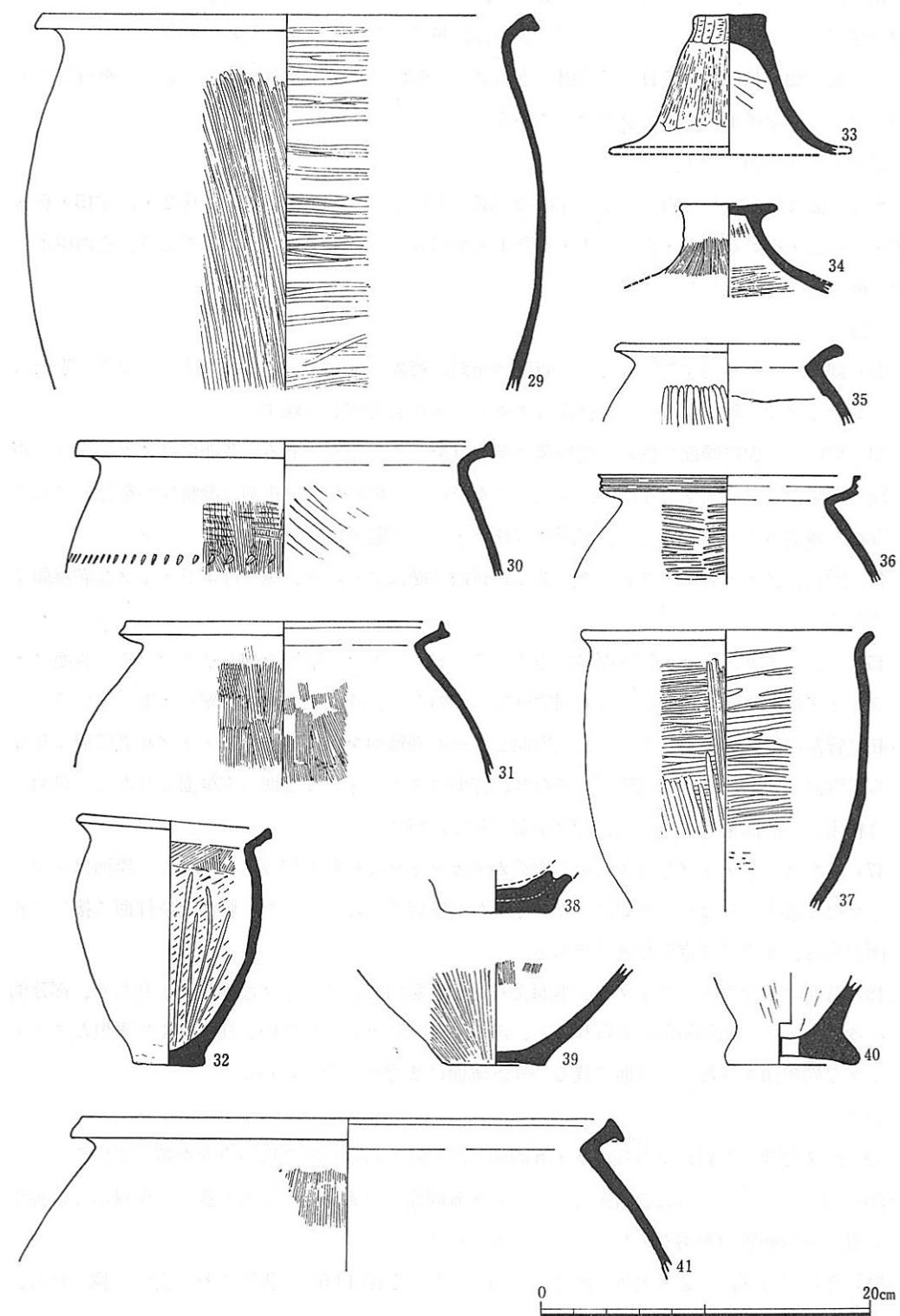
また、口縁部外面に櫛描波状文（14）、凹線文（12）を飾るもの、内外面に丹塗を施した



第73図 方形周溝墓及び包含層出土遺物（24）



第74図 方形周溝墓及び包含層出土遺物 (14)



第75図 方形周溝墓及び包含層出土遺物 (1/4)

(13) の存在は、装飾性に富んだものといえ、形態的特徴とともに中期的様相をそなえている。

楕形杯部を有する (18) は、口縁内面に2条の擬凹線文を施す特異なものである。

甕 (30—32・41) は、SD—05溝出土土器よりも全体にシンプルなプロポーションを有し、中期の中でもやや後出的な形態をそなえている。

〔石器〕(第76~79図)

SX—02より出土した石器及び剝片は総数37点を数える。その内訳は、碎片2・剝片15・石鎌7・石槍2・楔形石器1・石庖丁4・石斧1・削器3・叩石1・くぼみ石1である。その中より代表的なものを図化した。

剝片

(42) 側縁に礫面を残す剝片である。背面は礫面と複数のネガティブな剝離面よりなる。腹面はポジティブな剝離面よりなる。打面はネガティブな面を僅かに残す。

(43) 側面と打面に礫面を残し、側縁部に調整痕を有する剝片である。背面にはネガティブな複数の剝離面がポジティブな剝離面を切り込んでいて、側縁部には小刻な調整痕が部分的に認められ、調整ある剝片といえる。腹面はポジティブな剝離面よりなる。

(44) 所謂、ファースト・フレークである。背面は礫面よりなり、腹面はポジティブな剝離面よりなる。

(45) 背面はネガティブな剝離面が下方にあるポジティブな剝離面を切り込んでいる。腹面はポジティブな剝離面よりなる。打面調整は施しておらず、礫面上を直に加撃し剝離している。

(46) 背面は下縁部のポジティブな剝離面と、その剝離面を切り込むネガティブな剝離面よりなる。腹面はポジティブな剝離面よりなり、打面はネガティブな2面の剝離面よりなる。側面には朽木状の礫面を残す。一見、形態が翼状剝片に似ている。

(47) 背面はポジティブな剝離面を、複数のネガティブな剝離が切り込んでいる。腹面はポジティブな剝離面よりなり、打面はネガティブな剝離面よりなる。また、腹面及び打面に接して礫面がある、非常に不定形な剝片である。

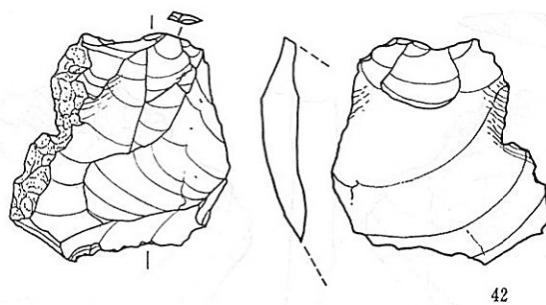
(48) 背面は複数のネガティブな剝離面よりなる。腹面はポジティブな剝離面よりなり、部分的にネガティブな剝離面が認められるが、調整剝離とは考えられない。打面はやや平坦なネガティブな剝離面よりなる。背面に残る剝片剝離面は2方向に分けられる。

石鎌

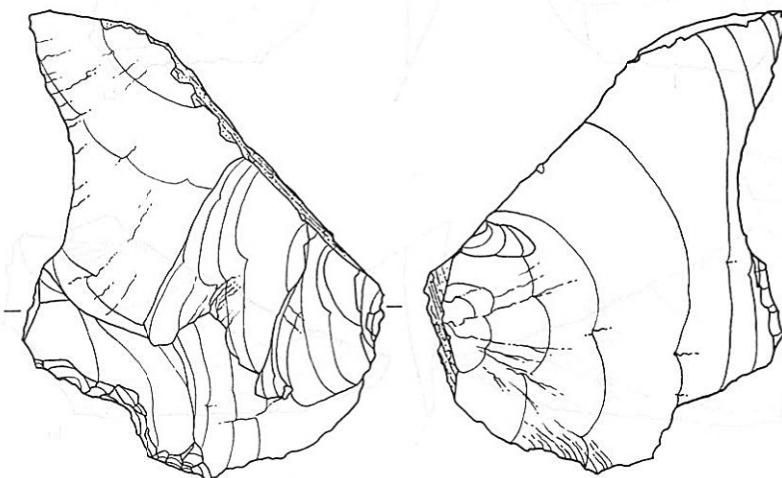
(49) ^(註10) 凸基有茎式の石鎌である。a・b両面共に側縁からの押圧剝離が全面を覆っている。

(50) 同様に、凸基有茎式の石鎌である。a・b両面には素材の剝離面を残し、側縁からの押圧剝離がその剝離面を切り込むように施されている。

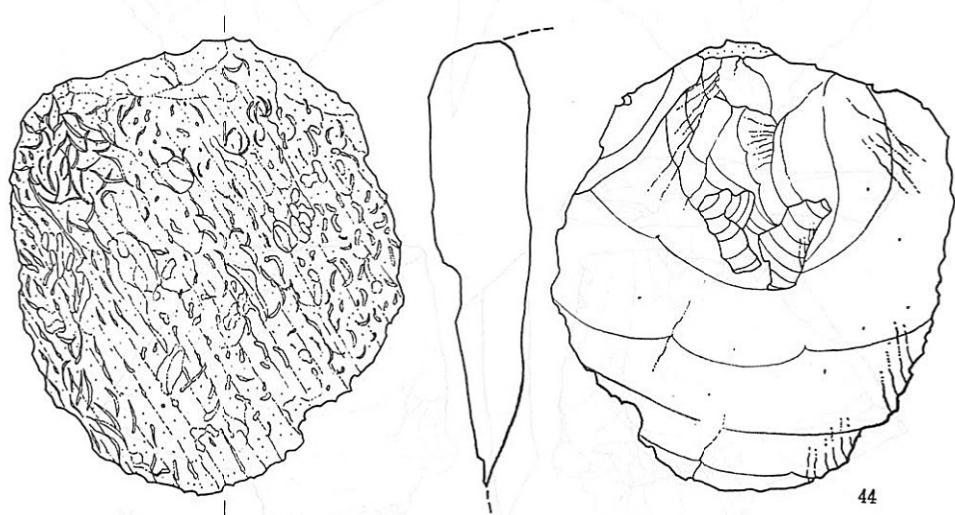
(51) 2号方形周溝墓2号主体の胸部より出土した(図版14b)。押圧剝離が全面に施された、完成度の高いゆう品である。



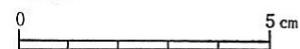
42



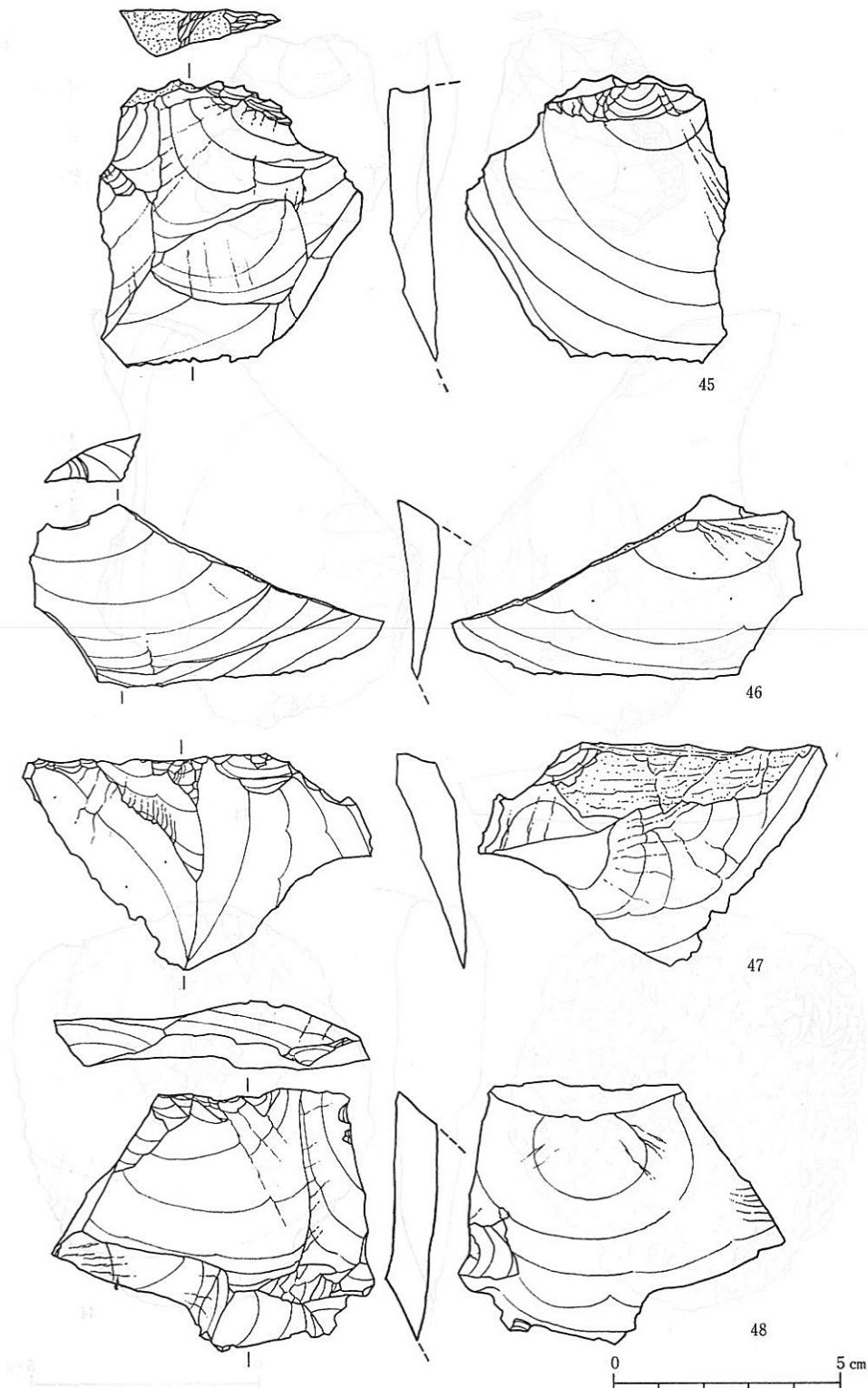
43



44



第76図 S X-02出土遺物 (2)

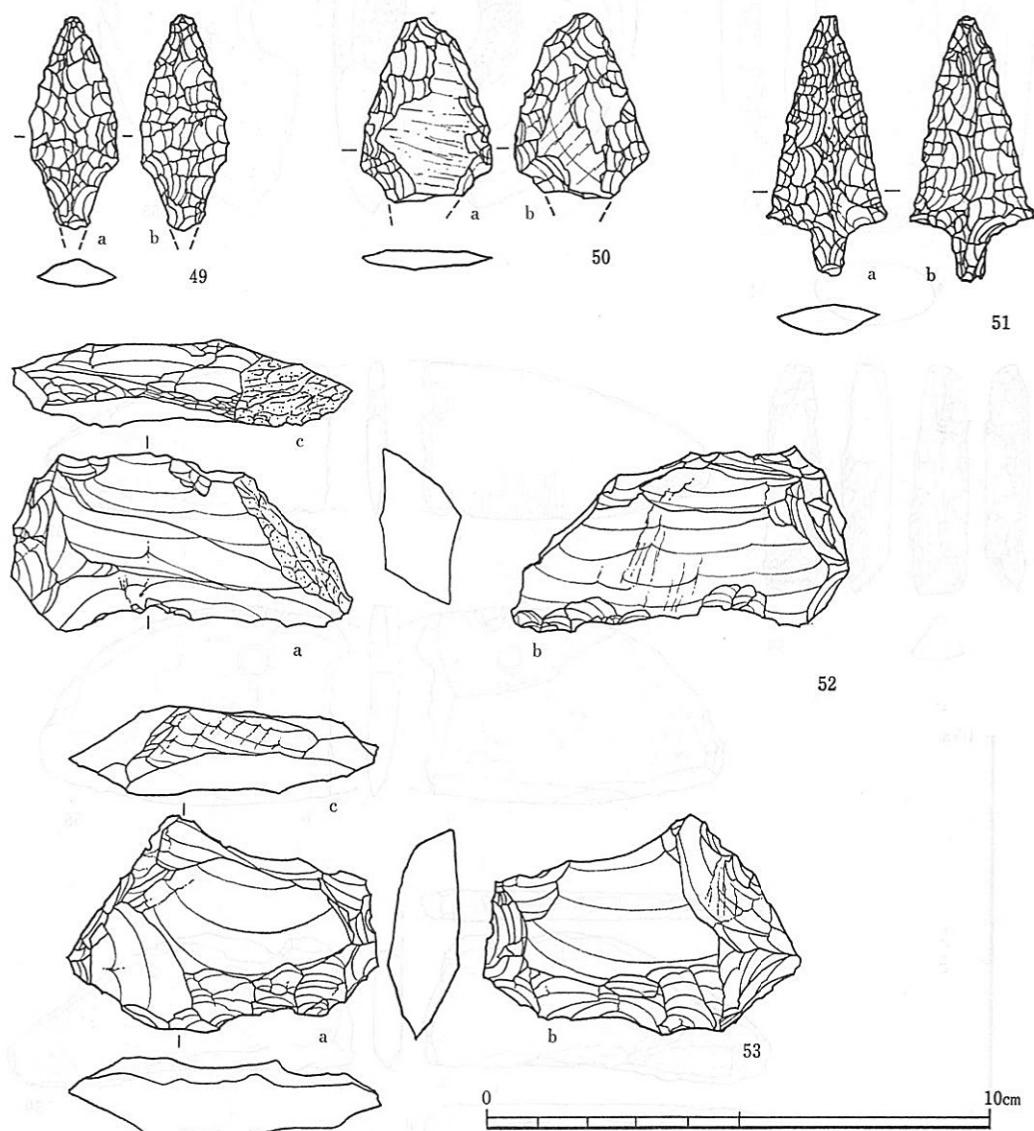


第77圖 S X-02出土遺物 (3)

削器

(52) 肉厚な剥片を素材とした削器である。a面は素材の背面にあたり、複数のネガティブな剥離面よりなる。腹面はポジティブな剥離面よりなる。背面及び腹面の端部には粗雑な階段状剥離の切り合が認められ、意図的な整形によるものかもしれない。打面は複数の剥離面よりなり、背面に接する個所は、数度の加撃による階段状剥離が著しい。側面には礫面を残す。刃部の調整剥離は主にb面に認められる。

(53) 52同様に、肉厚な剥片を素材とした削器である。a面は素材の背面に相当し、ネガティブな素材の剥離面を切り込むように、刃部の調整剥離を施している。b面も同様ポジティブな素

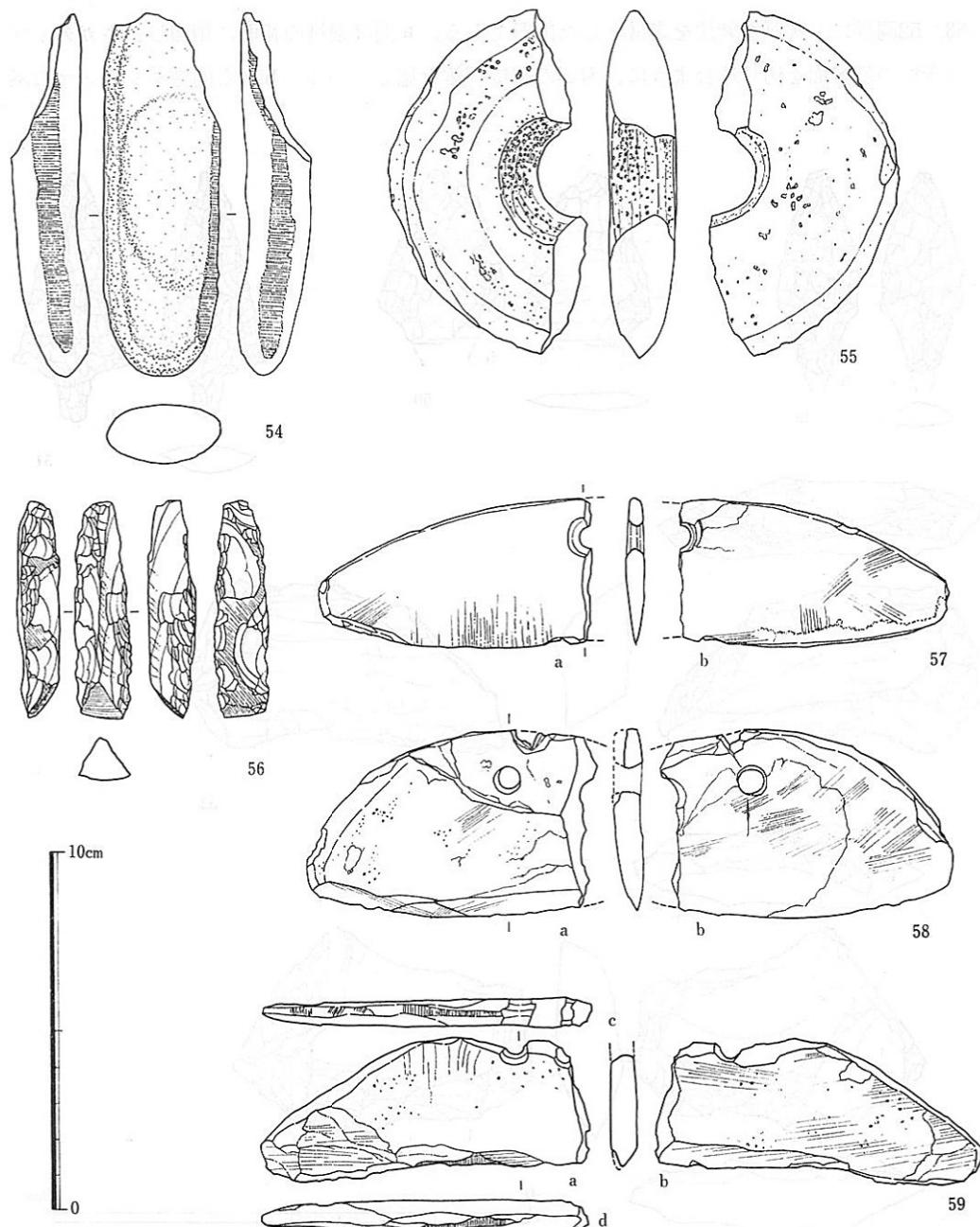


第78図 S X-02出土遺物 (23)

材の主要剝離面を、切り込むように刃部の調整剝離を施し、その調整は側縁にまで至っている。打面は b 面方向からのネガティブな一枚の剝離面となる。

叩き石 (54) 和泉砂岩の棒状河原石の叩き石である。両側面には主軸に対して直交する使用痕を持つ。

(55) 同種の使用痕は、石庖丁の刃部及び肩部に残された使用痕と同類のものと思われる。
(註9)



第79図 SX-02出土遺物 (1/2)

環状石斧

(55) 1点のみ出土している。亀井遺跡においては2例目である。石質は砂質片岩製である。刃部は蛤刃状を呈し、部分的に歯こぼれが認められる。体部全面には、研磨を施している。中心孔の穿孔は主に左面より施されている。中心孔面には細かい虫食い状の小穴が多数開いている。

小形柱状片刃石斧

(56) 1点のみ出土している。サヌカイト製の半磨製品である。中央に稜をもち、断面三角形を呈する。棒状の粗形を作り、研磨により刃部を作り出し、部分的に体部にまで研磨を施している。

石庖丁

(57) 緑泥片岩製の石庖丁である。刃部はわずかに外彎し部分的に面取り状の研磨痕が認められる。また刃面は認められないが、肩部はわずかに外彎し、面取り状の研磨痕が認められる。a面刃部には使用痕と思われる磨滅痕が認められる。

(58) 緑泥片岩製の石庖丁である。刃部はわずかに外彎し、a面に刃面を持つ。刃部には2方向からの研磨の切り合いが認められる。肩部は外彎し面取り状の研磨を施している。

(59) 緑泥石墨岩製の石庖丁である。刃部は直線状を呈し、b面に研磨による刃面を持つ。肩部は石器の転用により完全に残っていないが、残存部の形態より、ゆるやかに外彎するものと思われる。刃部と肩部には、他の石器として転用されたと思われる使用痕が認められ、肩部においては紐孔を欠損させるまで施されている。^(註9)

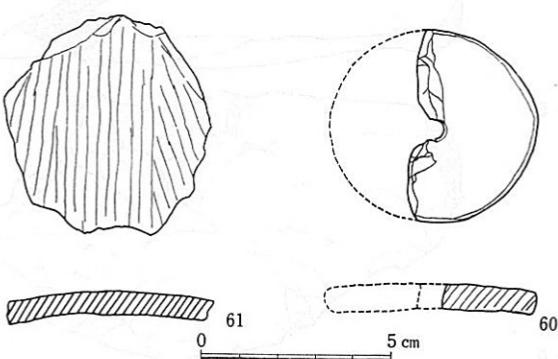
〔土製品〕(第80図)

紡錘車(60) 約半分を欠失する。直径5.1cm、厚さ0.7cm、残存重量16.0g、中心孔の内径0.5cmを計る。当初から紡錘車として製作されたもので、両面にはていねいなヘラミガキを、周縁にはナデを施す。中心孔は焼成前に穿孔されている。色調は黒色を呈する。

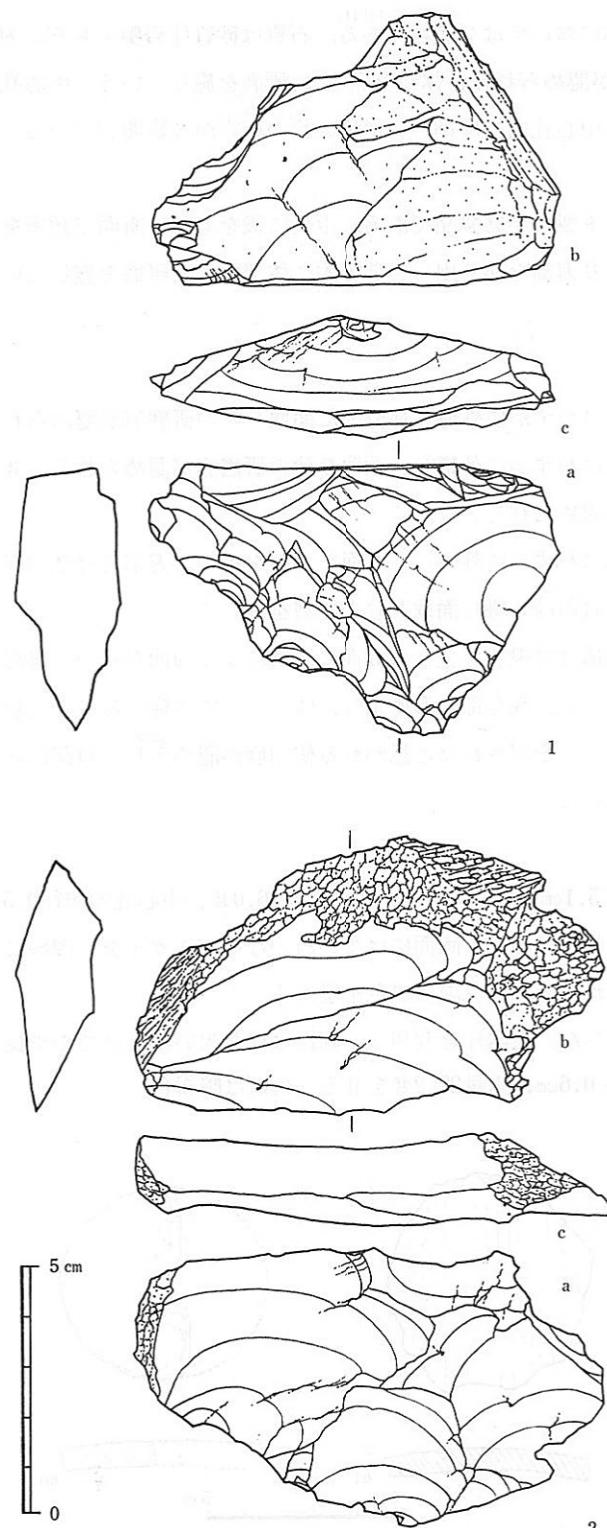
円板(61) 共有溝の埋土中より出土した。土器片を利用し、周縁は打ち欠いただけでやや長楕円形を呈する。直径5.5×5.3cm、厚さ0.6cm、重量27.2gを計る。色調は暗褐色。

〔動物遺存体〕

盛土中からイノシシ・ニホンジカの部分骨を得た。すべて2次堆積の産物である。イノシシは歯牙・上腕骨・桡骨があり、いずれも著しく破損している。最少個体数1。ニホンジカでは、歯牙・左上腕骨・胫骨・脛骨を得ている。左上腕骨には解体時に付されたと思われる解体痕が認められた。最少個体数1。



第80図 SX-02出土遺物 (1/2)



第81図 ブロック土層出土遺物 (2)

14) ブロック土層

第45図中の方形周溝墓のマウンドに相当する土層で、本来は方形周溝墓マウンド下層とすべきだが、黒褐色粘土に2cm大の青灰色シルト・粘土を多量に包含し、明らかに上層と区別できたので層位の上下関係を重視してここに別稿をもうけた。

出土遺物 (第81~83図)

出土土器は細片で図化できない。

〔石器〕 (1~9)

ブロック土層より出土した石器及び剝片は総数43点を数える。その内訳は、石核2・剝片19・碎片2・石鎌6・石錐1・石槍4・楔形石器2・石庖丁3・石斧1・叩石2である。その中より代表的なものを図化した。

石核

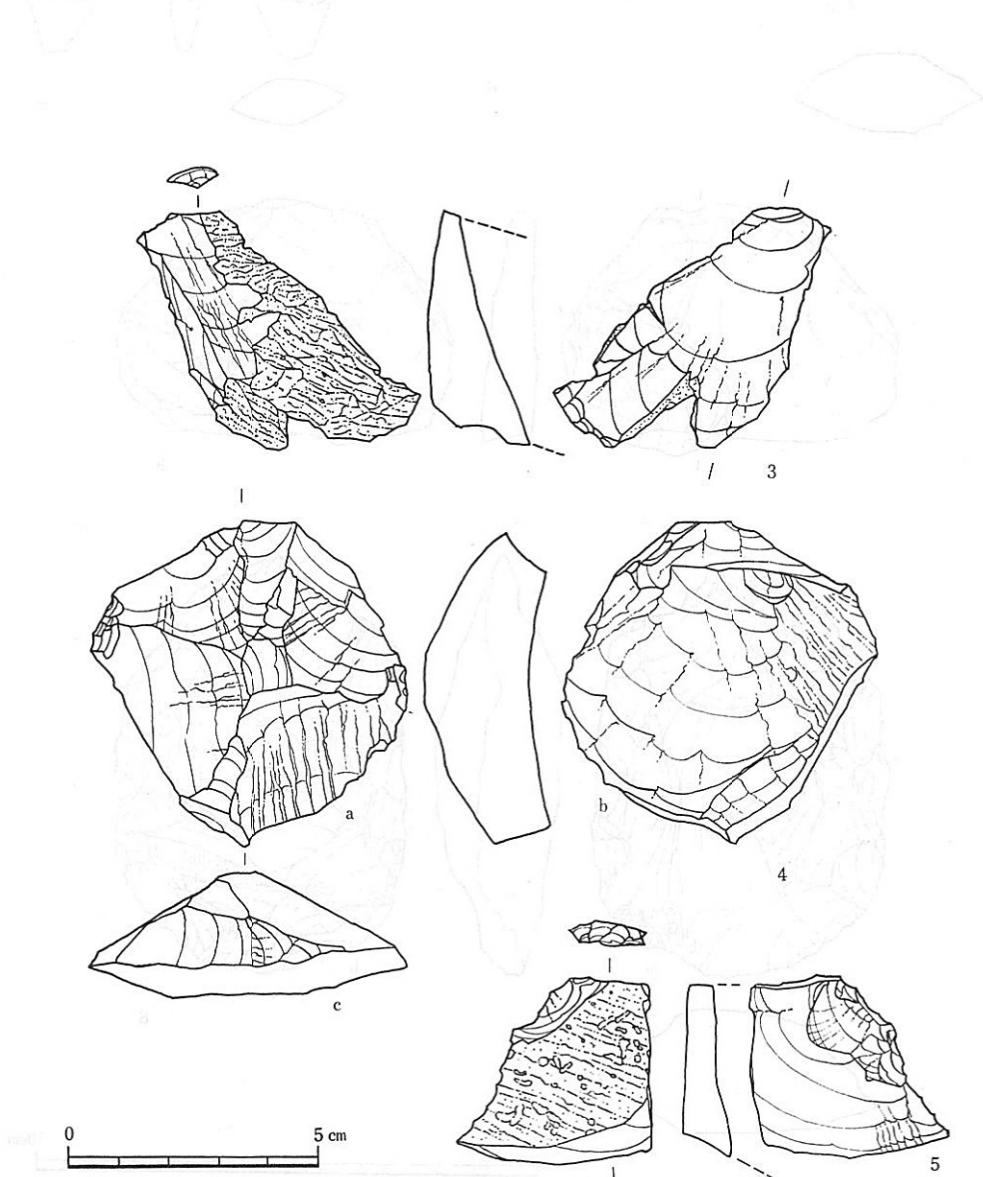
(1) 肉厚な剝片を素材とした石核である。a面はわずかに素材の剝離面を残し、周囲より剝片剝離作業を施している。剝離の中には完全に力が抜けきれず、階段状に止まるものが認められる。b面は礫面と節理に規制され平坦に剝離されたポジティブな剝離面よりも、剝片剝離作業の加撃面となる機能を有する面である。この剝離痕はa面に残る素材の剝離面と対になる剝離面であり、素材の連続的な剝片剝離作業によるものと考えられる。c面はb面からの加撃による折断面である。

(2) 1同様、剥片を素材とした石核である。a面にはわずかに素材の剥離面を残し、一側縁部より6面の剥片剥離面が切り込んでいる。b面は礫面とネガティブな2面の剥離面よりなり、ネガティブな剥離面は節理を意識し剥離作業を行っていて、石核用素材作成のための連続的な剥片剥離作業によるものであろう。

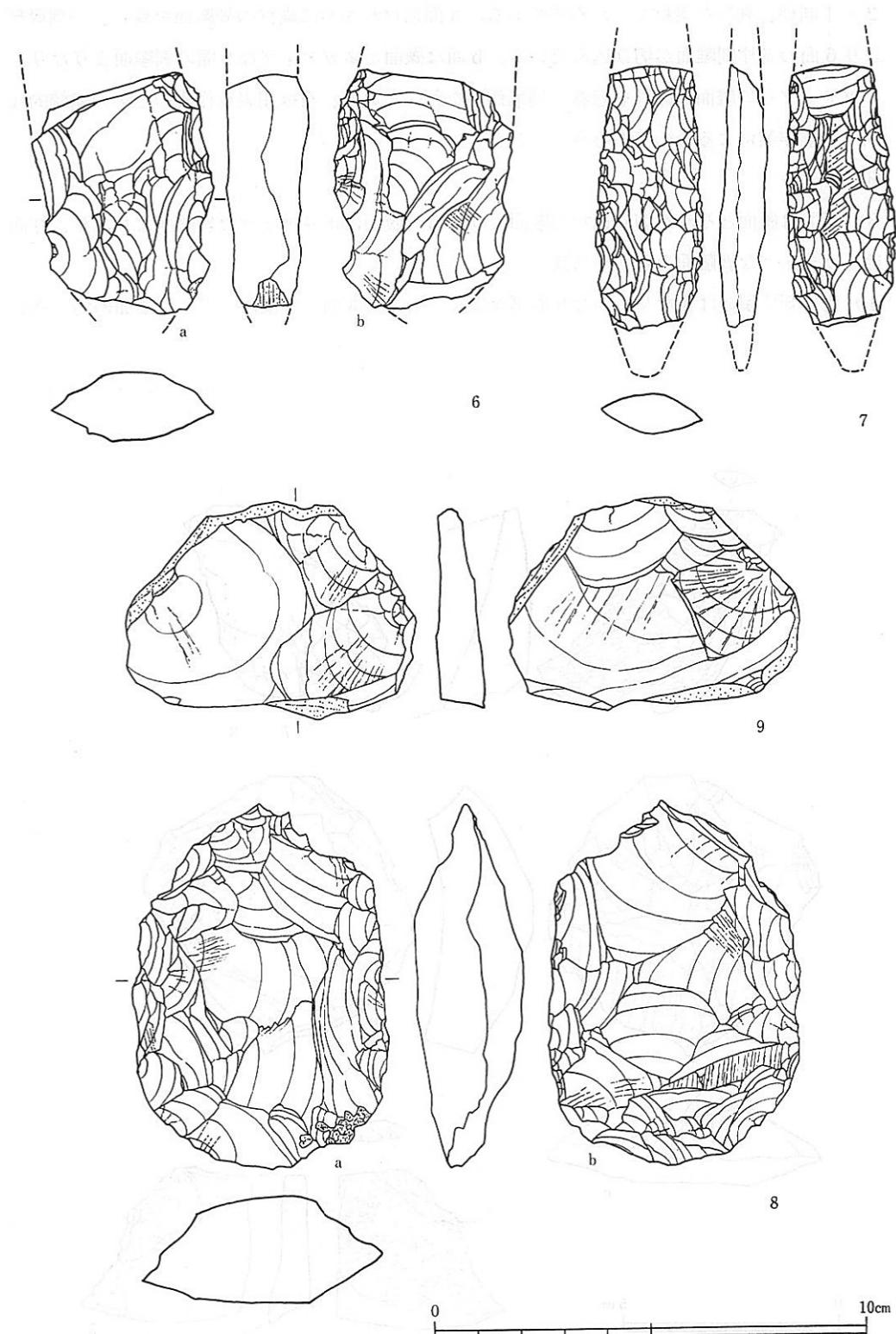
剥片

(3) 背面は礫面とそれを切り込む剥離面よりなる。腹面はポジティブな剥離面よりなり、打面はネガティブな剥離面をわずかに残す。

(4) 他の剥片類とは異なり、かなり肉厚な剥片である。a面には複数の剥片剥離面の切り合い



第82図 ブロック土層出土遺物 (2)



第83図 ブロック土層出土遺物 (2)

が認められ、その方向は全周を巡るように施されている。b面はポジティブな剥離面よりもなる。b面の打面となった面は節理に規制され、不明瞭な剥離面を呈する。c面に残る剥離面は、他の剥離面に較べ、風化が新しく意図的なものかどうかわからない。

(5) 所謂、ファースト・フレークの部類に入る剥片である。背面は礫面とネガティブな剥離面よりもなり、下縁部に存在する剥離は石核調整時の剥離面と考えられる。腹面はポジティブな剥離面であり、加撃時に生じるバルバスカーが顕著に認められ、打面部は背面からの加撃による複数の調整剥離痕よりもなる。側面部は折断面よりもなる。

石槍

(6) かなり肉厚な石槍の未製品の基部である。a面は素材の剥離面を中心にして残し、その剥離面を切り込む粗雑な調整剥離を施している。b面はa面同様粗雑な調整剥離を施していく、特にb面には粗雑な階段状剥離が顕著である。基部の一部は欠損し、また礫面を残している。

石鎌

(7) 所謂、長身鎌である。先端及び基部は欠損している。形態より見る限り凸基有柄式の石鎌と考えられる。器面全面に側縁より緻密な押圧剥離を施している。

円形搔器

(8) 円盤状に調整された肉厚な石器である。a面には中央部に素材の剥離面を持ち、その剥離面を切り込むように側縁からの調整剥離を施している。剥離の中には階段状に止まる剥離も認められ、わずかに礫面を残す。b面はa面同様に側縁より調整剥離を施し、また階段状剥離を呈する剥離面も認められる。側縁は鋭いエッヂを持つ。

二次加工ある剥片

(9) 円盤状の剥片に、調整剥離を加えた剥片である。背面には複数のネガティブな剥離面の切り合いが認められる。腹面はポジティブな主要剥離面と、それを切り込むネガティブな剥離面よりもなり、側縁には礫面を残す。

15) 包含層

ここで取り扱う包含層は、①第Ⅹ層（青灰色シルト）に覆いかぶさるようにして堆積する青灰色粘土層（第30図参照）、②方形周溝墓の真上に厚さ約10cmと薄く堆積する暗灰色粘土、③弥生時代遺構面となる所謂弥生時代遺物包含層である。

出土遺物

〔土器〕

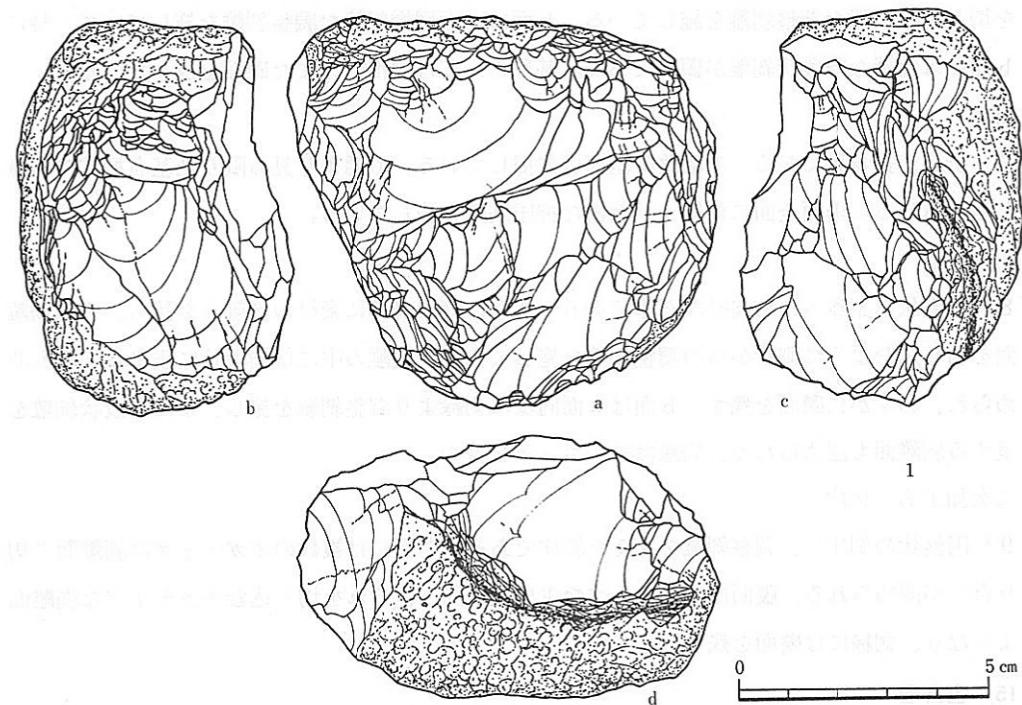
①・②包含層から出土した土器はいずれも細片で図化することができなかった。③包含層より検出した土器は、型式学的には弥生時代中期中頃の範ちゅうにおさまるものと思われる。

〔石器〕（1～6）

石核

(1) 拳大の円礫を素材とした石核である。剥片剥離作業面の縁辺には敲打痕が顕著に認めら

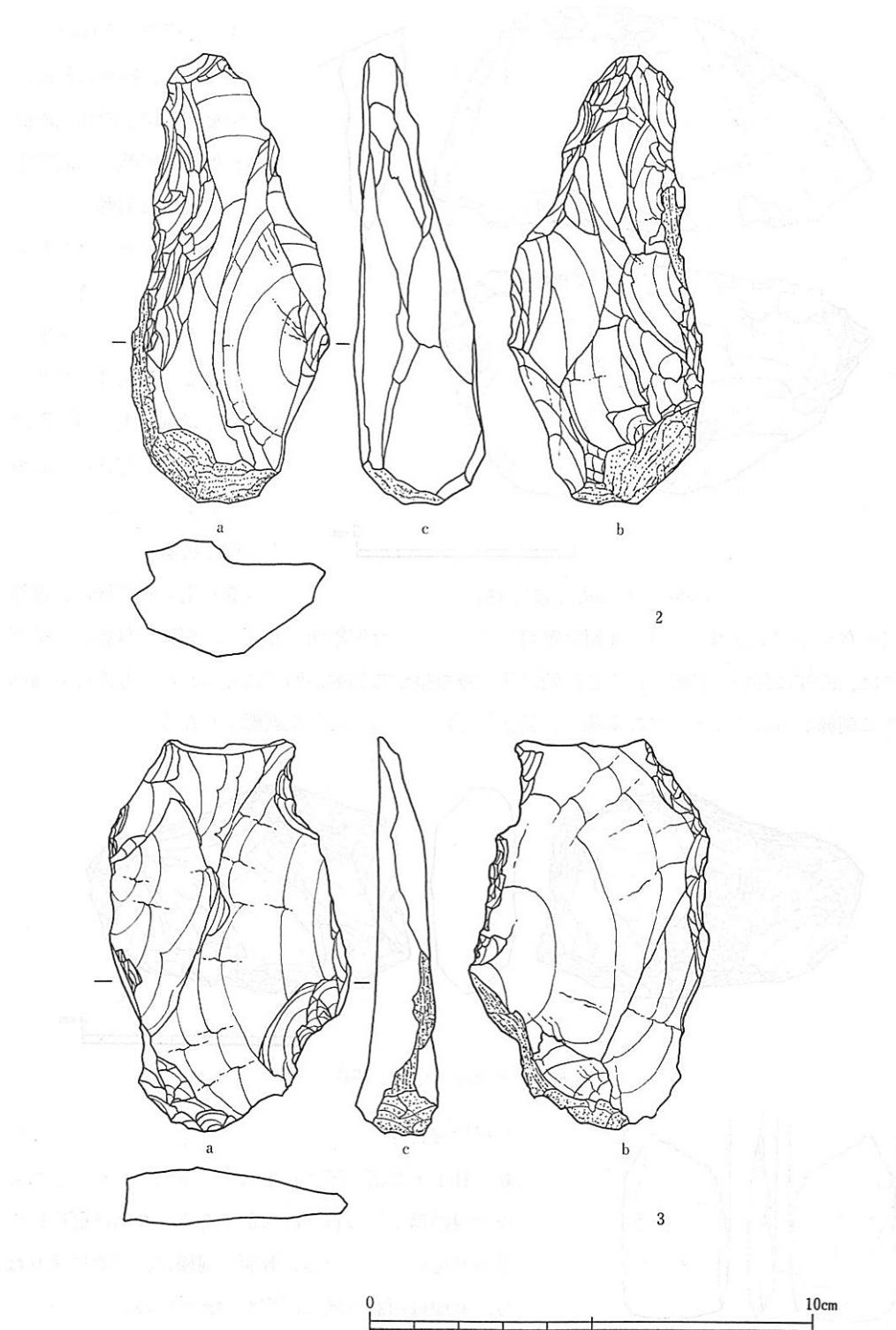
れ、後には叩き石として転用されたものと考えられる。石核としての構成は、剝片剝離作業面及び礫面（打面としての機能を持つ。）という単純なものであり、特別に打面を設けるようなことはしていない。すなわち礫面上を直接加撃することにより剝片を生産している石核である。剝片剝離作業面は、a～c面に及ぶ。a面は3面の中でも主に剝片剝離作業が行われた面であり、多方向からの加撃により複数のネガティブな剝離面の切り合いが認められる。剝離が多方向より加撃されている縁辺部では階段状剝離が顕著である。そしてa面・b面が接する稜線上では、敲打痕により小刻な階段状剝離で潰されている。c面には他の剝片剝離面と異なり、作業面方向からの加撃によるものがわずかに認められる。



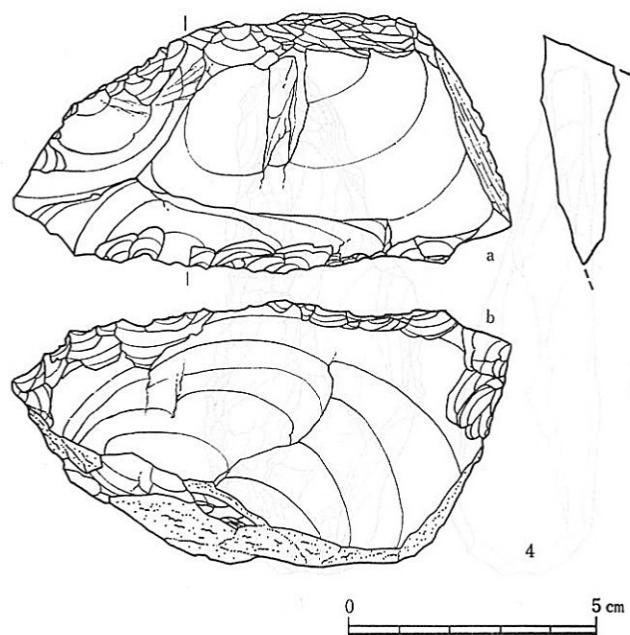
第84図 包含層出土遺物(2)

尖頭器状石器未製品

- (2) 側縁及び基部に礫面を残す尖頭器状石器未製品である。a面はポジティブな素材の剝離面を残し、同剝離面を側縁からの調整剝離が切り込んでいる。b面もa面同様に、基部に素材の剝離面を残し、同剝離面を側面からの調整剝離が切り込んでいる。先端部には、意図的に尖らすように調整剝離を施している。
- (3) 側縁及び基部に、礫面を残す板状の剝片を素材とした未製品である。a面にはネガティブな素材の剝離面を、側面より調整剝離が切り込んでいる。b面には新旧2つのポジティブな剝離面の切り合いが認められる。



第85図 包含層出土遺物 (2)



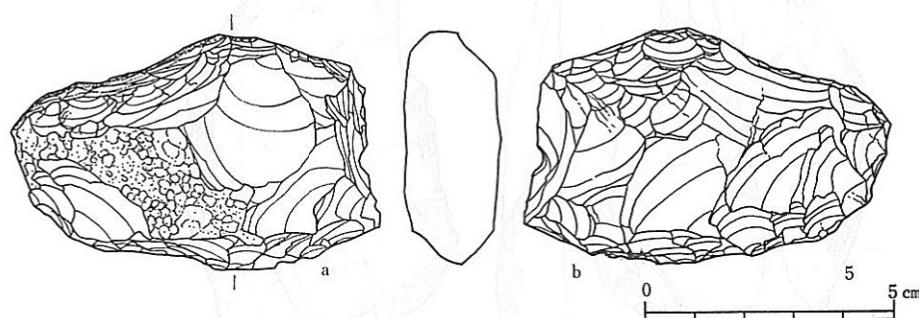
第86図 包含層出土遺物 (2)

(5) 上下両側縁に、敲打痕を有する楔型石器である。a面は礫面とネガティブな剝離面よりなる。側縁部付近の剝離面には、敲打に伴い、剝離した小さな階段状剝離を呈する剝離が顕著に見られる。b面はa面同様に側縁からのネガティブな剝離と、側縁付近に見られる階段状剝離よりなる。

削器

(4) 打面及び側面は礫面よりなり、特別に打面調整を施さず、礫面上を直接加撃し剝離した剝片を素材とした削器である。a面はネガティブな複数の剝離面の切り合いと刃部に施された調整剝離よりなる。b面はポジティブな素材の主要剝離面と、刃部に施された調整剝離よりなる。

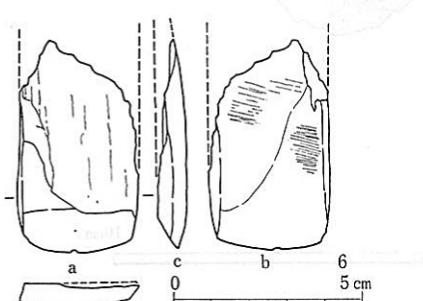
楔形石器



第87図 包含層出土遺物 (3)

扁平片刃石斧

(6) H 1・2 調査区より1点のみ出土したホルンフェルス製の扁平片刃石斧の刃部である。a面は研磨により刃面を形成している。b面も同様に、研磨によりなる。c面は面取り状の研磨を加えている。

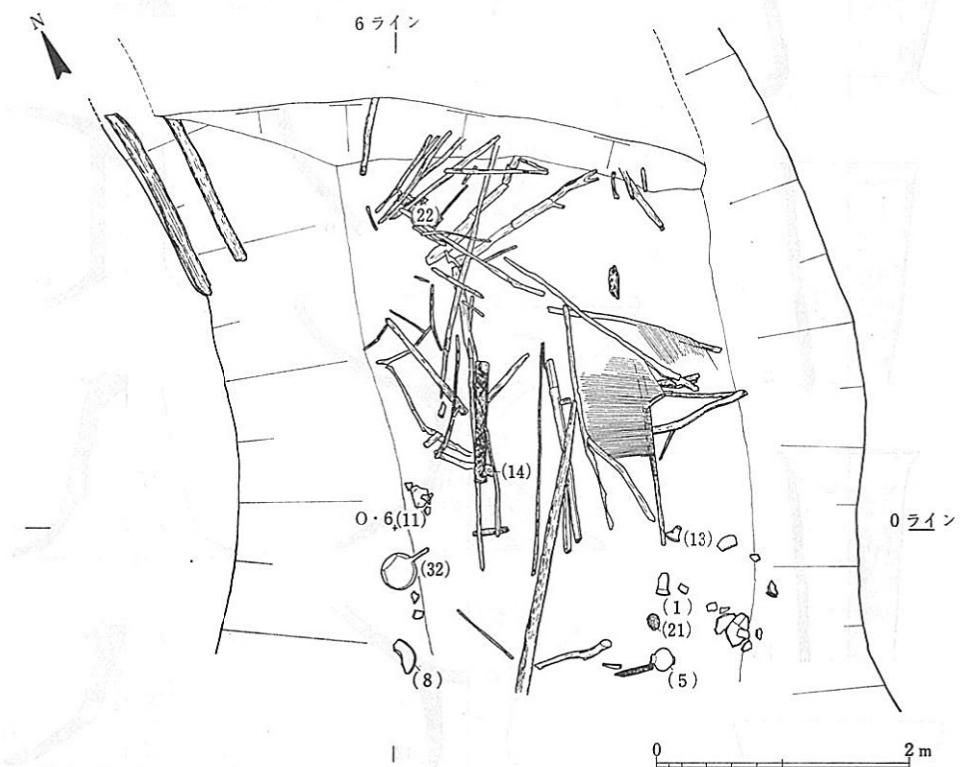


第88図 包含層出土遺物 (4)

第2節 弥生時代後期

1) SD-02 (第89~91図)

南北に走向する幅約4.7m、深さ約1.0mの弥生時代後期中頃の大溝である。基本層序第Ⅶ層除く後に検出した。北側は河床部にあたるため未調査であるが、Y字状に拡がっている。溝内の堆積状況はⅠ～Ⅲ層に分層が可能である。各層とも自然木片・加工木材・植物遺体・動物遺体の出土量が多い。土器は上層中に多くみられた。

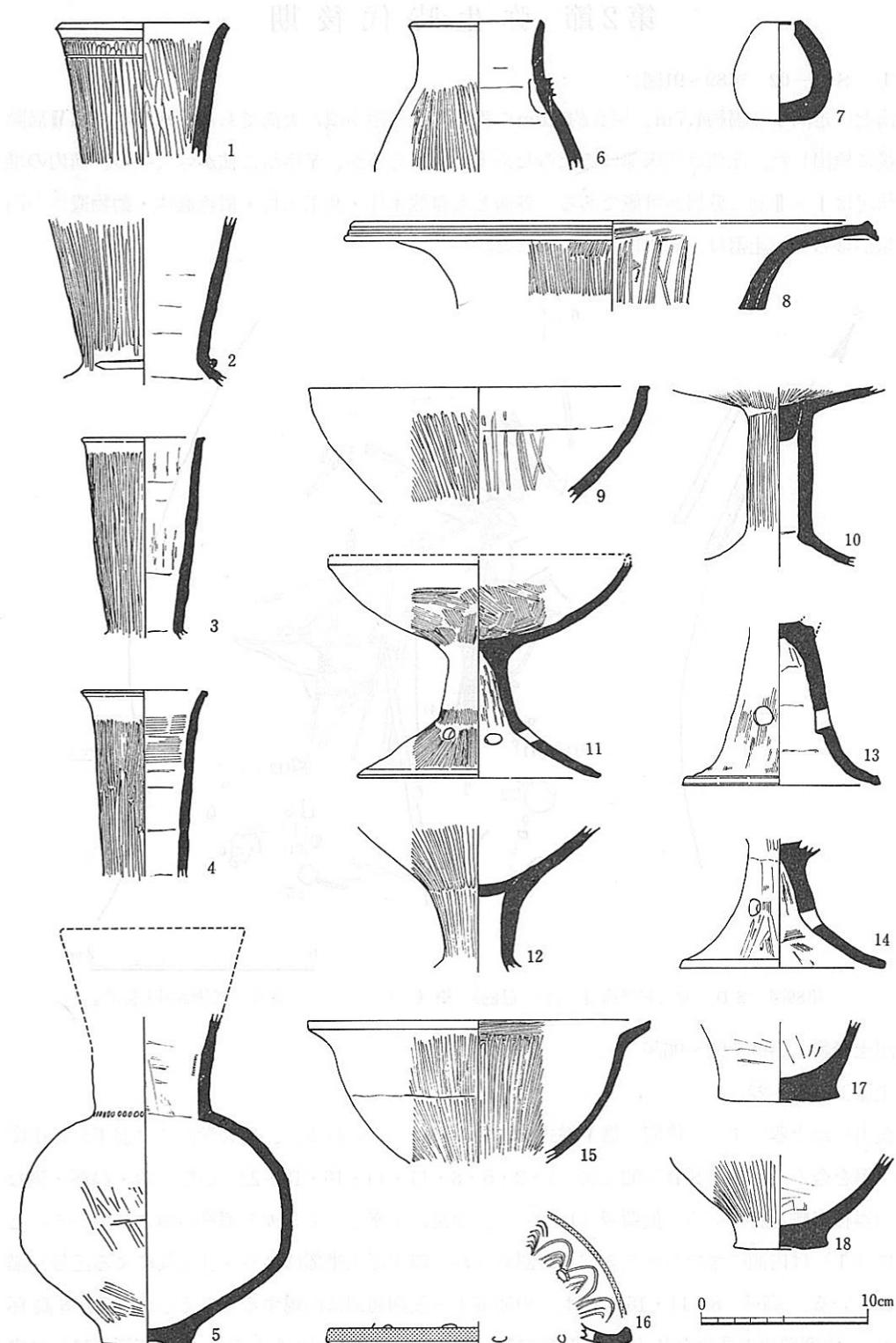


第89図 SD-02上層遺物出土状況 (1/60) ※()でくくった番号は遺物番号と同じ。

出土遺物 (第90・92~96図)

〔土器〕 (1~22)

検出した土器はすべて後期 (第Ⅶ様式) の範疇におさえられるが、型式学的には前半から中頃の土器を含んでいる。SD-02上層 (1・2・5・8・11・14~16・18~22) からは壺・高杯・甕などの器種資料を得ている。長頸壺 (1・2) は、非常に丁寧なヘラミガキ調整が施されている。特に (1) は内面にまでもヘラミガキが認められ、口頸部上半部にはヘラ状工具による記号が描かれている。高杯 (8・11・16) では、中期終末～後期初頭に出現すると考えられる装飾高杯 (8)、中期前半の系統をひく椀形高杯 (11・16) の二形式が認められる。椀形高杯 (11) は内外面ハケで調整された粗雑なつくりで、裾部の拡がりも後期前半にはみられない新しいタイプと

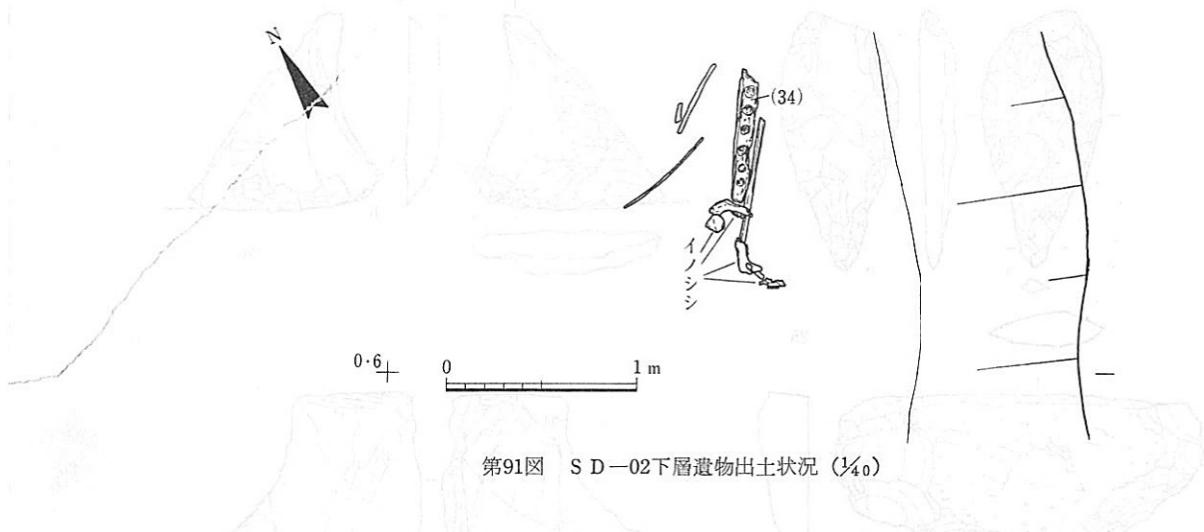


第90図 S D-02出土遺物 (1/4)

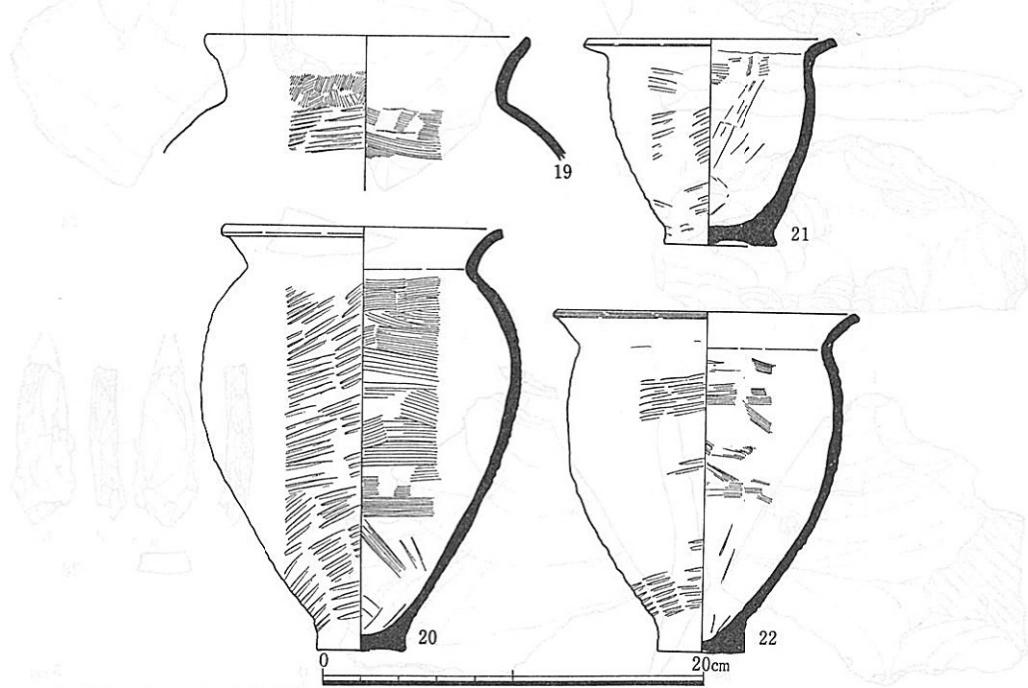
いえる。(16)は裾部端面に丹塗、裾部に波状文を施した稀しいものである。

S D-02下層 (3・4・6・7・9・10・12・13・17)

上層土器に比較して時期的にやや遅るものと思われ、細頸壺(3・4)は共に口唇部に面をもち、外反するもの(4)と外傾する型式学的に先行するもの(3)がある。水差形土器(6)は後期にあっては類例の乏しい器種で、短頸壺に把手を付けた簡素な器形である。高杯(10・12・13)は、前半に比定されるエンタシスの柱状部をもつ形式を得ている。以上、みてきたように S D-02は遅くとも後期前半の段階に掘削が行われ中頃まで經營された溝であると考えられる。



第91図 SD-02下層遺物出土状況 (1/4)

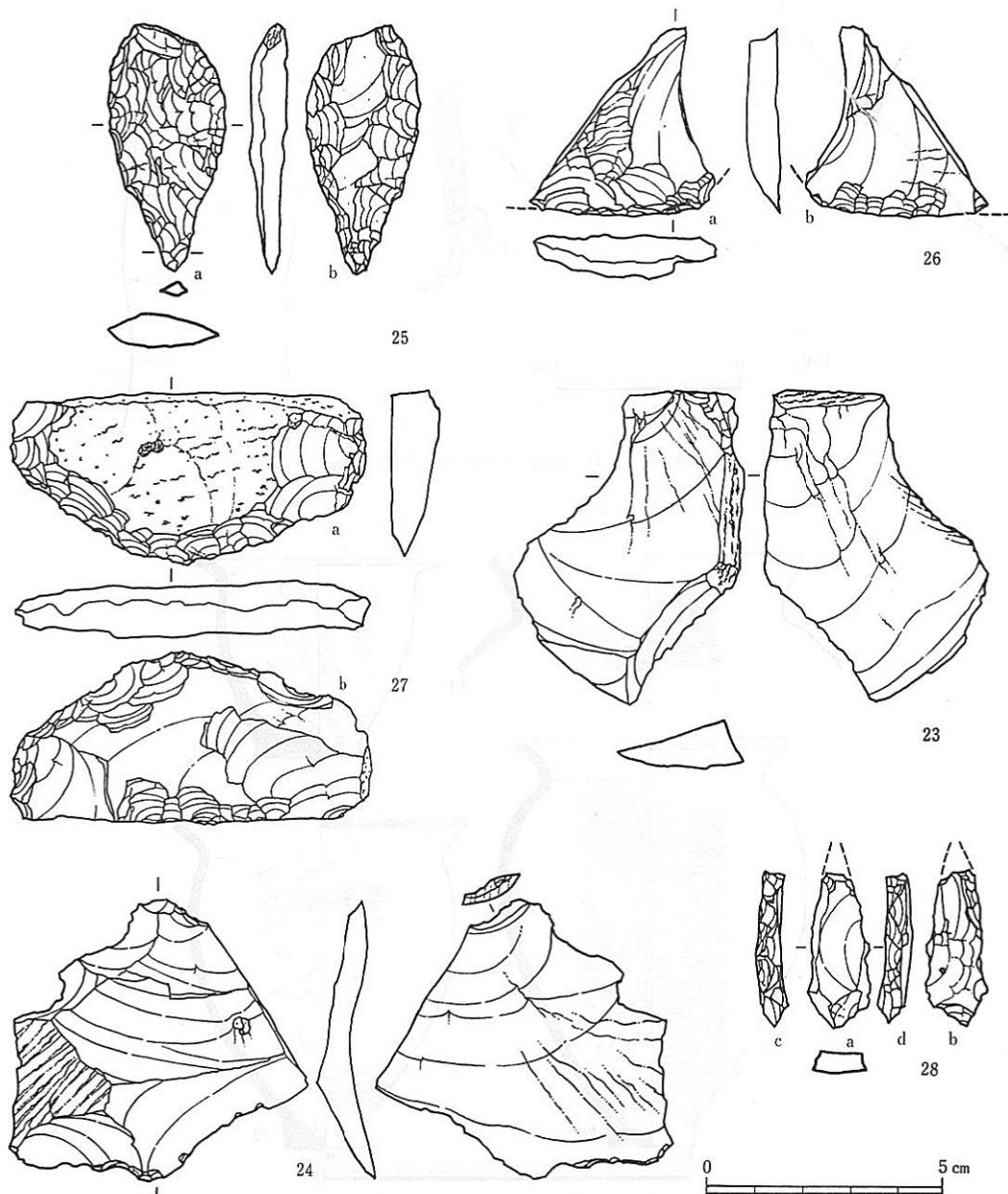


第92図 SD-02出土遺物 (1/4)

S D-02より出土した石器及び剝片は総数26点を数える。その内訳は、碎片3・剝片9・石錐2・削器8・叩石2・軽石2である。その中より代表的なものを図化した。

剝片

(23) 縦長状を呈するサヌカイトの剝片である。背面はネガティブな3面の剝離面の切り合が認められ、腹面はポジティブな剝離面となる。打面と側面は平坦な礫面となり、両者は



第93図 SD-02出土遺物 (2/3)

約90度の角度を持ち接する。腹面に残る打点はそのコーナーに位置する。

- (24) 下縁に調整剝離を施している調整ある剝片である。背面には多方向からの剝離の切り上りが認められ、腹面はポジティブな主要剝離面である。側面には平坦な礫面を残し、打面は背面方向からの加撃による。

石錐

- (25) a 及び b 面はネガティブな調整剝離面よりなり、基部には礫面を残す。

- (28) 先端部が欠損している石錐である。背面及び腹面はネガティブ及びポジティブな1面の剝離面よりなり、両側面には腹面及び背面から小刻な調整剝離を施し先端部を尖らしている。

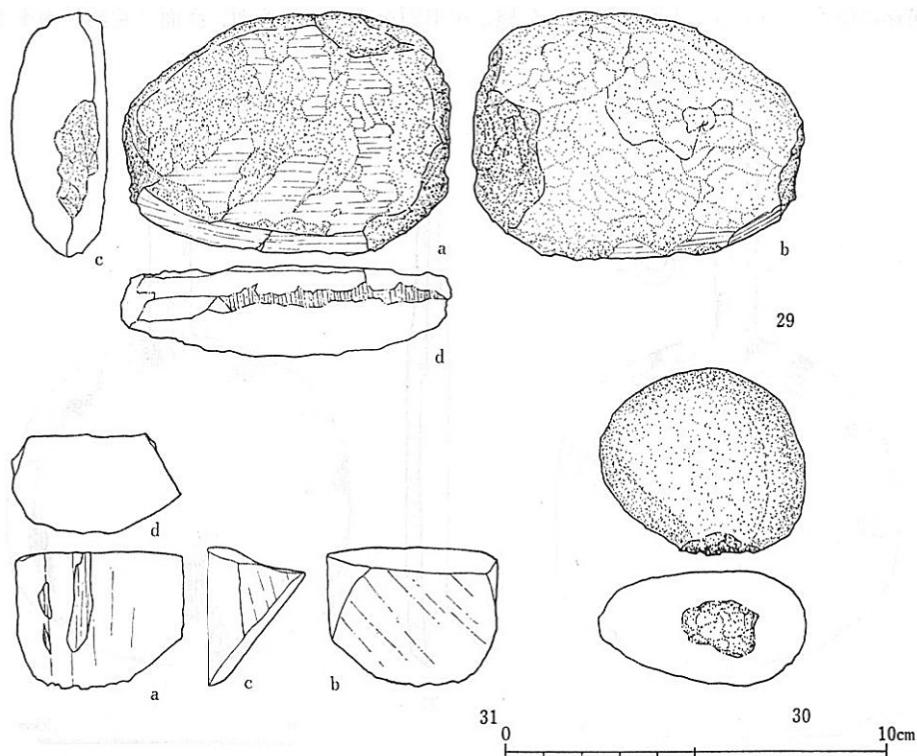
削器

- (26) 素材が剝片よりなる削器である。a・b 両下縁部に調整剝離を施して刃部としている。a 面には素材の主要剝離面であるポジティブな面を残している。

- (27) 26同様、素材が剝片よりなる削器である。b 面には素材の主要剝離面であるポジティブな剝離面をもち、a 面には礫面を残す。下縁部には、a・b 面より調整剝離を施している。

叩き石 (図 2)

- (29) 和泉砂岩製の叩き石である。d 側面及び a 面には、刃面状の研磨痕が認められ石庖丁未製品転用の叩き石である。敲打痕は、左右両端及び側面部に認められる。
(註9)



第94図 SD-02出土遺物 (1/2)

(30) 和泉砂岩の小円礫を素材とする叩き石である。打撃痕は一個所に集中している。

性格不明磨製石器

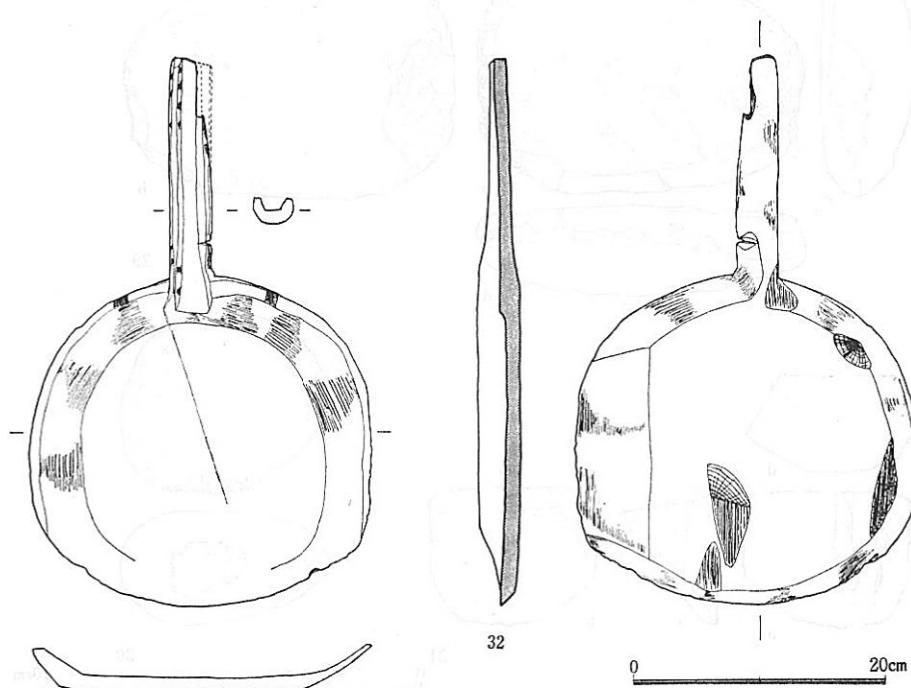
(31) 性格不明の磨製石器として、(31) があげられる。全面を磨いてあり、平坦面及び縦曲面よりなる。石質はホルンフェルスである。

〔木製品〕 (32~34)

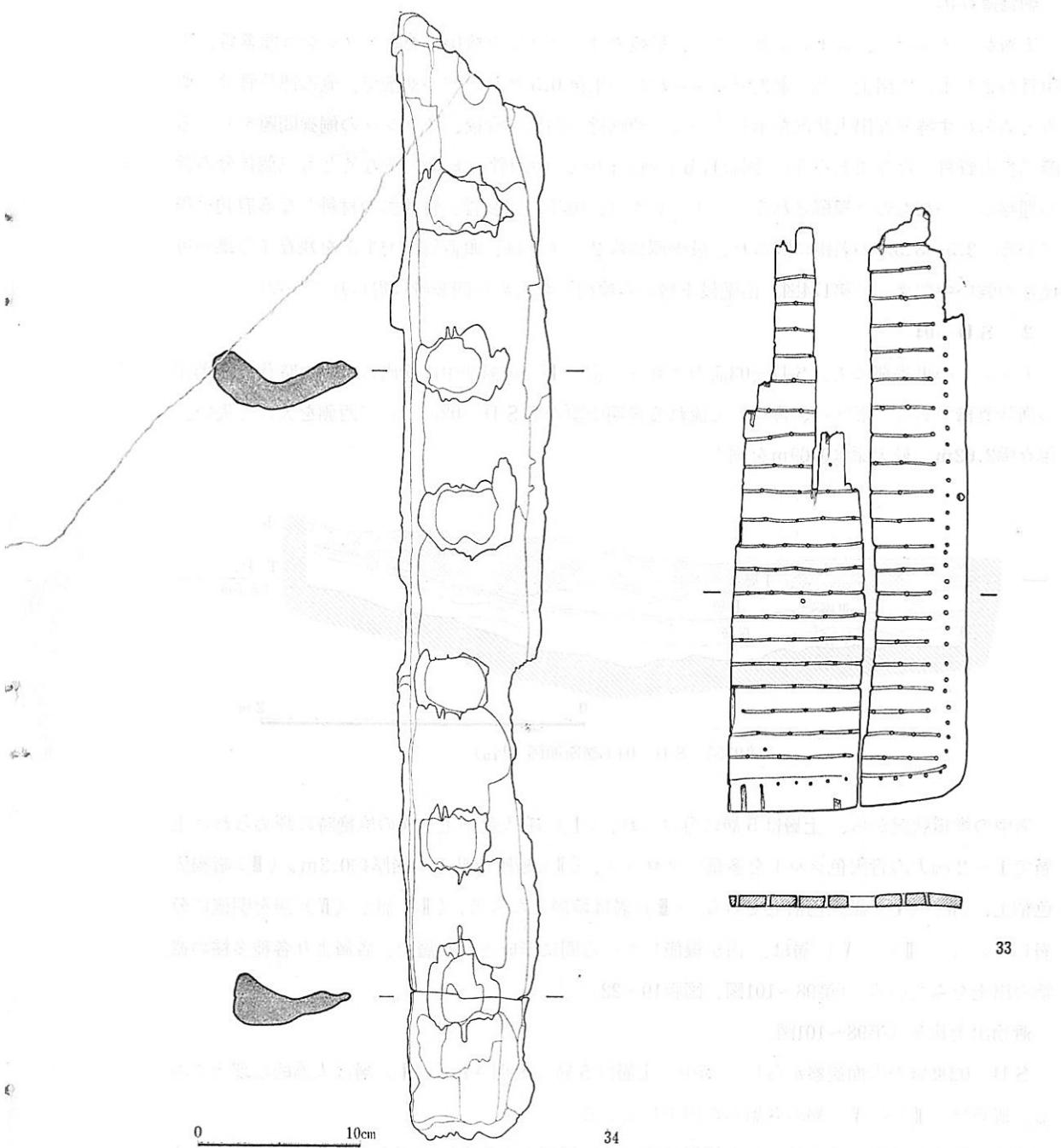
上層から多量の自然木、加工木材とともにフライパン状木製品 (32) を検出している。下面を上にして出土した。形状から類例をみない着柄鋤である。全長43cm、身幅27cmを測り、上面は凹面をなし、下面是フラットで側縁に面取りを施す。身には断面半円形を呈する長さ17.5cm、幅3.3cmの着柄軸を作り出している。着柄軸の上面には、柄を装着するためにU字状の着柄溝が穿かれている。「池上」のB1型式に相当するが、柄孔を有しない点から時期的にやや後出のものと思われる。

下層からは、有孔板形木製品 (33) と火鑽具 (34) が検出されている。前者は断片的な資料でありその全容は知り得ないが、径1mmの孔を規則的に穿ち、その孔に紐をとおしていたものである。用途不明であるが形態から装飾性の色濃い木製品と考えている。O・5地区の中央にて出土した。SD-03からも類似品の出土をみている。(第54図参照)

後者は形状から、発火具の一つである火鑽臼と思われる。両端を一部欠損するが長さ約70cm、最大幅8.9cm、最大厚約3.6cmを測る大形品で、今までのところ例を知らない最大のものであり、保存は良好といえる。上面は粗加工を施し平坦面を成すが、側面、底面は荒割りのままで粗



第95図 SD-02出土遺物(16)



第96図 SD-02出土遺物(24)

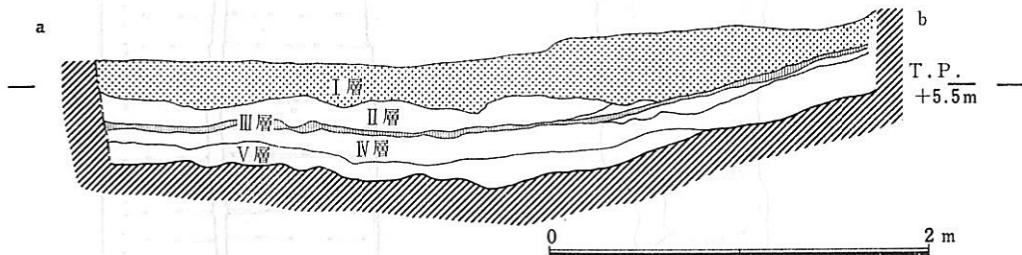
雑なつくりである。上面に断面ゆるやかなU字状を呈する貫通しない径5×4cm程の楕円形の穴を約6cm間隔に6ヶ所穿ち、各々に発火の際の焼痕が認められ、周辺は著しく炭化している。

〔動物遺存体〕

下層からイノシシ、ニホンジカ、イヌ、貝類ではハマグリを検出した。イノシシは頭蓋骨、下頬骨がまとまって出土した。永久歯のみられない生後0.5ヶ月以前の幼獣で、他の部分骨は一切みとめられず特異な出土状況を示している。幼獣骨の出土は今後、イノシシの飼養問題を考える際に参考資料となるであろう。(図版17b) 他に臼歯、中節骨があり、少なくとも三個体分の骨が埋存していたものと理解される。ニホンジカは、歯牙、四肢骨、骨角器の材料となる鹿角を得ている。2.5~3.5才の若獣に限られ、最少個体数2。イヌは、頭蓋骨の前半部を残存する雄の可能性の強い中型犬。(第174図) 南壁最下層から検出したためか四肢骨は得られていない。

2) SD-04

トレンチの東半部にて、SD-03溝のブロック土(I)層掘削中に検出した弥生時代後期前半の溝状遺構である。形状は、併行して流れる後期中頃の溝SD-02によって西側を大きく失い、現存幅2.62m、最大深は0.69mを測る。



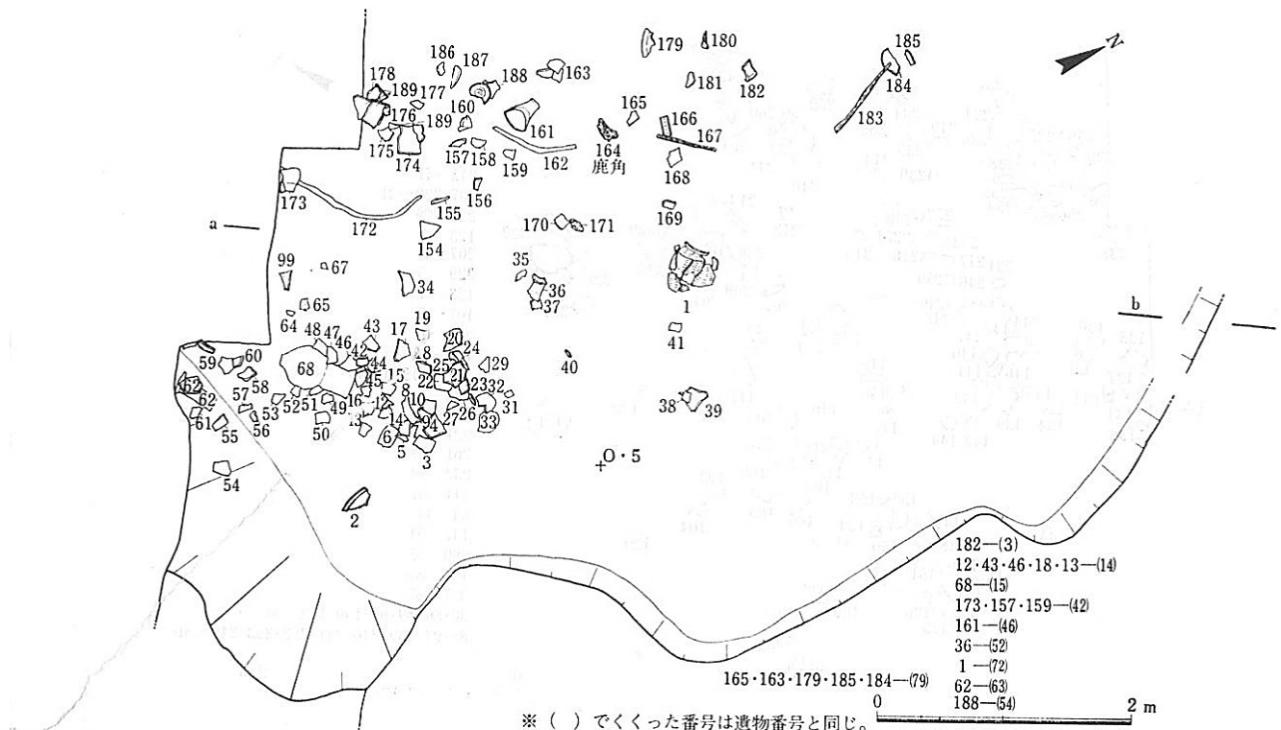
第97図 SD-04土層断面図 (1/40)

溝中の堆積状況から、土層は5層に分けられ、(I) 暗灰色粘土一溝の廃絶時に埋められた土層で1~2cm大の青灰色シルトを多量にブロック、(II) 暗灰色粘土一層厚約0.2m、(III) 暗褐灰色粘土、(IV)(V) 黒灰色粘土である。(III)層は鍵層となって、(II)層と(IV)層を明確に分層している。(II)~(V)層は、溝が機能している間に形成された層で、各層より各種多様の遺物の出土をみている。(第98~101図、図版19~22)

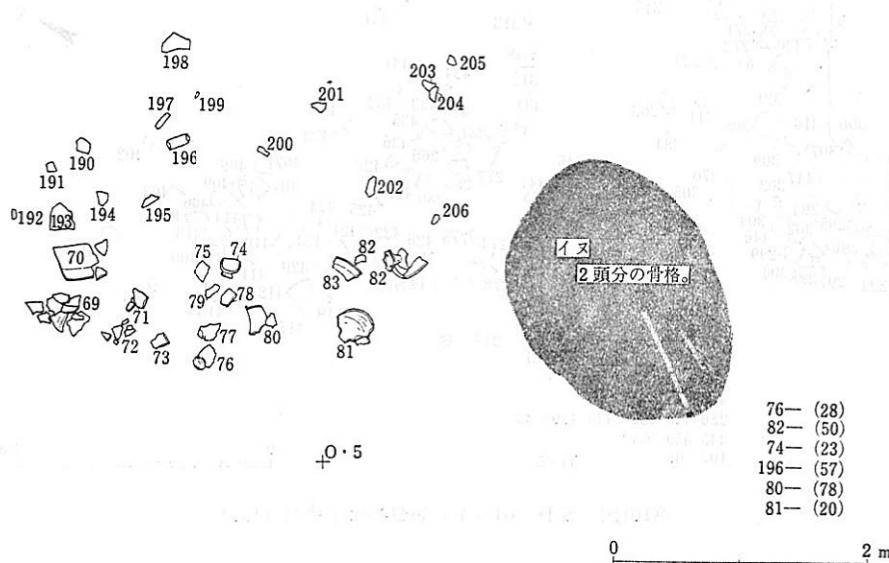
遺物出土状況 (第98~101図)

SD-02東肩の表面観察からして溝中の土層は5層に大別され、(I)層は人為的な埋土である。遺物は(II)~(V)層の各層から出土している。

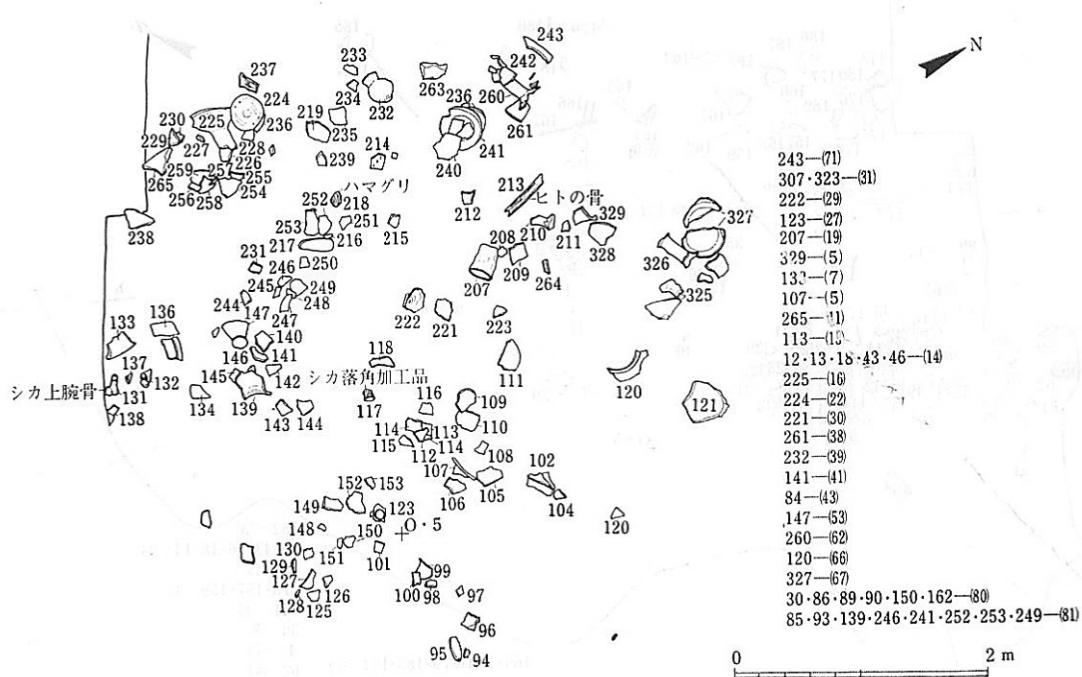
遺物の取りあげは、その拡がりを把握するために層ごとに行ない、できる限り、図面の中に入れるようこころがけた。その結果、1つの層に包含されている土器はその層で完結し上下層にまたがって検出されることはない。(接合資料の検討から)。また、(V)層の南ではニホンジカの部骨が集中して検出された。



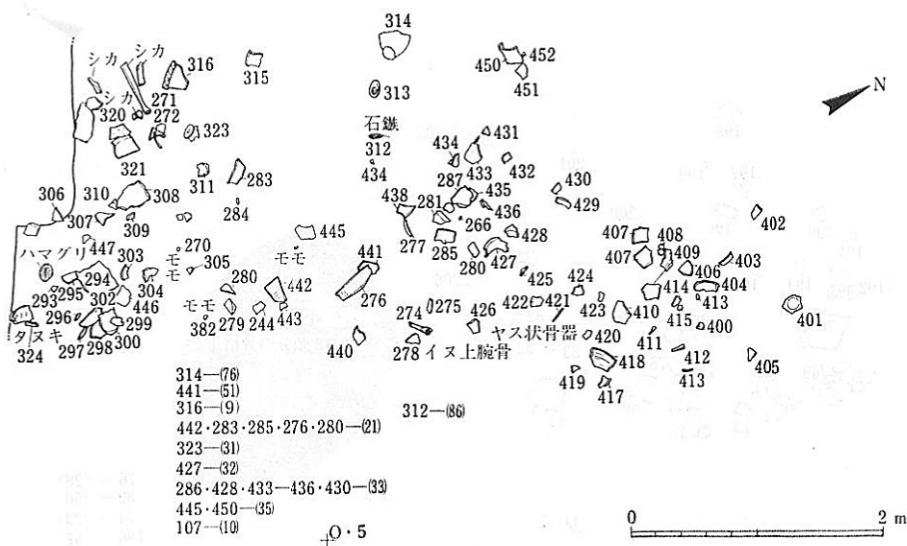
第98図 SD-04 (II) 層遺物出土状況 (1/30)



第99図 SD-04 (III) 層遺物出土状況 (1/30)



第100図 S D - 04 (IV) 層遺物出土状況 (1/50)



第101図 S D - 04 (V) 層遺物出土状況 (1/50)

出土遺物（第102～108図）

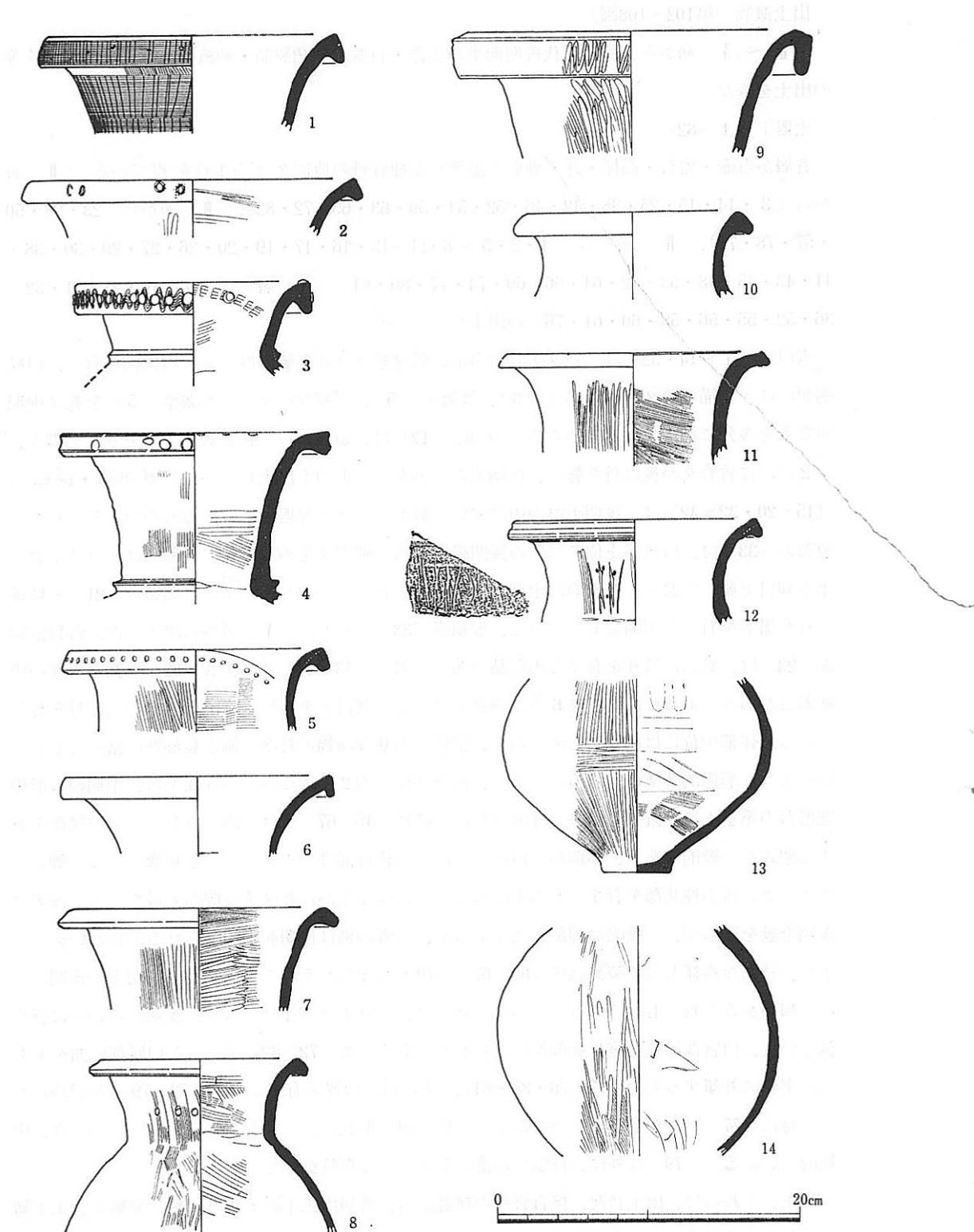
(Ⅱ)～(Ⅳ)層から、弥生時代後期前半の土器・石器・骨角製品・動植物遺存体・自然木片等の出土をみた。

〔土器〕(1～82)

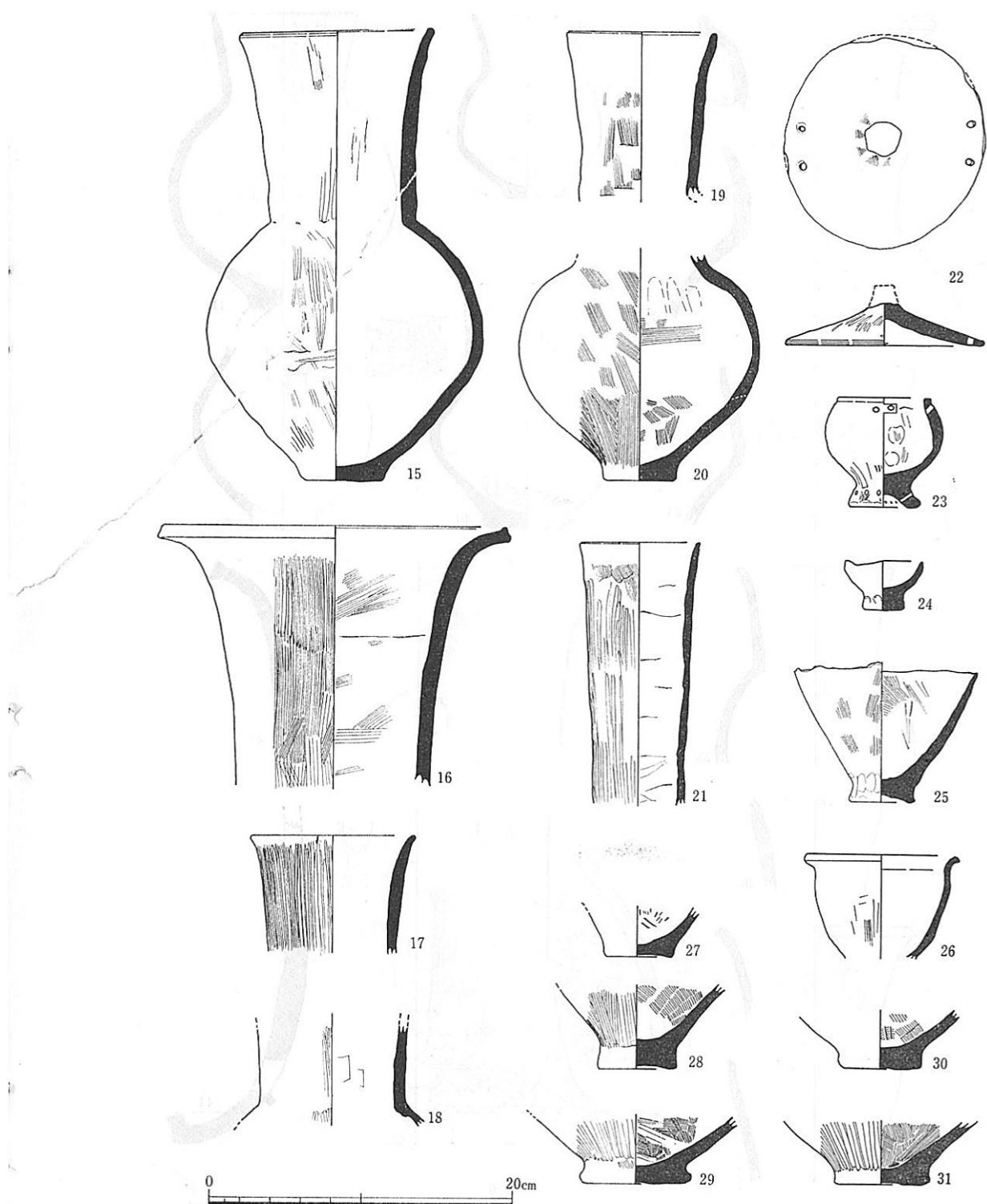
各層から壺・器台・高杯・鉢・甕形土器等の器種資料の他にタコ壺1点を得ている。(Ⅱ)層から(3・14・15・25・38・42・46・52・54・59・63・65・72・82)、(Ⅲ)層から(23・28・50・57・78・79)、(Ⅳ)層から(1・2・5～8・11～13・16・17・19・20・26・27・29・30・38～41・43・45・48・53・62・64・66～69・74・77・80・81)、(Ⅴ)層から(4・10・21・31・32～36・52・55・56・58・60・61・76)の出土をみている。

広口壺(1～14・32)は、外反する口頸部に肥厚垂下させた装飾性の強い口縁部を有し、口縁端面には、櫛描波状文+円形浮文(3)、竹管文(5)、丁寧なヘラミガキ調整(5)を施す中期的要素を多分に備えているといえる。反面、(12)は、頸部にヘラ状工具による記号文を描き、(2)には竹管文の後に丹を施し、後期的な装飾をもつものも出土している。短頸壺・長頸壺(15～20・32～42)は、後期土器の中において最もシンプルな器形を有するものである。しかし短頸壺(33)は、口縁部上位に二条の擬凹線文・円形刺突文をめぐらし、頸部にはヘラ状工具による刻目を飾っており、形態的に中期後半の特徴を有しているといえよう。^(註13)細頸壺(21)も精練された器形を有し中期的であるといえ、短頸壺(33)とともに(Ⅴ)層から出土した。台付無頸壺(23)は、脚台に透孔を有する小形品である。器台(43・44)では、底径32cmを測る大形の中空器台がある。裾部には沈線文6条、櫛状工具による刻目文を綾杉状に配し、その上に丹を施している。体部中位には沈線文をめぐらし、縦位に約0.5cm幅の丹塗を飾る装飾性に富んだものといえよう。形態的特徴はもちろんのこと、沈線文様、約2cm大の透孔の存在から、中期の大形中空器台の系譜上に位置するものと理解される。高杯(45～67)では、直に立ち上がる口縁部を有する型式が一般的であり、杯部から口縁にかけての移行部はやや張ることを特徴とする。脚部ではエンタシスの柱状部を有するものを中心として、ゆるやかに外反する脚部も得ている。後者は後期全般を通じて、一般的な脚部形式であるが、前者の例は後期前半に限られる形式といえる。また、特異な高杯として装飾高杯(65～67)の出土が知られる。この形式は、中期末～後期にかけて類例がみられるものである。さらに(48)は、プロポーションからして後期においては稀少例といえ、口唇部に丹を施し装飾性に富むものである。甕(72～82)はすべて口唇部に面をもちくの字状に外傾するもの(77・78・80・81)、受け口状口縁を有するもの(72・79)が認められる。特に(77)は、粘土紐張りつけによって広い面を形成し、二条の凹線文を施している点、中期的といえる。(79)以外は、長胴形の器形をもつことを特徴としている。

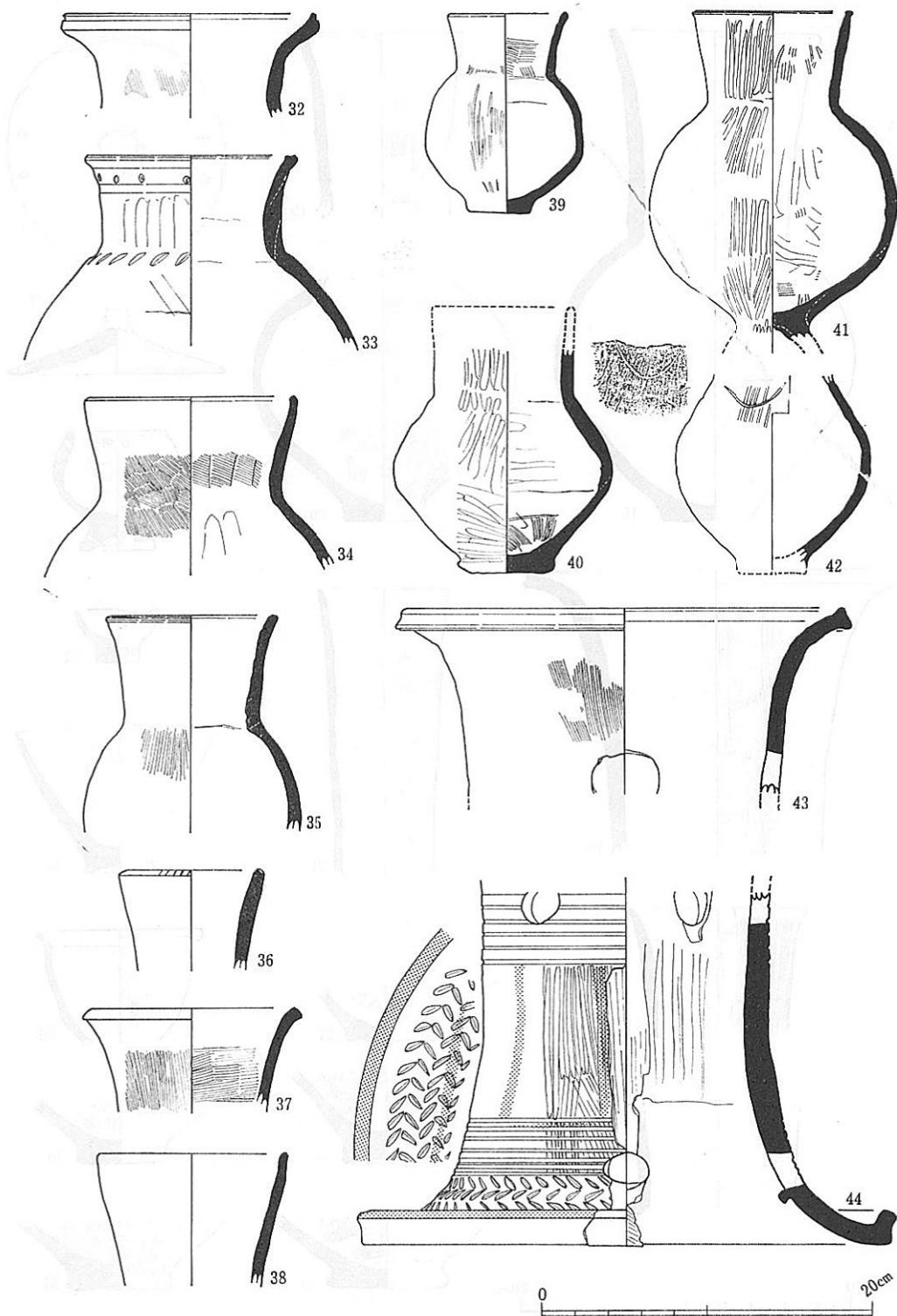
以上、これらは、出土状況、接合資料の検討から、各層出土土器は各々の層で完結し、上下層にまたがって接合される土器片はみられなかった。したがって、(I)～(V)層出土土器は後期前半の中において各々短い時間帯をもつものであろうと理解された。



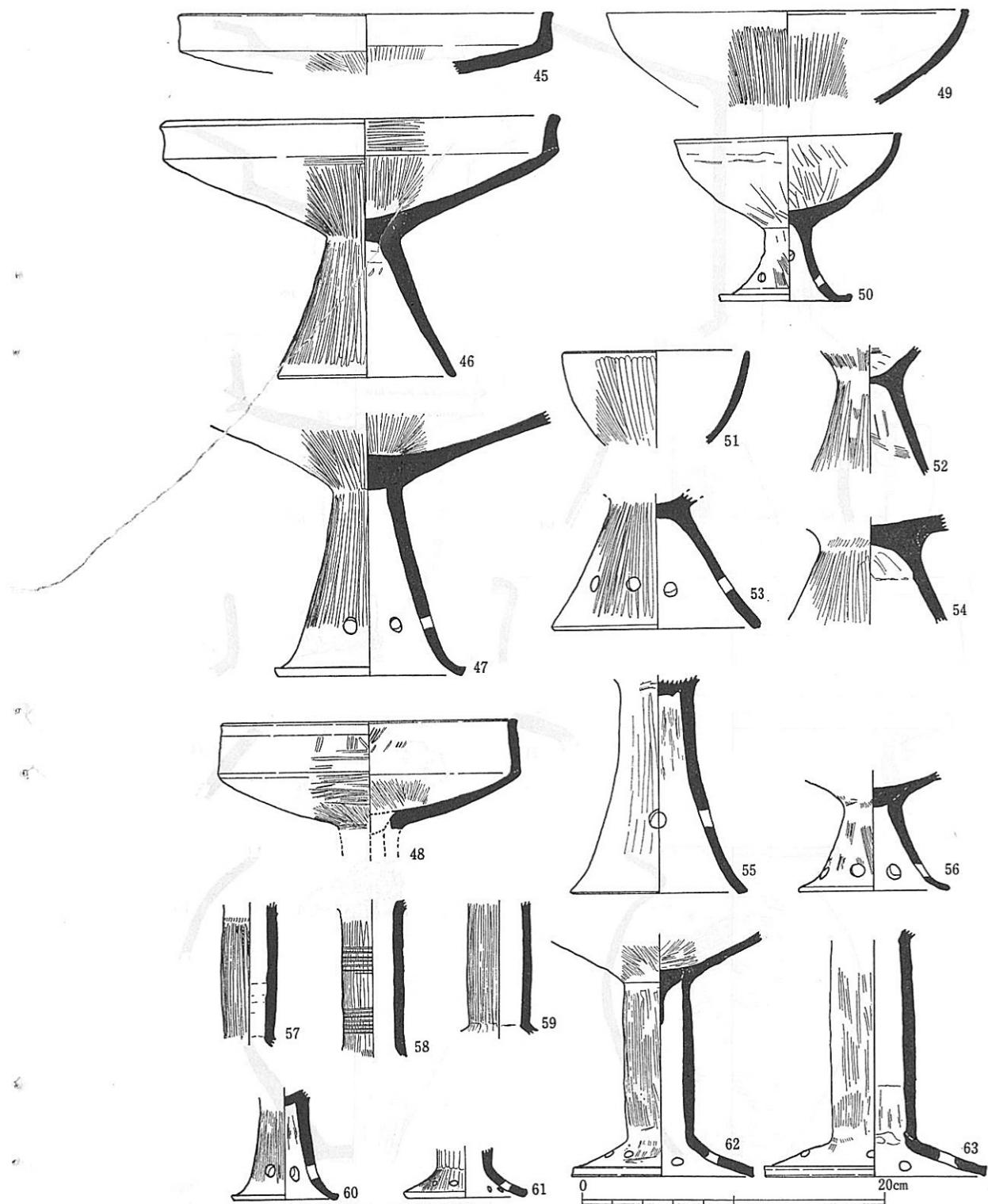
第102図 SD-04出土遺物 (14)



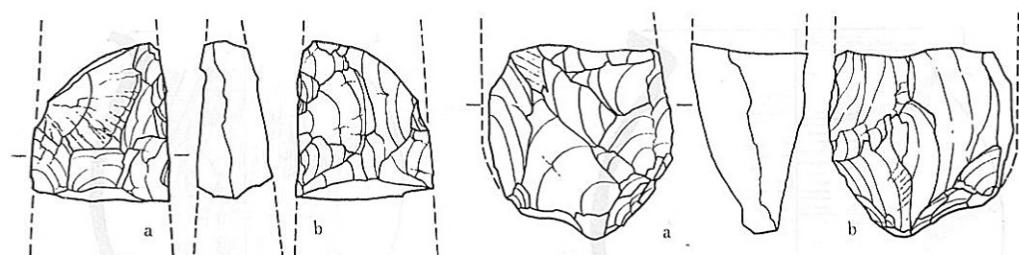
第103図 SD-04出土遺物 (1/4)



第104図 S D-04出土遺物 (3/4)

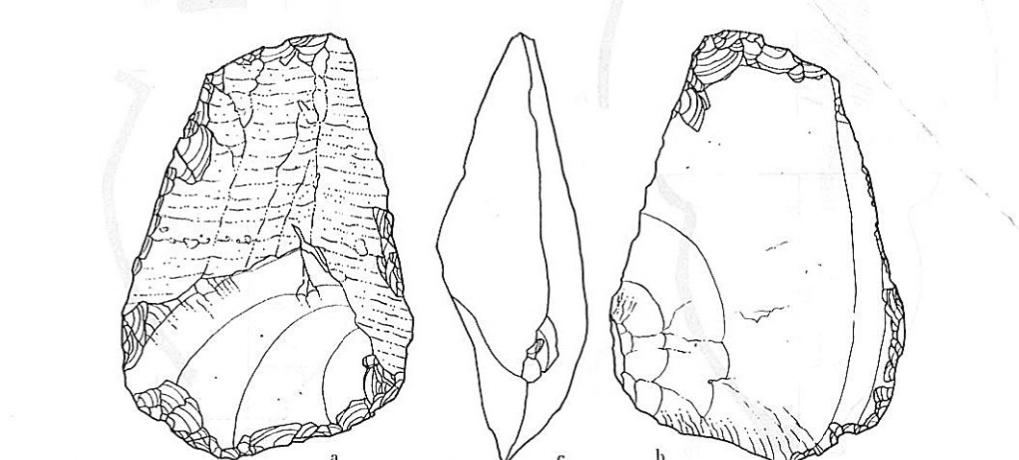


第105図 S D-04出土遺物 (1/4)



83

84



a

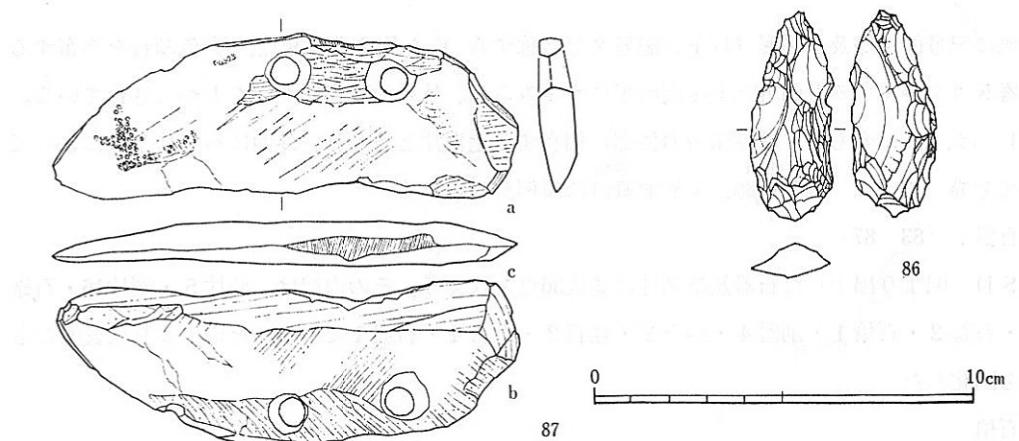
c

b

10cm

85

0



b

c

87

10cm

86

第108図 SD-04出土遺物（上2/3、下1/2）

るが、完成品の調整に認められる微細な押圧剥離は認められず、最終調整の段階で欠損した石槍と考えられる。

(84) かなり肉厚な石槍未製品の基部である。a・b両面に側縁部からの粗雑な調整剥離を全面に施している。

搔器

(85) 剥片を素材とした搔器である。側縁部にも微細な剥離痕を認めることができ、削器としても使用していただろう。背面は礫面・ネガティブな剥離面・調整剥離よりなり、腹面はポジティブな剥離面及び調整剥離よりなる。側縁部にはネガティブな平坦打面を残す。剥離の方向より連続的な剥離作業よりなる剥片を素材としたものであろう。

石鎌

(86) 粗雑な調整を施した石鎌の未製品である。側縁部より粗雑な調整剥離を施し、また剥離の中には部分的に階段状剥離を呈するものがある。

石庖丁

(87) 直線状にのびる片刃の刃部をもち、肩部は外縁に研磨痕が著しい。体部には磨滅痕が頭著であり、a面には小さな虫喰い状の小穴が多数認められる。^(註8) b面の刃面には研磨痕の切り合^(註9)いが著しく、また主軸に直交するような使用痕が認められる。石質は緑色泥片岩である。

〔動物遺存体〕

ほとんど(Ⅲ)～(Ⅶ)層から出土したもので、イノシシ・ニホンジカ・イヌ・タヌキ・ヒト等の部骨を得ている。

イノシシ部骨の出土数は少なく、歯牙・後肢骨3点を得ているにすぎない。1～2才の若獣に限られ最少個体数2。

ニホンジカは、骨角製品の材料となる鹿角4点の他に多くの椎骨・四肢骨等の部骨の出土をみている。頭蓋骨は1点も得られなかった。これらの骨は(Ⅳ)層中から集中して得られたもの(図版21b)で、出土状況から判断して解体処理後、一括して廃棄されたものと理解された。また、同一部骨が2つ以上みられないことから、同一個体に属する可能性が強い。最少個体数1

+ α。



第109図 イヌ出土状況(北から)

イヌは、(Ⅲ)層から2個体分の骨格を検出している(第109図)。保存は良好といえず、かろうじて形を保っている。SD-03からもイヌ2個体分の骨が出土しており、中期から後期にかけ

て同じ儀礼が行なわれていたのは、興味深いものといえよう。また、(IV)層からは右肩甲骨、(V)層より右上腕骨の出土をみた。(図版21a) 上腕骨は、長谷部分類による中型犬の中でも大きいタイプである。肩甲骨も同タイプである。出土地点不明であるが、長さ26.4mmを計測する中節骨1点を得ている。最小個体数4。

タヌキは、(V)層の南壁際で右下顎骨を得ている。P₂より前、下顎枝部分を失う標本である。(第101図324)

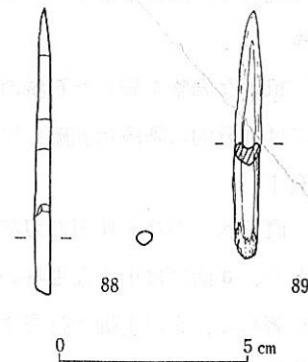
ヒトは、(IV)層から、大腿骨の破片を検出している。(第100図213)

〔骨角製品〕 (88・89)

骨針(88)は、基部は欠けているものの、長さ75.0mm、厚さ2.5mmを計測する棒状の製品である。表面はよく研磨され、精巧なつくりといえる。

ヤス状骨器(89)は、ニホンジカの中足、若しくは中手骨を利用したもので、基部は一部欠けるが長さ65mm、幅6.5mmを測る。(V)層より出土。

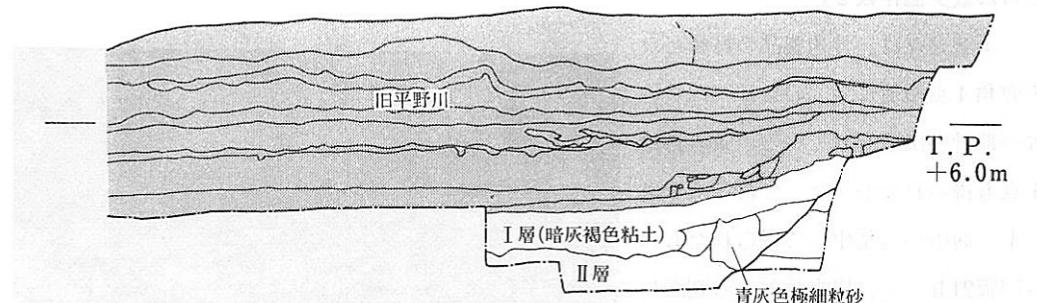
骨角製釣針(図版68b) (IV)層から出土。一部破損するものの形状をよく保存している。表面にはていねいな調整が施されている。



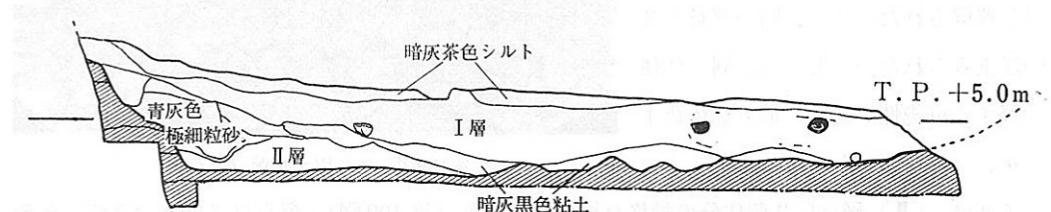
第110図 SD-04出土遺物(32)

3) SD-06

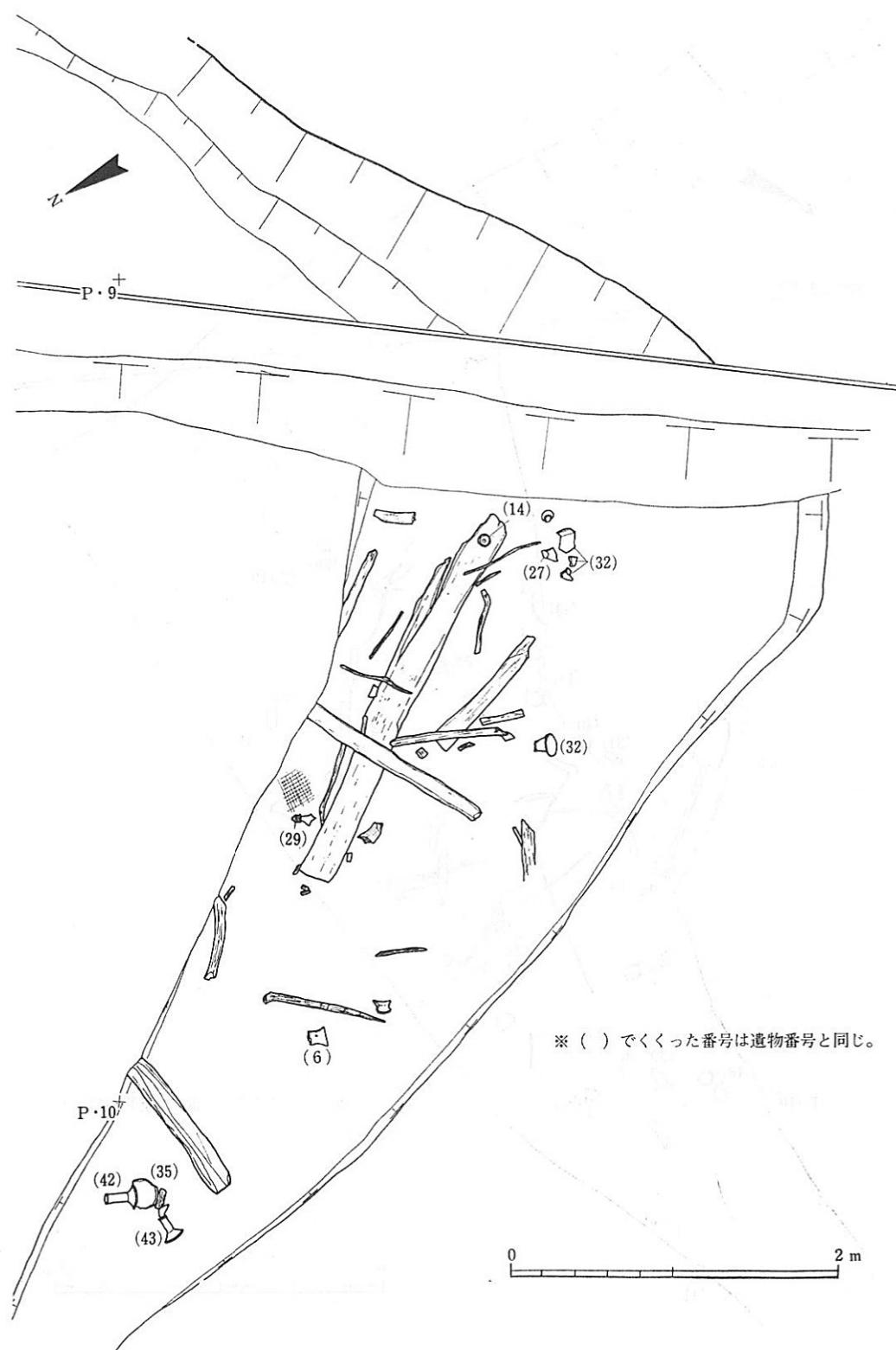
KM-H1・H2にまがって検出した北東一南西走する弥生時代後期初頭の大溝である。上部



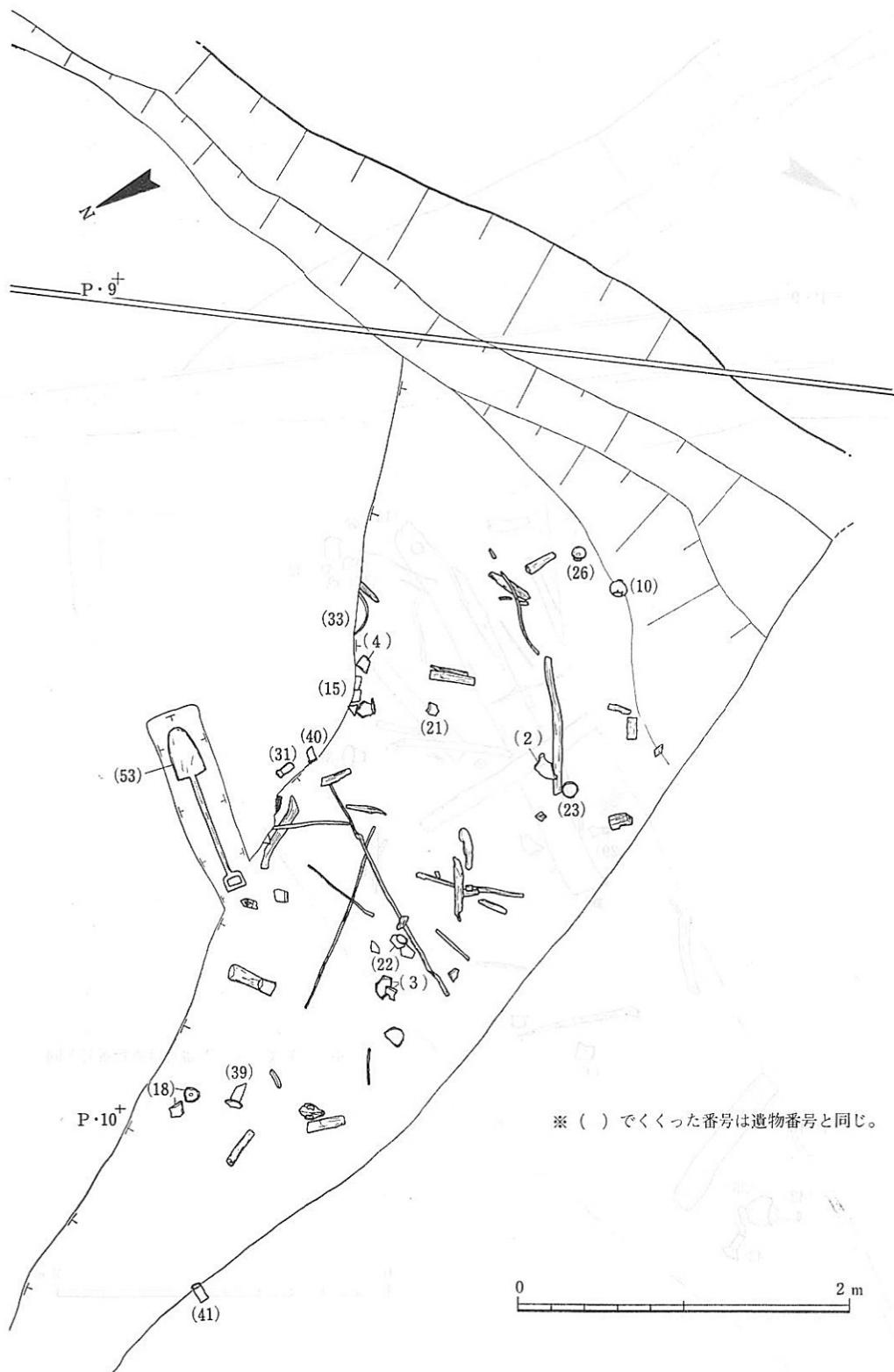
第111図 KM-H2 東側土層断面図(360)



第112図 SD-06 土層断面図(南)(360)



第113図 SD-06 (I a) 層遺物出土状況 (1/40)



第114図 S D-06 (I b) 層遺物出土状況 (1/40)

は旧平野川の削平を受け西肩を失なうが、南セクション（第112図）の底ラインのあがりから幅6.0m以上と推定され、深さは約1.3mを測る。

溝中の堆積状態から、覆土は2層に分層できた。（I）暗灰褐色粘土、で有機物を多量に含む、（II）灰黒色粘土+青灰色シルトのmix層である。なお、（I）層の上部凹みに基本層序（第Ⅶ層）に相当する灰色シルト・灰色極細砂が堆積し、廃絶時期が限定される。

（II）層は、鍬・鋤を使って掘削した際、掘り残した土の再堆積によって形成された土層で、遺物は含んでいない。遺物は層厚約30cmの（I）層中から多量に出土している。調査は（I）層を便宜的にa、bの2層に分けて遺物の取り上げを行なっている。（第113・114図）

出土遺物（第115～123図）

I（a・b層）から多量の自然木・加工木材片に間在して、豊富な器種資料を誇る第Ⅶ様式（後期）初頭の土器、石器・木製品・動植物遺存体等を得ている。出土状況から高杯は、杯部、脚部が接して出土するわりに別個体であり、杯部、脚部の単独で出土し、出土量もきわだつてのことからして、頻繁に使用・廃棄の行なわれたことを暗示しているものと思われる。

〔土器〕（1～45）

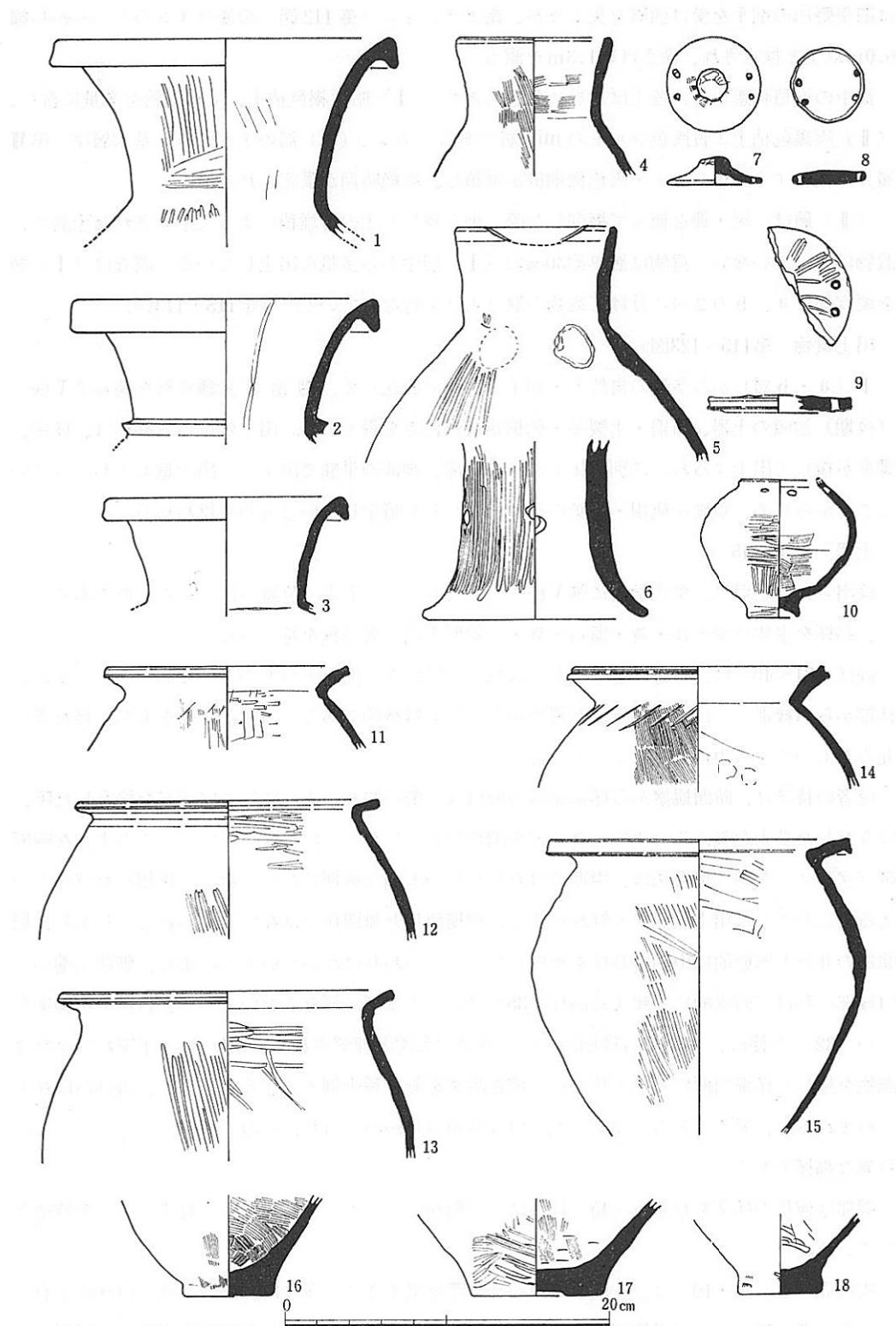
検出された土器は、型式学的に第Ⅶ様式の中でももっとも古く位置づけられる一群であるといえ、高杯を主体に壺・鉢・蓋・器台・甕・水差形土器の各器種を得ている。

高杯（31～45）は、杯部の立ち上がりは低く、口唇部に面をもつものが一般的である。また、杯部から口縁部にかけての移行部が緩やかなことも特徴的である。口唇部に面をもち、移行部に丸みをもつことは中期的であるといえる。

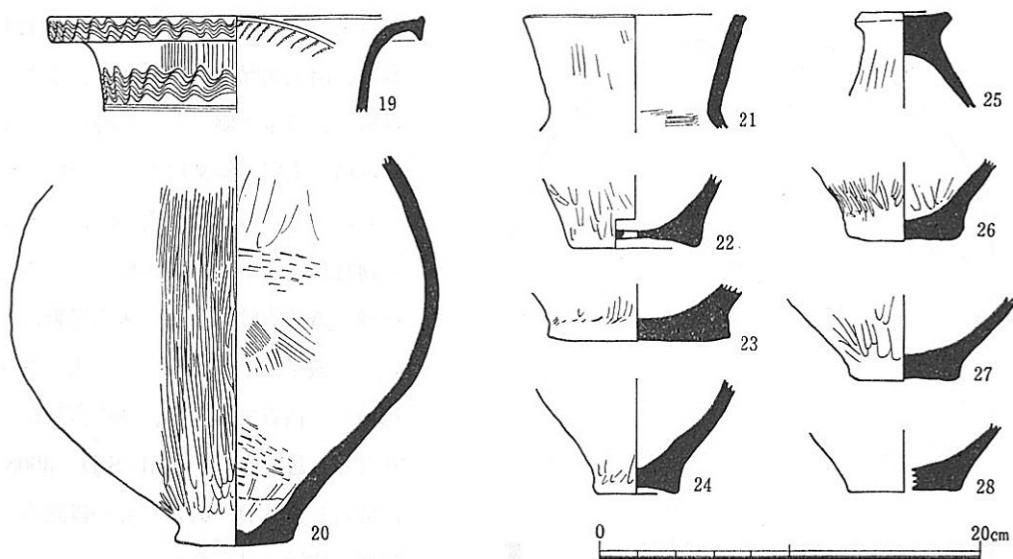
後者の特徴は、断面観察から杯部先端の擬口縁に覆い被せるようにして口縁部を接合した際、はみだした粘土を整えるためにヘラミガキ調整を施こしたことに基づいている。このような時間帯（プレス）をおく接合法は、中期にはみられないもので後期になって新しく採用した技法といえる。このことは出土状況にも触れたように頻繁使用と無関係ではないと思われる。しかし、屈曲部の丸みも形態的に中期の高杯を模倣したことには変わりはないといえる。また、脚部上端から口縁部にかけて直線的に外傾する高杯（38）は、今までに例をみないもので、台状中空脚部をもつ（32）と共に、中期から後期にいたる過渡的形態と理解される。（31）は、丁寧なヘラ磨き調整を施した杯部内面にヒトデ状のヘラ描き暗文を施す稀少例といえる。さらに、器高が口径をうわまわる点、異色である。（36）は、口縁内面に丹が認められ、そのプロポーションとともに特異な高杯である。

脚部は椀状の杯部を有する（45）以外は、中期的なエンタシスの柱状部を有することを特徴としている。

広口壺（1～3・19）は、外反する口頸部に肥厚垂下させた多分に加飾性の強い口縁部を有している。壺（19）は、口縁端部と頸部に櫛描波状文・直線文を飾り、中期的様相を示す好例といえる。後期前半に普遍的に存在する長頸壺は、皆無である。短頸壺・水差形土器（4・5・21）

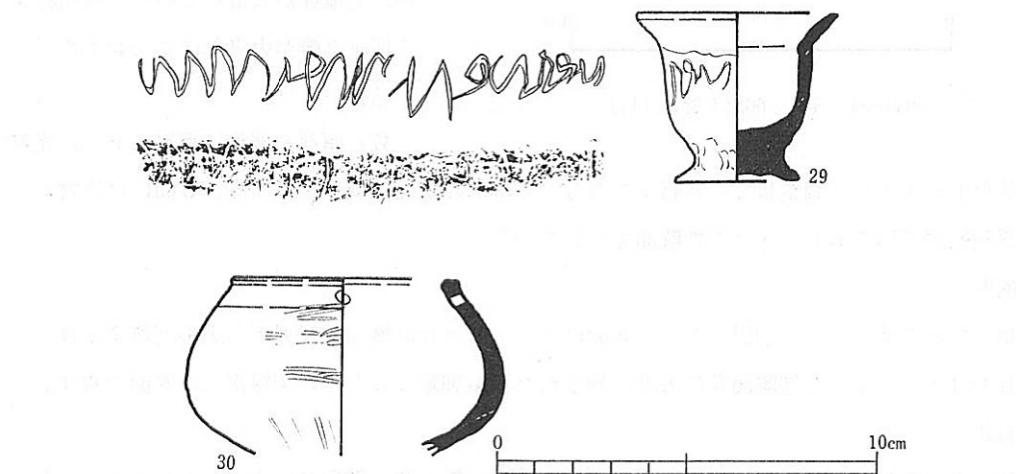


第115図 SD-06出土遺物 (14)

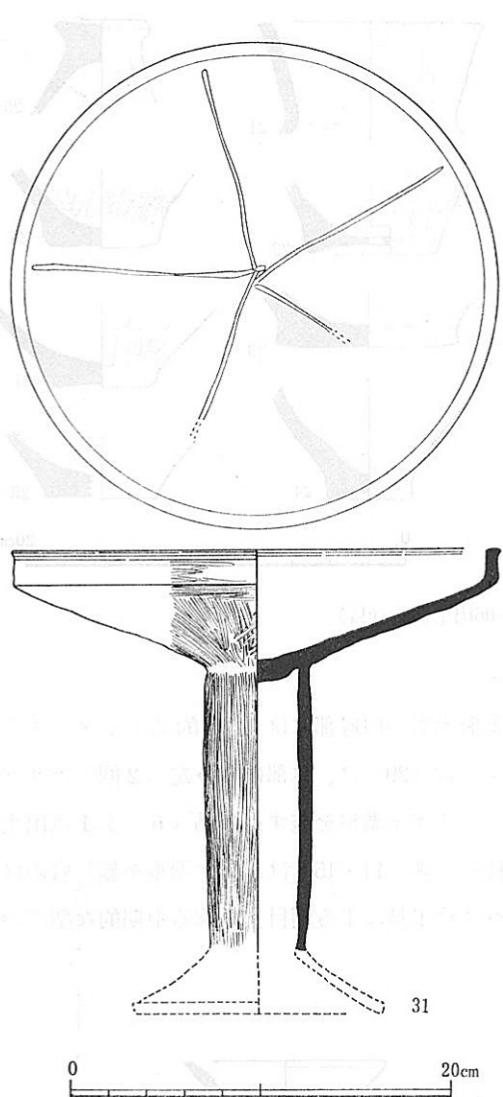


第116図 SD-06出土遺物 (1/4)

は、文様を有しないシンプルな器形を呈し、水差形土器の口縁部には中期的なルジメントとして、指おさえをする為のえぐりを持つ。ミニチュア鉢（29）は、体部に右→左へ2回ジグザグ文様をつくる暗号のようにもみえる。器台では、ヘラミガキ調整を施す小形品（6）が1点出土している。甕（11～15）は、すべて口唇部に面を持つ。甕（14・15）は、ハケ調整を施し肩のはるタイプで、（14）は口縁端部に凹線文、肩部にヘラ状工具による刻目文を飾る中期的な型式のも



第117図 SD-06出土遺物 (3/2)



第118図 SD-06出土遺物 (14)

部を尖らすように調整している石錐である。先端部の断面は菱形を呈する。b面には素材の主要剝離面であるポジティブな剝離面を残している。

削器

(48) 削片を素材とした削器である。a面はネガティブな剝離面及び刃部の調整剝離よりなり、b面はポジティブな剝離面及び刃部に施された調整剝離よりなる。側縁部には礫面を残す。

石鎌

(49) 石鎌未製品の基部である。a面は粗雑な調整剝離を施し階段状に止まるものもある。b面は礫面と礫面を切り込む調整剝離よりなる。

のである。

以上みてきたようにSD-06出土土器は、出土状況から判断して、土器の堆積は、滯水状態であった時に、粘土の堆積と土器の廃棄によって形成されたものと考えられ、型式学的にも廃棄の同時代性を示す共伴資料といえる。今後、亀井遺跡を含めた河内平野において、編年作業を進めていく上で後期初頭の一括資料として、基準資料になり得ると思われる。KM(SD-3008)に併行し、SD-04よりも一段階古い(註18)時期に位置づけられる。

〔石器〕 (46~51)

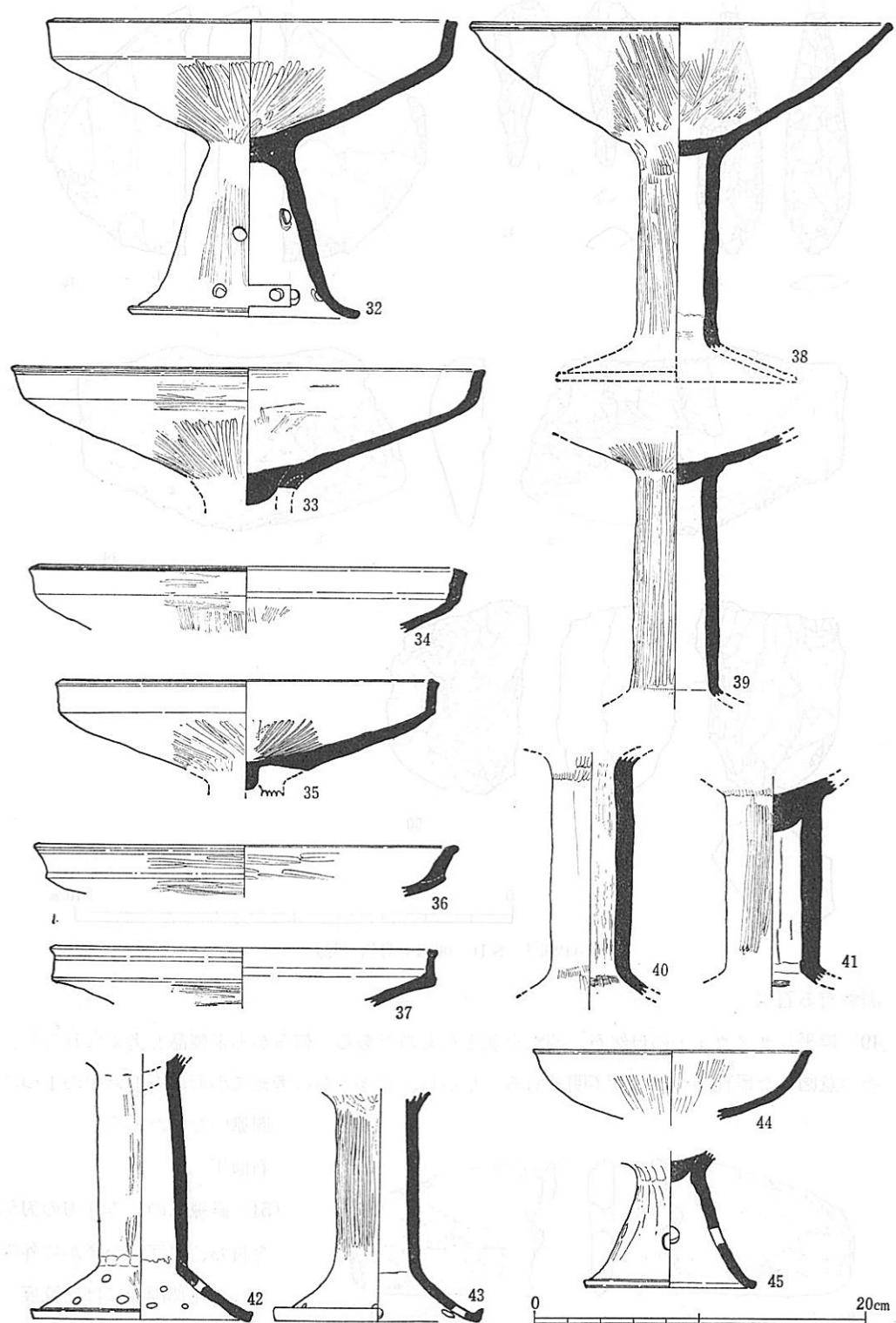
SD-06より出土した石器及び剝片は総数39点を数える。その内訳は、碎片15・剝片14・石庖丁1・削器2・石槌1・叩石3・砥石2・石皿1である。その中より代表的なものを図化した。

石鎌

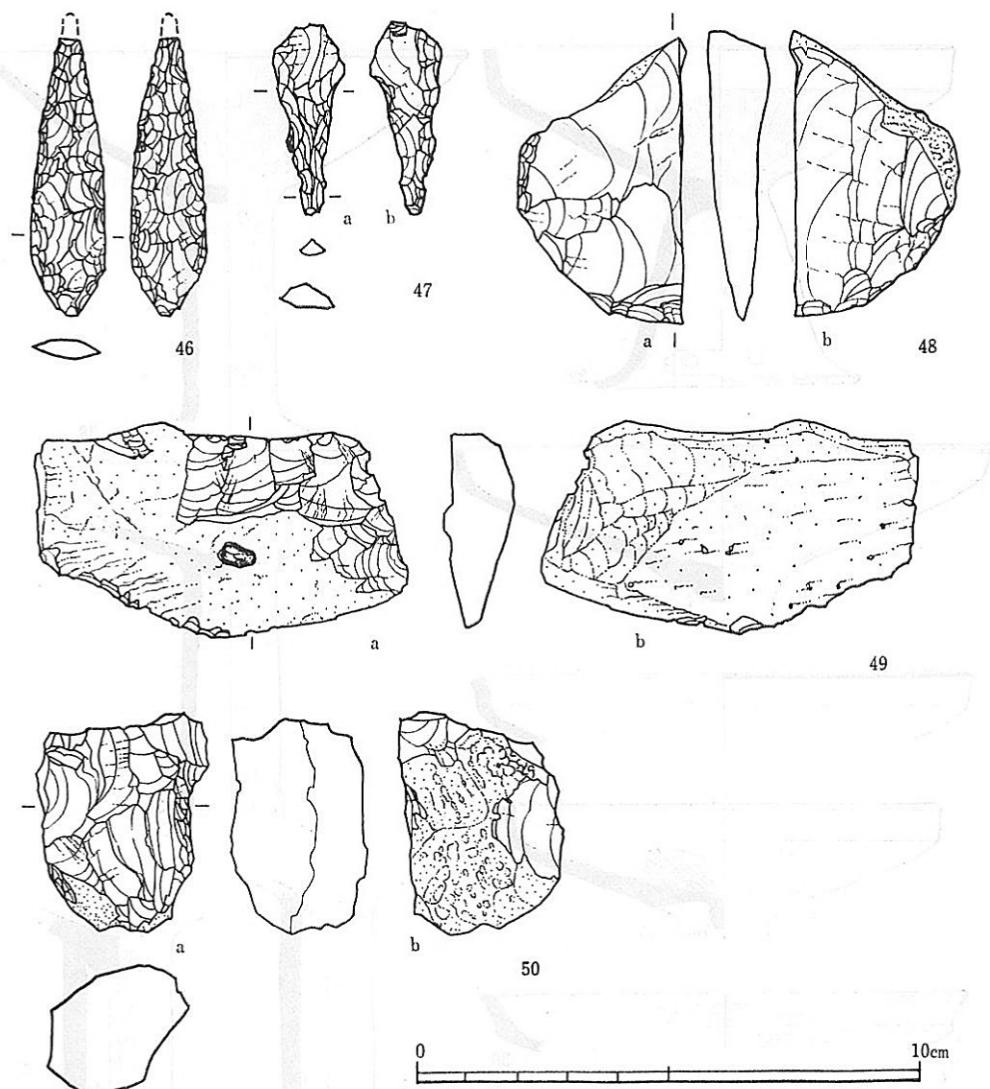
(46) 円基無茎式の石鎌である。わずかに先端部が欠損している。両側縁より押圧剝離が中央部にまでおよぶ。

石錐

(47) 頭部の調整は粗雑であり、先端



第119図 SD-06出土遺物 (3/4)



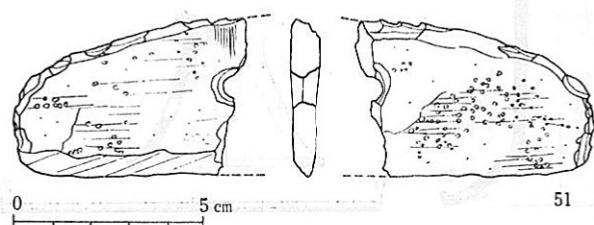
第120図 S D-06出土遺物 (3)

調整有る石器

(49) 扁平なサヌカイトの自然石に調整を加えたものである。何らかの未製品と考えられるが、その意図した器種については不明である。しかし、大きさから考えて小形の石器の中の1つに間違いないだろう。

石庖丁

(51) 直線にのびる片刃の刃部を持ち、肩部はわずかに外彎する。体部両面には磨滅痕と小さな虫喰い状の小穴が多数認められる。刃面には研磨痕



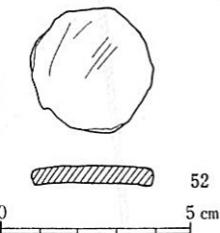
第121図 S D-06出土遺物 (3)

が認められる。肩部には、面取り状の主軸に直交するような使用痕が認められる。石質は石墨絹雲母片岩である。^(註2)

〔土製品〕

円板 (52)

第1植物層上層 (I a) から出土した。土器片を利用し、周縁は打ち欠き、研磨を加えほぼ円形に仕上げている。直径3.2×3.2cm、厚さ0.5cm、重量6.6gを計る。



第122図 S D-06
出土遺物 (52)

〔木製品〕

(I b) 層から自然木や加工木材とともに鋤 (53) を検出している。溝の中央から上面を上にして完形のままで出土した。身・柄・把手は一木造りで全長104.5cmを測る。形状は、現在われわれが使用している丸スコップと形態的に近似し、千数百年の歳月を経ているにもかかわらずほとんど変化していないのは驚くべきことといえよう。

柄と身の長軸は一致せず、身・把手は柄に対して右下がりに付く。柄部は上端から下端にむかって細くなり、身部上面に反る。肩は右側はやや下がり、左は水平で、側縁は左は直線的、右はゆるやかなカーブを描き左右対称でない等の特徴からして使う人（右きき）のことを考えて数多くの試作品中から生まれた完成された鋤といえる。

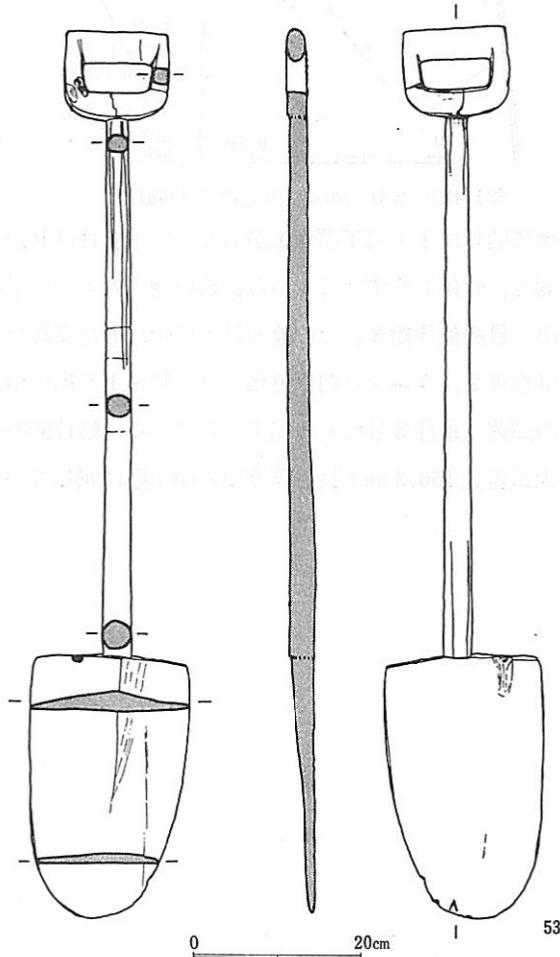
〔動物遺存体〕

イノシシ・ニホンジカ・イヌ・ナマズ or ギギ・ヘビ・カエル等の各部骨を得ている。

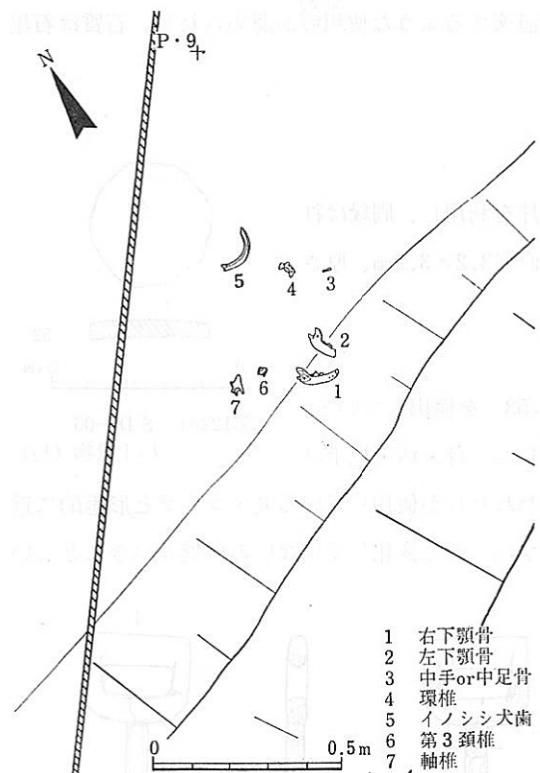
イノシシの出土は、頸椎・歯牙に限られる。歯牙では、先端が少し欠損するだけの若獣雄犬歯Cの出土がある。加工は施していない。最少個体数3。

ニホンジカは、歯牙と四肢骨がある。基節骨周囲全体にみられる咬痕は、イヌによるものであろう。最少個体数1。

イヌはO・8地区にて、左右下顎骨・



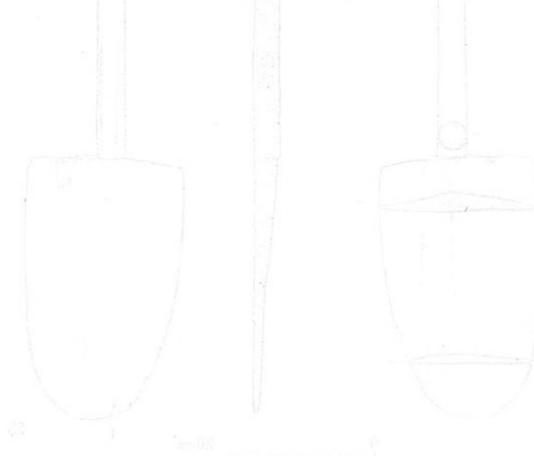
第123図 S D-06出土遺物 (53)



第124図 SD-06イヌ出土状況 (1/20)

他に肋骨片1・右下頸骨1がある。右下頸骨はP₃・P₄を残植する部分の破片で、咬耗の度合が弱く、骨体もうすいことから、若い個体のものと思われる(第176図の2)。大きさは、中小型の小。最少個体数3。その他の動物は断片的な資料であるが、ナマズ or ギギでは腹椎骨1、ヘビは椎骨2、カエルは白灰色化した上腕骨1の出土が知られる。また、(Ⅱb層)から、単独でイヌの頭蓋(亀井3号犬)の出土をみている(第175図)。先にしるしたイヌとは別個体のもので、最大頭蓋長160.3mmと長谷部分類の中小型に属している。

環椎・軸椎・第3頸椎・中手骨(若しくは中足骨)・中節骨各々1とイノシシ下顎の犬歯1(前述)を一括して検出した。(第124図)出土状況から、イヌは一個体分に属するものと考えることができる。左右下顎骨外側面には、縦位に鈍い擦痕が走っている。おそらく解体時に付されたものであろう。また、右下顎骨の下顎枝(第176の2図)には人為的に径5.45mm×2.8mmの孔が穿っていた。類例は、動物の種類は異なるが(註19)イノシシ・オオカミにも認められている。出土状態・非機能的穿孔から、農耕・狩猟儀礼にかかわるものと考えられ、亀井弥生人の精神面の一端を示すものとして注目されよう。下顎骨から、大きさは長谷部分類の中大型の中でもやや小さい部類に相当する。

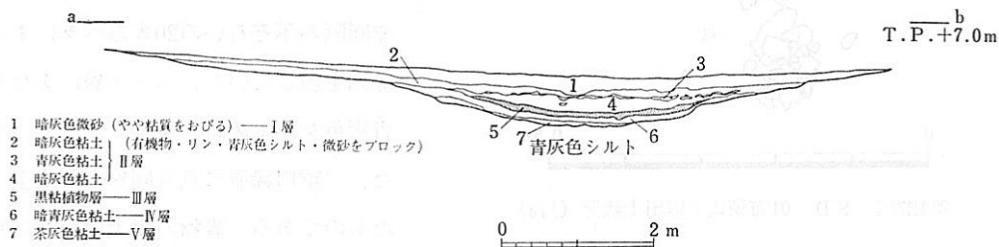


第175図 SD-06イヌ頭蓋

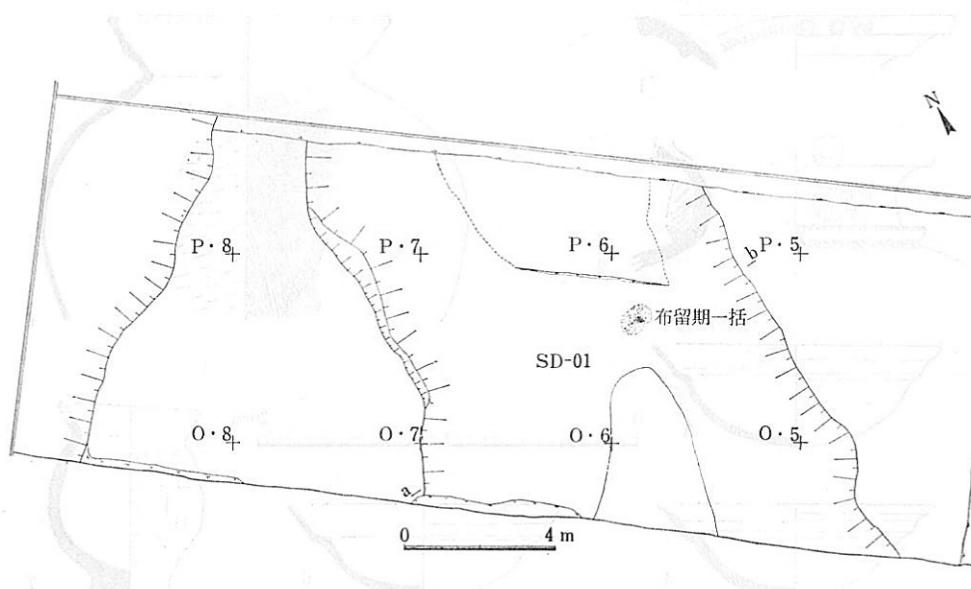
第3節 古 墳 時 代

SD-01

トレンチの中央にて検出した北西—南東に走向する幅約9m、深さ0.7mを測る古墳時代前期の自然流路である。南壁の断面観察からSD-02の凹みに堆積した青灰色シルト（層厚約30cm）をベースとしている。覆土の堆積状況は、(I)～(V)層に大別される。各層は砂を間仕させていないことから常に滞水状態にあったことが伺われる。(I)暗灰色微砂、(II)青灰色粘土を帯状にブロックする暗灰色粘土、(III)黒色植物層、(IV)布留期一括土器を含む暗青灰色粘土、(V)茶灰色粘土である。各層より土器細片を得ているが、弥生土器片はすべて著しいローリングを受け、二次的産物である。



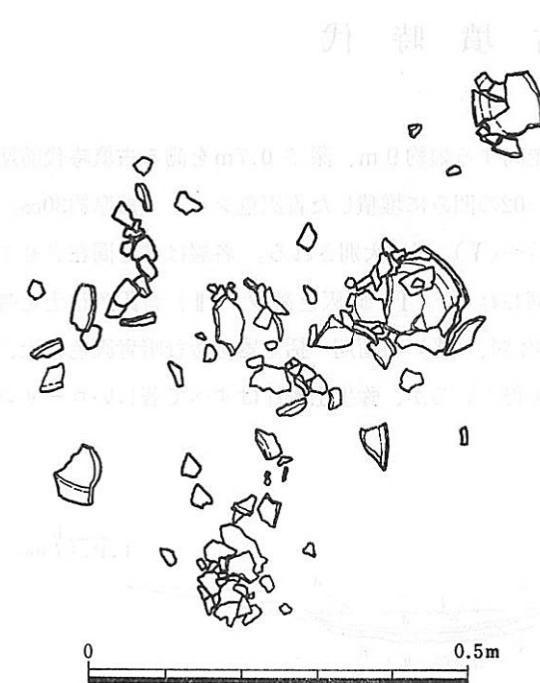
第125図 SD-01 土層断面図 (1/100)



第126図 SD-01 平面図 (1/200)

出土遺物 (第128図)

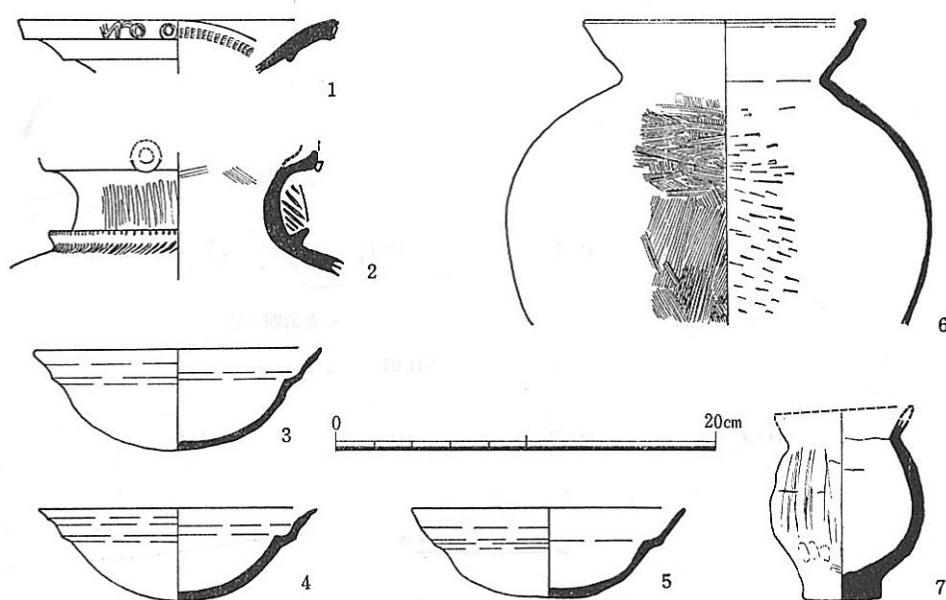
(IV) (V)層から布留式土器、動物骨を得ている。



第127図 SD-01布留式土器出土状況 (1/10)

〔土器〕(1~7)

(Ⅳ) 層から 1.5 m四方の範囲に集中して鉢3点(3、4、5)、甕1点(6)が出土した。(第127図) 鉢は三者ともタイプがよく似ているが、口唇部のつくり等細部において異なる。出土状況の検討から本来は3個体重なっていたものと理解された。甕(6)は細片となって検出された。(Ⅳ) 層からは、南壁から 1.0m 南のところで小形壺(7)を検出した。体部には、やや間隔の不ぞろいの20本のヘラによる線刻を施している。ベース層にあたる青灰色シルト床直から出土した。また、二重口縁壺二点も同層より出土したものである。遺物の出土状況から判断して水にかかわる祭祀がとり行われた可能性がある。



第128図 SD-01出土遺物 (1/4)

〔動物遺存体〕

O・6 地区の(Ⅳ)層からウマの右上顎臼歯 P³ 1点を得たのみである。

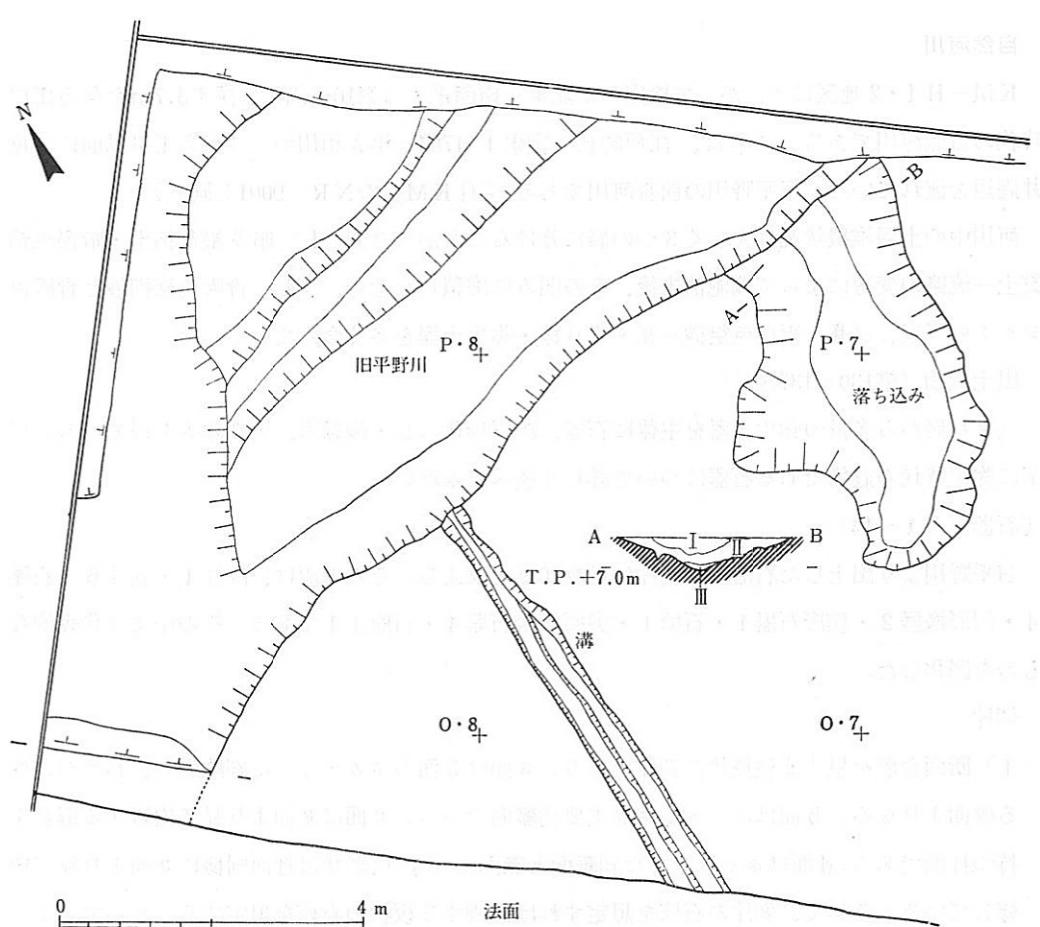
第4節 奈良時代

基本層序第Ⅳ層を除去すると第Ⅴ層（暗灰色粘土）上面にて径10~15cm程の小穴を多数確認した。（図版25b）これらの小穴は分布から密度の濃淡はあるが普遍的に調査区全域にわたってみられる。小穴の所属時期は層準からして奈良時代以前のものと思われた。

また、小穴を充填する砂・シルトはH 5 地区に検出した奈良時代の河川の氾濫土であり下限を奈良時代におさえることが出来る。第Ⅴ層に刻まれたこれら多数の小穴は、その形状からウシの足跡ではないかと推定され、畦畔は確認していないが奈良時代以前の水田跡の可能性もある。

第5節 室町時代

KM-H 1 地区の西半において溝1、落ち込み1を検出した。（第129図）（図版26a）



第129図 中・近世遺構平面図 (1/100)

溝 1

N・7-O・7 地区で検出した南北に走る幅約 0.4m、深さ 0.13m を測る中世素掘り溝である。暗褐色粘土（第 IVb 層）上面にて確認した。埋土は灰褐色粘土で、層中から土器細片 2 点得ている。当該時期を決める資料は欠くが、確認面、形状および南北走する点で、KM（SD-9001、9002）と同様の機能を有する遺構といえ、室町時代にその所属が求められる。

落ち込み

暗褐色粘土（第 IVb 層）上面にて検出した落ち込み状遺溝である。北側は旧平野川によって切られているが、平面プランは不定形を呈し長軸 4.7m、短軸 3.3m、深さ 0.42m を測る。埋土は 3 層に分けられ、（I）灰褐色粘土（第 IVa 層に相当）一鉄分、マンガン斑文を多量に含む、（II）灰色細砂—1~3 cm の黄褐色粘土をブロックする、（III）青色灰シルト—2~3 cm の偽礫を多く含む。遺物は得ていない。

第 6 節 江 戸 時 代

自然河川

KM-H 1・2 地区にまたがって検出した北東—南西走する幅 10m 以上、深さ 3.7m を測る江戸時代の自然河川である。これは、江戸時代の宝永 1（1704）年大和川のつけかえ工事以前に、亀井周辺を流れていた、現平野川の前身河川である。（「KM」の NR-9001 と同じ）

河川中の土層堆積状況は大きく 3 つの層に分けることができ、（I）暗茶褐色粘土・暗褐色粘質土—流路の変遷によって機能消失後、その凹みに堆積した土層、（II）青灰色極細砂と青灰色シルトの互層、（III）灰白色粗砂—瓦・すり鉢・弥生土器を多く含んでいる。

出土遺物（第 130~137 図）

（Ⅲ）層から多量の弥生土器を主体に石器、江戸時代の瓦・陶磁器、すり鉢等を得ている。以下に弥生時代の遺物である石器について詳しく述べてみたい。

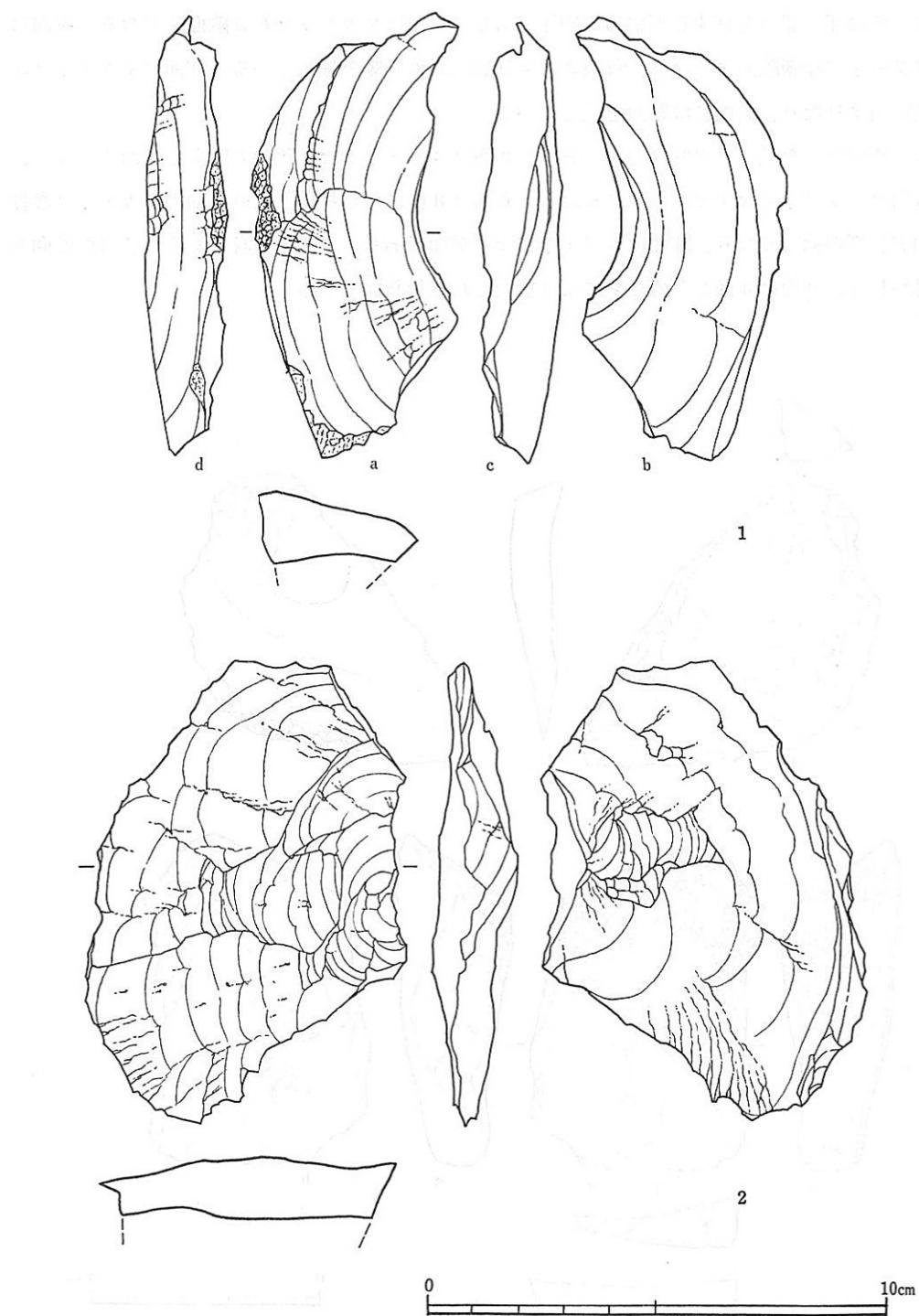
〔石器〕（1~14）

旧平野川より出土した石器及び剝片は総数 20 点を数える。その内訳は、碎片 1・剝片 6・石鎌 4・円形搔器 2・楔形石器 1・石槍 1・尖頭器状石器 4・石庖丁 1 である。その中より代表的なものを図化した。

剝片

（1）断面台形を呈する横長状の剝片である。a 面は 3 面のネガティブな剝離面と、わずかに残る礫面よりなる。b 面はポジティブな主要剝離面である。c 面は a 面より見て内縛する形状を持つ打面である。d 面はポジティブな剝離面と礫面よりなり、形状は打面同様に a 面より見て内縛している。そして、剝片の石核を想定すれば内縛する板状の石核を想定することができる。

（2）断面台形状を呈する横長状の剝片である。背面は複数のネガティブな剝離面よりなる。腹

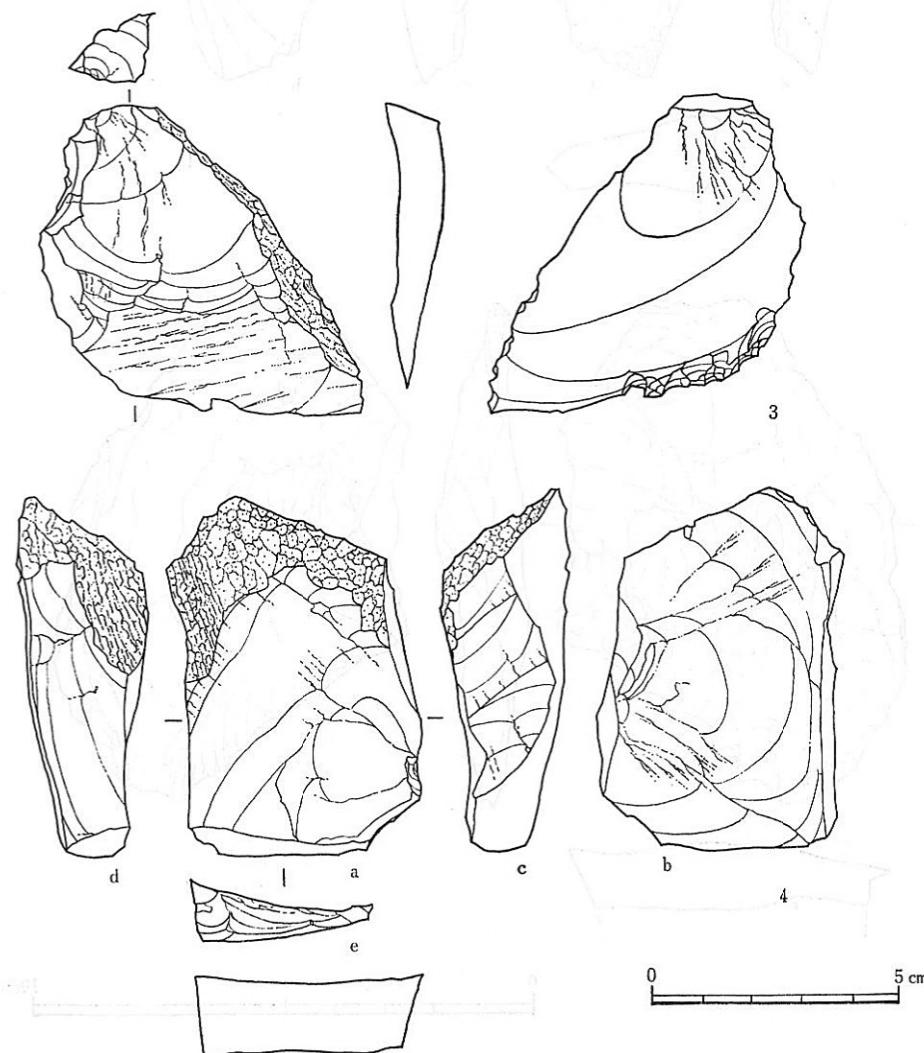


第130図 旧平野川出土遺物 (2)

面はポジティブな剥離面よりなり、明瞭なバルバスカーを残す。打面はネガティブな剥離面一面よりなる。

(3) 側縁部に調整を有する調整ある剝片である。背面はネガティブな剥離面よりなる。腹面はポジティブな剥離面よりなり、背面より部分的に調整剝離を施している。打面はネガティブな剥離面よりなり、側面には礫面を残している。

(4) 断面台形を呈する肉厚な剝片である。a面はネガティブな1枚の剥離面と礫面よりなり、b面はポジティブな主要剥離面よりなる。c面はa面に対し打面となり3面のネガティブな打面調整剝離面よりなり、d面はポジティブな剥離面であり、剝片の前身である石核の剥離面と思われる。e面はa面からの加撃により折断された折断面である。



第131図 旧平野川出土遺物 (23)

石鎌

(5) 押圧剥離を施す直前の石鎌未製品である。a面は部分的に礫面を残し、側縁からの調整剥離によって切り込まれている。b面には中央部に素材の剥離面を残し、側縁からの調整剥離により切り込まれている。基部はa面からの加撃により欠損している。

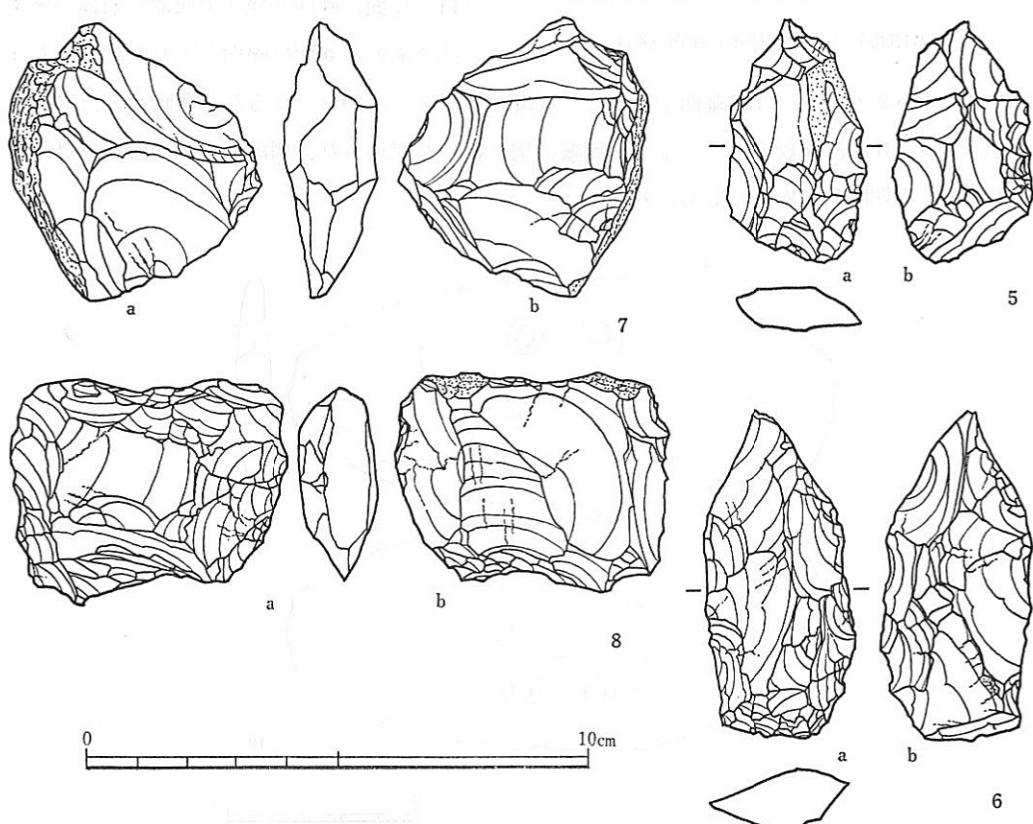
(6) 5同様に、押圧剥離を施す直前の石鎌未製品である。a・b両面に粗雑な調製剥離が全面を覆い、素材の剥離面と確信がもてるのはb面の基部に残るわずかな剥離面のみである。

円形搔器

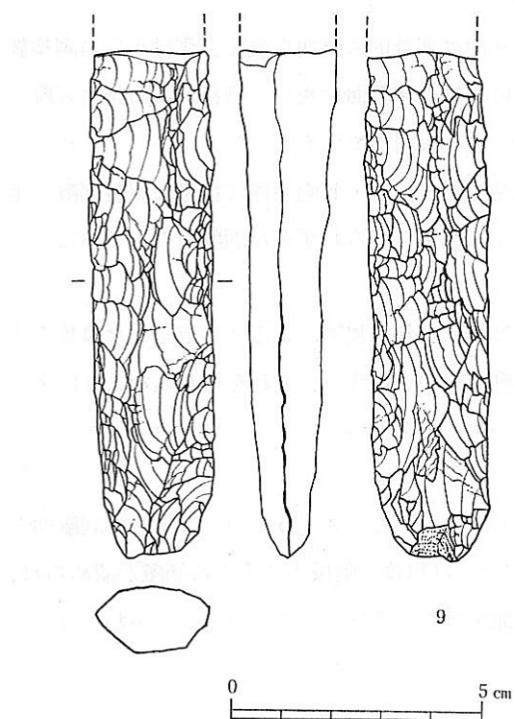
(7) 側縁に礫面を残している搔器である。a面は側縁よりの加撃によるネガティブな複数の剥離面及び礫面となる。b面はポジティブな剥離面を中央に残し、それを切り込むようにネガティブな剥離を施している。そのため側縁は鋭いエッヂをもつ。

楔形石器

(8) 側縁部を、複数の加撃により潰している楔形石器である。a・b両面には素材の剥離面を中央に残し、全周より剥離を施している。剥離の中には粗雑に階段上に止まる剥離が認められ、b面には素材の剥離面であるポジティブな剥離面を持ち、素材が剥片であることがわかる。



第132図 旧平野川出土遺物 (2)



第133図 旧平野川出土遺物 (3)

較的大きいネガティブな剥離面となる。剥離は側縁からの加撃によるが、明瞭な打点は残っていない。b面は複数のネガティブな剥離の切り合いが認められ、側縁付近の剥離面には階段状に止まる剥離面が顕著に認められる。

石槍

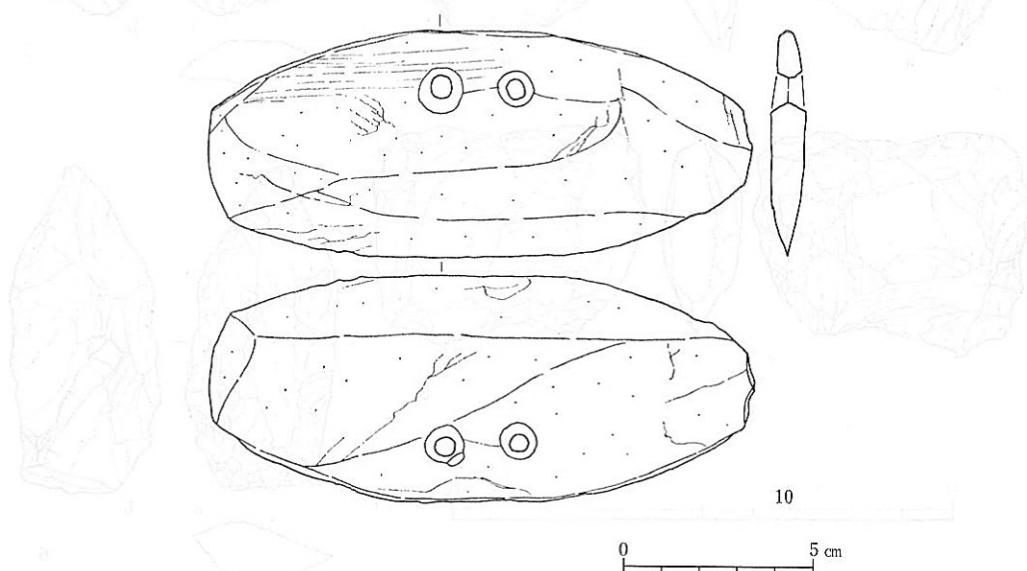
(9) 体部中央部より先端部にかけて欠損している石槍である。調整は両側縁部より緻密な押圧剥離を施していく、素材を想定する痕跡は基部に残る礫面のみである。両側縁部には体部より基部にかけて刃潰し痕が認められる。

石庖丁

(10) 緑簾緑泥岩製の完全な石庖丁である。刃部はわずかに外彎し、そして両面に研磨を施し、刃部を設けている。刃部には、わずかに歯こぼれが認められるが、使用痕等は認められなかった。背部は面取り状に研磨を施している。

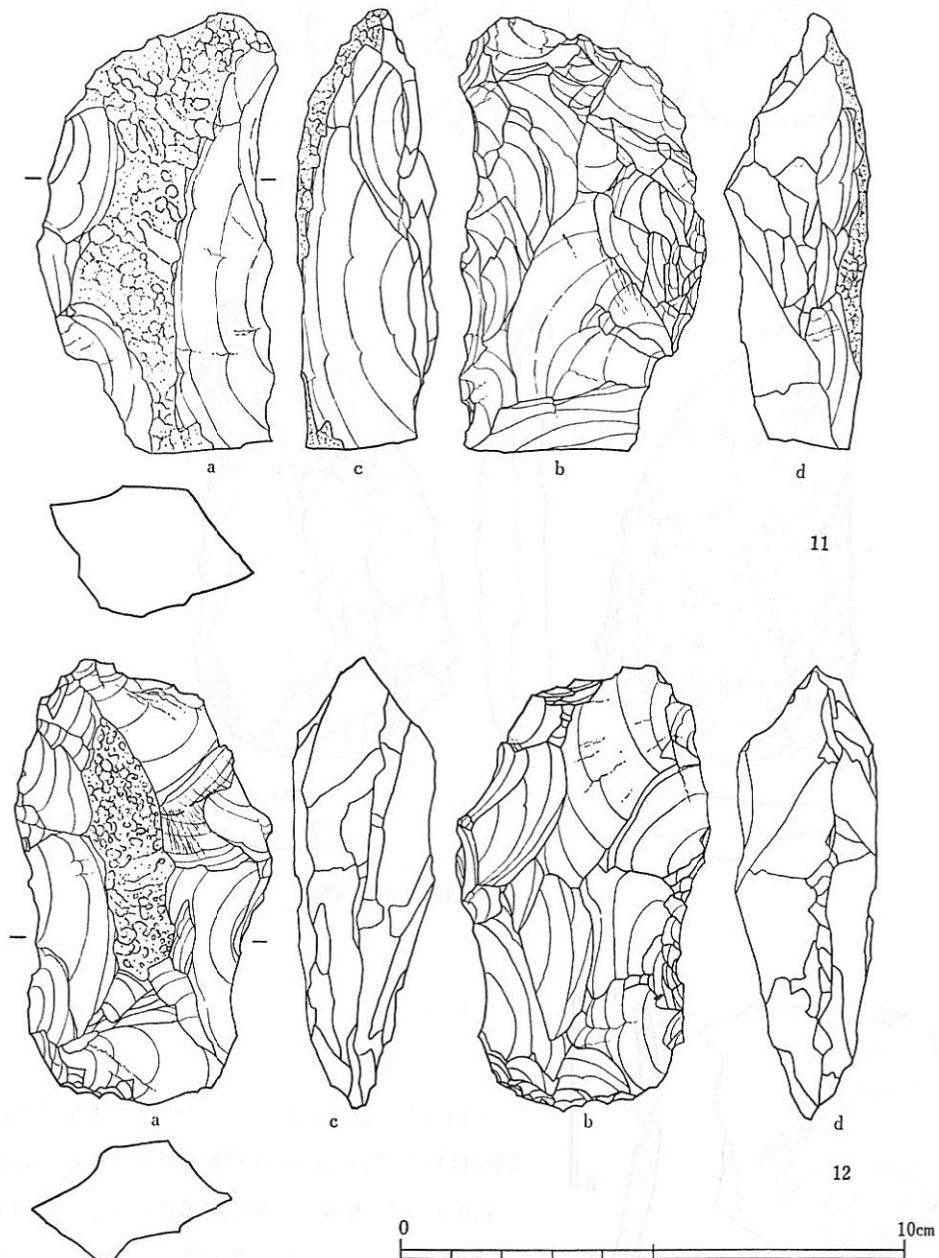
尖頭器状石器

(11) 片面に礫面を残す尖頭器状石器の未製品である。a面は礫面とそれを切り込む比



第134図 旧平野川出土遺物 (1)

- (12) 11同様に、片面に礫面を残す尖頭器状石器の未製品である。a面は中央部に礫面を残し、側縁よりの加撃による剥離面が、同礫面を切り込んでいる。b面はa面同様側縁からの調整剥離が全面を覆い、部分的階段状に止まるものもあり、緻密な調整を施す直前のものである。
- (13) 尖頭器状石器の先端部である。a・b両面に大きな剥離で形態を整えた後に、側縁より緻密な押圧剥離を施して、断面をレンズ状に仕上げている。



第135図 旧平野川出土遺物 (2)

- 註15 弥生時代後期の井戸から出土した広口壺体部片（？）の肩部下に、ヘラ状工具によって横位に双溝文を描いている。（p.42挿図29参照）今回、報告している資料は破片であり器種を限定することは出来ないが、おそらく長頸壺か広口壺形土器の体部にヘラ描きされていたのであろう。
- （財）大阪市文化財協会『瓜破北遺跡』共同溝建設工事に伴う発掘調査報告書 1980
- 註16 長谷部言人「犬骨」『吉胡貝塚』文化財保護委員会 1942
- 註17 亀井遺跡ポンプ場本体部の調査（KM）の後期初頭の溝（SD-3008）にも同形式の高杯がある。
高島 敏・尾谷雅彦・寺川史郎・金光正裕・畠 暢子・清原弘美「第Ⅶ章 遺構及び遺物」『亀井・城山』（財）大阪文化財センター 1980（第212図18・20）
- 註18 唐古・鍵遺跡第7次調査で検出されたSD-01溝出土の一括土器群は、当刻期に伴行するものと考えている。
寺沢 薫・松本洋明「SD-01溝の一括土器群について」『唐古・鍵遺跡』第6・7・8・9次発掘調査概報 横原考古学研究所編 1980
- 註19 宮崎泰史「各地のイノシシ下顎骨祭祀」『考古展—河内平野を掘る—近畿自動車道関連遺跡の発掘成果を中心として』（財）大阪文化財センター 1981